魔法の壺

鏑木恵梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法の壺

【Ｎコード】
Ｎ１５４４Ｎ

【作者名】
鏑木恵梨

【あらすじ】
私、天宮はるこは転校常連、遠慮がちながら気合い勝負な中学生。ツッコミ属性。そんな私が気になる人物は「藤生皆」。彼はいつも居眠りしていて、青磁の花瓶を手に魔法を操る魔法少年だった。言い伝えやら神話やらをめぐるちょっとした事件に巻きこまれながら進んでいく、恋愛成分微量の学園ファンタジー。
※個人サイト掲載作品を書き直し投稿しています。Ｒ１５指定はたまにブラックなためのチェックです。※

01. 気になる人物（前書き）

登場人物はほとんど神戸弁で話します。苦手な方はご注意ください。

01．気になる人物

「はるこは、だれか好きな人できた？」

遠慮なしな質問だった。

この中学校に転校してきて、三ヶ月。新しい学校にもすっかり慣れた。

でも、いちばんの友達・高梨せりの遠慮のなさ突っ走り方には、私もたまに閉口する……こともある。

好きな人ねえ。

多少意味は違うが、該当者はいる。私は正直に脳裏に浮かんだ人物の名を回答した。

「えーと。気になっとんのは、藤生くん」

その瞬間。せりは固まった。そして、

「え？　うそぉ！」

ほっとけっちゅうの。

「むっちゃ性格悪いやん、あいつ」

確かに。同意できる。

さらに、せりは説得を試みるかの如くに、かくのたまう。

「ついこのまえのことやけど、雨ふっとったやん？　あたし、傘忘れてなあ」

時は放課後、処は下駄箱。いざ帰宅という状況下にて。せりは雨に困惑して呆然と立ちつくしていた。

ふと、だれかがここに来た。

噂の藤生氏である。彼もまた、これより帰路につくらしい。

彼は目の前にいるせりを（彼女の主観によれば）無視し、ふと外を見やり、しとしと降る雨を確認した。そして、カバンの中に手を突っこむ。折りたたみ傘の所在を確かめるためだ。

「そう、確かにヤツはグレーの折りたたみを持っとったんよ。それやのに」

彼は靴をはきかえると傘立てに直行した。

そして、水色の長い傘を取り出すと、とっとと玄関をでていった。

「二本あるんやったら貸せー！」

「傘ないって、気づんかったんちゃうのん」

それ以前に、せりの存在に気づいてなかった可能性も否定できないけど。

「至近距離！　ふつう気づく！　これを許さでおくべきか！」

せりヒートアップ中。

説得、断念。

話題を変えよう。

そう思ったとき、隣のクラス担任の野田が教室に入ってきた。手にはプリントの束を抱えている。

ちょうど入り口付近には、噂の藤生氏しかいない。彼は机につっぷして寝ていた。

「すまん配っといてくれ」

ばさり。

と、野田は藤生の頭の横にプリントを置いて、せわしなく去っていった。

藤生はプリントをちら、と見る。と、そのままま寝た。

人のいい委員長の白河くんは、プリントを取りに行くと、鹿嶋くんとともに配りはじめた。　いまやこれを非難する者はいない。

以前、藤生氏に注意を試みた勇者がいた。これも『人のいい』委員長である。

「頼まれたんやったら配ってくれんと」

これに藤生氏はこう答えた。

「だれがだれかわからん」

以後一切、このクラスの人間はおろか、クラス担任も彼に頼みごとをしたためしがない。

「相変わらず快調に性格悪いわ」

せりが怒って言うと、チャイムが鳴った。

私は、先に『微妙に意味は違う』という条件をつけたけれど、実はというと『恋愛感情』という意味で藤生氏を好きといったのではない。変わり者に対する興味本位、堂々たる傍若無人に敬意を表して、といろんな意味があっての回答だった。

それに、彼を弁護するつもりはないが、私は藤生氏に助けられた経験がある。

今回は藤生氏に助けられたときの、あの不思議なできごとを書いてみたい。

02．魔法の花瓶

私は市街地のどまんなか、高台にそびえる高層マンションに住んでいた。
部屋からは眺めがよくて苅野（かりの）市内が見渡せる。
屋上からの眺めはそれはたいしたもんだろう。

「苅野ランドマークタワーとか言ってお金とってもええんちゃう？」

と我が家では冗談半分に言っているくらいだ。ただ、お父さんはせっかくオートロックのマンションなのに、住人以外を立ち入らせたらセキュリティに問題がでるじゃないか、とまじめ顔で反論してた。
その屋上は、なぜか立ち入り禁止で、小さな扉に鍵がかかっている。
私はもったいないなあ、と思っていた。

ところがある日、鍵がはずされていた。
入っていいよというわけじゃなく、だれかが鍵を開けて入った、といった具合だった。
ちょっと気持ち悪いと思ったが、好奇心の方が強かった。
私はそっと、入っていった。
夕焼け空の下、だれかがこちらに背中を向け、座っている。
少年。
中学生？
見知った顔だった。
私は近寄った。

「藤生くん？」

当たりだ。
彼は振り返った。いかにも不機嫌な顔をしていた。
どうせ覚えちゃいないだろう。先に名乗りをあげた。
「今度転校してきた、同級生の、天宮」
藤生氏は、座っていた。
彼の正面には小さくて細長い花瓶が置いてある。花瓶は陶器でできていて、中にはなにも入っていないように見えた。
花瓶に禅問答？　そんな雰囲気だった。
「なにやっとんの？」
当然ながら、彼は答えない。
「こんなところ入りこんどったって、バラす」
「あんたもここに入って来とうやろ」
「私はここの住民やから不審人物に退去を勧告すんのはおかしないもん」
まずもってオートロックのこのマンションに入り込んでるのが疑問だ。言うまでもないが、藤生氏はここの住民ではない。
「さあて、なにしとったん？」
「壷に呪をあつめてる」
「じゅ？　なにそれ」
「もう、ええやろ」
あからさまに嫌そうな声で、藤生氏は言い捨てた。

「ええことない。私にわかるように言葉を尽くしてもらいたいもんだね、でないと」
「このなかにたまった呪をネタに魔法を使う」
「魔法？」
私は不思議なことに、この奇怪な内容を本気にした。
ふつう、絶対とぼけられてると思うはずだ。けれども、この藤生氏が言うとなぜか納得した。
「魔法かぁ。ちょいとばかし使ってみて、ねえ」
彼は無視した。
「バラす」
なにも言わず彼は壷を手にして立ち上がった。『マジうざい』と顔に書いてあるが、知ったことかい。彼は目をつぶった。
……しばらくして。
突如として横殴りの強い風が駆け抜けた。
一瞬、ふっとばされるかと思うくらいだった。
少しの間、私は風の行方を追って放心していた。
そして、髪がばさばさになっていることに気づき、あわてて頭をなでた。
藤生氏は、また、元通り腰を下ろして花瓶と向かい合った。
私は、なんてうさんくさくてすごい奴だ、と妙に感心していた。
＊　＊　＊

それからというもの、何度となく藤生氏をこの屋上で目撃した。
やっぱり花瓶と対面に座り、じっとしていた。
そして私は彼の邪魔をする。
絶え間ない攻撃の結果、彼から非常にファンタジーな話を聞き出すことに成功した。
彼の家族は母親がひとり。片親でずっと育ってきた。その母親が、彼が小学校五年生のころ言ったという。

「あんたは悪魔の子供なんよ」

小学生藤生氏は『なに冗談いってんだこのおかん』と思っていたそうな。
しかし、転機が訪れる。
小学校の卒業式。帰りに知らないお兄さんに呼び止められた。
ビジュアル系のお兄さんで、顔もびっくりするほどかっこよかったらしい。お兄さんは藤生氏に聞いた。

「皆(かい)、魔法使えないのか？」

皆とは藤生氏の名前である。
理解不能な問いかけをする彼に、藤生氏は、こいつ頭いかれてんじゃないの？　と思ったらしい。
それでも、ネタ半分に話を聞いてみると内容に破綻がない。母親の知りあいみたいだし、父親のことも知っているそぶりだった。

「おれが魔法を教えてやろうか？」

小学生藤生氏はその誘いに乗った。
母親の冗談じみた言葉に、突如として現れた魔法使いの美形師匠。

そして、謎の父親の存在。これが彼をあやしげな世界に引き込み、魔法というものの存在を知り、のめりこむきっかけとなったのだ。

こうして呪を集めていれば、いずれ父に対面することになるやも知れない。

藤生氏はそう思って、このマンションで実行している。彼によると、かなり集まってきた、らしい。

結構、けなげな少年じゃないか。

０３．通り魔事件

ある日、といってもつい一週間前のこと。
帰りが遅くなった私は、東谷公園という大きな緑地公園を通っていた。そのほうが弱冠近道、と聞いていたからだ。
ただ、あとから聞いた話では、学校は、

『公園を通って帰るのはやめましょう』

というお達しを出していたそうだ。
私が転校してくる前に、この公園で「通り魔事件」が何件か起こったというのがその理由。犯人は捕まっていなかった。
ただ、ここ数ヶ月音沙汰がなかった。数ヶ月もすればみんなの関心は薄まるもの。だから、私は通り魔事件があったことは知らないし、うわさにものぼらないし、公園通るべからずのお達しも先生方から聞いてなかった。
知らないことは往々にして不幸を招く。私は近道を開拓するわくわく気分で、夜だってのになんの警戒もなしに歩いていた。そこを通り魔に襲撃されたわけである。

ヤツは三十前後のくたびれた感じの男で、メガネをかけてやせ形。モスグリーンのジャンパーにGパン、風貌はそれくらいしか覚えていない。
やたら印象に残ってるのは、そのごついけど色白な手に握っていたアーミーナイフ。
襲われたのは背後からだった。寸前、気づいて身をひるがえした。けどすっ転んだ。
やばい。早く立ち上がって、逃げないと。
……無理？

怖くて、立てない。
と、通り魔の背後からなにか固体が飛んできた。
見事、通り魔の頭に命中。それは派手に割れ、破片が飛び散った。
その破片からして陶器かなにかの割れ物みたいだった。
なんだかわかんないけど……私、助かるかも？
正義のヒーロー参上、悪い敵を一網打尽！
みたいな感じの淡い期待はナナメ上な妄想でしかなく、現実は正義のヒーローの名乗りなんてない。でもあの割れ物はなんだったの？
かたやアーミーナイフ男は一瞬ひるんだだけ。吠えるような異様なうなり声とともに、またすぐ襲いかかってきた。
腰が抜けちゃった。
ああ、もうダメ。
なんて頭の中が真っ白になりかけた、そのときだ。
男の背後に同じ中学校の制服が、目に飛びこんだ。
藤生氏？
彼に違いない。確信するや突如、アーミーナイフ男は煙のように目の前から姿を消した。

「……なに？」

藤生氏が近付いてくる。
敵は一網打尽にされてる。となるとこれはどうやら、助かったのではなかろうか。
とだけ、まず理解。目の前でなにが起こったのかはいまだ理解の範疇外のこと。私は彼に説明を求めた。

「なにがおこったん？」
「呪で魔の世界の門を開いた」

彼はしゃがみこんで割れた陶器片をひとつ拾っては眺め、ため息

をついた。

「自分が行くつもりで前々からちょうどこの場所で魔法陣準備しとったのに……ためた呪も陣も全部なくなった」

私には不幸中のすごくピンポイントな幸いが訪れ、藤生氏には人生最大の希望を棒にふるレベルの不幸がおこったわけか。そりゃあ、説明がグチにしかならないほど、ショックでへこむわ。

「この破片、呪をためてた花瓶」
「そう」
「破片を私がさわっても大丈夫？」
「おう」

質問をするうち、私はようやく立ち上がれるようになったので、割れた花瓶の片づけを手伝うことにした。破片を拾い集めながらも質問は続ける。

「あの消えたおっさんは、魔の世界に行ったってこと？」
「そう」
「魔の世界てどんなとこ」
「知らん」
「魔の世界へ行ってしもたらどうなるん？」
「おれは向こうへとばしただけで、あとはのたれ死のうが自力で戻ろうが知ったこっちゃない」

ひどい話だ。いいんだろうか。倫理的に。

……いいのかな。自力で戻ろうがって言ってるってことは、たぶん魔の世界とやらからこの世界に戻る手段があるんだろう。当然どうしたら戻れるかは知らんけど。

「助けてくれて、ありがと。……あと、ごめんね、呪を使わせちゃって」
「しゃあないやろ」
「ま、いいか。また、集めりゃええっしょ」

おまえが言うな。彼はそんな不機嫌そうな顔で、私を見上げた。
いつもどおりの藤生氏。私は安心した。

以上が私・天宮が通り魔に襲撃されて藤生氏に助けられた件のてん末。
とっても不思議な同級生・藤生皆がお気に入りになったのは、この事件がきっかけになる。魔の世界とやらを目指してるという、今後の彼がどうなっていくのか。期待しつつこれからもウォッチしていこうと思ってる。
ひとまず、このお話はここまで。

０４．夏休みの課題

『苅野は、古来より都と山陰地方を結ぶ交通の要所であった。そのため、昔から多くの旅人がこの地を訪れ、去っていった。他の土地との往来が激しいため、よそより災厄がもたらされることも多い、と考えた人々は、魔よけとして神社を設けて、外からの災厄が苅野を襲わないようにしたのである。……（以下略）』

苅野市の歴史について調べる。

なんて夏休みの課題を出された瞬間、教室にブーイングが響きわたった。

五、六人ぐらいで班をつくってレポート用紙十枚以上という過酷な課題は、今夏最大の難題だった。

私、天宮はるこのグループの精鋭を紹介しよう。

おしゃべり友達の高梨せりと渡辺かのん、委員長白河あきなり、委員長の心の友（？）鹿嶋たくみ、そして魔法少年藤生皆という、異端な雰囲気がぬぐえないメンバーだ。

内心、いい男子をゲットしたとほくそ笑んでいた。白河＆鹿嶋コンビがやってくれる。……そう、最初は私もやる気なしだったのだ。鹿嶋くんが課題のネタを提案するまでは。

放課後の図書室。

あまり人気はなく、貸し出しカウンターに返却督促を受けた生徒が延長願いを書いている。このへんうちの学校は厳しい。半月遅れると図書館から各担任に連絡がいって内申書に響く。なんてまことしやかにささやかれていた。

私たちメンバーは日当たりのいい席を陣取って、対策会議をはじめた。

「苅野市の魔よけ？」
「ずいぶんあやしいネタで攻めるんやねえ」
せりとかのんが同時に顔をしかめた。
「実は、姉貴が大学にだしたレポートの内容のパクリなんやけど」
鹿嶋くんはずりおちたメガネをあげながらいった。
「感神社ゆう名前のついた神社が市内には六カ所あって、それが古来より魔よけ的な役割を果たしていたらしいんや」
「苅野は、京都から中国山陰への交通の要所やったらしいな」
白河くんが口をはさんだ。
「京の都や江戸もよく風水を考慮して数々の怨霊から町を守る設計がされてた、っていうオカルトな話があるわな。苅野も同じってことか」
「昔、だいたい平安時代くらいからやな。それぞれの方角に禍神がいるって信じられてて、日常生活でも方角を気にしてたし、人の集まるところには近所に寺を建てたりして特に気を使ってた。そういった信仰と、昔の交通事情と、白河のいう都の建設をからめるのもええな」
私は興味津々だった。
藤生氏のおかげで魔法とか呪とか聞いたり見たりしているからだろう。あやしげな話題は大歓迎だ。
「そんな感じで一般論を書いて、神社の写真と地図でも資料につけ

ときゃ、レポート用紙五枚は軽く消化できる。あとは神社の来歴とかを書いとく。こーゆー路線でみんなええ？」

つまり、鹿嶋くんのお姉さんのレポート内容を簡単にアレンジして終わり。

みんなが手を抜ける提案だった。

みんな一斉にうなずいた。

「じゃ、おれと白河とで適当に写真とっとくから」

相談タイムはこれで終わった。

一斉に立ち上がり、帰り支度をはじめた。かのんは部活に行くし、せりは好きにしてって感じで、今後の進め方などは頭にないようだ。

私たちはなにも手を出さないから、よろしくね。という感じ。

それでいいのかな……。

私はその夜、鹿嶋くんに電話した。

「今日の話、私たちなんもすることないやんか。悪いなーとちょっと思って」

電話の向こうで鹿嶋くんは笑った。

「天宮さん、結構、乗り気ちゃうのん」

「うん。実は結構、乗り気」

「ほかの女の子は適当にやっといてーて感じやったけど、天宮さんだけなんか楽しそーに聞いてたよな」

「そうやった？」

「明らかに。白河も藤生も笑ってたで」

藤生氏が笑う、というのがなぜか意外に思えた。

「白河と藤生って、教室で見るよか実際は仲ええねんで」

「そうなん？」

「なんか小学校のころからのつき合いっぽい」

へー、それは貴重な情報。それ聞いただけでも電話したかいがあるってもんだ。

とりあえず。

「日曜日午後十時に、キャナルタウン中央駅東改札口、ケーブルテレビのモニター前集合。やね」

と復唱してから電話を置いた。

日曜日は男子精鋭三名全員来るんだって。その三人の中で藤生氏がどうふるまうのか、非常に興味深い夏休みの研究課題やわ。笑う藤生氏、見られるかもだよね。

日曜日、めっちゃ楽しみ！

05．結界

日曜日は真っ青に晴れ、十時すぎだってのにきっと三十度は超えてる。
つらい。水色のキャミソールに白のサブリナパンツでもつらい。

「日傘がほしい！」

熱烈に思った。
私が駅前スーパーの自転車置き場にマイ自転車をとめていたら、藤生氏を乗せたマウンテンバイクがすぐ横に突入してきた。
私は半身退いた。きゅきゅ、とタイヤと地面がこすれる音がした。

「遅刻娘」

珍しく彼から声をかけてきた。

「十時ちょうどやもん」

と反論を試みる私。

「……待て。私が遅刻なら藤生くんはどうよ」
「白河はもう来とる。あと鹿嶋はキャンセル」
「反論なしっすか」

待ち合わせ場所へ急いだ。
彼のいうとおり、白河くんは文庫本を手に立っていた。
鹿嶋くんはレポートを借りるために一週間、姉の奴隷となるそうな。彼を待ち受ける運命がどんな過酷かは知らない。とりあえず彼

の尽力に謝意を示し、その身の無事を祈っとく。五秒ほど黙祷。

「なにで来た？　ふたりともチャリ？」

「うん」

十時二〇分、青野原ダム行のバス。

キャナルシティターミナルから五〇分、揺られた。

高層マンションが何棟も空へ伸び、街路樹沿いに戸建の家が広がり、幹線道路が交錯する市内中心から少し離れると、畑、田んぼ、その間に一軒家。さほど遠くもなく山が連なる。

苅野は盆地に広がる平野のまち。ひと昔前はだいたい畑、田んぼ、その間に一軒家がぽつぽつと、といった世界だったのだろう。車窓の景色は苅野の原風景だ。

水原バス停を降りた。

家を出てきたときより断然、涼しい。

周囲はすっかり私たちの住んでいるまちとはかけ離れた世界だった。となりのト〇ロの世界……あれって、都会人の思う理想の田舎だよね。実際の田舎って、もっと無粋。バス停にはガソリンオイル缶を転用したサビたゴミ箱。木々の間にコンクリートの電柱が立ってて、空を電線が横断してる。ところどころ陥没したアスファルトには雑草がのぞき、登り坂を欠けたコンクリートを踏みつつ歩いて登り、私たちは目的地に向かう。

十五分ほど歩いたら『水原感神社』の鳥居が私たちを出むかえてくれた。

ここが今日の目的の場所だ。

いまや魔よけの意味は忘れ去られたのかもしれない。境内は地元のイベント会場的なノリで、やぐらが組まれていて『水原地区子供会』と書かれた白テントが張られている。人はいない。祭りの前か

後かは不明。

「天宮さん、ここ上がってきてみて」

白河くんが、石段の上から手を振った。

石段を登ると小さな社があり、その裏からは登りの土の道が続いてる。

足元は荒れており、ところどころ道がわからなくて草をかき分けて進む。

歩きづらい。ハイカット気味のスニーカーでよかったと胸をなでおろす。でもキャミは失敗……。枝が腕に当たるのは我慢するけど、肩だと耐えられないのはどうしてかな。それに白っぽい服装も大失敗。草とこすれて色がついてしまう。

なにより草いきれがすごい。むし暑い。

格闘すること数分。急に視界が開けた。

「わあ！」

眼下には畑、田んぼ。バス道が見えた。

私たちがいるところと向かいの山との谷間。木々の陰から鳥居の頭が見える。

バス停のところも涼しいと思ったけど。

空気が違う。

はっきりと感じる。さっきまでの雰囲気なんて地上世界の延長線上にすぎない。

「別の世界……って感じ」

私はふと感じたままを口にした。しょぼい表現で恥ずかしいけど。

「ここがその魔よけの結界なん？」
「魔よけやないな」

白河くんが腕組みしながら北の山の向こうを見た。山を越えると、となり町だ。

「ふうん」

藤生氏がバスに乗りこんで以来はじめて声を出した。
白河くんが尋ねた。

「藤生くんはどう思う？」
「おれは感呪能力はゼロやからな。なにもわからん」
「ためしに呪をつかってみればどうなるやろな」

白河くんは幾分挑発的に、藤生氏に提案した。
藤生氏は一蹴。

「あほか。もったいない」

白河くん『呪』のこと知ってるんだ。
藤生氏と小学校のころから仲よしってのはガセネタではなかったみたい。でも、もしかすると、意外と知ってる人多いのかな。それだと非常に残念だけど。

「ところで白河。どうゆうことよ。六カ所の感神社は魔よけの結界やないんか」

藤生氏は問いかけた。白河くんはメガネを上げる。

「外界と隔絶しひとつの器を完成させるための結界、といったほうが正しいんかな」
「外界と隔絶？」
私は首をひねった。藤生氏も眉を寄せた。
「サナリいわく……苅野はおれの『魔法の花瓶』みたいなもの。そういうことか？」
「言い得て妙やな」
「白河くん、なになに、どうゆうこと」
「それは」
呪を集めて、貯める。
藤生氏は花瓶に貯め込んでいるのだが、それを山あいの苅野市ぜんたいを器に見立てて貯め込んでいる、のだそうだ。せっかく貯めてるものがこぼれ出さないように、六カ所の感神社が結界を張っている。
魔よけじゃなくて魔封じ、といったほうが正しいだろう。
白河くんは地図を広げた。六ヶ所の神社をここ水原から時計回りに指し示してゆく。それらは市内を包み込むように、おおむね楕円を描いて点在している。
「え、藤生氏。それやったらここは、魔のもの？　がつくったん？」
「さあ」
藤生氏は怒ったような顔をした。
最近、彼の表情がよくわかる。怒ってるんじゃなく、真剣に長考中、シンキング・タイムのもようだ。
白河くんが昔、街道といわれていた道の遠景を撮っていた。

「白河くん、すごい呪に詳しいけど」
「ぼくもサナリさん……ビジュアル系のお兄さんとは知り合いやから。魔法は使えんけど」

白河くんはデジカメの画像を確認しながら、答えた。
……あんまり自然と、しらっと言うもんだから、驚くまでに多少の時間がかかった。

ビジュアル系のお兄さんの存在とか、魔法とか、藤生氏のおばさんが悪魔がどうのとかいうことって、どうも『苅野』という土地にも関係あるんじゃないの？
それが、この夏休みに考えてみた仮説。
藤生氏も白河くんも答えを探してるみたい。
それにしても委員長・白河くん。彼はキーパーソンなのではないだろうか。私はこのとき思った。実はこの予測はかなり当たっていると後日知るのだけれど……その話はまた次の機会に。

06. ルール

藤生氏の花瓶いっぱいに『呪』がたまった。『魔の世界への門』が開くのには十分な量だ。

だが、藤生氏はそれで行こうとはしなかった。第二の花瓶にスペア用『呪』を貯蔵しはじめた。

白河くんの諫言あってのことだ。

「備えあれば憂いなし」

手持ちの『呪』に余裕は持たせとかなきゃね。

それにしても、私が通り魔に襲われた折りに使った『呪』。あれは半年がかりでためたものだったらしい。それが四ヶ月でいっぱいだなんて。間違いなく、異常なペースといえるだろう。

「なんらかの理由で密度が前より濃いみたいや」

藤生氏はそのように分析していたのだけれど……。

＊　＊　＊

マンション・グリーンヒル東城山の屋上に、藤生氏と私はいた。

地上二十四階建て、苅野市一ののっぽマンションで私の住まい。

市内の眺望は抜群。

目的はやはり『呪』収集にある。

秋の深い青空の下、私はぼーっとなにもせずに座っている。高いところだから地上とは体感温度がぜんぜん違う。

冬、ここで集めるのは寒すぎてムリかな、とふと思った。

「にぶんのいち。にぶんのいち」

花瓶が子どもの声でしゃべった。

どのくらいの量なのか、花瓶が自己申告するよう、魔法をかけているらしい。

藤生氏が『呪』を感じ取る能力が低いため、そういう機能をつけとかないと、花瓶いっぱいになっても分からないから。満タンになったときは『いっぱい。いっぱい』とわめくのだ。

「もう半分なん？　すごいなあ」

私は藤生氏を見やった。彼は予想に反して厳しい表情をしていた。

「早すぎや」

ただ、ここまではさほど日常と変わりはない。

空が赤くなってきたときに、あのひとは我々の前に姿を見せた。

屋上への出口に現れた人影を認めると、藤生氏は一瞬、身を固くした。

そのひとは二〇才前後だろうか。身体のラインがよくわかるレザーパンツに、ウエストシェイプされた、ダークグリーンのシャツを身につけていた。びっくりするくらい整った顔立ちに赤茶の髪は、フランス系俳優を思いおこさせた。

美形かくあるべし。私の目は彼一点に注がれていた。

「サナリ」

藤生氏が沈黙を破る。

サナリ、と呼ばれたお兄さんは微笑むでもない微妙な表情で、私たちを見下ろしていた。

「とある話を仕入れてきました」

テノールの、しっかりした声だ。声までもが、美形かくあるべし。ビジュアルに違わない。せりやかのんに見せて堪能させてやりたいもんだ。

サナリは私の存在を確認し、藤生氏にこの場で話していいのかと手振りでたずねたみたいだ。

藤生氏はかまわないと返答した。

サナリはそれでは、と地べたに座った。

「苅野の呪の量は明らかに増加しています」

藤生氏はうなずいた。

「その理由ですが、魔のものたちが、いま話題の魂を自分のものにしようと、集結しつつあるからです」

「魂を自分のものにってーと？」

藤生氏は無表情で問いかけた。サナリはけげんそうな顔をした。

「以前、お話したはずですが」

「忘れた」

藤生氏が質問したのってなんにも知らない私のため……と考えるのは図々しいかな？

魔のものは『魂』を持てばもつほどステータスが高いそうだ。

ただ『魂』にもランクがある。

聖職者の魂は、たとえばローマ法王だとかチベットの高僧だとかを手に入れた日には、そりゃあスゴいらしい。ただ、そんな社会的宗教的なステータスがなくても、心の持ちようなりがまっすぐなキレイな人は、魔のものの社会では価値が高い。逆に悪いことしまくった人の『くすんだ魂』をいくら持ってたって自慢にならない。言い方は悪いけど、いわばゴミ集めしてるようなもんなんだって。

そんな魂の価値は客観的（？）にランク付けされるそうだ。法王さまとかなら一目瞭然。だけど、一般人のランク付けは目利きの技術が必要になる。魔のものたちの世界ではそういう鑑定技術者がいて……なんだか宝石鑑定士みたいな感じだね。

「今回、あいつらが狙っているのは、二週間後の土曜日に死期の迫った、苅野市在住の一二歳の少女の魂です。近年まれにみる聖職者並のピュアな極上物という鑑定結果が先月、公開されたものですから、かなりの数が集結していますね。

まあ、まだ時間もありますし、主に活動しているのも偵察系の小者ばかりですから、この程度の牽制のしあいですんでいますが」

「そいつらの呪か」

藤生氏は花瓶を両手で持ち上げた。

一見、空っぽ。中は半分『呪』のつまった魔法の花瓶だ。

「さっき小者だけって言うてたけど、そんな極上物を狙うんに、大物の魔のものは来ないもんなんか」

「魔のものには魔のものなりのルールがあるのです」

「嘘はつけなくとも、言葉は濁すんやな」

「真実ですよ」

藤生氏の言葉も構わず、お兄さんは続けた。

「もしそんな貴重な魂を、人間の皆が手に入れたとしたら？　魔のものの間でうわさになるでしょう。確実に皆の父親の関係者の耳にも届くはずです。
今日来たのはこの提案をしたかったためです」
「白河にはこの話」
「しましたよ。彼は興味がないと言い切っていましたがね」

藤生氏はサナリに手を差し出した。

「材料を」

サナリはシャツのポケットからメモと写真を出し、藤生氏のてのひらに乗せた。

「前向きな動きを期待してますよ。ではまた」

私がメモに気を取られたうちに、あのかっこいいお兄さんの姿は消えていた。
人間じゃないよね……。きっと。

「苅野市城山三丁目二一の一　グリーンヒル東城山一〇〇八、ここちゃうんか」
「ここの住所」
「この子に見覚えは」

写真を見て、私ははっとした。

「日下部さんちの、ここに住んでる女の子。この子を魔のものが狙っとんの？」

「二週間後に亡くなるらしい」
「たまに見かけるけど元気やよ」
「交通事故」

私は非難の声をあげた。
二週間後に死ぬって、それを知ってて見殺しにしていいわけないじゃない。あまつさえ、魂を手に入れようだなんて。

「運命は他人が変えられるもんやない」

それでも、と私はくってかかった。
藤生氏は困ったような顔をした。次に、花瓶をわきにかかえ、うつむいて不機嫌そうな顔をした。

「……魔のものたちが期して待つ魂を救うても、目立つのは同じやな」

藤生氏って少しひんまがってはいるけど、ほんとはいいやつなんだよね。

07. 事故現場

二週間後の土曜日。
魔のものの間で評判のタマシイの主『日下部あおい』を藤生氏と私とは見張っていた。
私はダークベージュのスリムラインなワークパンツに、黒にちょっぴり金のラインをデコったアンサンブルを着ていた。少し大人のスタイルを目指したわけだが、藤生氏から感想なぞまず得られまい。
藤生氏のスタイルは、ネイビーのパーカーにグレーカラーのジーンズ、アウトドアブランドの大きなショルダーバッグ。飾り気ないけど、うまくナチュラルにきまってる。結構かっこいい。
ちなみに藤生氏はバッグに、呪がたまった小さな花瓶を忍ばせていた。

対策なんてなにもない。今回は、白河くんの協力は得られなかった。

「運命は他人が変えられるもんやない」

藤生氏と同じせりふを白河くんは口にした。
白河くんは頼まれたら嫌といえない、人のいい子。それが学校で受ける印象だった。
でも藤生氏評するに、

「できることは快く手を貸しても、ムリそうと判断したらさっさと断る、きわめてシビアで常識的で冷静な人間」

……掛け値なしにいいひとじゃないんだ。印象が変わった。

それよりも張り込みのことだけど。

こっそり監視する側からすると、監視対象の日下部あおいちゃんは、幸いな条件がそろっていた。

まず『一家で遠出』の予定はなさそうだ。父親が単身赴任中という情報を耳にしていた。隔週一回は家に戻ってくる。母親はパートにでてるそう。彼女は成績優秀、週一回ヴァイオリンに通ってる。おっとりとしたお嬢さまで、おおむねインドア系。

できるなら、Xデー前後にあまり外出してほしくなかったんだけど。

残念ながら、日下部あおいは十一時から徒歩で家を出たのだった。仕方がない。尾行を開始した。

行き先は、キャナルシティ駅前の大型ショッピングモール『アクシア苅野』。彼女と待ち合わせる人はいない。ひとりでお買い物、のようだ。

二階の洋服売場、下着売場、おもちゃ売場と回る。余談……下着売場での藤生氏の困惑顔が印象的だった……以上。

日下部あおいはひととおり売場をチェックし終わったか、移動をはじめた。私たちは気づかれないよう、ひとつ隣の列の売場を通った。

だけどその選択は失敗。そこはゲーム売場で、顔見知りにばったり会ってしまったのだ。

「藤生と天宮やんかぁ」

同級生の庄司くん。渡辺くんが隣にいる。彼らはニヤニヤした顔で、私たちの行く手をさえぎった。

日下部あおいが遠ざかっていく。

「おまえらってつきあっとんのー?」

無視。
私は彼らの横を通り抜けようとした。

「なんや、返事しろや」

ガラ悪っ。なんで偉そうにからんでくるのさ?

「だーうるさいわっ」

私は彼らを強引に押しのけようとした。やばい。日下部あおいちゃんの姿が見えなくなる……一方で二人はしつこくつきまとい、そんな私のあせりと抵抗でさえ、おちょくりの対象にしてる。
泣きそう……こっちは人ひとりの命かかってるってのに!

「うるさい」

藤生氏は二人をにらんでつぶやく。

「邪魔すな」

か、かなりの迫力……庄司&渡辺、固まって後ずさってる。
藤生氏はすばやく私の腕をひっつかむと、早足で彼らから離れた。
私は文字どおり、引っ張られるかたちで彼についていった。

「ごめんな」

藤生氏はそう言った。
私には彼が謝ってる理由が分からないんだけど。

「謝ることは……」
「いた」

日下部あおいちゃんだ。ふたたび彼女の姿を認めた。
彼女は一階のベンチを置いたレストコーナー、インフォメーション・コーナーにつながるらせん階段を下りようとしていた。
彼女の周囲に、黒い霧みたいなものが見えた、ような気がした。

「なんかもやがかかってる?」

魔のもの。
藤生氏は鋭く言った。
まとわりつくような黒いもや。それは細胞が分裂するように増えていった。

「え、じゃあ」
「やばい!」

藤生氏はとっさにバッグを開いた。日下部あおいは突然、体のバランスを崩した。

あっという間だ。

一階レストコーナーに人だかりができた。たこ焼き屋のおじさんが、日下部あおいちゃんに声をかけていた。
彼女、ぐったりと動かない……。
私たちは二階吹き抜け部から彼女を確認した。ここにも、何事かと様子を眺める客が集まってきている。タンカがすでに運ばれてきていたが、救急が来るまで動かすなという怒号も耳にした。お客さ

ま、離れてください。四、五人ほどの店員さんたちがやじ馬を散らそうと格闘していた。
私は一階を見るのもいたたまれず、藤生氏の顔へと視線を向けた。
藤生氏は日下部あおいの姿を凝視している。

「大丈夫、たぶん……」
「頭をカバーするように、呪をとばした」
「それなら絶対大丈夫」
「頭さえ打ってへんかったら」
「絶対助かってる！」

藤生氏は私を見ると、深呼吸をした。そして、腕を組んでフェンスにもたれかかった。
彼の体は、かすかにふるえているようだった。
私もただ、つっ立っているばかり。それが、限界だった。

08．お見舞い

「では、くれぐれも身の回りに気をつけて、よい年を迎えましょう」

暴力事件、通り魔、コンビニ強盗。ここ数ヶ月ほど市内で頻発している事件の数々。それだけ苅野が都会になってしまったのだ、と昔からの苅野住民はそう話している。

でも、都会化しているからだけじゃない。私はそう思ってる。だてに藤生氏のキテレツな行動につきあってるわけじゃないんだから。

終業式の日だけど藤生氏は学校を休んでいた。

白河くんがプリントの束と通知票を持ってきた。

「藤生氏に届けろって？」

「藤生君の通知票、笑えるくらい学習欄と生活欄のギャップがすごいで」

「さいてー。他人の勝手に見るかなー」

毎度のこと、と白河くんは笑った。

「そのへんはギブ・アンド・テイクやん。だいいち、藤生くんが通知票見ただの見ないだの、気にするようなやつに見える？」

「見えへん」

むしろ学校の成績なんぞ全く眼中にないといっていいだろう。

かといって、勝手に見ようとは思わない。どうせ見せてくれるといえば無言で渡してくれるだろうし。……自らの手持ち分と比べると

悲しくなるから、見たくないけどさっ。

「今日、用事済ませたら例の公園に顔出すかもしれへんけど」

私は彼に不審の目を向けた。

「なに考えてるん？　いままでなんも関わろうとせんかったくせに」

「んー、僕の見立てではそろそろサナリさん動き出すと思うんよね。そやから、気をつけて。そいじゃ、また」

私はほっぺたをふくらませて、怒ってるふりをして見せた。

だけどその一方で、頼りになるかもと思っているのも事実。ほかに『呪』のことを相談できる人はいない。魔法少年藤生氏を理解してる人も。

それに根拠はないんだけど、藤生氏さえ知らないなにかを彼は知っている、と思う。

＊　＊　＊

藤生氏はグレーのピーコートを着て、広谷公園にたたずんでいた。

足元には花瓶が四本。うち二本は呪でいっぱいになっている。

おみやげはプリントと熱いお茶。藤生氏がふう、と息を吹きかけると白い湯気が立ちのぼるが、すぐに消えてしまう。

「凍頂烏龍」

「当たーりーい」

私が何度も差し入れしてはお茶講釈を披露していたので、藤生氏

は『利き茶』ができるようになったようだ。
道路をはさんで向かい側。苅野市立総合病院の敷地だ。
公園から見える建物は、南病棟。その五階に外科病棟があった。
日下部あおいちゃんはそこにいる。頭を強打し意識不明のまま、二ヶ月が過ぎようとしている。

「やっぱり、もやが見えるねえ」

どうもあの日下部あおいちゃん転落事故から、見えはじめたみたいだ。
少しずつ、なんとなく。
慣れとか経験とかってのは、恐ろしいもんだね。
でもこれはラッキーなこと。藤生氏は感知が大の苦手だから、私でも役に立つようになったのだ！
そのかわり、最近妙に金しばりが多い。二ヶ月も経ったら慣れたけど。

「やっぱりひとりやったら会話ムリ」

藤生氏は不機嫌そうにつぶやいた。
会話。道を隔てて離れてりゃふつうはムリだ。けど、魔法少年藤生氏のいう会話ってのは、常識の枠外でするお話。すなわち、ココロでする会話……魔法でそんなことが可能だったりする。
ただ藤生氏は、日下部あおいちゃんのココロを見つけられない。
そこで、私の感じるだけ力が発揮されるのだ。

「よし、チャレンジ！」

私はとびきり元気を演出して、藤生氏に握手を求めた。藤生氏は病院に意識を向けつつ、手を握りかえした。手袋ごしに、冷たい手。

藤生氏が目をつぶった。

そういえば『感じる』ということ。

これを、理論立てていうと難しい。

見えないものを『見る』というのは、そういうものを感じるための触手に触れたときのことを指す。どちらかというと『触覚』に近い。あ、物体的な触覚を考えたら、ビジュアル的にはキモいので、感覚論でとらえてください。

例えるなら――なにかいると感じたとき。それは、だいたいは他の五感いずれかが意識にはたらきかけた結果だ。視覚つまり眼で見えたからなにかいる、と意識するし、聴覚なら耳から音が聞こえて気配を感じるってぐあい。

藤生氏の今回の魔法は、そういった感覚を遠くにとばすもの。気分的には触手があってそれを伸ばしてみました、って感じ。その触手を使って日下部あおいちゃんのお見舞いにいくのが、私の役割だ。

しかしこれ、かなりこわい。

なぜなら、日下部あおいちゃんの元にたどり着くまでに、魔のものも当然いるわけで。

「来たあぁ！」

魔のものに襲撃されて半泣きの私。

「どこ」

「左ななめ前っ」

かろうじて、魔のもの襲来位置を知らせる。

藤生氏は花瓶をかまえて、ぼそっとつぶやく。

「くうきほう～」

ドラ〇もんのひみつ道具『空気砲』のパク……ヒントを得て編み出された魔法らしい。

花瓶の口から呪を放って魔のものをやっつける。その発動たるや、つぶやくだけ。気合いぜんぜん入ってないのに、威力は絶大。魔のものの姿は簡単に消えてしまう。

しかも、やっつけた魔のものが持っていた呪を花瓶に回収するのだが、やっつけるときに使う呪よりも回収する呪の量のほうが多かったりして、タマ切れゼロ。

人海（魔海？）戦術で攻められても心配はなさそうだ。魔のものさんは個人主義なのか、今まで集団で襲われたことはないけど。

「ありがと！　まいど最強やね」

「レベル低いのばっかやし」

藤生氏はそう言う。

謙遜じゃない。そんなガラでもないし。実はチートで無敵ちゃうの、この人って。

「やっぱり、いくら魔のものといっても殺したことになるんかな」

藤生氏は無言だった。

人間を助けるため魔のものを消す、その矛盾には気づいている。

「いた。見つけたよ」

「イヤーフォン」

藤生氏はすぐ、新たな魔法をかけた。

彼女と私の会話を聞けるようにする魔法だ。残念ながら、彼は話しかけることはできない。聞くだけなので、イメージはイヤーフォ

ン。電源不要・ワイヤレスのすぐれもの。

「こんにちは。今日もきましたあ」
「はるこさん」

彼女は私の存在に気づいた。
二ヶ月間、塾の日以外毎日会っている。すっかり下の名前で呼びあう仲良しさんだ。

09．彼女のタマシイ

「魔のものは大丈夫？」
「あんまりいないみたいです」

うん。よい傾向だ。
事情は彼女もよく心得ている。
ことの始終も初めてのお見舞いであらかた説明ずみだ。
納得してもらうのに苦労はなかった。思えば、こんな信じがたい珍奇な話、どこからともなく誰やわからん人間から聞かされたら、疑ってかかるよね。
これも貴重なタマシイゆえなのかしらん。

あおいちゃんと私は、しばらくはとりとめのない話をした。
今日はくもり。まだ雪が降らないねとか。クラスメートがお見舞いに会えなくてさみしい、とこぼすのをなぐさめてみたり。一転、ドラマのあらすじを語りつつ、お茶の入れかたを論じてみたり。
話してても、あおいちゃんは素直で気が利いて、それに考えがしっかりしてて、大人びてる。学年は三年違うけど、気がある。……私が幼いんではというご指摘はスルーで。

「ところではるこさん」

改まったようすであおいちゃんが言った。

「なんでしょ」
「魔のものが来なくなったんって、藤生皆ていう人のおかげなんですよね」
「うん。そう」

「そのひとに、改めてお礼を言いたいんです」
「藤生氏なら、私を通して聞いてると思う」
あおいちゃんはうつむいて、小声で告げた。
「いままで、ありがとうございました」
「……いままで？」
藤生氏が先に反応した。
「いままでってどういうこと？　……って藤生氏も言ってる」
「それは、つい昨日……サナリっていうひとの話を聞いて」
サナリ！
白河くんの忠告を思い出した。そろそろ動くって、もう来てるやんかあ！
あおいちゃんは私のココロの動きを感じ取り、私がサナリを知っていることを理解すると、再び話しはじめた。話はたどたどしいものの、彼女のココロに浮かぶ情景が、すんなり伝わってきたので話はよく分かった。
つまり、サナリは彼女にこう告げたわけ。
「日下部あおいは、運命として定められた寿命を越えて、生き続けてしまっている。これは法則をたがうことなので、このまま生き続けると、まず身内にその影響が及ぶ」
脅しじゃないの？
「そんなん信じたらあかんって」

私は彼女に強く言った。声にも出したかも知れない。
そこへ藤生氏が口をはさんだ。といっても、あおいちゃんには聞こえていないのだが。

「嘘やないかもしれん」
「なんで？」
「サナリには嘘を話されへんてゆう魔法がかけられとるらしい。自称やけど」
「その自称が大ウソやったら？」

ちょっと意固地な私。けんか腰である。

「本当かもしれん」
「藤生氏は彼女が死んでもええ思てんの？」
「そこまでの責任を負えるんか」
「責任を……」

言いよどむ私に藤生氏はたたみかける。

「サナリの警告どおり、彼女も今の状態のままで、さらに彼女の身内に不幸が起こる事態になったら。今よりも悪い状況を招いた原因は俺らやぞ」

二の句が継げない。
でも今さら見捨てるなんてできないじゃない？
そんな頭の中のもつれぶりを見抜かれてるのか、あおいちゃんはふたたび話しだす。

「私もほんまかなあと思ったし、どうしようか迷ったんやけど。でも、運命より長く生きられたし、その間みんな私のこと心配して

くれてるんやなってわかったし、はるこさんにも会えたし……もういいかなって。で、はるこさんに、最後にお願いなんです」

私はどきっとした。

最後ということばに。

「なに？」

「私のタマシイ、というの、天宮さんがうけとってほしいんです」

？だらけの私に、藤生氏は解説してくれた。

「魔のものの持ち物になるくらいやったら、天宮のところにおるほうがましやと」

「私のとこ？　そんなことできるん？」

「できる」

そして、私が同意するのかと聞いた。

「そりゃだって、彼女の頼みやん」

断るわけはなかった。即座に同意した。

藤生氏はというと、眉をよせている。私は少々心配になった。

「なにか問題あるのん？」

しばらくの間、彼はじっと私を見ていた。

やがて、ゆっくりと足元の花瓶を持ち上げた。

「やる」

藤生氏はそういって、眼を閉じた。私も眼を伏せた。
なんだろ、聴覚がぷつんと切れた感じ。道を行き交う車の音が聞こえるも、やがてだんだん遠くなってゆく。
静けさが訪れる。
音なく時が流れる。
やがて……静寂を藤生氏は破った。

「おわり」

自分の目から、光を感じた。
あらゆる魔法から解放されたのか、感覚もいつもどおりに戻っていた。目前にいたあおいちゃんも、今は見えない。

「……彼女は？」
「天宮のところ」
「うそ、なんも変わってへんよ私」
「変わった」

藤生氏は病棟へ眼をやった。

「人がひとり、おらんようなった」

私は彼の視線を追った。
――病室では異変に気づいているころだろうか。
看護婦さんが、お医者さんが慌ただしく動き、いつも病室に待機している彼女の母親が、ただならぬ動きにおびえる。想像に難くない、病室の情景。
時折、空から落ちてくる白い羽のような、今年はじめての雪。灰色の空を仰いで思う。
さっきは気軽に、いいよと言った。

けど……自分の選んだことは、実はとんでもないことではなかったろうか。

「私、彼女に……」

藤生氏は無言でジャスミンティーを入れ、私に差し出した。

家で入れたときは自画自賛したくらい、良い香りと苦みとでおいしかったはずなのだ。でも今は味もわからない。暖かい液体がのどを通り抜けるだけだった。

ふう……と私は長く息ついた。

涙はだすまいと努力。

でも落ち着いてる場合じゃなかった。

スロープから歩いて近づいてくる人影に気づく。白河くんと、サナリだった。サナリは相変わらずの美青年。で、白河くんはその仲間なのか？

サナリは藤生氏に微笑みかけた。

「例の少女は、天に召されたのでしょうか？」

「さあ」

藤生氏はうそぶいた。冷たい目をサナリに向ける。

「うそを平気で返してくれる。アンフェアではないですか」

サナリは微笑む表情を変えない。

「魂は、どの花瓶へ？」

サナリは、あおいちゃんの魂を藤生氏が手に入れたと確信してい

る。でも、今どこにあるかまでは分からないのだ。
バラしてはいけない。私は直感的に思った。サナリにも、白河くんにも。
藤生氏も無言だった。だれが教えるか、といった感じでサナリを斜めに見ている。

「忠告しておきます。このことで確実に、魔のものどもは皆の存在を知ったことでしょう。でも今は手に入れた事実、それだけで満足しておくべきです。その魂を人間の皆が持ち続けるなら、苅野の魔のものすべてを敵に回すことになるからです」

藤生氏は冷ややかに返した。

「それは大変やな」
「魔のものには数々のルールがあります。魂の争奪において、上位の魔が直接参戦しないこと、下位の魔が数々の保証と引き換えに手に入れた魂を上位の魔に献ずること、とされているのもそのひとつ。無益な争奪戦が歯止めなきがゆえに拡散せぬように、偉大にして賢明なる上主様がお定めになられたルールです」
「知るかそんなルール。俺は人間や」
「至宝をめぐる争いに加わるのなら、人も魔も、関係ありません」
「そやから大変やろなーて思てるわ」

要するに。サナリさんはそのタマシイよこせと。藤生氏が持ってると危ないからと。
なんか虫のよすぎる話じゃないかね。

「あんたの要求は断る。最近、なんでか知らんけどさらに魔のものがえらい勢いで増えとおしな。それで覚悟はしてる」
「それは残念です」

サナリさんは表情を変えない。藤生氏の反抗も想定どおりってとこか。

だけどそこへ、いまひとりの人物が割って入る。

「サナリさん。そもそも、おかしくないですか」

白河くんだ。

にこにこしながらも、その問いかけは鋭い。

「その弱い下級の魔物がこんなに増えてるのは、それこそ無秩序な状態になってると思うんですが。上主様の賢明なる思いと矛盾してるんでは」

白河くんの言葉に、ぴくっとサナリが反応した……ように見えた。

彼はサナリの仲間なのかと思ったけど、そうじゃないの？

「帰ろう、降り出す」

藤生氏はそういって自分のリュックと私の水筒を肩にかけ、背を向けて歩き出す。

私は二人に、そいじゃ、とだけ声をかけ、後を追った。

10．プレゼント

黒い霧が大変なスピードでせまり来る。魔のものの集団だ。
『呪』の入った花瓶を藤生氏は掲げる。すると、私たちの足元には、まばゆい光を放つ小さい魔法陣ができあがる。
霧ははじき返される。
再び、藤生氏が動く。
ぴかっ。
閃光が一面に広がる。なにも見えない。
やがて眼が視力を取り戻すと……魔のものの集団は消えていた。

＊　＊　＊

それは、ある春休みの出来事だった。
いままでにこういう事態には何度か遭遇したのだけど、いまだに慣れない。まあ、慣れたいとも思わないけど。
気持ちを落ち着かせようと、駅前の露店の指輪を眺める。

「手作りやねんで。かわいーやろ」

お兄さんが声をかけてきた。ワイン色のニット帽にダークグリーンのナイロンジャケット、だぶついたズボンをはいている。
品物は、というと。全般的にシンプルな、ハンドメイド感のあるものが並んでいる。重ねづけすると可愛いかもな、アクセサリーのたぐい。そんな中で異色なのは、ブリキづくりで文字盤にふたがついてる時計だった。
見た目ゴツくて自己主張が強くて。端的にいえば、かっこいい。

でもおこづかい一ヶ月分……。

藤生氏は後ろから不機嫌そうに眺めていたものの、私と同じく品定めをはじめた。四角いシルバーの台に赤い石（？）がはまっているアクセサリーを手にしている。透明な糸がついていて、身につけていてもシルバー部分しか見えない。長さは手首につけるくらい。それもかわいいなー。

「いくらすんの」

藤生氏が尋ねる。

「八〇〇円。安いやろ」

「五五〇」

「彼女の前で値切るか？　オマエ」

そんなことを気にする藤生氏ではない。そして私も気にする相方でもない。

「……そんなんで売れるか。七〇〇円やったら」

「五八〇」

しばらく数字の応酬が続く。品定めより交渉の行方を見てる方が楽しそう。

「しかたねーな、六六〇が底値」

「それで買う」

で、交渉成立となった。

「その時計いい感じやな」

藤生氏はゲットした品を握りながら、私が注目していた時計を指さす。

「あ、これ？　俺的イチオシ逸品。元町と西宮の雑貨屋にシリーズおいてるで」

お兄さんはそのお店のチラシをくれた。それを藤生氏は一瞥して言った。

「小遣い貯めたらまた交渉に来る」

「定価で買ってくれー」

お兄さんはそう嘆きながらも、またこいや、と私たちを送り出してくれた。

しばらく歩いて、藤生氏は握っていた品を私の眼前につきつけた。

「やる」

藤生氏からプレゼントとは……予想不可な展開だ！

「ええの？」

「おう」

「ありがとう！」

どきどきしながら、左の手首につけてみる。全然目立たない。

「学校でつけてもばれなさそう」

「それで、天宮でも魔法が使える。ただし、エネルギー貯蔵方式を採用のため、何度も使えない。それと、使用者の集中力をエンジン

代わりにしているので、使うと疲れる」

なんと。これがあれば……。

「魔法使いはるこ、誕生っ！」

「……話聞いてるか？」

「聞いてる聞いてる。何回かしか使われへんのね」

「目安は、魔のものを退散させるくらいやったら、三回くらい。魔法陣つくるとか、大技になったら一回きりや」

冒頭の如くの、魔のものの襲撃。これは日下部あおいちゃんのタマシイを手に入れて以来、ずっとだ。

サナリはたしかあおいちゃんを貴重な『いい魂』と言っていた。その希少なお宝を奪うためか藤生氏が手に入れて――と魔のものたちに知れわたって――以来、藤生氏に攻撃をしかけてくる。

そのことで昨日までは、藤生氏はずっと私を避けていた。火の粉がふりかからないように……だってことは、なんとなく私も気づいてた。

11．委員長の事情

その夜。私は塾の帰りだった。

「白河くん、どうしたん」

東谷公園で、コートを着てアコースティックギターをいじっている彼を見かけた。なんとなく沈んだような重いような、そんな空気を感じたのだけれど。

彼は私に気づいて顔を合わせると、ほのぼのした、いつものような笑顔を見せた。

「ちょいと遊んでるの」

彼は藤生氏と仲良し。藤生氏が魔のものがらみで不登校なときに相談なり情報交換なりしたことはあるけど、彼自身のことはあまりちゃんと話したことないな。

よし、いじろう。

と、最初のノリは軽かったのだけれど。

「ひとりギター片手に？」

「孤独と旅を愛する漂白の吟遊詩人ごっこ中」

「スナフ〇ンかい」

「なんだいム〇ミン」

だれがムー〇ンだ。

「でもどうしたん。なんか追い詰められてますって感じ」

白河くんは一瞬こわばったようだったが、頭をもたげて一言。

「藤生くんがなんか言った？」
「いやなにも」
「ほんまに？」
「自分のことすら聞かないと話さないのに、白河くんのことを話題にするわけが。以下略」
「そうかぁ」

白河くんはふうっと白い息を吐く。少し考えて、私を見上げた。

「家から緊急避難してて」
「緊急避難？」
「今、家がごたついとって」
「なに？　事件？　事故？　非常事態？」
「いやいや、親父が帰ってきただけ」
「そいで緊急避難って、お父さん暴力ふるうとか！」
「それはない」
「じゃ、単身赴任？」
「へ？」
「うちのお父さん今、短期で東京赴任中やねん。べつにうしろめたいことしてるわけちゃうけど、それでも突如、今日帰るとか言われると、いろいろあわてることあるわ」

平凡な天宮ファミリーの話は以下省略として。
白河くんの家はなんと県会議員。
白河くんのお父さん一代二十年で不動産事業に成功、そのあともやる事業がすべて当たり、政界に初チャレンジして見事に当選。この地域の経済界では知る人ぞ知る存在らしい。

「なんでその避難を」
「親父と顔あわせんのが、ちょっとね。親父が寝るまでのがまんです」
「がまん……おじさんが嫌いなん？」
白河くんは首を振った。
「親父がおれを、嫌いやねん」
ふだん白河くんは一人称を『ぼく』と言う。
そのあたりがまた、いつもと違った。
「でも、こんなとこずっといてると風邪ひくよ。しばらくうちでも来る？　いいお茶入荷してん」
「他人ん家あがると長居してまいそうやしなあ」
……と、白河くんはやんわりと私の申し出を断った。
「ヒマくない？　少しつきあうよ」
「案外ヒマやないよ。これ持ってきとおから」
「ギター弾くんや」
「鹿嶋とスタジオに行くこともあるのさね」
彼はギターに目を落とした。ゆるやかで渋い感じのバラードを奏でだす。
「なんか聞いたことある」
彼は途中から歌ってみせた。
……すごく、うまい。さすがスタジオに行くという気合いの入れ

ようだけはある。しかも全部英語だよ！

「誰の曲？」

「エリック・クラプトン。『ＣＨＡＮＧＥ　ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』。ぼくの歌より原曲……ＣＤ聞いてみる？　夜中、親父のバーボン片手に聞くと最高」

二期連続の委員長、生活態度むちゃくちゃやん。

その瞬間、びん、とギターの弦が音をたてた。白河くんはギターを確認する。

「切れてる」

私は気配を感じた。

魔のもの。

と、思ったのは人間だった。サラリーマン風のおじさん数人、学生ぽいお兄さん、ＯＬ。だけど……目つきが違う。気配が変だ。

白河くんも様子を察し、携帯を取り出した。電話の先はたぶん藤生氏。彼らは魔のものがらみだ。だからヘルプを求めたってところだろう。

「うえっ！」

背後になにか悪い気配。ふりかえり、視覚的にとらえたのは笑う影だ。

「そこの影！　どういうつもりよ！」

影が笑った……ような気がした。

答えたのか、あざ笑ったのか、それとも？

「藤生くん相手やったら勝てんから、周囲の人間を襲って脅迫でもしよかって算段か」

白河くんは携帯を切ってカバンにしまう。そして、ギターケースを構えた。

「ちょうどストレスたまっとんねん！」

彼は先手を切ってギターケースでおっさんに殴りかかる。私も追って、塾のテキストで重いショルダーバッグをふりまわした。

飛びかかってきたＯＬの頭にバッグが命中、彼女は私のほうにつんのめってきた。僅差で避けると、背後から学生が抱きついてきた。

うそー！　離れてくださいってば！

ずん、と背後に鈍い衝撃。

学生がずるずると地面に崩れ落ちる。白河くんのおかげだとわかった。

が、間もなく彼も私もサラリーマンに羽交い絞めにされ、互いに自分のことで手一杯になる。　またＯＬが立ち上がってきた。私に向かってくる。

私は全身に悪寒が走った。

「白河くん！」

彼は自分を抑えこんでるサラリーマンもろとも、私を羽交い絞めにしてるサラリーマンにぶつかっていった。だけど白河くんも私もウェイトが軽くて、倒れこんで下敷きになる。

その直後、鋭い風が走った。

影が舌打ちするのが聞こえた気がした。

風が通り過ぎるとＯＬは服は破れ、切り傷だらけになっていた。

下敷きになっていた私は無傷だ。サラリーマン二人は血を流している。白河くんの傷は二人に押さえつけられたときのすり傷だ。
またも嫌な感覚。

「また、来る！」

今度はかわしきれない。そのときだった。
影が、悲鳴をあげた。
気配は霧散。襲撃者たちは次々に倒れ、意識を失っていた。
それは藤生氏のしわざだった。
果たして、彼は花瓶をかかえ立っていた。遅れてやって来るのがヒーローて感じ。助かったぁ……。
と、ほっとしたその直後。信じられない光景を目にした。
白河くんがつかつかと藤生氏につめよる。と、彼のえり首をつかんだのだ。
白河くんの眼は、確実に怒りを表していた。対する藤生氏はされるがままで、いく分かおびえているように見えた。

「巻き添えにしたんかよ」
「白河……」

白河くんはそれ以上は無言で、やがて思いっきり突き放した。藤生氏はふらふらと後ろへ下がり、しりもちをついた。
意外すぎるシーンに私は固まってしまっていた。両人とも教室や今まで接して思ってた印象からは、想像ができない雰囲気で……そして、ことばをさしはさむ余地もなくて。
そんな私に、白河くんは今までの衝撃シーンはどこ吹く風の笑顔で、

「決めた。母親に離婚説得しに、帰るよ。天宮さん、ありがと」

そう言ってギターをケースにしまうと、それを背に立ち去ったのだった。

藤生氏もよろよろと立ち上がって。

「大丈夫か」

「大丈夫？」

私と質問がかぶった。

「おう」

「うん」

答えもかぶった。

その後、無言で帰路についた。藤生氏は終始、無言だった。

12．クラス名簿

迎えた三年生、始業式の日。
クラス分けを張り出した下駄箱は、人であふれかえっていた。私も多分にもれず、人山をにぎわせている一人だ。
渡辺かのんとは同じクラスだった。せりとは分かれてしまった。

「また今年も、ラブラブなわけやね、はるこ」
「へ？」

十秒ほど、なんのこっちゃと理由を推察。
もう一度、クラス名簿を見直して気がついた。

「あーそういうこと」

同じクラスに藤生皆の名がある。かのんが茶化しているのは、そのことなんだろう。
そういえば、鹿嶋くんは別のクラスで発見し、白河くんはどこにあるのか発見できなかった。見落としたかも知れない。
新しい教室は、四階一番端。
席順は、名前の順。かのんの席は対角線上にある。先生が来るまで廊下側の私の席でおしゃべりをしていた。
鐘が鳴り、先生が来た。青いジャージを制服にしている数学教師・下崎だ。
空席はひとつ。
藤生氏のところだということは、すぐわかった。
下崎が出席をとりはじめた。
まずは天宮。『あ』で始まる名前の私の出席番号は、今年は一番だ。あとは終わりまで待ちに入る。

全員の点呼を聞いていると……。
あれ？　白河くんの声。
声のした三列目一番前を見ると、目があった。人の良さそうな笑顔。そこにはメガネをはずして少し印象の違う彼がいた。
藤生氏は、初日から欠席のようだ。
下崎が連絡事項を伝え終わると、始業式のため校庭に出ることになった。

「白河くんの家、離婚でもしたんかなあ」

かのんが寄ってきて言った。

「へ？　なんで」
「名前ちゃうかったやん。名簿見てみよっか」

教卓の出席簿をちらっと見てみる。

「下の名前、なんやったっけ」
「ええと、あきなり……これちゃうのん？　『久瀬あきなり』」
「ほいな」

教卓のそばに席があるウワサの彼は、なにやら取りに戻っていた。

「両親、離婚したん？」
「ちょ、はる。ストレートすぎ」

かのんがぶしつけな質問をする私をなじる。
白河……久瀬くんは気にする風もなく答えた。

「おかげさまで。調停はこれからやけど」

「ふーん。大変やね」
「そうでもないで。それより」

始業式の時間はあと三分。悠長に話してられないことに気づく。
かのんは教室を出た。
続く私に、久瀬くんはすばやく小声で告げる。

「藤生くんからのメール、あとで見せる」
「なにしとん！　早く」

かのんにせかされて、私たちは校庭へと走った。

＊　＊　＊

『父親に会ってくる。どうも攻撃の対象はおれだけじゃなくなってきたから。会えばなんとかなると思う。それまでは、よろしく頼む』

久瀬くんが見せてくれた、藤生氏からのメールの内容。それは、藤生氏がとうとう念願を果たすことを示すものだった。
おめでとう、藤生氏！
でも……不安がつきまとう。
本当に大丈夫なんだろうか、と。

13．魔法の農場

学校の帰り道。久瀬くんと歩いている。
担任から、藤生氏と連絡をつけるよう使命を負わされたため、この二人連れとなったが、実際は自発的行動に依るところが大きい。

「僕も冷静やなかったよな」

久瀬くんはひとりごちた。

「あれって、ぼくが藤生くん追いつめたんやろな」

東谷公園で、久瀬くんと私が魔のものに襲われたときのことだ。藤生氏に助けられたけど、そのあと久瀬くんはえらい剣幕で怒っていた。信じられない光景だった。彼も怒ることがあるのかと、当たり前のことに驚いたりしたものだ。
なぜ怒ったのか、自分なりに考えてみた。

（もう藤生氏だけの問題じゃない）

そういうこと、じゃないだろうか。

「運命は他人が変えられるもんやない」

もともと久瀬くんは私たちがタマシイの行方に関知するのに否定的だった。
藤生氏は同じことを言いつつも行動してこの結果となった。でも藤生氏のせいじゃなく、そもそも私がゴネてはじまったことだ。あおいちゃんのタマシイを助けなければ、と。自発的に関わり合いに。

というよりむしろ私主導だよね。決して『巻き添え』なんかじゃない。

私たちはしばらく無言になった。

のだれど、やがて……久瀬くんが沈黙を破った。

「そおや天宮さん。日下部あおい、やった？　あのネタ絶対しゃべったらあかんで。ありかがばれたら最悪、天宮さん殺されてまうかもしれへん」

私は絶句した。

殺されるって……私はただ行方を知っているだけなのに？

久瀬くんは私の考えていることがわかるのか、すぐに言葉を継いだ。

「『器』を壊してまでして魂を奪おうとする魔のものもおるやろ」

日下部あおいちゃんが生きていたとき、魔のものは我先に彼女に襲いかかろうとしていた。私が彼女に会いに行くと、私を排除しに襲いかかってきた。手に入れてからも、そんなことはたびたびあった。

今までは藤生氏が守ってくれた。けれどいまはいない。自分の身を守るには、誰にもタマシイの行方はばれてはいけないのだ。

だけど？

「あおいちゃんのタマシイ、どこにあるんか知っとんの？」

「知ってる」

「藤生氏が教えたん？」

彼は小さくうなずいた。そして、話題を変えるように私に尋ねた。

「今から用事ある？」
「夜は塾があるけど。なに？」
「覚えとお？　感神社。あれの七つ目のポイントを新発見したんで、行こかと思って」

そういえば……と、思いかえす。
私たちの住む苅野市には同じ名前の神社が六つ存在し、それが魔よけの結界を意味しているということ。それが苅野市に、魔の力を貯め込む働きをしているということ。
それに七つ目のポイントがあるという。
久瀬くんの意図を読むことはできない。
だがそこになにかがあるから、彼は行こうとしているに決まっている。

「行ってみる」

私は早速、友達のせりに電話をした。同じ塾の同じクラスに通っているから、休むことを伝えてもらうのだ。
せりは、

「藤生くんといっしょなん？　大丈夫？」

と心配していたが。
久瀬くんは歩きながら、話をはじめた。

「こんだけ天宮さんも巻き込まれてしもたんなら、知る権利はあるな」
「藤生氏の魔法のこと？」
「よりも、例の苅野の結界の件のほう。苅野って、魔のものにとっては豊富なエサ場みたいな感じらしいねん」

「エサ場？」

その言葉に不快な印象をおぼえ、私は反応した。

「昔の田舎町やったらさほど問題もなかったんやと思う。でも、この十数年ほどで人口が倍になった」

「それはエサも増えたってこと」

人が増える、それにつれて諍いも起こる。

魔のものも肥え太る。

魔のものの力で、さらにいさかいも……それって、どんどん悪い状態になっていくのでは？

「エサが多いからって、魔のものにとっていいところやとは限らへんねん」

エサにも質がある。

悪いタマシイをたくさん持ってるより、いいタマシイをひとつ持ってる方がいい。そういった『ルール』だった。私は以前、サナリからこの理屈を聞いた。

「悪いタマシイが増えていってるんやったら、魔のものにとってもいいことないやん」

「だから結界の存在が重要やねんな。余計な魔の力、魔のものたちを排除して、最適の質と量を保てるし、人間にも支障がない。元来そういうものらしい。サナリはそういうポイントを‘ＭａｇｉＦａｒｍ’――魔法の農場、と呼んどった」

魔法の農場。

名前は軽いが、実際はかなり不気味なことだ。私たちは知らない

うちに『飼育』されていることになる。

「でもその結界は現状からして働いていない……ほら、久瀬くん前言うてたやん。苅野以外の魔のものが増えてるって」

「着いた。ここ」

「って、東谷公園？」

市街地の、私たちの通う学区内にある緑地公園。市内を貫く芽衣川と人口の林で形成された苅野市街地住民のオアシス。

通り魔や魔のものに襲撃されたりして、私にとってはろくなことのない場所だ。

芽衣川沿いに造成された遊歩道を、久瀬くんは歩いていく。夕方の公園に人はまばら。遊歩道を歩く人はいない。

「こんなところに神社なんてあった？」

「うん」

十七時を告げる鐘。

と同時に、私たちの目の前で川面から勢いよく水が吹き出した。

噴水のイベントだ。

カラフルな照明が噴水を照らし出す。水はさまざまに形を変え、変幻な姿を見せてくれる。

「わー、きれいや」

「そやなあ」

なんかデートしてるみたいな会話だ。

鐘が終わるとイベントも終了し、水面はまたもとの静けさを取りもどした。

14．結界復活

「ごめん。時間くわせた」
「ぜんぜんオッケー。ここが神社やし」
彼はそう言って水面を指さした。
川の中？

「正確には結界のもとになるもんが埋められていた場所」
「埋められていた……って、過去形？」
「過去形。公園として整備するとき、浚渫（しゅんせつ）工事で、つまり川底を掘り起こしたら発見されて、取り除かれてしもうたというわけ。詳しいことはこの記事見てみて」

久瀬くんが差し出したファイルにはさんである新聞記事、それは五年ほど前の地方記事だった。そこにはモノクロで陶器の破片の写真が掲載されている。
内容を要約してみると。

『都市整備事業の調査中、芽衣川から発見されたこの陶器片は、苅野近辺に伝わる古陶器のシンプルな様式と違って派手な装飾がなされ、珍しい遺物として注目されている』

……と、こんなところだろうか。

「想像でしかないけど、装飾された陶器って、魔よけ？」

ふと、私は大阪の百貨店で見た中国の殷・周時代の遺物とやらを思い出した。難しくて読めない名前のついた青銅器のたぐい。古い

時代の器についてる派手な文様は、呪術的な意味がこめられているとか。

物知りの久瀬くんだから、そんな知識も知ってるだろう。こくりとうなずいて同意する。

「ぼくも思った」

「でも……この陶器片が取り除かれて、苅野の結界とやらは不完全な結界になってしまった。だから、魔のものがばんばん入り込んでくるようになったけど、封じ込める力だけハンパに残ってるから、入りっぱなしで出ていかないで、苅野にたまりっぱなしになる、と」

久瀬くんはにぱっと笑う。

「大正解！　つーわけで、どうしよう」

どうしようって、どういうことだ。

「けっかいふっかつかびん～」

彼はドラ〇もんチックなノリで宣言するとともにかばんから花瓶を取り出し、高々とかかげる。

結界復活花瓶、かな。

それにしても、ひみつ道具をくり出すときのノリが藤生氏とかぶってるんだが……。本人には言わないけど。

「それって、藤生氏愛用の青磁」

「藤生くんにおねだりしててん。ちょいこの前くれてんけど、思えばこれも予兆ってやつやったんかも」

それをいうと、私にくれた赤い石の、魔法のアクセサリー。これ

も久瀬くんへの花瓶と似たようなものかな。なんとかしようという、藤生氏の決心のあらわれという意味で。

「その花瓶で工事でこわれた結界が復活するん」
「復活する」

久瀬くんは即答した。

「なら久瀬くん、復活させよう結界。今より良くはなるっしょ」
「そのノリが藤生くんをまるくしたんやな」
「は？」
「なんでもない。じゃ水面に投げとくれ」

私は『結界復活花瓶～』をかかえた。案外重みがある。
てや、と思いっきり腕を後ろから前へ伸ばす。　茜の空に花瓶は弧を描いた。

「えっ！」

水面に、人影！
それは花瓶の落下地点に現れ、花瓶をらくらくキャッチした。

「サナリ」

片手に花瓶を持ち水面を歩いてくるのは、あの美形のおにいさん。
だが、いつものようなかっこいい印象はなかった。禍々(まがまが)しい……
そんな言葉がぴったりだ。

「あきなり、これは人間のやる仕事じゃない」

初めて見る、サナリが怒りの感情をあらわす場面。
怖い。とんでもなく怖い。
風もないのに水面が波立つ。サナリから感じる感情の強さと同調している。

「すでに離反の準備はできていたというところですか……しがらみも切ったところで」

久瀬くんは静かに聞き、サナリは続ける。

「しかし、私としてもそこの彼女に写しこめばもう君の手助けは無用。彼女は彼の御方の御心も同調率も、すべて満たしている」

川面が鏡のように静かになる。
意味はわからないが重要なことに違いない。聞きもらすまいと、私は顔を上げてサナリを見た。
目線が合う。いつもの柔らかそうな笑顔だ。

「天宮さん」
「……え」

目が合っても呼びかけられるとは想定外。反応に迷った。

「結界を壊したままにしているのは確かです。だから魔の物どもが増加した。一連の推理は、因果関係の認識として正しい」
「え……」
「しかしそれは、苅野やその他世界中の‘Ｍａｇｉ Ｆａｒｍ’で進めているプロジェクトのためです。協力してくれませんか？　これは、皆自身のためにもなることです」

すごく素敵な、包み込むようなテノール。余韻にひたりつつ私は考える。

このままの方が藤生氏のためになるというなら、協力した方がいいのでは。

迷う私の横で、久瀬くんがつぶやく。

「理屈はともあれ、藤生くんひとりのために苅野じゅうが魔のものだらけになるんなら、ぼくは藤生くんをぶち殺すね」

ずいぶん乱暴な意見だが……温厚な久瀬くんがそこまで言うとは。

私は考えた。

たぶん、彼の意見が正しい判断なんだろう。なぜって、藤生氏は彼を信頼しているから。あおいいちゃんのタマシイのありかも教えてるし、魔の世界へ行くというメールも久瀬くん宛てだったし。

藤生氏にとってはやっぱり、彼の方が大事な友人なのかな。私よりは後事を託すことができて、なんでも話せる相手なんだろう。少し……くやしくて、うらやましい気がする。ああ、これって嫉妬ってやつかもしれない。

でも今からする選択には関係ない。

私は大きく息を吸い込んで、言葉をのせた。

「お断りします」

「ならば」

サナリは手のひらに光の玉を造りあげた。

「覚悟してもらいましょう」

「お願い！　藤生氏」

私の目の前で、光の玉ははじけた。

藤生氏からプレゼントされたシルバーアクセサリーが輝きを帯びている。
魔法は本当に成功した。

「藤生氏のところへ！」

コンクリートの遊歩道に魔法陣が描き出される。そのまぶしい閃光の中に私たちは飛び込んだ。
サナリが手を出す。が、はじき返される。
目の前が、真っ白になった。

15．異界にて

……おはようございます……。

「……んあ！？」

身を起こしてすぐ目に飛び込んだ風景。

そこは『魔女の部屋』だった。

おとぎ話に出てくるような、木枠の窓、濃緑色で重厚そうなベルベットのカーテン、あやしげな用途不明の器具、古びた書物の並ぶ本棚、大きな赤茶けた壷、その口からのぞく薬草（であると信じたい）のたぐい。それらがランプの灯りと暖炉の炎に照らされている、薄暗くて暖かい部屋。

「あかん、まだ寝てる」

ふとんを頭からかぶろうとしたそのとき、

「起きてますよ」

私はふとんから顔を出す。

変な顔が目の前に。目が異様に大きくて鼻がぺしゃんこ、しわしわの顔をして頭の薄い、人間離れした顔。

「おやすみ」

「起きていますって」

ふとんをひっぺがされる。必死の抵抗を試みる私。

「天宮はるこさん、あなた藤生皆様に会いに来たんじゃないんですか」

あ。そうだった。

確か、東谷公園で結界を復活しようとして、サナリに攻撃されそうになって、藤生氏にもらったアクセサリーで魔法陣を作って。

「ここは魔のものの世界ですか」

はい、と変な顔が答える。

背は小学校低学年くらい。マントみたいなものをかぶって魔法使いのような格好をしている。

「なんかすごい部屋ですねえ」

「あなたの反応も、すごいですね。ふつうの人間とは思えない落ち着きぶり」

「んー、なんでもこいって感じ」

いやマジで。藤生氏に会って一年、珍妙不可思議なことへの耐性ができあがりつつある。

「ところで、あなたは魔のものという方でしょうか」

「はい。『右目（みぎめ）』と呼んでください」

「右目？　おもしろい名前ですね」

「その意味も、そのうちわかるはずです」

魔のものでも話せるやつもいるんだなあ、と感心しながら、私は起きた。

右目さんは人間には食事が必要と、食べ物を用意してくれた。

トーストと紅茶とハムエッグにトマトサラダ。どこから手に入れ

たんだろうと思いつつも、ありがたくいただくことにした。
右目さんはちょこんと向かい側に座って、手帳をめくる。

「これからの予定なんですが、まず、あなたのお連れさんを捜さなければなりませんな」
「しらか……おっと、久瀬くんのこと？」
「はい」
「行方不明なんですか」
「亜空間転送のエネルギー量が適正でなかったんですな。あなた方の世界の身近な話で例えれば、定員ひとりの乗り物にふたり乗ってしまったため事故が起きてしまった、それで意図しない別空間に転移してしまったのです」
「事故っ！」

恐ろしい単語に思わず身を乗り出した。

「ご心配なく。残留魔力から軌道をトレースすることで居場所はつかめますし、すでに分析は完了しております」
「無事なんですか」
「はい、無事です。生体反応の確認はできています。あとは現地におもむき、救助します。なに、救助といってもあなたの手助けさえあれば、簡単なことです」
「手助け？　私でもできることですか」

右目さんは軽くウインクした。

「万事、おまかせください」

そのとき、私はこの魔のものさんがE．T．に似てるかもと思っていた。

＊　＊　＊

私はグランドキャニオンに来ている……つもり。
見渡すかぎり赤い崖と細い道が続いているので。まず日本にはなさそうな風景だ。
右目さんの家から徒歩二時間。といっても、そのくらいの時間感覚というだけで、正確な時間はわからない。

「右目さん魔のものなんだから、魔法陣でひとっとびなんてできないんですか」

いいかげん疲れてきたので、グチをたれる。
右目さんは慣れると愛嬌のある目をくりくりさせ、私をふりかえる。全く、疲れてなさそうだ。

「はあ、私そんな大技できませんよ」
「魔法は使えない？」
「使えるのですが、あなたがイメージされているものとは若干違うかもしれませんね」

と、右目さんは少し考えてから続けて説明。

「魔のものと一口にいってもいろんなものがいましてね。私はハイレベルに区分けされるほうですが、そういった物理的な変化をおよぼすような魔法は使えないんですよ」
「じゃ、どういった魔法なら」
「調査分析、探索」

地味だ。
あ、そういやあおいちゃんと話をするのに五感を遠隔にとばしてた。あれも探索系？
聞いてみた。

「まさにおっしゃった術は探索魔法のひとつです。よく思いつきましたね」
「そういう魔法、使えるようにしてもらったことがあって」
「してもらった、ですか」

藤生氏に、と名前は出さない。言うとまずいかなと思ったので。
いや、でも右目さんは藤生氏を知ってる。起きぬけに『藤生氏を探しに来たんでしょ』とツッコミ入れられたし。
そういえば、なぜ知ってるんだろ。藤生氏捜してるとか久瀬くんもいっしょだとか。
今ごろ疑問。なぜ気づかなかったんやろか。寝ぼけてたんかな。
さておき、右目さんは感心したように何度かうなずいた。

「たいへん高度な魔法ですね」
「こうど？」
「ハイレベルだと思います。探索と魔法付与を同時並行で処理する法術展開でしょうか。発想の特異さもさりながら、実行そして制御には非常に複雑かつ高度な思考を伴うでしょう。ぜひ、方法論をその方と議論してみたいものです」

右目さん、くりくり目がキラキラだ。楽しそう。
言ってること難しすぎてついてけないけど。
……やっぱり藤生氏、最強。実際はその高度な付与と探索に加えて、守備と攻撃までこなしてたしなあ。

「人間界にいるものはローレベルのものが圧倒的に多いのですがね。まあ、負の感情を貪っているようなローレベルのものでも、たまにいわゆる物理的な攻撃力は高いものがいますから、人間にはわかりにくいのですが」
「ハイとローの違いって、なんですか」
「ここ、ですよ」

右目さんは自分の頭をつっついた。納得。
一言つけ加えると、藤生氏にもらったアームレットはどうも魔法使用不可みたい。彼の使用方法の説明どおり、魔法陣一回分だったわけだ。

「お、いましたな」

右目さんが崖の下をのぞきこんだ。はるか下の方に、白い発光体が見える。

「彼は壊れた魔法陣の残骸に囚われたまま、脱出できないようなのです。助けに行ってください」

といって、右目さんはポケットから縄ばしごを取り出した。四次元ポケット？
それよりちょっと待て。そんな貧弱な縄ばしごで、私にあんな下まで降りろというのか。軽くビル十階分はある高さではないか。

「大丈夫ですよ。命綱つけとけば」

大丈夫って、あんた。
でも、私がやらないと久瀬くんは囚われたまま。

意を決して、というか泣く泣く、腰に命綱を巻く。

「簡単です。すぐ降りちゃえますよ」

右目さん得意のウインク。

ええい。こうなれば覚悟を決めよう。

「そうだ。私はマンションの十三階に住んどんのに。これしきのことできなくて、非常時避難ができようものか！」

「その意気です。あとは下にいる彼の言葉に従っていただければ、万事うまくいきますよ」

「エブリシングおっけ！　んじゃ、ＧＯ！」

縄ばしごが落とされる。安全そうなところに杭を打ち、命綱を結びつける。

大丈夫。怖くない。

単純明快な自己暗示を自分にかけ、そろそろと、私は降りていった。

「さすがは上主様にかけられた、サナリの罠を解いて下さった方ですな」

その右目さんのつぶやきは、かすかに私の耳に届いた。謎な言葉だが、今は気にしていられない。

16. 救出

降りる前には永遠に続くかもしれない、と思われた縄ばしご。
実際はすぐに一番下まで到着してしまった。あんなに高かったはずだけど。
肩すかし感はさておき。

「久瀬くん」
「おぉ、天宮さんだ」

魔法陣の放つ光の量は大きいものの、魔法陣自体は非常に小さかった。その小さい魔法陣から、手品のように久瀬くんの上半身が乗っかっている。逆に言えば、腰より下がひっかかって出られないのだ。
たぶんひっぱっても無理だろう。それが可能なら自力で脱出できるはずだ。

「どうすれば助かる？」

私は彼の前にしゃがみこんだ。
彼はにっこりとして答える。

「ええっと例のタマシイ？　あれがここでは武器になるそうやねん」

自分で聞いときながら、なぜそうサラっと答えられんのってツッコミ入れたくなるけど。
それは置いといて。

「武器にする？　やりかたって」

「彼女に願いをこめればＯＫ」
「願いをこめる」
「そう。頼みこむ」
「あおいちゃんに、頼むの？」

私は……ちゅうちょした。
日下部あおいちゃん。彼女のタマシイは今、私の中にいる……らしい。それが彼女の望みだったし、藤生氏がそうしてくれた。
だけど、私に取り込まれてしまうこと。それが彼女にとって本当に幸せだったのか。たまに自問する。
タマシイのライフサイクルがどういう仕組みなのかはよくわからない。けれど、受ける印象としては、死んでもなお、自由でない――そんな感じがする。私は深く考えずに、思いつくまま『ＯＫ』と答えた。それがよけいに後悔なわけで……。

「なにも、トラウマに思うことないやろ」

私の迷いをどうして見透かしているのか、久瀬くんは強い口調で説く。

「でも」
「彼女が望んだんやろ？　それに自分もそれがいいって思ったんやろ？　なら悩む必要、どこにあるよ」

トラウマ。言い得て妙だ。
考えすぎかもしれない。だけどさくっと割り切れない、いまの私には彼女に都合良く願いをかけてよいものか、というジレンマがある。
だけど……あえて願う。
久瀬くんを、助けて下さい。

魔法陣が一層、光り輝く。
久瀬くんが身軽そうに抜け出す。彼が立ち上がるとすぐ魔法陣は閉じ、跡かたもなく消えた。

「ありがと。助かったあ」

久瀬くん、いつもの人の良さそうな笑顔だ。

「それとごめんな。かなり偉そうなこと言うたよな」
「……なんかすっきりした」
「ほんま？」
「あ、完璧すっきりってわけやないけど」
「そんなもんなんやろな。ぼくは他人やから『簡単に割り切れ』て言えるんやろし」

そんなことを言いつつ、彼ははしごに手をかけた。
すると……崖が急に低くなり、はるか上空にいるはずの右目さんがすぐ頭上から顔を出している。なんだか笑顔ぽく見える。
どうなってんの？
右目さんは、はてなマークを周囲にとばしてる私を哀れんだか、ゆっくりと次のように述べた。

「ここは人間にとっては現実であり現実でない。簡単だと思えば簡単になり、苦しいと思えば苦しくなる。はしごで下に降りるのも案外簡単だったでしょう？　これは私にはできないことだったんです」

確かにすぐ下に降りてしまったっけ。

「それって、テストも百点と思たらほんまに百点になるんやろ。ええなあ」

おいおい久瀬くん。

「あなたはダメですよ。一応半分こちら側の人間ですからね。だから彼女の助けがないと抜け出せなかったんですよ、左目どの」

「左目？」

右目さんが久瀬くんをそう呼んだのを私は聞き逃さなかった。

「前から思ってたけど久瀬くん何者なのさね」

「うーん。自分でも詳しくはよう分かってへんねんけど」

考えている彼に代わり、右目さんが答えた。

「上主様……ここの支配者の知恵と記憶と感情の一部、それが私『右目』とこちらの『左目』どのです。これらの役は上主様の御心が決定しますが、記憶の植え込みはサナリが行います。すなわち最も波長が合い、知恵を持ち、記憶、感情を任すに足る者が選ばれるのです。私の知る限りでは、人間が選ばれた前例はないのですがね」

「久瀬くん確かに頭いいし、藤生氏と仲良しやもんね」

「我思うに、ぼくがなってしまったのも偶然で、波長が合うからと、サナリの陰謀みたいな。その証拠に、いままでサナリに従ってたぼくが土壇場で裏切ったら本気でキレてたし」

「なんで笑ってそんなん言えるん？」

ものすごく怖かったんだぞ私は。

怒る私を彼は平気で笑い飛ばす。

「結局ぜんぜん平気やん」

なんだか、無性に腹が立ってきた。

「サナリの味方してたくせにっ！」

「まあまあ天宮はるこさん、左目どのが今までサナリに従い、そして今、我々の味方であるお陰で、彼の者の罪業の証を揃えることができたのですから」

右目さんになだめられ、この場は収まった。

収まったといっても、私がひとりで怒ってたにすぎない。それも本気で怒ったわけじゃなく、いわば逆ギレか。どうせ久瀬くんもサナリに本気で従っていたのではないだろう。むしろ失言だよね。しかもうまくいなされてるし、完全に私の敗北。

「そっか。納得いった。『ミココロ』とか『ドウチョウリツ』とか、そのへんなんのこっちゃ？　と思ってたけど」

「要は、天宮さんを、言うこと聞かんぼくの代わりに仕立てよってつもりやってん。サナリは」

私はオッケー、と指でサインを示した。

久瀬くんはそれを確認すると、穏やかに笑みを浮かべる。ときに、彼が保護者のように思えてしまう。

「ま、この際だからその役目とやらを果たすことにします。無敵な味方もいますし」

久瀬くんは実直そうな顔でそう言って、私に改めてよろしゅう、とお辞儀した。

無敵な味方？

そして一言、彼はつけ加えた。

「右目さん、ぼくのことは久瀬って呼んでくれませんか？」

17．右目と左目

「さて、上主様に対して我々がどのような役割を果たすべきか。それを左目……失礼、久瀬どのはご存じですか？」

長く暗く冷たそうな石だたみの回廊を歩きながら、右目さんは問いかけた。

久瀬くん、ちらっと右目目さんを見おろてから答えていわく。

「知恵と記憶と感情を与えて、そやつを復活させること。やったかな」

「うろ覚えですね。では説明しましょう」

右目さんは明快にまとめてみせた。

まず右目。

彼は「上主様」がこれまでに蓄積してきた知恵と、古い記憶を与える。

そして左目。

こっちは比較的新しい記憶と、感情を与える。

役割をはたす順番は左、右と決めてあるそうだ。前の上主様のお考えだそうで、いきなり古い知識の洪水に直面して混乱しないようにだって。

で、方法というか儀式の進めかた。それぞれが与える気になったら、新しい上主様が目覚めて、どうすればいいかは教えてくれる。ちなみにそのときの上主様は仮に起きてるだけという状態。儀式を終えるまでは、まともに起きていないらしい。ねぼすけだ。

さらに重要なのは、儀式の間、両者ともども穏やかな状態を保つこと。

「安静第一。点滴受けるんと同じか」
「病気ちゃうんやから」

当たらずとも遠からず。つまり、かなり面倒くさそう。

「ところで上主様って、藤生氏のこと」

私がそう口にした瞬間、右目さんが目をくりくりさせて立ち止まった。

「こちらにいらっしゃいますよ」

とんでもなく大きい石の扉だ。観音開きらしき扉にはめこまれた石版には、神話から飛び出したようなツノノはやした幻獣たちが踊ってたり、旧約聖書に記された天使たちがお告げをもたらしていたり、そんな図柄が彫られている。重厚かつ壮麗、神秘的な雰囲気をかもし出した扉を前に、私たちは立ちすくんでいた。手を触れるのがおそれおおい気がして、こんな重そうな扉は動くんかいなと疑問に思い、なにより押すのか引くのかどっちやろ……つらつら考える。

と、扉は音もなく勝手に開いた。

自動ドアでした。

で、開けばそこには……想像どおりの展開か。大きな黒い椅子に座り、黒い机につっぷして居眠りをしているのは藤生氏。服はふつうのネイビーのパーカーにワークズボン。

全然偉そうじゃないし。

久瀬くんがそばに寄って、つっつく。

「学校と変わらへん……プリント配ってー」
「そこ！　ネタをやらない」

私がツッコミを入れると、すぐさま右目さんがこの場をしきる。

「さ、早速始めましょうか。久瀬どの、お願いします」

右目さんは外へ出るように私をうながした。右目さんも外へ出る。

「儀式は一対一。邪魔されてはなりません」

「邪魔したら？」

「はじめからやり直し、です。しかも、藤生皆さまの記憶も、こわれてしまいかねません」

それは絶対に無事終わってくれないと！

扉は再び、閉じられた。

「天宮はるこさん」

扉を背にして右目さんと私は並んで立っていた。

その右目さんが目を細めて、私を見上げた。

「上主様があの場に着くことができたのも、あなたのおかげです」

私は右目さんを見下ろした。

「私の？」

「ええ……上主様はサナリの『父親』という幻覚のためにずっと、さまよわれておられた」

「父親っていうのは幻覚なんですか？」

「前の上主様が、とあるＭａｇｉＦａｒｍでサバトを開かれた折、ちょうど代替えの時期でもありましたので、ひとりの人間の女性を媒体にして、新しい力を得ようとしたことから、話は始まります」

なにやら物々しい話のようだ。私は身を固くする。

「その、あるＭａｇｉＦａｒｍってのは、苅野のことですか？」

右目さんはうなずいた。

「じゃあ一人の女性って藤生氏のおかあさんで、その人を媒介にして生まれた上主様が藤生氏」

「ええ。一見人間のようですが、魔法を簡単に使われるところをあなたも見たと思います。自然に人間として育てば、ある日自然に目覚める……本来はそうなるはずでした」

右目さんは首をかしげてから再び続けた。

「サナリは、人間世界に散らばるＭａｇｉＦａｒｍの管理者です。また、上主様の成長を見守る役目もあります。しかし、サナリはその役目を利用し、上主様と上主様の母なる女性を誤った道へと導き、彼の意のままになるように操ったのです」

「サナリが藤生氏と藤生氏のおかあさんに、魔のものの子供であると伝えた。魔のものの父親がいるって」

右目さんはその通りです、と答えた。

「でも、それやったら結局ここに来るんやし、それはそれで良いのでは？」

「いいえ。それでは『父親』という幻覚を永遠に探し続けることになる……サナリの＜無限階段＞の魔法の籠に入りこんてしまわれたら、もうどうしようもありません。サナリの思うがままだったのです。上主様がいらっしゃろうとするのを久瀬どのが引き留めてくれ

ていたようで、本当に助かりました」

そういえば久瀬くん、藤生氏に呪をたくさん貯めてから魔の世界に行くように、アドバイスしてたっけ。

単に止めたのか、深慮遠謀なのかはわかんないけど。

だが、私はなお疑問である。

「でも実際は……今回、藤生氏は『父親』を探しに来たのに、無限階段にはまらなかったけど」

「それはあなたのお陰なのですよ、天宮はるこさん」

右目さんはにっこり笑った。

「私の？」

「上主様は『父親』を探しにいらっしゃったのではなく、あなたを守るための力を得に、ここにいらっしゃったのです。ですから自然と、本来の上主様となるためのこの部屋にたどり着いたわけです」

守る力……。当事者としては感動したいところだが……なんか、こっ恥ずかしい。

18．契約（前書き）

作中に噺家の人名が登場しますが、架空のものであり実在の人物とは一切関係ありません。

18．契約

「そそ、右目さん、基本的な質問で申し訳ないんですけど」
「なんでしょう」
「ＭａｇｉＦａｒｍって、なんですか」
右目さんはしばし黙想し、再び切り出した。
「人間であるあなたには不快に感じるかも知れませんが」
ＭａｇｉＦａｒｍ――直訳して『魔法の農場』。
それは、人間の世界の野菜を育てる田畑や家畜を育てる牧場と同じ、魔のものにとって食事となり財産となる魂や精神を、より良質に育てるため定義された領域（テリトリー）。同時に、みだりに『狩り』を行う魔のものたちを取り締まり、人間と我々の調和を守る拠点でもある。
ことばは難しいけど話は理解できた。久瀬くんが話してくれた結界のことも、似たような意味だった。
「そういったＭａｇｉＦａｒｍはけっこうあるんですか」
「一万九九九。これが上主様の治めていらっしゃる数です」
世界全体で一万九九九。
うーん、想像つかない。と思ってると突然、ドアが開いて顔がぬーっと現れる。久瀬くんだ。
「手間取ってもたんで、右目さんは手っ取り早くお願いします」
「これればかりは上主様のご意向によりますから」
右目さんは苦笑して、部屋に入っていった。

また扉が閉まる。
しばし沈黙。
扉に背もたれて石の冷たさを感じながら、久瀬くんなにしてたんだろ、と考えた。じつに興味深い。扉の向こうで二人きりの儀式……なんか危険な香りがするかも（ニヤリ）。
聞いていいのか悪いのか。ま、ダメなら答えてくれへんだけやろ。思い切ってたずねてみた。

「中でなにしてたん？」
「落語」
「はあ？」
「『池田の猪（しし）飼い』ていう古典落語の演目なんやけど、あれ演（や）ってて ん」
「……なんでまたそんな」
「知らんやん。藤生くんに聞いてくれ」

そんなもんをやれという藤生氏も藤生氏だが、言われてできる久瀬くんも久瀬くんだ。

「儀式は半ばですね」

聞き覚えのある声。それは同時に、今は聞きたくない声でもある。
長身の影――サナリが暗闇から現れる。
手が震えだした。怖いのは認めよう。たとえここが思いどおりになる世界だとしても、勝てる自信がない。
一方、久瀬くんは余裕そうに腕を組む。強がりなのか作戦があるのか、それはわからない。

「『池田の猪飼い』といえば、それって確か、藤生くんとぼくが小学校五年生の時やったかな。苅野市民会館に、今は亡き桂円雀一門

がやって来て、『苅野寄席』が開かれたんやったっけ。で、そんとき円雀が取りで演った『池田の猪飼い』。他の子はようわからんて言うてたけど、藤生くんとぼくは、あの表情が創り出す濃ゆい雰囲気、独特のリズムとテンポの話術が良い！　と意見が一致して、そのころより熱き友情で結ばれたんや。藤生くんもよほど印象に残ってたんやろなあ。上方の落語のお笑いが復活に大いなる影響を与えるって、なんかすごいと思わへん？」

もしかしてこいつ、落語マニア？

サナリは冷笑を浮かべながら聞いていたが、ふと口を開いた。

「今日は饒舌ですね。普段はポイントを狙い澄まして話すのに」

「だって、円雀自身がわざわざ苅野くんだりまでやって来て演ったんですよお。こりゃファンには涙目もんやないすか。それが偉大なる上主さまにいかなる影響を与えるのかの考察は」

「時間稼ぎありがとう」

「ばれてるよね」

久瀬くんはいつもの笑顔でいう。

「天宮さん、こう願ってくれへん？　サナリをここに近寄らせない」

私は日下部あおいにお願いした。サナリを近寄らせないで。

ぴきん。

一瞬にして厚い氷壁ができあがる。

サナリは炎を手のひらの上に作り上げ、投げつけた。でも壁はびくともしない。

サナリは炎を作るのをやめると、壁面に手を当てて微笑みかけた。

その相手は久瀬くん。

「そういえば……ご両親が離婚なさったそうで、大変でしたね」
「いえいえ、どういたしまして」

久瀬くんはにっこり答えた。
サナリの手は氷壁の冷気で徐々に凍り、壁面と一体になりつつあった。

「その事実は、契約上の私のきみに対する権利にいささかの変わりもないのですがね」

サナリは、氷のような冷たい表情を浮かべた。
と、突然。
久瀬くんの体が崩れ落ちる。

「くぜくん!?」
「地位と名誉を条件に白河と交わした約定は、きみと白河の血縁に拠るもので、社会的関係の変化には影響されない。すなわち今、きみが私の意志に反して動く権利は一切ないのですよ」

私は彼のそばに寄った。が、

「うわっ!」

近づけない。
彼の周囲から、黒いもやがたちこめはじめていた。足元には血が固まったような色の魔法陣が描かれている。

「久瀬くん!」

黒いもやは、じょじょに、確実に彼を包み込んでいた。

私は、彼が公園のベンチでひとり座っていたことを思い出す。
聞こえるのは独り言、心の声？

ここで死んだところで、家族は悲しまない。厄介な子供がいなくなって、かえってほっとするやろう。目立たんよう生きてきたから、クラスでもそんなに顧みられることもない。
あ、鹿嶋はギターパートが減ったて残念がるかも？
でも……それも基本的観測……。

「そんなことない！」

真っ向から否定した私を、久瀬くんは黒いもやの中から、疑うような目でにらみつける。
私はひるんで問いかけた。

「なぜ……」

問いかけは久瀬くんにではなかった。
分からないのだ。なぜ、賢くて冷静な彼がこんなに簡単にあきらめて、サナリの思惑どおりになってしまったのか？
氷壁が鋭い音をたてた。サナリの手が当たる場所から放射状に亀裂が走る。
私の心の動揺と同じくして、次々といくつも、幾重にも、より深くなり。
そして氷壁は派手な音をたて、割れた。

「人間の感情は綾のごとく麻のごとく」

サナリは両手をかざし光を集めた。

「通していただきます」

サナリは風を起こして、私たちをすっ飛ばした。私も、もやに取り囲まれた久瀬くんも。

なのに衝撃は軽かった。

久瀬くんが下敷きになって倒れてる。

かばってくれたのだ……そうだ、彼はあきらめてない。

久瀬くんが手を伸ばす。私の袖をつかもうとして、触れた彼の手はとても冷たかった。彼はどこか強く打ったのか、立てないでいる。

「天宮さん、ひとこと……」

彼は小さな声しか出なかった。私は耳を寄せた。

「藤生くん、頼むって」

あたふたしてる場合じゃない。

私は敢然、立ち上がった。腰と右ひじ右ひざが痛む……けどそんなのは、知るもんか。

サナリは扉に手をかけようとしていた。

「あおいちゃん、お願い！」

願った瞬間、手首の赤い石がまぶしく輝いた。

サナリが放った以上の衝撃が、私の手首からサナリめがけて走る。

うわぁ、すごすぎる攻撃魔法、あおいちゃん、ありがとうっ！

サナリは両手を構えた。

氷壁の残骸に衝撃波が直撃。小さな氷の破片が舞い上がり、まるで霧雨のように降り注いだ。目の前が視界がゼロになる。

さっきの魔法をリピートすれば、勝てる。

「あおいちゃん、もう一度お願い！」

……だがしかし今度はまったく無反応だった。

しだいに視界が回復する。

ど、どないしよう？

19．復活の日

サナリはまだ防御の姿勢をとっていたが、次の攻撃が来ないと気づくや、すぐに背を向け再び扉に手をかけた。
万事休す？
いや、まだなにかできるはず。

「させるもんか！」

私はダッシュした。
体当たり！
サナリは全く想像していなかったのか、避けるすべなく横とびに転げた。
私も勢いあまって転んだけど、すぐ立ち上がって扉の前を占拠した。

「絶対、通さない」

右目さんの儀式が終わるまでは。
無謀って分かってる。けど、腕をばっと横に広げた。通りたくば我が屍を越えて行けい！
サナリがほほ笑みとともに告げる。

「離れなさい。痛いですよ」

ほほ笑みでも氷の微笑だ、凄みに圧倒される。背筋が凍りそう、両手は震えが止まらない。
……いや。
私は輝きながら舞い落ちる氷の細雪を全身に浴び、もう一度、自

分に言い聞かせた。

「絶対通さない」

サナリの手がすうっと伸びて、私に近づく。

瞬間、目の前で星がとび散った。視界がぐらりと揺れる。ひざの力が抜け、足元が崩れ落ちたようになった。倒れる……鈍痛が襲う、どこが痛い……頭が痛い。

――やられた。

目前にいるサナリが、ゆるやかに動いた。固まりかけのパソコンの動画みたいに見えた。

「うぉっ」

薄れる意識の中、背後からの声を聞いた……緊張感のない、最大限ひいきめにいえば余分な感情のこもらないその声、覚えている。

なぜか痛みがひいた。足をふんばってふり返るとそこには。

「藤生氏」

「す、すまん。無理にドア開けたら自分おるって思てなくて」

えー、つまり。この頭痛、藤生氏からの攻撃でした。

藤生氏いわく、ドアが開かなくて強引にけり破ってみたら私がいたとのこと。ドアの機能（自動）・特性（横スライド、重そう）の面からツッコミどころ満載だけど。

一方、

「上主様……」

サナリは立ちつくしていた。

藤生氏の横（ななめ下）には右目さんがいる。

「ほう、氷霧ですか……美しいですねえ」

その右目さんはいまだ降りやまぬ霧の風景を観賞し、嘆息した。

藤生氏はなんの感想もなさげに、空に手をかざす。

ふわっと浮くような感じがして、ほかほか暖かくなった。しだいに体のあちこちの痛みも消えていく。すり傷だらけだった足もつるつる。これならミニスカートにサンダルの夏も怖くない。さらに驚いたことに、すり切れて汚れた制服も元どおりきれいになってる。細やかな配慮がありがたいです。

いやいやそれより藤生氏、花瓶がなくても魔法が使えるようになってる。

「藤生くん」

そして今まで倒れてた久瀬くんが、なにもなかったように立ち上がった。そして彼が見せた華麗なジャンプは、ケガはどこへやらって感じだ。

さて、私たちへの治療（？）が終わると藤生氏はサナリの所へ歩んでいった。

しばし呆然としていたサナリだったけど、弾かれたようにひざをついた。

「話、一応聞くけど」

藤生氏の言葉に、はいと素直にサナリは答える。その態度からして藤生氏は今やとんでもなく偉いらしい。

「魔の世界には上主様以外に他に八の王が存在します」

「知ってる」
「彼らの勢力拡張は著しく、我々としましてもそれに対抗せねばなりません。ですから是が非でも、数の上での拡張を……そのために、Ｍａｇｉ Ｆａｒｍを一部取り崩し、新たな魔のものをそこに取り込み、我らが配下におさめました。その成果のほどは、契約書を見ていただければ、一目にしてお分かりいただけるはずです」
「契約書の被使用者は」
「それは」

言語に窮するサナリに、藤生氏は冷たい息を吹くように告げた。

「サナリてしとかなしゃあないわな。おれ寝てたし」
「……はい」
「それでおれは何度も襲撃されたっと。まぁそれはええけど」

藤生氏はふと考えてから言い直した。

「いや、ええことないわ。とばっちりの被害者続出やんか」

サナリはさらに低く、頭を下げる。

「じゃ、まとめ。良質のＭａｇｉＦａｒｍを壊し、人間との調和を破壊し、サバトの時以外許していない人間の感情を食い物にする行為を見逃していた」

藤生氏は私をちらと見て、再びサナリに視線を落とす。

「日下部あおいの魂の争奪戦を扇動したのも、おまえやろ？」

サナリはがっくりと肩を落とした。

「早急に各地のＭａｇｉＦａｒｍを修復。詮議はそれ終わってからにしとく」

サナリははっと頭を上げ、そしてゆらめくように消えていった。

そして、藤生氏は私たちの方をふり返る。

「天宮さん、白河」

「藤生氏！」

藤生氏はいつものように面倒くさげな態度だったが、どことなく好意的だ。

「さ、藤生氏、帰ろ」

「それなんやけどな」

藤生氏は言いにくそうだ。

私はにこりと笑いかけることで、話をうながす。

「あの……さっきも右目と話してたんやけど、おれ来たばっかやし、サナリの後始末もあるし、いろいろ立て直さなあかんとか、なんかすごいまずいみたいで」

彼は彼なりの仕事がある、ということだ。

それは、彼が本当に必要とされている場所にたどり着いたということ。

さみしいけど……それって、藤生氏にとっていいこと、だよね。

「問題は白河の親父さんやなあ」

藤生氏が頭をかいた。
なんのことかとたずねてみた、その答えによると。藤生氏は事後、サナリへの罰として、魔力を奪って苅野に住まわせることを考え中とのこと。
かたやサナリは久瀬くんの父親と契約している。

「子どもを『左目』にしてサナリに売ることと引き替えに、富と栄誉を得る」

サナリの魔力を奪うと契約は解除される。しかもまずいことに、被契約者が破綻すれば契約者も応分に負担を――う、難しい……つまり、久瀬くんの父親の『富と栄誉』は失われるわけだ。得るものが大きい分、失うものも大きい。

「縁切っても意味なかったんやな」

久瀬くんはため息をついた。
自分が親を嫌いなのではなく、親が自分を嫌っているんだ。そう彼は言ってたっけ。それでもこう、親を思いやれる彼は優しいなあと思う。
そして藤生氏は難しい顔して頭をひねる。どうすればサナリに罰を与えられ、かつ久瀬くんにもいい結果になるのだろう？

「上主さまご自身が契約を継承すればよろしいかと」

右目さんが提案した。

「サナリの所持する権利を上主さまがいったん承継するのです。そうすれば、契約者が拒絶の意思を表明しない限り、契約解除となりません。なにより安心かと存じます」

「めっちゃ簡単そうに聞こえるけど」
「サナリとの合意が必要です」
「ぜったい合意する」

藤生氏は断言し、

「うまくいったらそういう内容の通知を届けるわ」

と久瀬くんに告げた。久瀬くんはにやりと笑う。

「藤生くんのこと、これからご主人様と呼ばせていただくわ」
「やめいボケ」

のどかな光景だった。

「右目さん、藤生氏これから忙しいん？」

右目さんは肩をすくめた。

「いますぐにでも、やらねばならないタスクが山積みです」
「そっか」

私は軽くため息をついた。

「藤生氏！　久瀬くん！」

不意に呼ばれたふたりは私に注目。

「そろそろおいとましましょう」

藤生氏はなんとなくさびしそうな顔で、パーカーのすそをいじっている。

久瀬くんがじゃあな、と藤生氏をひじで小突くと、藤生氏はけりを入れ返そうとした。久瀬くんは急いで私の影に隠れる。

私は……そんな彼らを眺めながら、最後まで残る疑問をあえてぶつけてみることにした。

「藤生氏。藤生氏はいままで十四年苅野に住んできたことを、どう思てる？」

「なかなか悪くないで」

本当？　本心？

藤生氏が教室でひとり座って眠りこけている図。だれもよせつけなかった姿を思い出す。

彼にとっていい思い出だったとは、私にはどうしても思えないんだけど。

「他の人間には重大でもおれにとってはささいなこともあるし、その逆もある」

藤生氏はそっと目をふせた。

そしてゆっくりと、言葉を継ぐ。

「……ふと、一番最初に頭に浮かんできたことが、それがいいことやったなら、悪くはなかったといいことやろ」

藤生氏のいいことって、なんだろう。

疑問だけど、あえて聞かないことにしようと思う。

彼は再び瞳をこちらに向けた。それは彼が見せた、はじめての笑顔だった。

「逆に聞くけどや。白河、おまえ、実はおれんことめっちゃ嫌いやろ」
「ご主人様、ご明察」
白河もとい、久瀬くんは愛想よく笑うと、ふと冷たく藤生氏を見返した。
「あんたの存在に巻き込まれたために、ろくでもない目にあってるし。それに自分、他の連中としゃべるん嫌やったら嫌って、好きなようにやっとったやん。それが普通にみんなと付き合おうとしてるぼくには、むかつくゆうかうらやましいゆうか……てなこと言うてる自分もアホな気するけど」
わかる気がする。
私も、藤生氏が気になったのはそんなアウトローぽいところだったっけ。
私、久瀬くんもそうかもしれないけど、どうしてもみんなに合わせるのがいいことで、大事と思ってる。
でも藤生氏にはささいなこと。そう思いきれることに私はあこがれた。
大事に思うことが少し違うだけだったのに。
「また時間見つけて遊びに来て。グリーンヒル東城山の屋上！　おいしいお茶入れるから」
「『東方美人』がええな」
彼は私をまぶしそうな目で見つめていた。
「じゃ、送り届ける。両人、目をつぶって」

＊　＊　＊

私は先生にたたき起こされた。
授業中、一番前の席で大胆不敵にも居眠りをしていたのだった。
ふと藤生氏の席を見た。そこには別の生徒が座っていて、席順は前に詰まっていた。
藤生氏の名前はクラス名簿になかった。
始業式に撮った＜クラス写真購入のお知らせ＞が回覧されてきた。
藤生氏の顔は、ない。

ファンタジーものの定石通り、だれも藤生氏のことは覚えていないのだろう。

久瀬くんは……休み時間には隣のクラスからやって来た鹿嶋くんと、いつものように話をしている。どうも中学最後の文化祭でライブを開くなんてことを企んでるとか。

「おい久瀬、頼むわ」

青ジャージの担任・下崎が、返却物のプリントを久瀬くんに渡す。
私は彼に声をかけてみた。

「久瀬くん」
「あ、プリント返すん手伝って」

反論する間もなく、ぱさ、と渡されたプリントの束。私はしぶしぶ配りはじめた。

ほどなくほとんど配り終わり、名無しの一枚が残った。男子っぽい字だけどさすがに誰のかは判別つかない。

「これ名無し。男子のやと思うけど、だれのんかわからへん?」

久瀬くんはじっと観察してから、小声で言った。

「消すの忘れたんやろ。もらっとったら?」

私はゆっくり、首を振った。

「いい。証拠隠滅しとこ」

彼はうなずいてプリントを受け取ると、静かに紙を破いていった。プリントの小片がごみ箱にこぼれ落ちていったとき、窓の向こうで最後の桜吹雪が舞っていた。

19．復活の日（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
『Ｍａｇｉ Ｆａｒｍ』は終わりです。
次章は白河からの視点で『Ｍａｇｉ Ｆａｒｍ』を語ります。

01．9月15日（火）（前書き）

『ＭａｇｉＦａｒｍ』久瀬（白河）視点。暗くて屈折してます。

01．9月15日（火）

宛先：白河たかなり
Ｃｃ：
Ｂｃｃ：
件名：お久しぶりです

宝塚の駅前で、選挙運動をしている姿を見ました。
お元気そうで、なによりです。
母は、昨日から風邪をひいています。猛暑の疲労によるものと思います。
ご飯はきっちり食べるんで、さほど心配はしていません。

以上

＊　＊　＊

「ほっとくと、死んでしまうんよ？」
「で、どうしたいん？」

あえて冷たく問い返す、俺。

「どうしたいって、決まってるやん！　日下部あおいって子が死なないように、なんとか助けるねん」

天宮はるこって子は、ホント……まっすぐな子だ。
いいご両親なんだろうなあ、とオッサンな発想が頭をよぎった。

藤生君と彼女は、サナリの話で『日下部あおい』とやらが死んでしまう予定だということを知った。その『日下部あおい』は俺たちより年下、天宮はるこのご近所さんなんだそうだ。天宮はるこは、その子の顔も知っている。

私たちは彼女にふりかかる事故を、知ってしまった。知っているのに、このまま何もしないで見殺しにするのか？　そんなことはできない……。

それが天宮はるこの論理。

わからないでもない。

近所だ。顔も知っている。知っている人間の不幸を三文推理小説読むように眺めているのは、後味が悪いには違いない。

だが逆に問いたい。

もしその『日下部あおい』が近所ではなく、遠いところに住む知らない他人だったら、どうする？

自分を苦しめる存在であったとしたら——たぶんこっちは天宮はるこに想像を要求するのは無理だろうけど。

所詮、運命は自分では変えられない。まして他人がどうこうできるものでもない。『日下部あおい』の運命を他人の俺が変える資格など、あろうはずがない。

これは倫理観がどうの、といった話ではないんだ。

それが俺、白河あきてるの論理。

「運命は他人が変えられるもんやない」

俺は文字どおり科白を吐き捨てた。

あとできっと重荷になる。他人の人生を変えるのは、他人の人生を背負い込むことになるんだから。

しばらく彼女は途方に暮れていたようだったが、

「もう、いいよ。頼まない」

大声で彼女は答えた。少し涙ぐんで聞こえた。

泣きたいのはこっちや、という気になりながら、しばしの間彼女の背中をみつめていた。

02．12月24日（木）

宛先：白河たかなり
Ｃｃ：
Ｂｃｃ：
件名：おめでとうございます

県会議員、再選おめでとうございます。
たまには苅野に帰ってきて、母と顔をあわせてやって下さい。
事前にご連絡いただければ、自室なりコンビニなりに行っています。
以上

＊　＊　＊

「白河、藤生の荷物、頼むな」

藤生君に渡すのは……課題のプリント、通知票。上履きもか？
毎度、世話を焼かせるやつだ。
これがあるから毎年俺は藤生君と同じクラスなのかもしれない。
三年も同じクラス、もしかして高校も同じところ受験せななならんのやろか。成績からしてそうなるやろな。高校も同級生……想像したないな、マジ勘弁。
といっても来年、藤生君は苅野にいるんやろか？
などと思っているうちにいいカモがやって来た。

「天宮さん。これ」

「藤生氏に届けろって？」

一見イヤそうでも手は先に出ている。

「藤生君の通知票、笑えるくらい学習欄と生活欄のギャップがすごいで」

「さいてー。他人の勝手に見るかなー」

「毎度のことやって」

人のこと、さいてー扱いするくせ、かなり興味深そうだ。

また例の公園に顔出すかも、と彼女に告げると、彼女はぷうーっとふくれっ面に。

は？　俺、なにかした？

この子と会話すんの、なんとなく疲れる。

軽いものは天宮さんに預けるとして。かさばるものは藤生君の家に直接届けることにする。置きっぱなしのブツ……藤生君の体操服や体育館シューズをまとめていると、後ろから鹿嶋が、

「おまえ苦労性やろ」

……一瞬、鹿嶋への殺意が芽生えた。

03．3月25日（月）

宛先：白河たかなり
Ｃｃ：
Ｂｃｃ：
件名：お伝えしておきました

苅野の家に帰ってくることについては、母に伝えてあります。
前回のご連絡通り、僕は家を出ておきます。

以上

＊　　＊　　＊

五弦のアコースティック・ギター。
自分のギター・スキルは、五弦を生かした細やかな旋律を出せるほどではない。時々、音が絡む。寒さのせいやろか。
東谷公園。少なくとも俺の周りには人っ子一人いない。
身を切るような寒風が頬をかすめてゆく……。

「白河くん、なにしてるん」

突然の声に驚いて顔を上げた。
さきほどまで通行人もいなかった。なのにどうしてかくも運悪く天宮はるこに出会うんや！
泡喰いながらもいつもの愛想笑いを……なんとか準備した。

「ちょいと遊んでるの」
「ひとりギター片手に？」
「孤独と旅を愛する漂白の吟遊詩人ごっこ中」
「スナ〇キンかい」
「なんだいムー〇ン」
「だれがじゃ」
「まあ、そういうわけでギターの練習中」

だからどっか行け。
愛想笑いで邪険にされれば機嫌も悪くなろう。案の定、天宮はるこは眉間にしわを寄せて怒った。たいへん分かりやすくてよい。ついでに、そのまま腹を立てて立ち去ってくれればなおよい。
ギターに目線を戻してそう祈ったのだが。
あ、と女の子らしい細く高い声に続いて、質問が飛んだ。
「でもどうしたん。なんか追い詰められてますって感じ」

手が、こわばった。
この俺の態度からどうしてそんな結論が導きだされるんだ。しかも正解を。おかしいやろ。
藤生君から聞いたのかと思ったが、まったくの勘らしい。これには驚いたが、その外れた予想をした自分にも驚き直した。
藤生君が他人のことをネタに話す——藤生君に限ってありえないその状況を、彼女相手なら十分にありえると、ごく自然に想定してしまった。
話してもいいのかもしれない。
ふと思った。反応を見たくなった。この脳天気かつ首突っ込みたがりなクラスメートの反応を。

「緊急避難？」

軌道修正はできそうにない。

「今、家がごたついとって」

「なに？　事件？　事故？　非常事態？」

「いやいや、親父が帰ってきただけ」

「そいで緊急避難って、お父さん暴力ふるうとか！」

さんざん脱線したあげく、彼女は神妙になって俺の話を聞いていた。

この子でもこんな顔をするのか。

「親父と顔あわせんのが、ちょっとね。親父が寝るまでのがまんです」

なぜか誤魔化しなく答えてしまう。

どれだけ表情を崩さず淡々と語るか。そこに力を注ぐ。

「がまん……おじさんが嫌いなん？」

「親父がおれを、嫌いやねん」

なぜだろうか。俺の中で警鐘が鳴る。淡々と語る冷静さが失われてゆく。取り繕うことができない。これ以上この話題が続いたら、本気で感情を吐きだしそうだ。

自分で話そうと思ったというのに、矛盾している……。

終わってくれ、頼む。

「でも、こんなとこずっといてると風邪ひくよ。しばらくうちでも来る？　いいお茶入荷してん」

終わってくれた。
肩の力が抜ける。
……お茶か。呼ばれよかな？
お茶ていうたら、藤生君、中国茶の銘柄覚えさせられたって語っとったな。巻き添えはごめんだ。それに、天宮はるこの家に行くなんて、藤生君に悪い。

「他人ん家あがると長居してまうからなあ」
「ヒマくない？　少しつきあうよ」　藤生君が手なずけられたのが分かる気がした。オトコマエな性格をしてるが、意外と気遣うところもある。
……ひとりでいるつもりだった、時間。
不意に天宮はるこが現れて正直扱いかねている。時間そのものも、彼女自身も。

「ヒマくない？　少しつきあうよ」

この言葉は正直言って救いだった。
時間を押し流すために、ギターに手を伸ばし、弾き語る。
『ＣＨＡＮＧＥ　ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』、エリック・クラプトンのナンバー。
ゆるやかに音が流れる。目を伏せても指は動く。何度も繰り返し見たライブＤＶＤの、彼の息遣いまで全身で覚えている。

こうしながらいつも自分に疑問を投げかけている。
なにかを変えたいんだろうか。
自分に問いかけながらメロディを進める。
そして、なんとなく思うのだ。時間を、現状を止めているのは、自分じゃないのだろうか、と。

04．4月6日（水）

送信者：藤生　皆
宛先：Ａｋｉ．Ｓｉｒａｋａｗａ
Ｃｃ：
Ｂｃｃ：
件名：依頼

父親に会ってくる。
どうも攻撃の対象はおれだけじゃなくなってきたから。
会えばなんとかなると思う。
それまでは、よろしく頼む。

＊　＊　＊

俺が藤生君を責めたのは、感情の赴くままでしかなかった。
ずっと冷静に一定の距離をおいてつきあってきたつもりだった。
お互いの傷口に触れないようにと。なぜ前後の見境なく、藤生君に怒りをぶつけてしまったのだろう。
さらにショックだったのは、藤生君が決意したこと。その事実そのものだ。
動機は、俺の言葉。
そしてなにより、天宮はるこの存在。

「なら久瀬くん、復活させよう結界。今より良くはなるっしょ」

天宮はるこが自信満々に言ってのける。

一体、その自信はどこから来るのだろう。結界を復活が及ぼす影響もわからないのに、良くなるって……そんなことは誰も保証していない。猪突猛進なのか、知識のなさがなせる技なのか。

しかし今ではそれがうらやましい。それが藤生君に『他人のためになにかをする』気にさせたのだから。

彼女は偉大な人だ。

歴史に残るべくもないけど。

それでも、俺は彼女ってすごいよな、と思う。

「そのノリが藤生くんをまるくしたんやな」

「は？」

「なんでもない。じゃ水面に投げとくれ」

しかも彼女は自分の影響力を自覚していない。

そんな彼女ののんきさに俺はほっと、息をつける気がした。

本当は息が詰まるほど怖い。

今から俺は、サナリを裏切る。

サナリへの裏切り……サナリの言うとおりにするなぞ、俺自身は生まれてこの方約束したことはないのだが……はギャンブルだ。成功確率すら分からない。もっとも俺は、契約内容を正確に把握していない。なにが契約に反し、そして裏切りになるのかも分からないのだ。

全てが暗中模索。それでもなんとかなるのでは。

そんな楽天的な考えが脳裏をよぎる。俺も『天宮はるこ』のノリが伝染したのかもしれない。

だがこれは確実に言える。

変わるなら、今しかない。

藤生君を呼び覚ましさえすれば変わるに違いない——そんな自分

の賭けに天宮はるこを巻き込んだことは、罪の意識を感じてはいる。
だが信じたい、いや、もっと言えば正当化した上で『すがりたい』のだ。成功の鍵は彼女が握っている、巻き込んだからこそ成功に近づくのだと。そんな証拠たる材料はなにひとつなく、ただ勘でしかないというのに。

05．4月7日（木）

宛先：Ｋａｉ｜Ｆｕｊｉｏ
Ｃｃ：
Ｂｃｃ：
件名：Ｒｅ：依頼

よろしく頼まれても僕にはなにもできないと思う。
僕は、自分のことしか考えられない。
ただ、天宮さんには伝えておくことには賛成だ。
・・・こんなことに巻き込んだって、今度こそ怒りそうやな。
このレスが読まれることは無いかもしれないけれど。一応。

＊　＊　＊

藤生君を『復活』させることが役目だとしよう。その役目を遂行することは、サナリの意志に反した行動であるらしかった。
実際、真っ当なことならそれを邪魔するサナリに非があるはずだ。しかし現実は、正しい筋道だけで動くものではない。今、契約は生きていて、役目は今のみに限らず、遠い未来に果たせばよいものだ。
彼の静かな怒りが肌に伝わってくる。

「その事実は、契約上の私のきみに対する権利にいささかの変わりもないのですがね」

サナリが発した冷ややかな宣言の直後、ひざが崩れた。

重い。見えない重石を乗せられたみたいだ。耐えかねてひざを屈し、地に手をついた。回りが黒い霧のカーテンで覆われる、何が起こっているのか、わけがわからない。

パニックになるな、と自分に言い聞かせる。

身がきしみ、鋭い痛みが全身を襲った。鞭(むち)で叩かれているようだ。これはしつけられているのか。さながら、サナリはサーカスの団長で、俺は芸を忘れた犬か。

意識が、遠のく……。

亡者の嘆きか現世の邪念か、喚び声が体を包む。

辺土の重労働を訴える声。

去っていった女に復讐を誓う男。

そして、よく知っている声。

「そんなことで、全てを手に入れることが出来るのか！」

もう役目は果たしている。

親父は金も名誉も手に入れたし、あとはサナリに従えばいいだけのこと。

「ぜんぶわかったような目で……気持ち悪い……こっち見ないでよ！」

サナリに従っていればいい。

それ以外に、必要とはされていない。

サナリが俺を消すべきとするなら従わねばならない……思い残すこともない、ここで死んだところで、家族は悲しまない。厄介な子供がいなくなって、かえってほっとするやろう。目立たんよう生きてきたから、クラスでもそんなに顧みられることもない。

あ、鹿嶋はギターパートが減ったて残念がるかも？

でも……それも基本的観測……。

受験のライバルが減ったと喜ぶのが関の山。

「そんなことない！」

天宮？

なぜ、そんなことがわかる？

天宮は、今までに自分の存在を疑ったことはないんか？

ただ、存在するだけの自分。存在を認められたときでさえ、リビングを飛び交う蝿のように追い払われる。家を出てひとりになる。それがむしろ、つかの間の幸せ。ただ藤生君の感情とやらのために、しかもひとりの男と魔人の打算だけを拠にして、いまここにいる。なんなんだ。ここにいる意義って。

いまや、自分が存在する必要などないじゃないか？

誰ひとり必要としない以上は。

「……なぜ？」

なぜ、サナリの思惑どおりになってしまってるの？

いつも冷静だし、自分の考えはっきり話して見事に断るよね？

それがいまはなぜ？

氷壁が鋭い音をたてた。サナリの手が当たる場所から放射状に亀裂が走る。

サナリの行く手を阻む氷壁が割れた。

なぜ――ああそうだ、気づいた。

サナリに今ほど利用されていたことはないな。

それに俺は、やつを裏切るのだと、従わないのだと、決めたはずだろ。

風が崩れかけた氷壁の間を駆け抜ける。黒い闇の拘束を無理やり

振り切って、動いた。

「久瀬くん！　久瀬くん！」

気がつくと天宮が俺の体に覆い被さろうとしている。なんだこのシチュエーションは。

ああそうか。天宮、無事だったんだな。

「藤生くん、頼む」

ただただ、声を出すのが精一杯だった。

本当は笑顔を見せたかったのだ。愛想じゃない笑顔を。

彼女をサナリの風の攻撃からかばえたことが、俺はとても嬉しかったんだ。

ぜひそれ、彼女に伝えたかったんだけど……。

06．4月10日（土）

宛先：白河たかなり
Ｃｃ：
Ｂｃｃ：
件名：ご報告・契約について

母との件について、すぐに同意していただけるとは
正直言って予想していなかったので、驚いています。
今はすっかり落ち着きましたので、ご報告します。
さて、既存の「契約」に関しては先日申した通り、
思うところがあり、ご迷惑のかかることがないよう
処理させて頂きました。
要するに、すべて「夢の出来事」であったと理解して
頂ければ結構です。後顧の憂いもございません。
今後も仕事に邁進下さいますよう、お祈り申し上げます。

以上

＊　＊　＊

送ったメールに返信など無いことくらい、自分も予想している。
邪魔であるとさえ思われているだろう。それくらいはいいかげん認識している。
それが分かっていても意地になって送りつける、その不毛さに自分自身、呆れ返ってはいる。
こんなのは自己満足。逃げ場が欲しいだけ。

そう表現してしまえば、終わってしまう。
たとえ現実逃避でも、止めてはならない……そんな気がしていたのだ。

そんな時、一通のメールが届いた。
無題で、ＨＴＭＬ形式。いつもならごみ箱に捨てている。
たまたま今日はプレビューウインドウを開いてしまっていた。

送信者：白河隆哉
宛先：久瀬暁哉
Ｃｃ：
Ｂｃｃ：
件名：

これまで返事の一つも出さなかったことをお許し下さい。
さて、例の件については君の言う通り「夢の出来事」と考えることにします。これは私の償いようのない罪です。しかし、礼や侘びの言葉、美辞麗句等をどれだけ重ねたとしても君には届かないでしょうし、私も空虚です。今は敢えてこれ以上何も書かないこととします。
ただ、いずれは君にかけることの出来る言葉が見つかると信じています。我が儘な願いですがそれまで待って下さい。

父

俺は、パソコンの前で、しばらく動けなかった。

「今頃……」

呟きは、ディスプレイの光に紛れていった。
俺は突然、散り際の夜桜を眺めたくて、窓を開けた。
自分が、何かに呼び醒まされるような感覚に包まれながら。
生温い風を全身に感じながら。

ただ、闇を見つめた。

06．4月10日（土）（後書き）

Ｔｉｍｅｓｈａｒｅ　終了です。

次は、藤生氏の仕事人ぶりをご紹介する小話を予定しています。

Ref No. 01

暗い部屋の中。
一人の少女がたたずんでいた。
床には円陣。その中には六芒星が描かれている。そして、中央には供物なのだろうか、生命感のない蛙が紅くどす黒い液にまみれ、その身を沈めていた。
少女はただ立っていたのではない。
無限に続くとも思えるような呟きが彼女の口から漏れる。掠れがちなその声は、地を這うように闇に溶け、時として闇を切り裂かんばかりに高みにと昇華していった。
その姿は古代の巫女を彷彿とさせる。
闇は、彼女のために有った。

＊　＊　＊

携帯から、勇ましい音楽が奏でられる。右目の動きが止まる。
「上主様、音楽お変えになったのですね」
右目はのんきそうに言った。彼は、のしに『未決済』と墨書された紙の束を抱えている。ペーパレス化が執務上での課題だが、このお話には関係がない。
「この曲、思わずダウンロードしてもてん」
藤生氏は少しはにかんで答えるとすぐ、もしもし、と応答していた。

ううむ、聞いたことあるような無いような。と、右目は光の速さで書類に目を通しながら考えている。

（確かに、曲調は覚えがあるのですが）

右目は知恵を司る者だけに、自分の知らぬものへの好奇心は強い。

「ああ……わかった」

藤生氏は忌々しそうに電話を切った。

「どうかなさりましたか」

右目は首をかしげた。

「召還された」

「……え？」

「人間からの魔法陣呼び出しで、呼び出しの際の呪の波動と『魔のもの人事データベース』とのマッチングの結果、おれがヒットしてもうたんやそーな」

「信じられない！　魔王クラスを呼び出すなどとは前代未聞……なんたる呪の持ち主か！　過去数百年はなかったことですぞ！」

右目はもろ手を上げ叫んだ。どれだけ異例であるかを強調しながら。

「おれ庶民やし」

「いえ、そういうことではなく」

右目のツッコミも意に介さず、藤生氏は語気を改め真面目ぶって

述べる。

「召還されるのも上級魔の仕事のひとつだ。魔王自ら体験するのも悪くあるまいて」

「それもそうですね」

本心は仕事をサボりたいだけとは、右目は先刻承知である。

だが、遊びたい盛りの少年が強引に主張するへ理屈を、むやみに崩してかかるのはあまりに無情というものだろう。

右目は大人だった。

「では、お気をつけていってらっしゃいませ」

藤生氏は右目の言葉を聞くと、蜃気楼のゆらめきのように姿を隠していった。

ただ、少しばつの悪い表情を漂わせながら、だったが。

＊　＊　＊

藤生氏が姿を現した場所は、暗い部屋だった。厚い黒いカーテンが閉じらているが、微かにカーテンと壁面の間から光が漏れる。

眼が慣れてくると、藤生氏はそこが学校の視聴覚室ぽい場所だと気づく。　対峙しているのは紺のセーターにひざ上十センチスカートの制服を身につけた少女。顔は可ならず不可ならずといった、ごくごく平凡な印象だ。

「ちわっす」

少女は、突然現れた、だるそ～な態度の少年に不審の目を向ける。

「なに？　あんた」

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん」

無限なる魔法の技で、少年はハク○ョン大魔王のコスプレに早変わりする。ご丁寧にヒゲがついているのがご愛敬。

ただ、大胆なビール腹までまねする勇気はなかったらしく、結局あまり似ていなかった。

「やっぱ……解剖実習の蛙じゃ、悪魔召還なんてうまくいかないのね」

「待たんかコラ」

尊厳を傷つけられ、普段のシャツにワークズボンのスタイルに戻る藤生氏。

「いちお、結構魔力とかいけてるんやぞ、俺」

「がんばったのに、なんかヤバイ子が出てきて、もー信じらんないっ！」

（聞いてねえな、こいつ）

ため息をつきつつも、藤生氏は賢明である。

とりあえず、さっさと依頼を聞くことが先決だ。と思考を切り替える。

「とにかく姐さん？　呼び出されたからにはできることはするわ。願いはなんやのん」

少女はじっと藤生氏を見返した――案外、見てくれイケメンじゃない？

少女の思考が読みとれる。藤生氏、ちょっと照れる。

「さっき、魔力とか、いけてるって、言ったわよね」

「おう」

「私、彼氏ほしいの」

藤生氏の息が止まった。

少女は、真剣な眼差しを寄せる。

「んなことでいちいち魔人召還すんなや！」

「だって彼氏いない歴一五年なのよ！」

「おれも彼女いない歴一五年や！　ケンカ売っとんのか！」

藤生氏、逆ギレである。

「じゃ、ちょうどいいわよねえ」

なにがや！　と藤生氏が叫ぶ前に、彼女はかるーく言ってのけた。

「結婚して」

「あ゛？」

藤生氏の脳みそはその言葉の理解を拒絶した。

「出会いの演出センスは最悪だけど顔とか見た目はジャ○系だし、魔力もいけるとか言ってるし……自己申告だけど同い年っぽいし、これって運命じゃない？」

「運命ちゃうゆーに」
「魂、あなたに一生捧げるわよ」
「ううむ」

自分を呼び出すほどの「呪」の使い手の魂、というのは、結構食指が伸びる。さりとて、その代償は少々ヤバイ。
一世代前の上主であれば、適当に結婚でもして味見して、魂をいただくくらいはしたかもしれない。だが藤生皆は、ひねくれてはいるが案外、純真な少年である。

「自分、よく暴走気味とか言われんか？」
「そんなことないわ」
「でもちょっと、結婚っつーのは」
「呼び出した人間のいうこと聞いてくれるんじゃないの？」
「だ、だけど……やっぱできんわ」
「なんでっ！？」

藤生氏は心中、引きまくっているのだが、さりとて良策は思い浮かばず。

（ううっ、しゃあねえの）

彼は最強のカードを切った。

「俺、好きな女おる」

沈黙（藤生氏自身はかなり長く感じたらしい）。そのあと。

「がびーん」

彼女は自ら効果音をつけつつ、ひざから崩れていった。

＊　＊　＊

「で、結局どうされたのです」

最終的には依頼は果たされなければならない。召還者が「もういい」といっても通用しないのだ。このへん強引なシステムである。藤生氏はこんな面倒なシステムは絶対に再構築してやる、と決意したのだが……それはまだ心に秘していた。

藤生氏は書類に目を通しつつ、かったるそうに答える。「結局は、あやつの究極のタイプを探し出して赤い糸を紡ぎ直したったと。んで、数日後偶然出会ったようにシチュエーション仕組んどいて何度かチャンス作って、あとは自然に任せた。あとは、もつれようが切れようが知らん」

（親切なんだか無責任なんだか）

と右目は思ったが口には出さない。

「ところで上主様。その着メロ、なんという曲なのですか？」

「デビルマンのテーマ」

右目は深くため息をつく。

「なんでそこでため息になるかな」

右目は黙々と手元の資料を調査している。

「確かにオチもなんもないけどや」

藤生氏のいつになく饒舌な言い訳は、しばらく続いた。

01．そう、修学旅行である（前書き）

5月後半くらいのお話です。

01．そう、修学旅行である

「星は待つんやなく、呼べばいい」

彼は漆黒の闇に染まる空を見上げた。

その言葉を、私は心の中でくりかえした。

＊　＊　＊

配られた行程表を目にしたクラスの面々から、文句の声が次々あがる。

「民泊～？」

「えー嫌や」

「ふつう南の島てホテルとかちゃうん」

「修学旅行や。リゾート満喫♪癒し旅ちゃうぞ～」

対する担任・青ジャージ下崎の反論も至極ごもっともなものであった。

そう、修学旅行である。学校生活の一大イベント！　行き先は沖縄！

てな流れで浮かれた雰囲気を盛り下げるべく、下崎が問いかける。

「クラスの行動規範はなんやったかな？　山名」

委員長山名くん即答。

「『学びは孤高たれ』」
「その意味を考えながら、このＬＨＲ（ロングホームルーム）の時間中に、飛行機とバスの席順、行動学習の班、部屋割は、君ら自身で決めてくれ。班割りの紙は明日のＨＲに出してな。
世話役はいつもの山名、中林、久瀬で進めてくれ。私は職員室行ってるから、なにか起こったり、知りたいことあったら職員室に呼びにきて」

世話役すなわち仕切り役を名指しして、後は丸投げの担任なのであった。毎度のことで非難はない。
そして指名された順に委員長・副委員長・生徒副会長の三名は、ひな壇に陣取った。

「じゃあいまから班ぎめします。どうやって分けるか案のあるひとー」
「好きなもんどうしでええやん」

てな感じで、フリーダムな議論になるのも、うちのクラスらしいとこだ。
ところで。正直なとこ、好きな子どうしで班決めって、いろいろ不安にならへん？
クラスの人間関係、勢力図が赤裸々に暴かれる瞬間というか。なにより、ぶっちゃけ分ける人数にあぶれたらどうしよかという、漠然たる不安……私って、小学校のときに転校何回か経験してて異邦人な立場が多かったから、そのへん敏感になってしまうのだ。
その点、久瀬生徒副会長のお裁きはいつも不満が少なかった。仕切りもうまいもので、

「じゃあ、体験学習のやりたいもんのグループで集まる案を採用しよか」

「なんでー」
「班で分かれてからやること決めたら、自分が本当に興味ある体験学習ができんようになる」

下崎いわく『学びは孤高たれ』――他の人に引きずられないで自分の意見を述べよ。
まずやりたいことから決めてくってのは納得。結果的に好きな子どうしグループで固まったとしてもね？

「人数調整はトレードで決めよう」
「そんじゃ漁業にロマン感じるやつ、俺んとこに名前書いて」
「農家いきたい子～」

みんな立ち上がりだしてぞろぞろ移動をはじめる。
かのんが早速、声をかけてきた。

「はるこどうする？」
「料理教室と磯釣りを」
「なにその取り合わせ」

お料理教室は女の子ばっかりだ。
かのんは海相手でもシュノーケルをやるとのこと。二人そろって漁師さんちを志望。ただ、釣り体験希望の女子はいない。男子ばかりだ。紅一点だぜ！
しかも久瀬くんがいたのも意外っちゃ意外。

「君らに意外とか言われたない」

と本人は心外な様子。
続いて彼からは、グループ分けの極意のタネ明かしをレクチャー

された。

「グループ固まりたい連中には、できるだけ農家とか店にいってくれ、て根回ししててん」

「そんなん聞いてへん」

「天宮さんはやりたいこと無視して固まりたい人とちゃうやろ」

「ん、かなぁ」

「僕は人数合わせ要員やから」

かくして、漁師さんの民宿にはクラスのマイウェイな人たちが集ったらしい。

私もはなはだ心外だ。

＊　＊　＊

一日目。

修学旅行は伊丹空港に集合し、那覇空港に到着、ひめゆりの塔とか糸数壕とか見学して黙祷して、ホテルの大広間で沖縄戦の話を聞いて。

バス移動と列をなして歩く、ツアーらしい旅行であった。

夜はホテルのファミリールームに5人くらいが雑魚寝。明日の出発までに、島にもってく荷物と、本島に置いとく荷物を分けなきゃいけない。かのんと荷物シェアしよう。ドライヤーは持参するかな。

……かのん、どこ行ったんやろ。別のクラスのせりちゃんに会いに行ったのかもしれない。

私もひさしぶりにせりちゃんに会うか、と廊下を出た矢先。

「久瀬しらね？」

と顔見知りの男子に呼び止められた。
鹿嶋くんだ。

「知らんけど私に聞くのなんで？」
「3組の女子に呼び出されたとかゆってたんで、知らへんかなって」
うわあ。うわさに聞く『修旅で告られ』ですか。対象者が身近に現れるとは！
もしかして聞けばさらに情報が得られるか？

「3組のだれに？」
「浅賀さん」

情報ゲット！
3組っていったらせりちゃんのクラス。あとで裏情報仕入れよっと。
しかし鹿嶋くんには厳重注意だよね。

「聞いといてアレやけど、聞かれて即答やめたほうがええと思う」
「うん」

うなずく鹿島くん。
だけど、うーんとうなって首をかしげる。納得ならない様子。ひっかかる理由が分からない。が、説得は彼らなりになんかあるだろうから差し控えよう。
私の祝辞を鹿嶋くんから伝えてもらうよう、頼むことにした。

「久瀬くんついに彼女できるかぁ。めっちゃ頭いいし、めがねくんでもサッカー部と競り合いしちゃえるし、ギター弾き語りさせると

渋かっこよいし、彼女いておかしくないわな。『おめでとう　ばい・あまみや』って、伝えといて」
「めでたくないやろ、たぶん断るやろし」
「なんで？　浅賀さんめっちゃモテ子さんですよ」
「そういうの疎いんで」
「浅賀さんは呼び出しただけとして、ほかの仲いい子らも全員かわいい子やん」
「出てくときマジ勘弁って顔しとった」

浅賀さんかそのご学友、かわいそすぎる。
久瀬くんて人畜無害な笑顔キープしてるようでいて、実は男子だけの時は正直者なのだね。だけど、こういうデリケートなネタで正直なのは、アウトだろう。
あとで苦情を申し立てておこう。

02．星に願いどころでは

二日目。

バスに乗り込んで美ら海水族館に行って、イルカとかジンベイザメとか見た。そのあと、本部港に向かい、フェリーに乗りかえ。

港には白に青と水色の船体がドックに接岸されていた。

私、フェリーってはじめて。白と青の船体が今から南の海を渡るぞという気分になる。

フェリーが到着したのは伊江島というところ。

島の港には島の人がたくさん迎えにきていた。

船から降りると近くの大きな集会所に集まり『入村式』をやった。

式典というからには、観光協会の会長さんがあいさつ、続いて先生方のあいさつをへて、ようやく民宿のホストファミリーの人たち――『おじぃ』『おばぁ』たちとご対面である。

「よろしくおねがいしまーす」

と私があいさつした相手こそ、一夜の宿と各種体験でお世話になる民宿の方。仲井さんという五十代くらいのご夫婦だ。

仲井さんの民宿は若干、大きいかもねって感じの家だった。

リビングに共同キッチンもある。集まって持込みのお茶で楽しめそうな感じ。

沖縄オリジナルなお茶あるかな。あとで仲井さんに聞こう。

荷物を置くと、隣の平良さんちへ。体験その一『おかぁ』のお料理教室がスタートだ。

トライしたのが『ゆし豆腐』メニュー。

「みんなで作ったの、夕飯に出しましょうね～」

と仲井さん。
夕飯ってすごいプレッシャーだ。
私は手つきがいいとほめられた。自分と弟とのお弁当担当だ、手早くおかずを仕上げるのは慣れている。といっても、ランチョンミートってぶたの缶詰とゴーヤー炒めるだけだから、腕前を誇るほどでもないけど。
それとお菓子。山盛りのサータアンダギーができた。出来はまあまあだと思う。けど、他の子の失敗作の消費を手伝っていて、私のぶんは手付かずでそっくり残ってしまった。どうしようこの山。
夕食は同宿のみんなと庭でバーベキューをした。
テーブルに例のゆし豆腐やそうめんチャンプルーを並べてみたところ、おおむね好評だった。
作ったのが我々だと後でばらしたところ、

「レシピが完璧すぎ」
「仲井さんどこまで手伝ったん」

と失礼なリアクションが返ってきた。
ちゃんと女の子らをほめんかい、と仲井さんがつっこんで、みんなで大笑いした。マイウェイ集団らしいけど、いい感じで和気あいあいした夕食だった。
仲井さんからだったか、

「今日は天気がいいから星空がよく見えるよ」
「星」
「見てみたい！」

かのんが強く希望を主張。
食べたあとの片付け後、海岸に星空観察会とあいなった。

夜空は銀粉をまいたよう。
星の数は苅野で見るのとは桁違いだ。
苅野は山の中のベッドタウンで、自然豊かなまち。それでも、マンションや幾何学的曲線を幾重に重ねたような市街の照明は、星あかりの存在をかき消してしまうらしい。

「すごいね」
「数えきれんわ」
「あれ、北極星やろ」
「あれもしかして、南十字星ですか」

同じクラスの吉本くんが興奮気味に質問する。
仲井さんがそうだと答えると、何人かが盛り上がった。かのんも「ほんまや、すごい」とうなずいた。
かのんは星や天気に興味があって、いつも天気を聞いたら即答って子だ。家のパソコンで気象庁と複数の天気予報会社を見比べてるらしい。ウェザーなんとかっていう、似たような長いカタカナ名をスラスラ話すくらい。
そんな彼女になにがすごいかたずねてみる。

「日本では見えへんて思っててんけど、沖縄本島近辺でも見えるんやって」

つまりレアもの！
かのんと吉本くん中心に、星空観察のしあいっこになった。

「冬だとココでも完全に十字見えますか」

かのんの質問に仲井さんが解説をする。
完全には見えないってことと、八重山、つまりもっと南の石垣島

あたりだと正月前は十字が見えるのだそう。
久瀬くんが仲井さんにたずねる。
「八重山では南十字星を『はいむるぶし』と呼ぶと聞きましたが」
「伊江島、本島も同じだよ」
私は聞いたことのない響きに魅せられた。
「はいむるぶし……」
「『はいむる』は『南の群れ』、『ぶし』は『星』がなまった……」
「あ、流れ星！」
かのんが空を指した。
みんないっせいに空を見上げる。
あっちだと見つけた子が位置を教え、見つけられなかった子も次こそはと宣言していた。
あそこだ、と男子のだれかが言った。
また、だれかが流れ星を見つけたようだ。私も見た、と女の子の声も。男子女子関係なく盛り上がってきた。
「三つ願い事すればかなうのは、見て消えるまでやったっけ」
「そんなん無理やろ」
「無理ちゃうがんばれ」
そして私は盛り下がっていた。
がんばって見つかるものなのか。
「あ、流れた」
久瀬くんがぽつり。

見逃した。星に願いどころではない。
もしかして見つけられてないの、私だけやったりして……動態視力・集中力・運のどれが悪いかは不明だが、こういう状況になるとへこむ。
はいむるぶし。
自分をなぐさめるように、それをじーっと眺めた。

03．それって告白ですか

三日目。
朝食後、ついに念願（大げさ）の磯釣りにとくり出した。
今日のおかずをとおとぅに大漁祈願されての出陣である！
で、実際はというと。
伊江島の磯は入れ食い状態！
最初は経験浅い素人やし、隣人の久瀬生徒副会長と並継ロッドでガンガン飛距離飛ばすぜという方面で熱くなってた。が、私はグルクマーって魚を三匹たてつづけ。なんか久瀬くんは沖縄らしい青いイラブチャーやらタカサゴ（沖縄だとグルクンっていう）やら何種類か十尾くらい釣りあげてた。
結論。帰り時間まで真面目にやったらクーラーボックスがヤバイ。
ゆえに竿を置いたまま会話をはじめた。

「昨日言ってた、サータアンダギーもってきた」
「サンキュ」
「おなかこわしても知らんよ」

昨晩の星空観察後、プチお茶会をした。
その際、揚げ菓子備蓄を聞きつけた久瀬くん、持参をリクエストしてきたのだった。

「んまい」

成長期の久瀬副会長。よく食べる。
しかし私もタダで食べさせやしない。
ズバリ質問をぶつけた。あのネタだ。

「絶対断るって、鹿嶋くんが断言してたけど。実際どうなん」
「あぁ、浅賀さんが来た件」

察しがいい。久瀬くんの頭のいいとこだ。
だが、回答に感情がないか感情的すぎか、ブレ幅がかなり大きいのがよくないとこだ。

「そりゃ断るよ。天宮さん以外の子は」
「え」

なんて言った？
私以外の子は？

思考放棄はせず懸命に考える。
私が告る分にはＯＫてこと？
それってまさか、告白ですか。逆説的表現してるみたいな。まさか修旅で告るってやつ。それに自分が遭遇してるとか。まさか。
胸痛い。動悸が。息切れが。やばい、救心くれ！
といったぐあいに動転中の私の横で、彼はふたたび口を開いた。

「諸々の懸念がいろいろ面倒やし」
「……は？」
「藤生君がらみの懸案事項。世間的に堂々と話せる内容やないし」
「そうか確かに」

魔法とか魔王さまとか。
やばい人扱いやわ。間違いなく。

「話せへんのに面倒に巻き込む可能性なくはないし」
「それもしかり」

「というわけで僕は世捨て人となりました。天宮さんそんな寂しい僕を救ってください」
「ほかの人、藤生氏ワールドに巻き込むとマズい、ってこと？」
後半のセリフはスルーして再確認。
「そんなとこ」
久瀬くんは変わらず淡々と答えた。
最初の衝撃のセリフは、私をからかうものではないようだ。純粋に、そういう人様に話せないことを相談できる友だちは私って、そんな話。
なーんだ。
……期待したわけじゃないからねっ。
恥ずかしいけど。
こうなりゃもはや勢いで切りこんでやれ。
「じゃあ、久瀬くんって、好きな子はおらへんの？」
「いる」
「いるんだ！」
「今はだれとは明かしません。秘して忍ぶも恋の道なり」
誰かと追及する前に釘をさされてしまった。
「されど天宮さんにはいずれご紹介さしあげてもよい」
「私の知らん子？」
「微妙。しかしそもそも紹介できるんやろか」
久瀬くんはほおづえついて思案する。
そして私も思案。どういう意味やろ。紹介したいけど『できるん

やろか』疑問で。知らん子かといえば『微妙』。名前だけは知ってるかも？

しかも、藤生氏のことを話して大丈夫な人物。

ぜんぜん見当がつかない。

さらにはいずれ紹介。なぜか私に。

私が告られてるでもないのだが、少々ドキドキしてしまった。

「相互扶助てとこ。天宮さんを応援するのも。よけいなお世話やろけど」

私、藤生氏ラヴです！　って思われてるのかな。

否定するほど大きく間違ってないとは思うけど。

ともあれ、礼だ。

「いえ助かってますので」

「で、藤生君へのおみやげ、なんか決めてる？　まさか無いとかないやんな」

考えてませんでしたすいません。

でもおみやげ用意して、どう渡すよ。久瀬くんが当たり前に話してる以上、渡すつてがあるのかね。聞いてみよう。

「藤生氏へのおみやげ預けてええ？　あとなにが喜ぶかね」

「簡単やで」

「かんたん？」

「わからんかなー」

久瀬くんは笑いかける。一見、優しげでいて詐欺師の笑顔だ。

「わからん！」

「お菓子もっと食べてよい？」

まだ二つほど残っているビニル袋を差し出すと。

「あーん」

「どういうことすか」

「練習台にどうぞ。ぜひ藤生君にやってあげてください」

慣れない沖縄の温かさに頭やられたんかいな。

詐欺師の笑顔、継続営業中やけど。

私はため息とともに久瀬くんの口に押し込めた。強引に。気恥ずかしいし。

「ごちそうさま。ちょっと耳貸して」

久瀬くんが接近する。

やたら耳がくすぐったい。もう半ばどうにでもなれだな。

久瀬くんいわく――もう一度コレ彼のために作ったげたら。そこらで買うよりオンリー・ワンな修旅土産でいいと思うよ。

確かに。藤生氏が喜びそうな品物は思いつかない。

藤生氏って物欲なさげだし、服も小物もシンプルな趣味してたし。なによりモノもらって『わぁ、ありがとう！』って喜ぶ図が絵にならない。

それに魔のもののエラいお方・上主さまなら、その気になりゃなんでも手に入るんやないのかね。

意見は妥当だろうと判断。

結局、久瀬くんは藤生氏の理解者であり、頼りになるなと再認識するのであった。

そんなこんなで私が土産選定に関する一考察中のこと。
この鮮やかで美しい海に、新たな危機が発生していた。
『藤生氏へのおみやげ』に頭をめぐらせる私と、勝手に人の菓子を消費する久瀬少年。この二名に今まさに危機が迫っていようとは……このとき知る由もなかったのである。

０４．これって修羅場かも（前書き）

難解なせりふがありますが、そういうものとスルーしてください。

０４．これって修羅場かも

午後で伊江島での滞在は終了。
港では『涙そうそう』をうたいながらのお別れになった。
これが唄力（うたぢから）なのかな。たった一泊だけど涙腺がゆるんだ。
出航の汽笛が鳴る。

「また帰ってくるよ」

船が島から離れ、島のおとぅ・おかぁたちはだんだん小さくなっていっても、手をふり続けてくれた。私たちもデッキに立ち、見えなくなるまで手をふり返したのだった。

本島では知念のホテルにもう一泊。
夜ミーティングに集まり、互いの話をしあうことになった。
自転車で島を回った、船に乗せてもらった、焼き物……ラインナップは知ってたけど、いざ体験談を聞くとおもしろかった。
私たちがいた民宿の人は、はいむるぶしや流れ星について話す人が多かった。
私は流れ星は見られなかったけど、幾多の星に感激したには違いない。苅野でも星は見えると言われて、うまく思ったことを語れないのがもどかしかった。
ひとしきり話がもりあがったところで、

「天宮さん。ちょっとええ?」

別の部屋の女の子から声をかけられた。
いやな予感。
まさか告られ……気分は悪くはないが、よくもない。藤生氏の顔

を思いだすとなお、浮かれた気になれなかった。
そう考えると、鹿嶋くんや久瀬くんに「もったいない」と言ったのは、適切じゃなかったな。あとで謝らなきゃ。

さて、やって来たのは別のファミリールーム。
うちの学校の生徒のどこかのグループの部屋だろう。
よくわからず足を踏み入れた、その和洋室の主たち＝女子五人のメンツを見て、私は凍りついた。
浅賀さんとそのご学友だ。

「天宮さん、久瀬君と付き合ってんの？」

開口一番これ。しかも上から目線。

「友だちづきあいやけど」

この正直回答に、ふざけんといてと彼女たちはいきり立った。
これって修羅場かも。ひぇー、怖い。

「ユイ見てさっき、一瞬固まらんかった？」
「ユイが久瀬君に告ったの知っとんのよね」
「なのに島で二人仲良く見せ付けてたとか性格悪すぎ」

つまりこういうこと。
午前中の伊江島で、浅賀ユイさんとその学友たちは船に乗っていた。その船上から磯釣りグループが見えたのだ。
したがって、色恋沙汰とおみやげ相談、そしてあの馬鹿げた、久瀬くん練習台となるの図。しっかりばっちり見ていたらしい。
長時間の観察ご苦労さま……。

「ユイに謝ってよ」
「そうよ謝ってよ」
「気分を害したのは申し訳ないです」
「なら今後久瀬君に近づかんといて」

アホか。
思っても極力、社会的に耐えうる表現に改める。

「それは無理な相談やわ」
「はぁ？！」
「大事やことやからも一度言うけど、久瀬くん鹿嶋くんとは友だちやから、ふつうに会話するし、相談ごともふつうに話する。そやから無理」
「なんなのこの子」
「最悪！」

ついにご学友たちがキレてつかみかかってきた。
幸いにも宿泊部屋の一室、ふとんが敷いてある。
若干の心得を頼りに、奥えりをつかんで外から足を刈って、一人めをゆるやかに倒した。次に別の子に背後から襲われるのを、その子の腕をはさみ抱えて身を反転させて、逃れた。
大外刈りと巻き込み後ろ袈裟(けさ)。
想像以上にキレイに決まってびっくりだが、自画自賛する間もなく立ち上がって、

「暴力反対っ」

と捨て台詞吐いて、私はトンズラこいたのだった。

逃げるの、悪いって認めるの、だのと金切り声が聞こえたけど。

知らんわい！
ああ、逃げたさ！
でも譲歩もしてない。
――相互扶助てとこ。天宮さんを応援するのも。
久瀬くんが私を助けてくれる。私も彼を助ける。それが相互扶助だ。
彼女たちの言い分は認めるわけにはいかない。認めたら、久瀬くんと彼が好きだという子、その二人がうまくいったとき、見知らぬ彼女が理不尽な攻撃にさらされかねない。一度やると調子にのるやろと。
さすがに精神的にキツくて。
なにくわぬ顔で部屋に戻るも、はた目にはそう見えなかったようだ。
かのんが心配そうに声をかけてきた。
「はる、どうしたん」
「疲れたみたい。先に寝るわ」
顔を見せないよう、隅っこの布団にもぐりこむのが精一杯だった。
＊　＊　＊
四日目。
青空の下、那覇の公設市場と首里城を見学した。
守礼の門をくぐって階段をのぼりきると、朱に彩られた首里城は

光って見えた。
明るすぎて負けそうになる。頭が痛い。偏頭痛だろうか。
首里城の中は私たち修学旅行生や観光客でにぎわっていた。うるさい中で歴史について説明を受けるんだが、頭に入らない。
少し後ろに離れて、楼間から外を眺めた。
高台に立つ城は那覇市内が一望できて、眺めがいい。

漠然とした不安が去らない。
かのんを巻きこみたくない。久瀬くんにも相談しにくい。
どうしたら……。
脈打つごとに痛むこめかみを両手でおさえ、目を閉じた。

「いらにぃー、いらにぃー」

なんだ?
いつの間にか周囲が静かになり、かわりになに言ってるか分からないことばが聞こえてくる。
手を下ろして目を開く。
鮮やかないろいろな色が視界に飛びこんできた。

「うしゅがなしぃめーが、おとーいんどぉ」

整然とした意味不明に華麗な行列が、守礼門の方から歩んでくる。
黄色い衣のおばさんたち六人の列の後に、人が乗ってるらしき黒い駕篭(かご)が通った。時代劇で見かけるみたいな。小さな花の模様の衣をつけた女の人の列、さわやかな水色の衣を着た女の人が列、とこれもそれぞれ六人ほど。
コスプレ、というより時代行列の琉球王国版?
今日イベント日?

（違うなぁ。なんか違和感）

これだけの規模なら、実行委員会スタッフとか報道のカメラとかもたくさんいそうなもの。それが一切いない。遠景にビルがない。目を疑って、目をこする。

さらに気づいたのは……私は城の上にいたはず。なのに今、私は一階にいる。御差床（うさすか）っていう、いわゆる玉座前。

時代行列に臨場感があってラッキー。

じゃなくて。

行列がとまった。駕篭がゆっくり地面に降ろされる。駕篭からは真っ白な布に身を包み、頭や首に玉飾りをした人が出てきた。顔は見えない。その人、単独でこちらに歩んでくる。

「うぇんむーさぎーぃ」

近づいてきてようやく分かった。きれいな女の人。

その彼女が両手で私に差し出す。

ベルベットのようにつややかな、黒くて太くて短いひも。

「はるこ！」

「えっ！」

城の前庭から一瞬で行列が消えた。

じゃなく、城の前庭にはばらばらと観光客が歩いている。もとの光景だ。

「あ……」

ことばを失う。

私のすぐ横にはかのんがいた。また心配そうな顔をしている。

「体調悪いんちゃうの」
「大丈夫。うん」

あの時代行列は私だけが見た幻。
ただビジュアル的に克明すぎた。夢ではない、ふしぎ現象。
藤生氏がおらずして遭遇するとは、半信半疑だし、それにあの幻の意味がぜんぜん分からない。そもそも意味があるのかも。
手には例のひもがあった。ベルベットじゃない、たぶんシルクを組紐（くみひも）みたいにしたものだ。受け取ったっけ？
久瀬くんに相談していいのかな。

「あんしー汗かいてー」

背後からおばあさんらしき人がハンカチを差し出してくれた。
私はハンカチより先に、手を額にあてた。
確かに……手がじっとりと濡れた。暑くもないのに。冷や汗だろうか。

「ねぇねぇうぇーか、うちなーんちゅなー」

たぶん『ウチナーンチュ』＝沖縄のひと、って聞かれてるんだよね？
天宮家は父方は神戸、母方は静岡の人だから答えは『いいえ』。
と、おばあさんは不思議そうな顔してから、手の中の黒い組紐を指差し、くしゃっとした笑みを見せてくれた。

「鼻緒はノロぬお告げ、足ぬくとぅは、気つけて」

０５．まさか会えるとは（前書き）

イジメがらみの描写を不快に感じる方は最後の十数行だけお読みください。逆にこんなのぬるいと思う方もいるかもしれませんが……

05．まさか会えるとは

下駄箱から上履きを取ろうとして、

「天宮さん」

と呼ぶ廊下の久瀬くんに気をとられてると、靴から小さなものがいくつかこぼれ落ちた。

横にいたかのんが小さく悲鳴。

「……なんじゃこれ」

「天宮さん。それは靴に画鋲では」

「はる、それマジヤバイって！」

ひた隠しにしようと決めた修学旅行中の懸念材料。

旅行後初登校した朝、ふたりにバレた。

午前段階でデマは広まっていた。

・誰か久瀬君に告白してたのを邪魔して、横から盗ったんやって。

・同じ民宿で女子一人で磯釣りってぜんぶ狙ってやってたんよね。

話に尾ひれがつき、しかも意図的に主語が省かれてるのがいやらしい。

私、どんだけ陰謀家で悪女ですか。むしろそうなりたい。見合う容姿と頭脳つきで。

あからさまに悪口もいわれはじめた。目立つカワイイ女子グループ中心というのもあって、女子の大半が流れに乗るまで時間はかからなかった。

意図せず久瀬くん近辺を歩くと足をひっかけられもした。

――足ぬくとぅは、気つけて。

首里城のおばあさんの言葉を思い出す。

今ならピンとくる。足のことに気をつけてって、予言だったんだ。

ちなみに組みひもはぞうりの鼻緒らしい。お母さんが教えてくれた。なんでそんなもんをと変な顔されたけど。

足のこと――足引っかけられるのもそうだが、靴も気をつけなきゃ。靴入れ用エコバックを持参して、授業中は革靴入れ、帰りは上履きと体育館シューズを持って帰った。

用心しすぎでもなんでもなく、せりちゃんが『靴刻んだろと思ってた』『用心深い子やな』って会話を3組で聞いたと教えてくれた。

……寒気がした。

救いは男子が総スルーだったこと。

そして、かのんが変わらず味方だったことだ。

「人のウワサも四十九日というし」

「それ忌明け法要やから」

「そんなら八十八夜？」

さらに間違ってるし。立夏とか茶摘みだから。正解は七十五日だから。

さておき、なぐさめはありがたかった。

＊　＊　＊

修学旅行から一週間、夏日予想の晴れた日。

ついにマンガみたいな展開に陥ってしまった。

私がふりむいた時にはすでに遅かった。

がらがらがらっ。

扉が音をたてて閉まると即、ガチャガチャ、かちんと鍵がかかる。

そして軽い女の子の笑い声がすると、バタバタと足音が遠ざかっていった。

私は扉に体当たりよろしく何度もたたいてみた。反応はない。

お約束すぎる。

かたわらの体操用マットに座りこんだ。

「ここまでやるか」

体育の授業の後片づけでこんな目にあうとは思わなかった。

たしかに私が片付けていたのはソフトボールのベースだ。踏むものだ。『足』関係だ確かに。

が、気づくかいなそんなん……。

「なんでこんな目に……はあ……」

うわさも七十五日か。

三ヶ月どころか一週間で精神的にまいりそうになっている。

こうして一人暗くひんやりとした体育倉庫に閉じ込められ。そして誰も来ないまま行方不明となりやがて——みたいな展開を想像しかかった。

いくらなんでもネガティブすぎる。

最悪でも明日どこかの授業で倉庫は開けられるはず。なら最悪の事態は脱水症状。じっと動かないのが正解だろう。

意外と冷静な自分に自画自賛。ふと、かすかな衣ずれの音が聞こえた。

「む」

小さくつぶやいて耳をすます。

確実に、だれかがいる。気配がする。

耳を澄ます——くすん、くすんと、悲しげなすすり泣きがする。

女子みたいだ。誰？

同じく閉じ込められた子がいる？

「う！」

苦しい。

突然、のどが詰まった。のどが渇き、口の中が粘るようだ。ズシリ——と全身になにか背負わされたような感覚。足かせをつけられたように動かない。

動くのはかろうじて、手だけ。

——なんで、わたしばっかり？

なんでわたしだけ、こんなめにあうの。くやしい。かなしい。こわい。

うん、わたしもそうおもう。

意識が遠のく……。

「マジかぃ」

……聴き覚えのある声。

「まとめて閉じ込められてもたやん」

「久瀬くん！」

「やぁ天宮さん」

そしてあらゆる拘束から解放されたみたく、私は『立ち上がれた』。

ボールの山の奥から久瀬くん登場。

「どうして倉庫に」

「よい子の久瀬はいつも率先して後片付けしとぅでしょうが」

そして最後まで片づけしてますね。なるほど。

いつの間にか身体は軽くなっていた。私、閉所恐怖症にでもなってたのかな。

彼は扉に近づいて耳をあてた。

「見張りはなしか」

「ゴメン巻きぞえ」

私が立ち上がると、久瀬くんも立って歩みよってきた。

「状況的に声かけそこなってて今さらやけど、ごめんな。僕が調子乗りすぎたからやな」

「もしかして相当怒ってる?」

「もうぶち切れ。あいつら絶対シメる」

「久瀬くん、冷静に」

久瀬くんは無言でマットに座って跳び箱にもたれかかった。

暗くて見えにくいけど、窓から入るわずかな明るさで表情が読み取れた。いつものにこにこ笑顔はない。とりすましつつも憮然とした表情。教室では見ない顔……どことなく藤生氏に似ている気がした。

私もマットの上で再び体育すわり。

「誤解って男子は思ってくれてるでしょ。女子がノリでやってるだけで、そのうちあきてやめるよ」

「ガキ相手に無抵抗主義はつけあがるだけや」

「無抵抗やないよ。一度、柔道わざ返しちゃってる」

一瞬の間をおいて、久瀬くんはおなか抱えて笑いだした。

その言がまたひどい。「天宮さん最高」の賛辞はいいとして、言うにこと欠いて「一人か二人は病院送りにすりゃよかった」「そこは柔道やなくて正拳突きをみまうべき」「僕も寝技受けたい」。

彼に告白せんとする乙女諸姉は一度認識を改めるべきだ。

さておき、ネタ発言が出るくらいなら怒りもおさまったことだろう。

待つしかない今、あの件を話してみた。そう、時代行列と『足』に注意の件だ。

ひとしきり話を聞いた久瀬くん、すぐに解を導き出した。

「そのおばあさんは『ユタ』やと思う」

「ユタ？」

「青森の恐山の『イタコ』って知っとう？　あれに近い。お告げや占いでスピリチュアル・カウンセリングを行う霊能者」

「あれっておばあさんからのお告げなん？」

「『足のこと』はユタばあさんのお告げやないな。この世ならざる存在がきみに直接干渉し、琉球王朝の司祭である『ノロ』の行列に擬して告げたものやと思う」

ノロぬお告げ――確かそう言ってた。

なんでノロウイルス登場やろかと意味不明で口にしなかった単語

『ノロ』が、久瀬くんの解釈で登場したことに驚いた。やっぱりすごいなこの人。

「おばあさんは分かってない天宮さんに『お告げ』やって教えてくれたんちゃうかな。そして」

「そして？」

「やすやすときみが干渉された原因。それを事態の打開に利用をば」

久瀬くんが立ち上がって、目の前に立ち。

私の両手首をきゅっとつかむ。両手を封じられ……。

「あのその、顔が、非常に近いんですが」

「体育倉庫といえばそういう場所やんか」

どういう場所。ってツッコミいれてる場合か。

意外と久瀬くんは握力がある。体育座りからでは腕の自由が利かないと、体勢が整えにくい。つまり動きは封じられたも同然だ。

「ウワサ以上に事実を進めるんはどうかとも考えてみた」

「……考えるだけにとどめませんか」

「さみしすぎる速攻レスありがとう」

彼は私の左腕を強引にひきよせて、手首に顔をよせた。

手の甲だったら紳士淑女のあいさつ。手首だとなまめかしい……。

彼は微かな低い声でつぶやく——我が盟約に応じよ。

え。

突然、まばゆい光が、久瀬くんがもたれていた跳び箱から放たれた。

光の中に見たシルエットはやがて確かな輪郭をえがく。収束してゆく光の束が人のかたちをとるようにも見えた。
わずかな残光をまとう彼、その表情は憮然としてた。

「やあ元気？　藤生君」
「最悪や。白河しばく」

まさかこんな場面で遭……じゃなくて会えるとは。
だけど感動よりも懐かしさよりも先に、雰囲気が険悪すぎるわ。

06．依頼は丸投げで

「藤生くん『僕らを、いろんな意味で』助けてくれるかね」

久瀬くんの依頼はいわゆる丸投げだった。
対する藤生氏は不機嫌そうにそっぽを向いている。
拒否してる？　怒ってる？
私が声をかけあぐねていると、藤生氏はあらぬ方向に話しかけた。

「あんたもここ出るよな」

続いて、かちっと乾いたスイッチ音。藤生氏の手の中には懐中電灯があった。ＬＥＤライトが窓から差し込む光の届かない、体育倉庫のすみっこを照らす。
制服の女子が一人、座っていた。
うつむいていて顔は見えない。
胸の名札のラインの色が判別できた。緑色は二年生だ。
私への仕打ちに巻き込まれたんだろうか。申し訳ないことをしたな。
あと、怪しげな話を聞かれて、多少恥ずかしいとこ見られて、挙句のはてに藤生氏登場シーンも目撃されてる。これってマズいよね。とはいえ、この期におよんで言いつくろってもしょうがないし、ここはひとつナチュラルに接してみるか。

「私のせいでとんだとばっちり、ほんまゴメンね」
「……ぁなたのせぃ……」

彼女はうつむいたままか細い声で答える。
聞き覚えがある声だ。

「うん。どうも私、クラスの女子にからかわれてて。でも今から出られるようにするから」
「……出られる……わけ、ない……」

えらいネガティブな子やな。

「いや開けられるハズやから、大丈夫やって。あーえっと、あなたって、二年？」
「……三年五組」
「え、三年五組て」

それはうちのクラス。
だけど私、この子知らないんだけど。
彼女は小さく横に首をふり、延々とつぶやき続ける。

「……二年三組……二年一組……三年三組……一年……」

いろんな学年、いろんなクラス。
いったいどれが正解？
久瀬くんが藤生氏の背後から小声でたずねる。

「藤生くん、彼女て何年間閉じこめられとんの？」
「十年以上」
「マジ？　僕ら生まれてへんかも？」
「かも」
「そんだけ積年の憎悪やと人畜無害ではすまんのな」
「たとえば」
「……を、引きずりこみかけた」
「なるほど」

彼らはいったん切り上げると、たがいに距離をとった。
藤生氏は一歩、倉庫の奥へ。久瀬くんは三歩ほど後退し、私のほど近くへ。
会話の内容は理解不能だ。十年以上て。十時間以上の間違いじゃ。それでもすごいけど。
いや。彼らの会話は“ヒント”だ。
十年単位で体育倉庫で泣く彼女。ありえない。ありえると考えとしたら、彼女の正体は幽……。

「……こわい……くやしい、やめて……」

ぞくっと背中が冷たくなった。
少し前に私が思ったこと。そのままだ。

――なんで、わたしだけ？

そのことばが頭をもたげる。

「さ、開けよか」

と言って藤生氏が一歩、彼女に近づく。
すると彼女はその身を後に退いた。倉庫の闇の中へと身を沈めるように。
藤生氏が（どこから取り出したんだか）一輪挿しを差し出す。

「……やめて……やめて、やめて……」
「やめない」
「……こないで」
「断る」

「こ、来ないで、来ないで――来るなぁ！！」

天宮さん！

私の名前を叫んだのは久瀬くんだ。

彼が私にとびかかった。マットの上に倒れざま、とっさに受身の姿勢をとる。

すさまじい雷鳴がとどろいた。

いやこれは重く冷たい金属の衝撃音だ。鼓膜が破れんばかりの轟音に耳をおさた。つづいて地面が揺れ、身体が振動した。

それもつかの間のこと。

一転、静かになる。

頭上からの久瀬くんの「大丈夫みたい」との言葉に、私はおずおずと顔を上げた。

倉庫の中はずいぶん明るくなっていた。

それもそのはず。体育倉庫の扉が消えてなくなっていた。

正確にいうと、扉ははずれて数メートルほど外に吹っ飛んでいた。

遠目にも扉の鉄板がボコボコに凹んでいるのがわかった。

この惨状、どう言い訳するん。

ここで藤生氏がひと言。

「開いたで」

「おぉ開いたよかったぁ。って、んなわけあるか！　藤生くんなにやらかすねん！」

「え、いろんな意味で助けようと」

久瀬くん藤生氏につめ寄り、藤生氏引き気味で言い訳の図であった。

がしかし、ちょっと待ったと久瀬くんをとどめた藤生氏、倉庫の

すみに向かってしゃがみこんだ。
相対する彼女――その姿は消えかかっていた。
やっぱり彼女は幽霊さん？
藤生氏がゆっくりと話しかける。

「ほら見てみ。自分ら力合わせたら、自力で脱出できんねんで」
「……」
「もう縛るもんはないて、分かっとうよな」
「……うん……」
「消えるなり戻るなりムカつくやつに仕返しなり、好きにしたら」

彼女は小さくこくりとうなずくと、すうっと、消えてしまった。
まるで、虹がいつの間にか消えてなくなるように。

「ひどいめにあった生徒たちの強い残留思念ってとこ？」

久瀬くんが推測をぶつけた。
藤生氏は「おう」と答えて「よっこらしょ」とじじむさく立ち上がる。

「それも藤生くん『自分ら』て二人称複数形で呼びかけたよな。複数人の集合体やったと」
「うん」
「孤独な魂は呼び合うとはいうけど」

そうつぶやいた久瀬くん、倉庫の外へ出た。犠牲者が出たらどうする気やったんかね、とイヤミを言いながら周囲を見回している。
藤生氏はそこは配慮したつもり、と反論する。
幸いなことに近くに人はいないようだ。
いや、今さら確かめてもだけど。

久瀬くんは鉄扉のレールの上に立った。数分前までは、かたく閉ざされた扉が存在していたところだ。

「にしても藤生くん、僕ら以外ともまともに話せるようになったんやな」

「元からしゃべれる」

「しばらくお会いせぬ間にご立派に。じいやはうれしゅうございますぞ」

「黙れエセじじい」

「ではエセじじいは職員室に出頭し、後始末してまいります。天宮さん、僕に代わって藤生くんに礼言っといて」

「え、はい」

思わず返事をしてしまった。

で、と久瀬くんは藤生氏にも有無を言わせぬ口調で告げる。

「藤生くんは天宮さんからサータアンダギーの礼を謹んで受けるように。いいね？」

「え、さーた、なに？」

明らかにこの流れと仕切り、久瀬くんの仕込み罠に違いなかった。

私は自宅の仕入れの状況を危惧しはじめた。材料あったかな。

07．復讐するは誰にあり

材料はバッチリあった。
ボールに卵を割り入れてとき、砂糖を入れてよく混ぜ、サラダ油を入れる。薄力粉とベーキングパウダーを入れて、さっくりと混ぜる。
混ぜて混ぜて揚げる。
できあがり！

マンション・グリーンヒル東城山の屋上。
藤生氏がドアノブをひねるとあたりまえに開いた。シリンダーキーの常時施錠はいったい……。
キャンプ用のビニールシートの上に、ジップロックを次々あける。ごはんにおかずはタコ酢味噌あえ、葉ごぼうと厚揚げの煮物。メインは豚肉生姜焼き。バレないように持ってくるのにちょっと苦労した。

「残り物ですいません」
「めっちゃごちそう、いただきます」

と、手をあわせる藤生氏。礼儀正しい。
屋上は風が通るぶん、かなり涼しい。
苅野の西、羽束山の山ぎわに日が沈み、ひときわ明るい星が見えた。今夜は快晴。いい夜空が期待できそうだ。

「んまい」
「お茶どうぞ」

藤生氏はマグに息を吹きかけた。

ぬるめのお茶からふんわり漂う香気を楽しんで、そしてゆっくり、口をつける。

「茶も、んまい」

「今日のお茶は」

藤生氏は私の説明を制した。

「プーアール茶？　年季入っとんの」

「なんと大正解」

「はまるとうまいよな。クセあって発酵すっと、なんてのかな、微かな蜜っぽい香り」

茶ソムリエかあんたは。

いやはや、驚くべき進化だ。一年前は麦茶と紅茶しか知らなかったというのに。

そんな感じで始まった宴は、久瀬くんの仕込みによるものだ。後日またあらためて感謝の念を伝えねばなるまい。

「今日は助けてくれてありがとう」

「勝手に倉庫の扉がダイブしただけやし」

そんな不条理な鋼鉄が存在してたまるか。

で、その衝撃的な鉄の扉だけど、いろいろと分からない。さっさと撤退を最優先したから、聞きたいのにあとまわしだったのだ。

「その扉が飛んだのって」

「ん」

「片すみにいた子がやったん？」

「おう」

藤生氏がうなずいていわく。

「強い呪やったし、いじったら扉くらいふっとばせるんちゃうかなぁて」

「『集合体』っていうてたけど」

「過去に閉じ込められたことある人ら、結構おったんやろな」

一人に見えて実は何人もが集まってたのか。

おそらく私と同じように……嫌なめにあった人たちが。

いくつも違う何年なん組を答えてたのは『彼女たち』全員がおのおの、答えたんだろう。

「ふっとんだあと『彼女たち』って消えたやん。あれ、どうなん」

「どうって？」

「藤生氏におはらいでもされたんかなと思ったけど」

そう言いつつ違うような気がした。

藤生氏が『彼女たち』に好きにしたら、と言っていたから。消えるなり戻るなり仕返しなり――おはらいするつもりだったら『仕返し』って選択肢は出てこないと思う。

案の定、藤生氏は首をふった。

「そんなめんどくさいことせえへん」

「めんどくさいの？」

「相手、たくさんやし、いちいち説得せなならん」

そうなんですか？

「おれが勝手にみんな帰れ～て決めても、なにその上から目線て感

じで不満やろし、ムカつくやつに仕返ししたいんとか帰るん嫌なんもおるやろから、また倉庫に居残るかもしれん。そんなんいちいち考えるん、めんどくさいやん」

ほんと、めんどくさいの嫌いだね。藤生氏は。

……マジメに話を整理しなおすと。つまり『彼女ら』の意志にまかせた、ということかな。

扉が開いたら満足して消える人もいるだろうし、戻るってのはよう分からんけど、仕返しはしたけりゃ扉ふっとばすパワフルな呪で反撃したい人もいるかも。と考えると、ひとつに決められると不満だろうね。

あとこれは想像だけど、『自分で決めていい』とはっきり言ってあげることに意味があったのかもしれないな。

と私が考えてるところ、藤生氏が思いだしたようにたずねてきた。

「天宮さんはどうしたいんかなあ」

「どうって」

「あの人らと同じで、倉庫から出られたけど、あとはどうしたいんかなーと思って」

どうしたい？

特には、と口にしかけて思いとどまる。

満足してる？

仕返ししたい？

「べつに、出られたからええし」

ほんとうに？

「仕返しとかって気もないし」

「ならええけど」

藤生氏はサータアンダギーをつまむ。
食後のおやつはサータアンダギー。これも久瀬センセイのご提案どおりだ。

「白河は笑顔で復讐誓ってた」
「復讐てなにを」
「それはおれの口からよう語らんわ」

なんだそりゃ。
とはいえ藤生氏、渋い顔。そんな表情をさせた久瀬くんの復讐とやらに恐怖した。

「それはええとして」
「ええの？」
「天宮さん的には今で満足か」
「というより、またやり返されるかもしれんし、まぁ七十五日も過ぎれば」
「なにその七十五て」
「ことわざ」

藤生氏は淡々とお茶をすると、つぶやく。

「なんか我慢してそ」

そうでもないけど。
と言いかけて、口をつぐんだ。
かのんを安心させて。久瀬くんには、女子だけやからすぐあきるよ、と笑って軽口をたたいた。

気にしてない。
……うそつけ。
倉庫で思ったやん。
――なんでわたしばっかり？
って。
あの倉庫の片隅で泣いてた『彼女たち』に同調してた。閉じ込められた恐怖、自分ばっかりって不平。その気持ちに私も囚われ……。
囚われた？
いや。そんな受け身じゃなかったぞ。
あのときあの場所で、私自身が思ったはずだ。
気持ちは分かる。私も嫌な目にあってる。なにもしてないのに。
どうしてこんなめにあうんだろう……。

「……正直な話、不平不満はあったかな」

藤生氏は黙ってうなずいた。
同感と思ってくれたか。はたまた単なるあいづちか。どちらかは分からない。
ただ、正直な話――と切り出したからには私は話を続けねばならないだろう。
実は考えや話したいこと、その整理が私の中でまったくついてない。そんなので話を続けると、単なるグチや悪口っぽくなりそうだ。けど、とりあえず思いつくことをことばにしてみる。

「なんていうのかな。報復とか仕返しとかのしかた、思いつかへんねん」
「やりかた分かればやってみたい？」

私はうなだれた。
否定せず無言。そうだ、と答えるようなものかもしれない。久瀬くんが私に言った暴言――病院送りにしてやりゃいいとか、そんなの――ひどいもんだけど、私もそれを否定はしなかった。
同感だと思ったんだろうな。今考えると自分にへこむ。

「ええんちゃうの」

さらっと藤生氏が言った。
私が顔を上げると、彼はさらにサータアンダギーをつまんでいた。んまい、ともぐもぐ食べてる。藤生氏の『んまい』はお世辞に聞こえないから真に受けてしまう。まぁお世辞でもうれしいけどね。
藤生氏も食欲旺盛な甘党らしい。
ってのは置いといて。

「藤生氏やったらやりかえす？」
「逃げる」

即答だ。
魔物の上主さまとやらがそれでいいのかね。

「めんどくさいから？」
「おう」

しかもどこまでも『めんどくさい』かどうかが絶対の基準かい。
ゆるぎないところは立派だ。
ということにしておこう。

08．星は呼べばいい

藤生氏の手には三つ目のサータアンダギーがあった。
……胃袋、底なし沼。私は現在進行形で圧倒されている。
彼は仏頂面だが、いつものことで機嫌が悪いわけではない。難しそうな顔つきをするくせ、

「ま、天宮さんはやさしいわ」

などとほめ殺してきた。
うろたえながら、やさしくないよと否定すると、

「勇猛果敢」
「女子へのほめことばちゃうやん」
「頑固一徹」
「すでにほめてない」

藤生氏はかすかに笑って、ひきつづき菓子をもごもご食べていた。
カオスな食欲だ。
それでやせ気味だから、いったいどこで消費されるんだろう。うらやましい。
というツッコミとまったく関係なく、ふと藤生氏のピントのずれたほめ殺しの意味に思い当たった。
別にほめてもけなしてもないのだろう、と。
こうかな、とカマをかけてみる。

「勇猛ぶっとらんと頼れ頑固者、といいたいわけですかな」
「そんな感じ」
「めんどくさいのに？」

「せなならんことはめんどうやない」
「うーん」

悩ましい。
藤生氏がめんどくさいの嫌いなように、私も人に頼るとか後味悪いのが苦手。
そういう性格だ、しかたがない。

「しかえしはいややなぁ」
「なんで」
「まわりにとばっちりがいくのも、藤生氏の魔法に頼るのもなんかすっきりしな」
「ごちそうさまでした」

会話の流れと無関係に藤生氏は手を合わせ、小さく礼。おもむろにジップロックを重ねて片付けはじめた。

「あ、片付けはええから」
「……流れ星」
「えっ」

唐突に藤生氏が暗い空を指さした。
私も空を見上げる。
北の空にひときわ明るく北極星がみえる。ほかにも名も知らぬたくさんの星が、いつもよりもくっきりと見えた。さすがに沖縄ほどではないけれど……。

「あっ！」
「また流れ星」

見えた。
黒い空に細く白いもの。
それも一つだけじゃない。
ふたつ……みっつ！

「沖縄でぜんぜん見られんかったのに、苅野で」
「もうすぐ流れるで」
「えっなぜ予告とか」
「油断してんと願い事スタンバイどうぞ」

スタンバイて。
とツッコミ入れつつも、南に目をこらすと。
数十秒後。銀色のラインがすうっと描かれ、すぐに消えた。
しかもひとつだけに終わらない。感嘆している間もなくふたつ、みっつと、現れては消えていく。
うそぉ……。
幻でなくほんとに見えてる。
そうだ、『願い事』しなきゃ。消えるまでに三回唱えきれば願いはかなう、やったよね。
願いはただひとつ。
唱えてみた。
が、とても消えるまでに唱えきれない。内容を短くして次の流れ星で再チャレンジをくりかえす。
たくさんの流れ星たちで『願い事』を伝えあうとか、融通きかせてくれたらいいのに——なんて都合のいいことを思いつつ、こりもせず願い事を省略改造しては早口で唱えなおし続けた。
どのくらい時間がたったろう。
信じられないほど無数の流星群もしだいにまばらになり、やがて降りやんだのか、待てども次の願い先を見つからなくなってきた。
そんなとき。

おつかれさん、と言って藤生氏がお茶を入れてくれた。
確かにつかれた。姿勢がおかしかったのか首が痛いし、唱えすぎてのどがかわいた。
どんだけ集中してたんだ。必死やな私。
悟り開けるレベル？
あ、願い事ある時点で悟ってないか。
にしても藤生氏のスタンバイやらおつかれさんって、

「流星群のスタート・エンド、そんなのあるのか知らんけど、分かるん」
「まぁ多少は」
「なんで」
「自分で呼んだし」

は？

「呼んだし、て」

藤生氏は漆黒の闇に染まる空をもう一度見上げて、言った。

「星は待つんやなく、呼べばいい、かなと」

……はぁ？！
カオスな食欲をも越えるビッグバンなみの驚きだ。
というより意味が分からない。
どうリアクションしたらいいんだろう。

「ま、願い事かなえばなんでもいいんじゃね？」
「いやしかし」

とうろたえる私をよそに、藤生氏はおもむろに立ちあがると、

「うまかった。天宮さんの願いかなうとええな。ほな、また」

と告げて軽く手をふるや、いきなり姿を消した。

あわてて周囲を見まわすも私以外だれもいない。藤生氏、とつぶやく私の声はあたたかな風にかき消された。

夜空を仰ぐと点在する星たちはただ静かに瞬いていて。

ジップロックやお皿は重ねられていて、全部洗ったあとみたいにきれいだった。

＊　＊　＊

一夜明けて、私には通り名が与えられていた。

『鉄の扉を破壊した女』――そのまんまやないかい。

へこんだ。当然だ。ウワサ七十五日どころか、永遠に伝説として語り継がれかねない。文字どおり破壊力満点の通り名だ。

実際、鉄の扉なんか倒せないし。心霊現象による事故だから！

それにいっしょにいた久瀬くんでなく、私が破壊したことになってるのも理不尽だ。

ただ、怪我の功名というべきだろう。嫌がらせがなくなった。鉄の扉を破壊する凶暴女がキレたら危険だし、嫌がらせも下手すりゃ命がけ。となれば、まず手はだす向こう見ずな女子はいまい。

お弁当タイムをかのんと楽しんでると、鹿嶋くんが紙袋を持参して登場した。

「これ例のブツな」

なんのことはないマンガ単行本一式とアニメのＤＶＤ。フランス革命を題材にした超名作で、貸してもらえる約束になっていた。
かのんがＤＶＤのパッケージを観察してひとこと。

「鹿嶋って守備範囲広いなあ」
「これ姉貴のやから」
「またまた。あらすじ語れるでしょ間違いなく」
「はいはいそのとおり」

少し投げやりな受け答えで鹿嶋くんらしくない。
どしたん、とたずねてみると。

「まあ……なんでもええわ。身分制と革命の悲劇から現代日本の平和の尊さを実感してくれ」
「はあ」

意味がわからん。
謎の忠告を残して彼はいずこかへと去っていった。となりの教室に戻るだけだが。ただ、去りぎわの彼の表情は弱りはて、背中は疲労コンパイ、と雄弁に語っていた。

「あーやっぱ、まいっとうねぇ」
「鹿嶋くんになんかあったん」
「久瀬が暴れたんで途方にくれてんのとちゃう」

暴れた？
前の休み時間はいつもどおりほのぼのと配布物配ってたけど。

「暴れたって」

「知らんの？」
「うん」

暴れたってのはかのんの比喩だ。
事件は今朝。浅賀さんグループと久瀬くんが対決したそうだ。
あ、対決だの暴れただの言ってるけど、実際はとっても穏やかなもの。彼らしい温厚そうな口調で、現状の倫理的不適切さ不毛さと、受験と内申点という現実的な観点からの問題を、実に冷静かつ論理的に語ったらしい。三年だから内申点持ち出されるとかなり痛いよね……ずばり当を得た対処だ。
ただ、それよりもキツかったのが、とどめのせりふ。

そもそも僕が好きなの鹿島なんやから、誤解ばらまくのやめてな。
女子に告られても嬉しくないねん。

鹿島くんに同情した。
そりゃまいるわ。私ならマンガ渡しに来てる場合じゃない。
鹿島くんのあずかり知らぬ間に、周知の事実となっていて。さらには男子連中が『ああやっぱり？』って納得しているのがなお意味不明であり、認めたくない状況であるといえるだろう。

「ええんちゃうの、はるも助かったし」
「いいのかなあ」

不幸な鹿島くんをはげますことばが見つからない。

「そんなことより昨日の夜、流れ星すごかったん知っとお？」
「うん、私も見た」
「よかったー、電話しても出えへんかったし」

かのんにそんなこと扱いされた鹿島くんにあわれみを覚えつつ。

「ごめん昨日、かばんの中に携帯入れっぱなしで星見てて」
「ええって。はるに教えよと思って電話しただけやから」
「ありがと」
「でね、あれって、謎のウチュウジン襲来やったんやって」
「は？」

かのんまで意味不明の供述をはじめたぞ。
私の周りの世界の常識が狂いはじめているんじゃないか――そう思っているうち、五時限の予鈴が鳴った。
さて五時限の授業は、理科の平林先生だ。
前回の授業は『地球の自転』とか『南中高度』がどうのって内容だった。今日は『太陽系の星』なので、

「昨夜、大規模な流星群が見えたのを知ってるか～」

と、タイムリーな雑談から授業がはじまった。
平林先生には珍しいことだが、なにより驚いたことに、この雑談でかのんの供述の謎が明らかになるとは思いもよらなかった。

「宇宙空間には何ミクロンというちりが無数に漂っている。こういったちりは星が爆発したり、彗星の核の部分から撒き散らして、生まれるんやけど、こうしてできたちりはまた集まって星になったりしている。
こうしたちり、宇宙塵（うちゅうじん）が地球に近づくと、引力の法則で地球に吸い寄せられて、大気圏に突入する前に高温で燃える。それが夜やと輝くから『流星』や『火球』として観察されるんや」

かのんのいったとおり、流星はウチュウジンなのだ。

「ただ、昨日のは天文学会でも『ミステリアスな流星群』だといわれている。
なぜかというと、あれほど大規模やとふつうは大きな彗星や隕石の接近が先に発見されるはずなんや。毎日欠かさず世界中の天文機関や研究者たちが天体観察データを積み重ねていくことで、みんなは星空のショーがいつか事前に分かるようになってる、はずやったんや。
なのに今回は誰も事前に分からなかった――」

宇宙にはまだまだ謎がある。
平林先生はそんな一般論で雑談をしめくくると、教科書と資料集のページを告げて、黒板に『太陽系の天体』と板書した。
資料集には明けの明星、宵の明星の写真がのっていて、金星の観察が授業内容らしい。
ただ、私は授業そっちのけで考えていた。

ミステリアスな流星群。
謎のウチュウジン。

藤生氏のしわざだ。
信じられないことだけど、隕石のかけらやら彗星のきれっぱしやらのウチュウジンを呼んだんだ。藤生氏は。
それと藤生氏は去りぎわ、「ほな、また」と言った。ということはまた会えるってことだ。
星は待つんやなく、呼べばいい。
“彼”は漆黒の闇に染まる空を見上げてそう言った、はず。
だったら呼ぼう。
その、藤生氏の言葉を、私は心の中でくりかえした。

――でも。どうやって呼べばいいんだろう。希望を現実にするって、難しい。

08. 星は呼べばいい（後書き）

『Ｕｐｏｎ　Ｔｈｅ　Ｓｔａｒ』終わりです。
次回は時とんで中学卒業のお話です。

01．春の光さす部屋へ

「天宮さん、このあと用事ある？」
「ないけど」
「せやったら付き合うて」

私は軽くうなずいた。
久瀬くんは卒業証書の筒をリュックにしまうと、ブレザーの前を合わせた。
そのブレザーにボタンはひとつだけ。
寒そうだけど、同情すべきかどうか。

「つらいね、もてるニイチャンは」
「違うて」
「そうかね？」

正門を出て、歩を進めるたびに二年を過ごした学校は遠景にとけ込み消えていく。あの校舎は大事な思い出のカタチそのものだ。

「僕思うにさ」

隣の彼が語り始めた。私は再び、視線を校舎から久瀬くんに戻す。

「ボタンくれってのは、福袋買いに殺到する客の心理みたいなもんやろ」

出たよ。
久瀬くん、かなり分析好きなんだよね。これが始まったら、おとなしく何も考えずに耳を傾けて泰然自若とかまえているしかないわ

けで。

「思い浮かんだあの人のボタンを是非手に入れようと動く、アレ。集団心理のなせる技だね。卒業式みたいな感傷高めるイベントの熱にあてられて、みんな気分高揚してどっかイッてるから」

勢いっちゅうもんはあるわね。否定はしない。

けど冷たくない？　ボタンください、と頼むまでには、勢い以前に想いというものがあるやろに。福袋求めてエスカレータをかけ上がるおばちゃんといっしょにするってどうよ？

「何人かは告白でもしたんちゃうの」

「ふたりほど、かなあ」

それでどうした、のどから出かけたが寸前で思いとどまった。聞くだけ無駄だ。

「ほんで、どこ行くよ」

「藤生みほ三十四才のアパート」

「藤生みほって」

藤生氏の関係者？

「一大プロジェクトを天宮さんだけに明かそう」

久瀬くんは声を落とし、神妙な顔を私に向けた。

私もつられて真剣になる。声をひそめて問いかけた。

「プロジェクトとは？」

「卒業アルバムをお届けするのだ」

それが一大プロジェクトかいっ！
いっぺん大外刈りでもくらわさなければ、この秀才少年の大言壮語癖は直るまい。
いやしかし、と私は考える。
「藤生みほさんとは、もしや藤生皆少年のおかあさん」
久瀬くんは目を細めて笑った。
「ええ女ですえ？　天宮さん。是非見ときなはれ。ええ勉強になりまっせ」
……アルバム渡したら絶対に大外刈り。
私が苅野にやってきた二年前。
藤生氏は確かに教室の片隅にいた。クラスのみんなからひとり孤立していたけれど。
無関心なふりをしながら、魔法陣をつくって私を救ってくれた。
日下部あおいちゃんの魂を救った。私に災いが降りかからないよう、魔の世界へ去っていった。はじめに目的としていた、父親に会うためでなく……。
魔の世界で『さようなら』の言葉を交わして以来、藤生氏は消えてしまった。ただ一度、再会したことはあるけれど……。
彼が教室に戻ることはなかった。席もなくなり、名簿からその名も消えた。
私と久瀬くん以外、だれも彼がいたことを覚えてはいなかった。
はじめから存在しない。そう考えなければならなかった。
「アルバム届けても藤生氏はいないのに」

藤生氏がいた証はどこにも見いだせない。卒業アルバムも藤生氏の姿を、面影を写し出していないのだ。確かな思い出なのに。私でさえ胸が痛んだ。藤生氏のお母さんが見たら、なおさら悲しむのではないだろうか。

「そうかも」

久瀬くんは言外の意味を察して相づちを打った。

でも、そういうときほど、彼は私が満足する言葉を返してはくれないのだ。

「けどさ、僕らは頼まれたから届けるだけ。こっちでいろいろ考えるんのもよけいなお世話や」

彼はそう言うと、冷たい目を前方へと向けた。

春の青い空は、霞がかかっている。

私は藤生氏が去って一年たったいま初めて、藤生氏の家を知った。苅野市の旧市街、細い路地を歩く。

苅野に二年住みながら通ったことのない道だった。古くからの商店街らしい。街頭を彩るプラスティックの花飾りが風に揺れる音がする。たまに毛糸の帽子をかぶったおばあさんが通り過ぎた。

シャッターの閉じた店の並びに埋もれて、二階建てのアパートが一棟。

裏には焼鳥屋さんがある。木造らしいアパートは、火の粉が飛んできたらすぐに燃えてしまいそうだった。

私たちは錆びた階段をあがっていった。湿り気を帯びたような金属音が重なる。

二階の奥には、洗濯機がぽつりと置かれていた。

はがれかけた合板のドアの横、ビニールに包まれた紙には油性マジックで『藤生』の文字。走り書きのようだが整った字だ。
ドアの前に立ってみたけど、緊張してノックをためらってしまう。救いを求めるように久瀬くんの顔をのぞいてみる。彼はポケットから鍵を出し、ノブに差し込んだ。
ちょっと待て。

「なんで鍵を持ってるん？」
「愛人やったら当然っしょ」

そこで笑顔を見せてくれるな。
どこからどこまでが本気なのか分からないから、怖い。
金属がこすれ合う不快な音がした。
ドアが開くにつれ、差し込む光に奥の様子がわかってくる。玄関口に段ボールが三箱。閉じたカーテンの手前に布団のないこたつテーブル。
生活のにおいが感じられない、殺風景な空間だった。
戸を閉めて玄関に立っていると、体の底から寒気がして身震いが止められない。

「おじゃまして、いいですか」

返事はどこからも聞こえなかった。
久瀬くんは無造作に靴を脱ぎ捨てた。私はためらいがちに、

「おじゃまします」

と言いつつ、音を立てないように上がった。
こたつテーブルにはノートパソコンが眠っていた。部屋のすみの半間のクロゼットは開け放しで、スーツが何着か掛かっていた。淡

いピンク、ビジネスライクな黒、幼稚園のスモッグみたいな水色。
それに今から活躍しそうなトレンチ風味のスプリングコート。鏡の前に転がる、木の箱は上ぶたがはね上がり、カラフルなパレットと十本以上のルージュがのぞいている。少し、香水っぽい香りが漂う。雑然と、しかし機能的でこだわりが見えない部屋。女性の暮らす家って感じがしなかった。

久瀬くんがカーテンを開けた。春の光がおぼろげにさしこむ。

私の体のふるえは、ようやくおさまった。

アルバムをテーブルに置くと、久瀬くんがあぐらを組んだ。つられて私も座った。正座で、背を丸めて身をすくめた。

うしろ暗そうにしなくたってええやん、とそのうち思いなおして背筋を伸ばした。

目の前にはアルバムがある。私はアルバムをめくろうとして、手を出した。……手を出して、そして手を止めた。

顔を上げて久瀬くんを見た。目が合うと、彼は口を開いた

「初恋やったんよ」

はつこい。私は、彼の言葉を復唱した。

「そ」

「愛人やないの」

「それはあ。夢、希望、願望」

「でも、初恋は成就したんじゃないですか。鍵持ってるということは」

「これ？」

久瀬くんは鍵を持つ手を挙げた。

「藤生君は僕にいろんなものを押しつけてん。鍵もそうやしアルバ

ムを届けるのもそう」
「……もしかして、以前言ってた久瀬くんの好きな人って」
「鹿嶋やと何度いえば」

もういいです。
私は再び、卒業アルバムに視線を落とした。
藤生氏の頼みだった。なぜ？
藤生氏の姿がどこにもないアルバムを、どうして届けろと。
私は止めていた手を再び動かし、アルバムを開く。

「あ」

久瀬くんの動揺した声が聞こえると、周囲が真っ白になった。
しまった。藤生氏の頼みなんだから、なにか起こっても不思議ではないんだ……。

02．クラス写真を撮ろう

「……あ……みや……」

遠い声。

脳裏に浮かぶ、白い光。

フラッシュバックする、教室の白い壁。独特の机のにおい。

「起きろ」

私は、ゆっくりと頭をもたげる。

「よう寝てたな」

びくっ。

その声は、担任・下崎。その姿は定番の青ジャージではなく、見慣れぬスーツスタイルだ。しかも彼いわく『一張羅のダンヒルや』とのこと。『豚に真珠』という格言が頭をよぎる。

さて、冷静に周囲を見回す。クラス全員静かに席に着いている。声は当然、教室の隅まで届いているだろう。居眠りをクラス中に公表せんでもええやん、とすねた気分になる。

と、久瀬くんが教室に入ってきた。

「いま、三組だそうです」

「そうか。全員、廊下に並べよお」

下崎の呼びかけに、みなぞろぞろと教室を出た。

ナンだ？

みんな素直に、とくに女子なんて我先に教室を出ていっている。

「何て？」

久瀬くんは教卓にはりついてクラスの連中に道を譲っている。そんな生徒副会長・久瀬のブレザーの袖を、私はむんずとつかんだ。彼は不審の目を向けながら、

「クラス写真撮るんやん。ほら、卒業アルバム用の集合写真」

そうでしたでしょうか。本日の記憶が全くないんですけど。教室からほぼ空になってなお、私は惚けて突っ立っていた。状況が把握できていない。

かのんが、私を派手にゆすって言う。

「はるちゃん、起きて。はよ行こ」

「寝とったんか」

久瀬くんがため息をついた。

「さてもさても。もう一名寝てるヤツおるし。起きろって」

むくり、と教室の隅で男子が上体をあげた。すぐ、ぎぎいと椅子が音をたてる。彼はしばし頭をかくと、不機嫌そうな面持ちでふらふらと近づいてくる。

彼・藤生氏は私を指さした。

「寝てへん、いっしょにすな」

「失敬なっ」

即座に私も逆襲する。

すると、藤生氏が近づいてきた。
身構える間もなく、すうっと、私の頭に手を添える。

「……え」
「自分、ええカンジ」

あわわ、と声にならない私の声。

「寝グセ」
「！？」

私はあわてて両手で頭を抱え込む。
脳みそが沸き立ってくるのがわかる。

「真っ赤やぞ」
「のあう」

人語ならざる声を発しつつ、私は脱兎の如く逃げ出した。
どこへ。
トイレだ。
しかし女子トイレに駆け込んだ瞬間、私は「うぐ」と失意の声をあげた。
みんな考えることは同じだ。できるだけ整った自分を、写真に収めてもらいたい。鏡の前は人だかり。十人ちかくが鏡面に映る自分の姿の面積を、押し合いへし合い、奪い合い。
今頃気づいた。女子のみなさんがさっさと教室から出ていったのは、このためだったのだ。
私も必死だ。
一瞬、映った自分の頭頂部に寝グセを発見。それは重力の法則に反し、天へ向かい威風堂々はねている。顔はぽーっと紅潮して、湯

気が出そうだ。
こんなのが卒業アルバムにおさまってしまったら、恥ずかしいことこの上ないじゃないか。人生の汚点だ。生涯の恥だ。
しかし遠い。鏡まではあまりに遠い。
占拠された鏡の前の強固な陣営を撃破するパワフルな戦闘力を、私は持ち合わせちゃいない。

「はるちゃん」

はっとして、私は頭部から手をはずした。
女子トイレの入り口から顔だけのぞかせているのは、せりちゃんだ。

「か・が・み」

思わず、せりちゃんに飛びついた。せりちゃんの鏡に飛びついた、というほうが正しいか。

「ええの？」
「ええよ。うちのクラス、もう撮り終わったから」

せりちゃんは三組だ。
そのせりちゃんの傍らにいるかのんが「ワックスやよん」。

「地獄に仏。渡りに船。持つべきものはトモダチだ」
「いやあ、持つべきものはカレシやんねえ」
「カレシの一言で、帰ってきちゃうもんねえ」
「愛やよねえ」
「はるちゃんだけに優しいよねえ」
「どこがよ。完全におちょくっとるだけやん」

女子トイレから出てくると、藤生氏と久瀬くんと目が合った。ふたりが同時に皮肉と嘲笑の色濃い笑みをほんの少しの間、浮かべる様子を見て、私は確信する。

あの人たちの共通点、皮肉屋をあらためて見出したり。

「こらあ。早う段にあがれ。次のクラスがあるんやぞ」

下崎が座る場所を確保しつつ、声を上げた。

ぞろぞろと、男女別名前の順に中から詰めていく。私は『あ』なんで、下崎の横だったりする。

写真撮影の極意。

自分の思う以上に、あごを引く。少し上目遣い。両肩を後に引くと、二重あごにならない。背筋を伸ばせば、不自然にはならない。

ばしゅ。

フラッシュの光がまぶたの裏に残る。目、つぶってないかな。

「はーい。もう一枚撮りますー」

もう一度、今度は満を持して。

「はーい」

……。

……。

はーい、からが長いねん！

いつまで待たすねん！

といらつきはじめてすぐ、こういう格言を思い出した。

――短気は損気。

フラッシュに目を閉じてしまった。これぞ一生の不覚。

03．彼女だけのアルバム

重いまぶたを上げると、司会はかげってぼんやり薄暗くて。
少し、大人の香りがする。甘くて少しスパイシーな香水か、百貨店の化粧品売場のにおいが、鼻をくすぐる。

「起きた？」

私は、ゆっくりと頭をもたげる。

「おはよう」

びくっ。
その声は、だれっすか。その人は当然青ジャージではなく、見慣れぬ淡いベージュのコート。どことなく清楚で『月下美人』という言葉がぽうっと、浮かび上がる。
さて、冷静に周囲を見回す。ここは藤生氏の家だ。
と、久瀬くんが頭に手を当てている。朦朧とした様子で無言のまま周囲を見渡している。

「しらかわやなくって、久瀬君。一年ぶりやんなあ」

見知らぬ女性が少しだるそうに言った。少しハスキーボイスだ。

「……でしたかねえ」

この人、藤生氏のおかあさんだろうか。
ミディアムロングの黒髪をすっきりとシルバーのバレッタで束ね、ベージュのジャケット黒のタイトを着こなすキャリア風でキレイな

人。見た目はすごく若い。でもしっかりお仕事してそうで、三十代前半くらいに見える。

「はじめまして！　私、天宮はること申します。藤生くんと同じクラスで」

「知っとおよ。一応」

そうでしたか。

「なんで断りなくあんたたちがここにいるのかも、だいたい想像がつくし」

「すんません」

久瀬くんがうなだれた。

「アルバム見せに行けって話やったんで」

ふふ、と藤生氏のおかあさんは鼻をならして笑う。

彼女は首をまわしてぼきぼき、と肩をならすと、視線をテーブルに落とした。アルバムがそこにあった。

彼女がページをめくるたび、紙が剥がれるような微かな音がする。久瀬くんは不安な面持ちで、それでも愛想笑いを表に出すよう務めながら、様子を眺めている。

こたつテーブルにはほかに二つ、ティーカップが置いてあった。いつの間にか淹れてくれたのかな。久瀬くんがそれを手に取り、私も続いた。アールグレイの香りが意識を取り戻させてくれる。

「勝手に見せてもらっとおよ」

彼女は卒業アルバムを眺めながら抑揚なく言った。

「あ、はい」
「これが久瀬くんで、これ天宮さんで……これが皆やね」
「えっ」
「ええっ」

久瀬くんと私、声を上げたのはほぼ同時だった。
横からアルバムを見せてもらう。
クラス集合写真。
三年五組。
真ん中にダンヒル（仮）のスーツの、下崎。隣に座る私。女子の一番上段外端に、かのん。一段目の一番外側に久瀬くん。最上段の真ん中に……。

「藤生君」
「ふじ、し」

声にならない私の声。

「いい顔しとおね。ふうん」

彼女の目が細くなる。
愛おしそうに眺める、その横顔。
きれいな人だ。私は目頭が熱くなった。
藤生氏は私たちの大事なトモダチだけど、このひとにとっては、自分の子どもだ。しかも、たったひとりの子どもだ。
私は藤生氏にお別れを言ったけど、この人はどうだったんだろう。
彼女は最後のページにたどり着くと、もう一度三年五組のクラス写真のページを開いた。
藤生氏の姿が、唯一残るページだ。

しばらく眺めているうち、彼女はまぶたを伏せた。
そして別れを惜しむように、ゆっくり、アルバムを閉じた。

「これ、ほんまは久瀬くんのやろ」
「そうです」
「ありがと。返すわね」

藤生氏・母は緩慢な動きで、久瀬くんに差し出す。
久瀬くんが受け取ろうとする。と、彼女はアルバムを持つ手を引いて。
フェイントかまされた形で久瀬くんの手は空を切った。

「久瀬くん」
「あ、えーと」
「皆から預かった鍵、返して」

＊　＊　＊

東谷公園はところどころ、桜のつぼみが芽ぶいていた。
記録的な暖かさで、関東では観測史上最も早く桜が咲いたと報道されている。
関西の開花は宣言されていない。おとうさんの情報だと三宮じゃちらほらと、つぼみはほころんでいるらしい。山間の盆地にある苅野は三宮に比べて数度ほど気温が下回る。少しだけ春の訪れは遅い。
ベンチに腰掛ける人は少ない。
まだ花見には早いからか、お昼どきだからか。

そんな中、久瀬くんと私は満開の早咲きの樹を見つけて、ベンチを陣取り一足早い花見デートと洒落込んでみた。コンビニのプチオムライスに中国緑茶はひとり一本。チープな花見弁当だわね。

「では天宮さん、改めましてご卒業おめでとうございます」
「そちらこそ、おめでとうございます」

ペットボトルで乾杯。
ぽこん、と気の抜けるような音がした。

「しかし、踊らされたな」
「えっと？」

足を組み直しながら久瀬くんは言った。

「いいダシにされたんやん、俺ら。たまらんわ」
「そんな怒らんでも」
「怒ってへんよ。ただ さ」
「ただ？」
「愛人、なり損ねた」
「そもそも絶望的しょ」
「やっぱりそうすか？　僕も内心だめかもと思ってた」

私はほっとした。オチをつけるくらいなら怒ってない。
安堵しつつ、いま一度久瀬くんのアルバムを開いてみた。
私はまた、肩を落とした。

「やっぱり、ないかあ」

藤生氏のアパートを出たあと、道々でページをくってみた。

けれど、あの写真ではなかった。
三年五組のクラス写真に、やはり藤生氏の姿は、ない。

「サービス心のカケラもないヤツや」
「やっぱり怒っとおし」

今度の彼は無言だった。
その視線の先には芽衣川。水面が太陽に反射し、きらきらと光る。
また、私は不安になる。

「天宮さん」
「あいっ」

久瀬くんは視線を、右手に握るペットボトルに落とす。

「第二ボタン、くれへん?」
「え?」

まさか久瀬くんが……。
いやいや。そんな柄ではあるまい。彼はボタンに込める告白を福袋に殺到するオバチャンに例えるような人間である。なにか考えがあるのだろう。
よく分からないけど。
うつむいて、第二ボタンをつかみ、引っ張る。
ちぎれない。
いや、決して緊張してるわけじゃなく。縫製が完璧だから、なかなかとれないのである。きっとそうに違いない。
わざとらしく、久瀬くんはため息をつく。

「貸してみ」

「任せた」

ブレザーを脱いで、渡す。

下に着ているのはブラウスとベストなんだが、意外に肌寒い。寒いから、プチオムライスを一気に食べてしまったりして。

ブレザーを返してもらうと、急いで袖を通した。

「さてと」

久瀬くんは空になったプチオムライスの容器をコンビニ袋に片づけに、ゴミ箱へ歩いていった。

いや、そうじゃないらしい。ゴミ箱には通りがかりついでで、そのまま川の方へ向かう。

私も急いで立ち上がって、ついていった。

上流へと歩く。

その先には、噴水がある。

噴水。

苅野『ＭＡＧＩＦＡＲＭ』結界第七のポイント。

「久瀬くん！　それっ……」

私がやると言う前に、第二ボタンは晴れ上がった空を横切った。

描いた放物線のその先には、川のせせらぎ。水の囁きにかき消され、ボタンは音もなく姿を消してしまう。

「……自分で『渡す』のに」

「それやったら、自分で気づきぃさ」

辛口批評だ。

でも確かに私、気づかなかった。結界を通して藤生氏に受け取っ

てもらおうだなんて。藤生氏にください、って言えないしね。兎さんの勇気だけじゃ、キモチは伝わらない。

自分がのほほんとできているのも、久瀬くんが色々気を遣ってくれたからだ。

四月からは別々の高校に通う。

なかなか気軽に話せない。メールもなんか遠慮してしまってるし。

感謝は、いまのうちに伝えておかなくては。

「ありがとう」

その一言から次なることばは自然と紡ぎ出た。

「私は私でがんばるよ。でも、これからも藤生氏のことでなんかあったら、教えてください」

「え？　はあ……うん」

久瀬くんは、鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしていた。

０４．春一番が訪れて

家へ帰ると母の第一声はこうだった。

「はるこ意外ともてるんやね」

「そやよ。意外ともてんねんで」

わが胸元の消えた第二ボタンを看破したのである。

私はムリに胸をはって威張ってみた。

本当は、くださいと言われたんじゃないけど。いや、言われたけど少々話が違うし。もらえ、と押しつけたようなものだし。

でも、まあいいでしょう。少しくらいの違いは。

「普通、女子が男子からもらうもんやろ」

せっかくいい気分になっているところ、横やりが入る。

小魚スナックをむさぼっている弟だ。

「黙れ。あんたは言われるアテあんの？」

「関係ないやろ、オトコオンナ」

「にゃあにおう？」

座布団をひっつかんで投げようとした矢先、母はエプロンを着けながらたずねた。

「はるこ。あんた、カフスもあげたん」

「え」

私は座布団を持った手首を回して、袖口を確認した。

ふたつボタンがついているはずなのだが、ひとつしかない。
そんなおぼえはないけど……。どこかでひっかけてなくしたかな。
記憶を遡ってみる。
数秒考えた。
ぴん、ときた。直近の記憶だ。

「あやつ……」
「姉ちゃん。顔、赤いで」
「うるさいわっ！」

私はあわてて自分の部屋へ駆け込んだ。
駆け込んだはいいけど。
どうしよう。
電話してみるか。「ボタン取った？」って聞いて。
冗談じゃない。
そんなん、めっちゃ恥ずかしいやん。違ってたらさらに赤面ものではないか。断じて、それはならん。
さて仕切直し。どうしよう。
途方に暮れて、卒業アルバムを開いてみる。
三年五組。最前列左端。容疑者の顔を発見。私は無性に腹が立って、アルバムをベッドに放り投げてしまった。
だが意を決し、携帯を手に取った。
握る手が冷たい。冷や汗が出る。
メモリから呼び出そうと動かす指を、途中で止める。考え直して、また押す。

「もしもし……かのん？　教科書買うん、いっしょに行こ」

かのんから約束を取りつけて、通話終了。

「これでよし……って、違うやろ！」

ひとりボケツッコミやってどうするよ、私。

手がふるえた。いや携帯電話がふるえた。

即座に電話をとった。

『久瀬です』

自供の電話か？

「はいはい、なんでしょ」

『天宮さん、今日、お付き合いありがとうございます』

「は、はい。どういたしまして」

久瀬くんのどこかよそよそしい話し方に、少しずつ落ち着いてくる。

『お礼、申し上げるのを忘れてましたので、お電話差し上げました。ボタンも僕のぶん失敬させて頂きましたので、お断わりしておこうかなと』

「そうなん？　気づかんかったけど」

気づいていたというのがなんとなく気恥ずかしく、とぼけてみる。

『イヤやったら返しにいきますが。カッコ悪いやんな』

「別に着ることないから、ええけど」

『僕はこれやったらリサイクル出されへんから、悔しいねん。天宮さんのはわかりづらいやん。第二ボタンなんかは勲章っぽいからともかくとして』

「カフスなんか見た目分からへんしね。忘れて譲りそう」

電話口で彼が笑い転げている。

「なにを笑うよ」

『返せっていわれるほうが僕的には嬉しかったんですけど。会う口実として』

顔が赤らむのが分かる。

「なにを言うかね」

『差出人藤生君と思われるお礼の直筆書簡が来てました』

「藤生氏の。見たい！」

『了解。天宮さんちに送付しときます。藤生君も直接送ればええのに、あとメールとか。面倒くさい』

「まあそう言わんと、よろしくお願いします」

『かしこまりました。ところで天宮さん、さっき、なぜカフスと速攻お気づきで？』

「……あ」

『そいじゃ』

弁解するスキも与えられず、無情に電話は切れてしまった。

私は頭をかかえて、へたりこむ。

どう受け取られたんやろ。いや、そういうやなくって——どう収めたものやら判断のつかぬ感情が、つぎつぎとこみあげる。

そう。頭の中は強風に吹かれたあとのように、荒れていた。

へんな誤解されたらどうしよう。するわきゃないか……なんかそれも腹立つし……ていうか、私ってはめられた？

明日は春一番が吹くらしい。

でも、すでに春一番は私に訪れているらしい。

０４．春一番が訪れて（後書き）

『Ａｌｂｕｍｓ』終了です。
次回から高校生になります。

01．ふとした契機

メールでカンタンに告げられた、別れの言葉。
神戸三宮、花時計前。
待ちぼうけのあたしは、ひとりぼっちのあたし。

＊　＊　＊

「すみません。買い物付き合ってくれませんか？」
かのんが顔を上げると、目の前にいるのは男。
ユナイテッドアローズのジャケットと、ビンテージ色のジーンズを着こなした、シンプルな印象の青年。
かのんはまず思った。
（新手のナンパ？）
青年は丁寧な口調で続ける。
「スカーフが欲しいんですが、なにをどう選んだらいいのかが分からなくて」
「ヘルプ・ミー！　てカンジですか」
「そうです」
次にかのんが思ったのはこうだった。
（顔は合格点かも）

彼はかのんが迷っていると思ったのだろう。小声で申し訳に付け加える。

「見ず知らずですし、突然のこととは分かっています。嫌ならどうぞ遠慮なく断ってください」

「ええよ。約束キャンセルされたとこやし」

かのんは軽く同意した。青年の表情はぱっと明るくなる。

「本当ですか！」

「ちょうど気分悪かったし。買い物してるとこ見て、気分転換でもさせてもらう」

青年が表情を曇らせる。分かりやすい人だ。

「お加減悪いんですか」

かのんはそっけなく、答える。

「カレと、別れたとこ」

「え！」

かのんは虚をつかれた。青年の思いのほかの狼狽ぶり。さらには、予想をはるかに超える恐縮ぶりを見せて、

「申し訳ないことをしました」

「はい？」

「悪いことを言わせてしまったと思いまして」

「別に、勝手にあたしがしゃべっただけやん。むしろ、ハケグチが

ほしかったんよね」

青年は無言のまま、かのんの次の言葉を待った。

「買い物付き合うけど。先にあたしのグチ聞いてくれへん？」

02．地に足のついたヒト

サガラ・タカミチ。漢字で書くと『相良隆道』。
字だけを見ていると、少々お堅い香りがする。
いや実際、キャラもちょっと固めかも。
国際会館の屋上、カフェのテラス席。
澄みきった空のもと、緑の庭を眺めてのハーブティーでもなお、
気分は晴れない。

＊　＊　＊

「どう思う？」

かのんはその相良にグチの感想を求めた。

「分かりません。俺……実をいうと、恋愛経験、あんまりなくて」
「ホントに？」
「片思いとかはあるんですよ」

あわてて相良が言い訳をする。

「でも想うだけやったから」
「今まで想いっぱなしできたん？」
「その子には、気づいたときには男がいたから」
「そんなんカンケーないやん！」
「関係ないかな」
「取られたときは仕方ないやろ」

「そうやなくて。人の幸福に介入して、横入りするわけやから。横入りは嫌がられるのが世の常というものではと」
「別に占有権があるわけやなし。好きなものがあって、もっと好きなものができる。好きなものが嫌いになる。自然な感情の動きやない？」
「そこまで割り切れたらええけど」
「そこまで割り切られてサヨナラされた人がここにおる！」
「あ」

相良ががくりとうなだれる。

「またや。ゴメン」
「ええねん。そう割り切らんと自分でも納得いかへんねん」
「……俺は声をかけたことを後悔してる。君には残酷やないかと。まっすぐ家に帰って、ふて寝でもしとくべきやったんやないかと」
「ネタか本気か分からんこと言うなあ」

かのんは少しの間、周囲を見渡した。
周囲の喧騒。
寄り添うカップル。
からみあう手。
笑い声。

（すべてがナーバスにさせる。おしゃべりだけが救いやわ）

ミント・ダージリンを口にして、かのんはつくり笑いを浮かべた。

「そんなことないよ。めっちゃ気ぃ楽になってきたし」
「そんなら俺は、これ以上、つっこまない。うっとおしいやろし」

見すかされているかも。
かのんはあせり気味にミント・ダージリンを飲みほし、顔を上げた。
「さてとっ。スカーフが買いたいんやったよね。誰の？」
「え……っと」
相良は思わず視線をさまよわせる。
明らかに答えにくそうだ。なぜだろう。余計に回答を聞き出したくなる。
かのんは無邪気な言い方で、意地悪に追求の姿勢を見せた。
「彼女はいないんやったっけ。片思い……も一発逆転する気はなし。誰に買うん？」
「あのー、言わなアカン？」
「だってどんなん買えばいいか困るやん」
「それもそうか」
相良は意を決して答えた。
「あげるのは俺のバアチャン」
「おばあちゃん？」
「バアチャンが入院してて、見舞いに行ってきてん」
「病気！　大丈夫なん？」
「まあ病状、ていうほどのこともなかったんやけど」
「ほんま？」
「うん。でもそれより問題は……うちのバアチャン、阪急王子公園の近くでひとり暮らししててな。すごく元気やったけど、今回ですっかり意気消沈してしもて。そやから退院したらどっか連れて行ってあげよう、て言うてて」

ひどく地に足の着いた理由だった。かのんはそれが新鮮に聞こえる。

「んで、お洒落させたげようっていうわけなんや」

「その通りです」

優しい人だな、とかのんは思う。家族を大事にする人に悪い人はいない。かのんの持論のひとつだ。

がぜん、かのんは乗り気になった。

「なら安いスカーフなんか買われへんよ！　おサイフの覚悟できとお？」

「カード切りゃいい。いざとなったらボーナス払い」

ええっ？　リーマン！

このときはじめてかのんは、相良が社会人だということに気がついた。世慣れたように見えないし童顔だから、少し上の大学生くらいかと思い込んでいたのだった。と同時に、やたら自分がアネさん顔してきた気がして、こっ恥ずかしくて居心地が悪い。

しかし、かのんの座右の銘のひとつは『過ぎたるは及ばざるがごとし』。

いさましく地面を蹴って立ち上がり、

「エトロがいいと思う。てなわけで、大丸に行こっ！」

と一方的に宣言し、カフェを出て行った。

そして相良はあわてて伝票をひっつかみ、レジに向かうのだった。

03．エアサッカーしよう

勢いでさっさとカフェを出たことを、ちょっと後悔した。
急げばそれだけ『おしまい』が早くなるのだから。
元町大丸へ向かうのに、気まぐれに遠回りして、東遊園地を通る。
噴水とオブジェと木陰の間を抜け、石畳の道を歩いた。

＊　＊　＊

「自分、サッカー好きなんや」
相良は前を向きながらも、目を輝かせていた。
「……前の彼と最初は、ウイングスタジアムや万博公園とか、長居にも試合見に行った」
「へえ」
「けど彼、すぐ飽きたみたい。にわかファンてやつやったわけ」
「にわかファンでも、好きやったには違いない」
「でも過去形は過去形」

自分との恋愛だって、にわか恋愛にすぎなかったのだ。
好きだとか愛してるだとか呪文を繰り返しても、解呪なしに魔法は解けてしまった。

「だから言うてサッカーがつまらないわけやない。面白さがハマんなかっただけやろ」

相良がさりげなく微笑んでいる。
すると不思議と、かのんは冷静に考えることができた。頭の中で「サッカー」を「かのん」に変換してみると。

（あたしが面白くなかったんやなくて。あたしの面白さが向こうには分かんなかっただけ、てことになんのかな）

「実はこの東遊園地、日本で初めてサッカーの試合が行われた場所だって知っとお？」

先をゆくかのんは足をとどめて振り返った。
木々の間からのぞく、市役所ビルの窓がきらきら輝いている。

「そうなん？」
「元町からこのへんて、元外国人居留地やん」
「うん」
「結構体力ありげな貿易商とかが住んでたから、スポーツでもしようって感じで、ここにグラウンドを作ってん。でも、練習ばっかりやったら面白ないからチーム作って試合した。それが今の東遊園地、ということやねん。明治時代の話や」
「来たれ『蹴鞠大会開催！』とか言うたりして」

かのんは茶化してみる。

「正解」
「ウソっ」
「ホンマ。当時の日本語新聞は『蹴鞠が行われた』と報道してたそうやで。サッカーなんて単語、当時の日本人はほとんど知らへんから」
「なかなか雅ねえ。えいやあ」

かのんは鞠を蹴り上げるふりをした。

「えーい」

相良もその鞠を蹴り返すふりをする。

「えーい」
「えーい」

しばらく空想の鞠は東遊園地の空を舞った。ぽこん、ぽこん、という音がしたかどうか……それは定かではない。
かのんが突如、鞠を踏みつける。
どうやら鞠はサッカーボールに変わったらしい。

「このシュートが決まれば勝ちっ」

緊張のＰＫ戦が始まる。かのんがキッカーで、キーパーは相良。
相良は腰を落として構えを取る。

「うー」

相良は悔しさをうなり声に代え、頭を抱えた。
かのんはしばらく突っ立っていた。ゴールしたらしい。自分に納得させる。そして、

「やったー！！」

跳びはねる。
うれしい。すごく、うれしい。なんちゃってゴールでもうれしい。

……相良が勝たせてくれたことが、すごく。
かのんは彼に走り寄り、握手を求めた。

「お互いの健闘を称えて」

相良は苦笑しながら応じ、軽く握り返した。

「すっかり変な奴らやん、あたしら」
「パントマイムの寸劇と考えたらば、変でもないんちゃうん」
「いやあ、やっぱ絶対変やって」
「そうかなあ」
「そうでもないかも？」

お互い顔を見合わせて、笑う。

「どっちでもええやん」

０４．ふたりの距離

お買い上げのエトロの袋は相良の手にある。
帰りは同じ電車だった。神戸の中心・三宮からふた駅。
そして湊川から北へ――六甲山脈を越える――神戸電鉄。
『うちのバアチャン、阪急王子公園』の彼が、同じ方向だったとは。
なにかがもう少しだけ、いっしょにいる時間を与えてくれたみたい。

＊　＊　＊

白に赤ラインの電車は、山を上り、トンネルを抜ける。
『神戸山岳鉄道』と揶揄とも愛称ともつかない呼ばれ方をされている、六甲山系の合間を縫うように走る路線だから、モーターも強力なものを積んでいる。車内の音は相当なものだ。
そんな中、黙ってつり革を握るかのんと相良。
あえて大声で話そうとは思わない。始終無言のままだったが、居心地は悪くなかった。

（なんか不思議やな）

沈黙が怖い。なんかしゃべらんとアカン。
友達同士でいても、かのんはついそう思ってしまう。そして無理やりどうでもいい、アホな話をひねり出しては、無意味に面白がる。いつも盛り上げ役をかって出て、楽しい子やと言われるけれど、ほんとうはとても疲れるのだ。

今は違う。ただ黙って並んで立っていても、かえって落ち着く。
そして安らぐ。
心地よい距離感。
これもかのんには初めてのことだ。

――次は、すずらん台。
車内にアナウンスが流れる。車窓の風景は、菊水山の緑から、棚田のように広がる見渡すかぎりの住宅へと変わっていた。
そしてまもなく、駅にたどり着く。
無常にも扉が開いた。
みんな我もわれもと、先を急いで降りてゆく。

（『なごり惜しい』って、このことなんやろな。はるちゃんが使いそうな言葉やけど）

相良は人の流れが途切れるのを待っていて、なかなか降りようとしない。
相良も「なごり惜しい」と思っているだろうか。
だったらどれだけいいだろう。同じ気持ちでいるなら、どれだけ。
そう願いながら、

（単に遠慮しぃ、なんやろけど）

と自分で希望を否定するようなことを考えてしまう。

「ここ、すずらん台よ」

言いたくないのだが、かのんはあえて言った。
相良が心あらず、とばかりに答える。

「……ですね」

降りる人並みが途切れた。電車に乗り込み北へ向かう人は、数少ない。

かのんは彼の顔をもう一度見た。

相良がエトロの袋を持ち上げて、かのんを見下ろした。

「今日はありがとう」

低い声がかのんの耳をくすぐる。

「いろいろ、ごめんね」

かのんは小さく首をふった。

もっと声を聞きたい。

にわかにそんな思いがこみあげる。そのとき、

――扉を閉めます、ご注意ください。

すべての心地よさを壊すようなアナウンスが流れ、せかされるように相良は電車を降りた。

とっさにかのんが叫んだ。

「相良さん！」

振り返る相良。

反射的に手が出る。投げられたモノを掴み取った。

「あたし、渡辺かのん！」

閉まる扉がお互いの姿を隠す。

「それぜったい、返……」

かのんの声は、最後まで届かない。

電車は動き出した。相良の目の前で、白と赤のラインが流れ去ってゆく。

彼は電車が見えなくなるまでホームに立ちつくしていた。

右手にはホワイトパールの携帯電話。それを握りしめながら……

彼は初めて、彼女の名を呼んだ。

渡辺、かのん。

０４．ふたりの距離（後書き）

『Ｄｉｓｔａｎｃｅ』おわりです。
次は藤生氏の魔王様執務レポートその２。

Ref No. 02

暗い部屋の中。
一人の女がたたずんでいた。
床には円陣。その中には六芒星が描かれている。そして、中央には供物なのだろうか、生命感のない蛙が紅くどす黒い液にまみれ、その身を沈めていた。
少女はただ立っていたのではない。
無限に続くとも思えるような呟きが彼女の口から漏れる。掠れがちなその声は、地を這うように闇に溶け、時として闇を切り裂かんばかりに高みにと昇華していった。
その姿は古代の巫女を彷彿とさせる。
闇は、彼女のために有った。

＊　＊　＊

携帯から、穏やかな音楽が奏でられる。右目の動きが止まる。

「上主様お電話……」

右目はキーボードを叩く手を止め、液晶画面から目を逸らした。
上主……いわゆる魔王さまの号令一下、執務はコンピュータシステム化され、つい最近カット・オーバーを迎え本番運用されている。これにより右目は彼の背よりも高い『未決裁』の書類の束を抱えなくて済むようになったのだが、その壮大なプロジェクトの経緯は別のお話である。

「上主様っ！」
「……う？」

藤生氏は少し遠い目になりながら答えるとすぐ、もしもし、と応答していた。

（本当に、デスクワーク嫌いなのですな）
右目は再び、慣れぬ手つきでキーボードと格闘していた。
（居眠りはいいが、わからないようにやってほしいものです）
右目は藤生氏の部下ながら親代わりのようなもの、叱るや叱らざるやのジレンマに陥っていた。

「ああ……修復を急げ。こっちは了解した」
藤生氏は忌々しそうに電話を切った。

「どうかなさりましたか」
右目は首をかしげた。

「代理で、召還されることになった」
「……え？」
「システム障害らしい。五年も前の『魔のもの人事マスターデータ』をデータベースに移行してしてもうたんやそーな」
「なんですと！　それでなぜ魔王とも称せらる上主さまが呼び出されねばならないのです！」
「どうも被召還者はサナリっぽい。だけどあいつ受刑中やし、サナリほどのクラスは今、出払っとるやろ。近場にいそうなんはやっかいな案件かかえてる方々やしなあ」

右目はそれでも机を叩いた。理に合わない、どうなっているんだと強調しながら。

「まあ『魂管理システム』に予算振ってもたんで、人事なんぞウチ内部のことやからってんで超ド短期間でつくらせたし」
「それにしたって」
右目のツッコミも意に介さず、藤生氏は語気を改め真面目ぶって述べる。
「トラブル時の責任をとるのは上級魔の仕事だ。そもそも、魔王の俺が自らシステム再構築プロジェクトの最高責任者だったわけだろう」
「それはご立派ですが」
本心は仕事をサボりたいだけとは、右目は先刻承知である。だが、責任を進んでとる態度は（はた目には）立派だし、部下の魔のものにも良い影響を与えるだろう。
右目は管理職だった。
「では、お気をつけていってらっしゃいませ」
藤生氏は右目の言葉を聞くと、蜃気楼のゆらめきのように姿を隠していった。
ただ、少しばつの悪い表情を漂わせながら、だったが。

＊　＊　＊

藤生氏が姿を現した場所は、暗い部屋だった。厚い黒いカーテンが閉じらているが、微かにカーテンと壁面の間から光が漏れる。

眼が慣れてくると、藤生氏はそこが学校の視聴覚室ぽい場所だと気づく。
対峙しているのはいまどき珍しい純白のセーラー服にひざ下三センチスカートの制服を身につけた少女。顔は結構可愛い。それに女優顔負けにスリムだ。

「ちわっす」

少女は突然現れたインチキくさい少年に不審の目を向ける。

「あなたは、どなた？」
「どなたって、あんたが呼んだっしょ。魔物」

無限なる魔法の技で、少年は悪魔〇んのコスプレに早変わりする。
ご丁寧に髪の毛がはねているのがご愛敬。
ただ、微妙な三頭身をまねする勇気はなかったらしく、結局あまり似ていなかった。

「……悪魔召還したはずなのに」
「いや、俺、召還されて来た悪魔ですけど」

少女は完全に意気消沈していた。あわてて、普段のシャツにワークズボンのスタイルに戻る藤生氏。

「一応、魔法もそこそこ使えるんですけど」
「がんばったのに。カエルも怖かったけど切ったのに……」

（泣いてるよこの子）
困惑のシチュエーションながら、藤生氏は冷静である。
とりあえず落ち着いて依頼を聞くことが先決だ。と思考を切り替

える。

「とにかく、な？　呼び出されたからにはできることはするわ。願いはなんやのん」

少女は、じっと、藤生氏を見返した。

案外、頼れるのかもしれない。

少女の思考が読みとれる。藤生氏、ちょっと強気になる。

「あの……願いを聞いてくれるのですよね」

「まあな。魂を預ける生前予約してもらう必要、あるけど」

「なんですか。セイゼンヨヤクって」

「死んだら俺に魂くれるって、って今約束してくれること」

少女はさらに、じっと、藤生氏を見た。

少女の思考が読みとれる。……藤生氏の息が止まった。

少女は、真剣な眼差しを寄せる。

「自分、どこが太ってるて？」

「私の願いがわかるんですか」

少女は目を光らせた。

「この腕見てください。上腕、中指と親指広げてくっつかないし」

「普通、くっつくのは手からひじまでの間くらいやろ」

「足もひざの裏側の下。ふくれてるし」

「ふくれてるから『ふくらはぎ』て言うんやろ」

「ヒップも肩幅に近いし」

「おしり小ちゃかったら、色気ないで」

「とにかく、太ってるんです。嫌なんです。こんなんじゃ彼氏もで

きないし、死にたいくらい」

（頭痛が痛い）

素直に痩せさせりゃ簡単だ。だがこれ以上痩せたら体を壊すんじゃねえか？　殺人幇助の厳禁は、天界・魔界の鉄の協定である。願いを叶えたあげく死なれては、諸方からクレームが来る。その後のアフターケアだってまっぴら御免だ。

一世代前の上主であれば、適当にあしらって、魂をいただくくらいはしたかもしれない。だが藤生皆は、ひねくれてはいるが案外、素直な少年である。

「自分、今のままで十分可愛いけど。卑下しすぎちゃう？」

「そんなこと、ない」

少女は引かなかった。

システムのバグとはいえ、サナリレベルを呼び出すくらいだ。精神力は高く、意思は固い。

藤生氏は心中、困っているのだが、さりとて説得もままならず。

（ゴメン。勝手に利用します）

彼は渋々、カードを切った。

「俺には、好きな女子がいるんですけど」

少女は少し、不思議そうな顔をした。

藤生氏が「えいや」と唱えると、ヒトガタが現れ、ヒトガタはショートボブの女の子に変わる。

「こいつはかなりのぷっぷくぷぅです」

「この人ですか？」

「イエース。チビっ子ですけど、腕は筋肉とぷにぷにの両質感があります」

藤生氏は『こいつ』の二の腕をつかんだ。白い肌が伸びる。

「あんたの基準からしたら、相当に丸物やろうけどさ」

「でも、このひと可愛いから」

「あんたも十分可愛い思うよ？」

少女は大きく首を振って言い張るのだった。そんなはずはない。絶対私は太っていて、醜いんだ……。

ええ加減にせえよと藤生氏は思うのだが、良心的に受け止めようとすれば痛々しくもいじらしくもある。これは心の病だ。いたわりの言葉を重ねても、素通りするだけだろう。

藤生氏は沈思黙考を試みる。

ちーん。

藤生氏の頭の中で音がした。

藤生氏はどこからともなく取り出したペンライトをかざした。

暗室の中、壁面に映像が浮き上がる。

学校の廊下のようだ。静かな廊下を歩む、異国の少年。

突如、藤生氏が少女の袖口をつかんだ。

「きゃあああああっ！」

少女は絶叫した。

藤生氏は画像の浮かぶ壁面に少女を叩きつけたのだ。

そして画像の中。

少女はふらつく体勢を立て直していた。

「あれ、壁にぶつかってない」
「シヨクインシツ、は、どこですか？」

異国の少年がたたずむ彼女に問いかける。
不安と安堵の入り混じる表情は、整った表情に少しエキセントリックさを添えている。
少女は――彼に魅惑された。呆けた顔で、かろうじてことばを口にした。

「あなたは？」
「コウカン・リユウガク、セイ、で」

少女は、頬が紅潮するのを止められなかった。

「しばらくほかのことで忘れてもらおう」

ペンライトを消し、藤生氏はつぶやいた。
恋でもすりゃ他のことに悩むだろう。痩せる痩せないより、よほど重大事に考えるに違いない。現実味を帯びてない相手なら、なお困難度も増すだろうから、たぶんそのうち願い事すら忘れるに違いない。
藤生氏は勝手に決めた。

これで解決。依頼完了。

暗室に残るは藤生氏と『こいつ』。
ふと『こいつ』に目をやった。
ごくりと、つばを飲む藤生氏。
暴言失言の類が『こいつ』自身にばれたら。殴られるか、大外刈

りか、熱いお茶をかけられるか。はたまた。
（ここって苅野の学校とかとちゃうよな）
藤生氏はおどおどと、あたりを見回した。
そして『こいつ』のヒトガタ抱えて、ゆらりと姿を消したのだった。

＊　＊　＊

「ヒトガタ、消しなさい」
右目は短く叱った。
「左目どのに申し伝えますよ」
「消します」

藤生氏は、肩を落とし両手をひざにそろえて座っていた。
うだうだとぼやき……に近いつぶやきとともに、その物体は、ぱっと姿を消す。

（まあ思春期後半戦ですからねえ）

と、右目は思う。

「ところで上主様。承認を求める申請がわんさか入っています」
「え？」
「人事データの修復処理の回復と、魔物員配置の再考結果の最終決裁をお願いします」
「あ、そうだ。おれ、出張します。ほらほら、自分で状況を確認しなきゃーいかんと思ってたんや」
「どちらへ」

「えーと、えーと」
「後回しにするとまた呼び出されますよ」
右目は話すと、もとどおり黙ってキーボードと格闘しはじめた。
「……ハイ」
藤生氏もまた、いつも通り仏頂面に戻り、ひじ掛け椅子に身体を投げ出した。

The First Goal

「はるちゃん、小学校のころ少年リーグにコッソリ入っとったそうやん」

私は絶句の上、固まった。

かのんはにこにこしつつ、私を追いつめていた。

「だれにそんな話」

「ケージ君から。天宮家は全員サッカー好き、ということを聞いていたら実はそんなエピソードがあったとかで」

弟よ。なぜばらした。

ていうか知らなかったぞ。かのんとケージが面識あるなんて。

「いやそれ仙台住んでたころやから五年も前の」

「代わりに出てくれへん？」

「……はあ？」

「俺からも、頼む」

かのんの彼氏まで頭を下げた。

彼の名前は『タカくん』――相良（さがら）タカミチ、という。

背が高くまゆが細い。目元も細く一重まぶただが、全体的にくっきりした印象。私から見ると十分イケメンで、面食いかのんの彼氏としても十分合格点に達していた。

はじめて会った気もしない。

というのも、かのんから毎日話を聞いてるし、それ以上に一ヶ月前、妙な展開に巻き込まれたからだ。

一ヶ月前。彼はいきなり電話かけてきたんだっけ……しかもかの

んの携帯から。

『携帯電話を忘れていったから、お返ししたくて』

いきなり背景理解不能、意味不明の供述。

どういういきさつか知らずして、うかつに個人情報を教えるわけにはいかない。逆に彼のメールアドレスを聴取し、かのんに渡した。

そして数日後より、かのんのトークテーマに挙がるようになり……今に至る。

おっと、人物紹介を悠長にしてる場合じゃなかった。

反論！

「私、可憐な女ですよ？　わかってます？」

「可憐でもカレーでもええけど、とにかくはるちゃんが入ってくれれば」

「すまんけど」

なんじゃそりゃ。

マジで怒りかけた。

カレーとか意味不明やし。

だいたいチーム編成に一人くらい余裕を持っとけよ。

そもそも初見の、彼女の女友人に頼む気が知れない。

さらにはこんな荒れた試合に女子高生を出すなんてありえん。鬼畜。悪魔。人でなし。

とにかく、私は訴えた。

「無茶言うな！」

でも、それは小声だった。

とかく私は、はっきり物申す性格のわりに頼まれたら断れない。
結局、半泣きで、すね当てを着け靴を履いた。
靴なんぞよくもまあ合うサイズがあるものだと思ったが、かのんがふざけて買ったものらしい。
サラリと長い髪のかのんが着けたら、キャンペンガールみたいな感じになるんだろう。
でも私の場合はちびっ子だが、間違いなく戦闘要員ぽさが漂っている。

「交代、十五番」

フットサルのルールでは、各チーム前後半1分間のタイムアウトが認められている。
その短い時間で、私は戦場へ赴くことになってしまったのだ。

＊　＊　＊

フットサル。
乱暴にいえば、サッカーのミニチュア版。
細かいところは違うが、足でボールを操ることには変わりがない。
まあ、私もサッカーのルールは過去、一応は経験したので分かっている。だがフットサルとの違いは把握していない。
人数が一チーム五人で前後半各二〇分とか、フィールドが小さいとか、オフサイドがないとか。
私の認識はそんなもんである。

「あと十分、攻めていこう！」

〇対〇の好ゲーム。後半十分過ぎ。
ねんざでタカ君のチームから一人、退く。そのかわりが私。
ゴールのない均衡した試合に訪れた、不利な戦況。たった一点が動くことでそのストレスは解消されるのだが……。
それでも攻めるってのは、勘弁してくれ。
競り合いでもまれるのを避けるため、私はキックインを志願した。
サッカーではライン外から投げ込むやつ。あれはフットサルでは『キックイン』つまりボールを蹴り入れるのだ。
うまくタカ君があわせ、そのままボールをキープし敵陣へなだれ込んでいった。
後ろから一応、ついていってみる。
ペナルティエリア前。
フォワードらしき、サッカーの丸刈り君にボールが渡る。
すると、丸刈り君が前をさえぎられた上、横からスライディングされて。
……コケた。
ファウルだろ！　とに思いたいが判定されない。
相手チームはレベル高いんだけど勝利至上主義なのかな、観戦してグレーゾーンのラフプレーが多い印象だった。
それが私が出場を渋った最大の理由だ。

「あっ」

こぼれ球はなぜか私の前に転がってきた。

「く、来るなあっ！」

と身がまえながらも、前方のゴールめがけて蹴り込んだ。
むかし、藤生氏のくれた『魔法のアームレット』。今は力を失くしたらしいそれが手首で揺れた。

……ぱすっ。
いわゆる完全にフリーの状態からの。
「はるこー！」
かのんがグランドに響き渡る声で叫んだ。
おっつけ『うわあああああ』という声が同じフィールド上であがった。
自陣は興奮のるつぼ。
敵陣は信じられない、という顔で放心状態。
こういうときってプレーヤーはゴールした人間に抱きつきまくる。
けど、一応私は女子高生。チームのみなさんは走り寄ってくると、私を取り囲んで踊りはじめていた。麗しき哀しき自主規制だ。
ちなみに、私は頭をかいてつっ立っているしかなかった。

Winner's Goal

そのゴールのあと。
ゲームは、守備がちの流れとなっていた。
敵のほうが攻撃に形ができている。右サイドからのカウンター攻撃がうまい。
というわけで私は右サイド、敵からすると左サイドを動き回っていた。当然、ボールができるだけ来ないところにポジショニングしてるわけ。
それでも、さっきのゴールで一人、厳しいプレスがついている。

「そんなことしたって無駄。私はゲームに参加してません」

と主張をしたいのだが、偶然であれ実績は、実力より雄弁である。
審判がボードをあげた。
ロスタイムは一分。
一対〇で勝ち越している。
攻め込まれてはいるけど、なんとか守りきればいい。
体内時計がカウント開始した、そのときだった。
笛の音がフィールドに鳴りわたった。

「ああ！」

タカ君は思わず頭をかかえた。
味方のゴールキーパーが四秒以上ボールを持っていたため、ファウルを取られたのだ。守りのための時間稼ぎが過ぎた結果だった。
敵にはフリーキックが与えられる。
タカ君はすまなさそうに私を見た。

「天宮さん、ゴメン」

真意がわかった。

フリーキックといえば守備側が行うのは『ゴール前の壁』。

「私も？」

「無理せんでいいから」

タカ君は口ではそう言っていた。でも少しばかりの期待を抱いてもいる。

私も中途半端にひき受けながら逃げ出すのかと悩ましい。

もとはといえば。

私の心の叫びはひとつだった。

……あほー！！

「このへんおればええ？」

私はとぼとぼと歩いて、丸刈り君の横に陣取った。

タカ君はさっと表情を明るくすると、壁の真ん中に入った。

とほほ。

おのれの人の良さ、無謀さには時々自分でも腹がたつ。

さて、気持ちを切り替えよう。

ボールはほぼこの壁のどこかに来る。覚悟はできた。

でも、

「顔だけには来てくれるな」

と、私は切に願った。

男の人が壁になっているとき、某急所を手でガードするじゃない

？　一番当たるとつらい（と思われる）し、困るところだから。でも顔は手でガードはできない。腕にボールが当たったらファウルになる。

どうしよう。この手のゆくえ。みんなの真似したらアホだし。二番目に大事な胸なんか、ガードしてみたりして。意味ないか。ぺたんこやし。

つまらんことで私が途方に暮れていると、横で抑揚のない低い声がした。

「俺に任しとき」

丸刈り君だ。

かっこいい。

こんな頼もしい言葉、今までの人生で男の子から聞いたことがない。

「丸刈り君」

というのは失礼なんで、私は小さくうなずいて前を見すえた。

笛が聞こえた。

ボールが宙を駆けた。

私めがけてやってくる。

丸刈り君が私を軽く押して、跳んだ。

私は、前へ走った。

丸刈り君がボールをヘディングでクリア。

フリーの私の前へ落ちるボール。

それはまさしく、奇跡のよう……。

私は思い切って、蹴り上げた。

ボールは遠くへ舞い、ラインを割ってゆく。

そして、終了を告げる音が高らかに響いた。

「はるこ！」

かのんが羽のようにふわりと、飛びついてきた。

「はるこ、すごいすごいっ！」
「こら、かのん。勝利をたたえるのは彼氏にやりたまえ」
「だって、すごいやんっ」

興奮で言語中枢がいかれたか。かのんのボキャブラリは皆無になっていた。すごい、かっこいい、すごい。と、彼女は同じ言葉をひたすら彼氏に訴え続けていた。

そんな「なんだかなあ」な光景を眺めていると、丸刈り君が私のそばへやって来た。拳を顔の横で固めている。

「サンキュ」

彼はそう言った。

それに答えるかわりに、私は彼の拳に自分の拳を軽くあててみせた。

彼は、微笑でそれに応じた。

少しつり目だ。目元がどこか藤生氏に似ている気がする。

私は藤生氏の顔を思いうかべた。

ほかのメンバーも次々と私の元に寄ってきた。剣を交える騎士のように、私たちはその儀式を交わしていった。

ふと、左手首の熱さに気づく。

アームレットだ。それは熱を帯び、手首に絡みついてくるようだった。

（もしかしたら助けてくれたのかも……藤生氏）

今ごろ私は、勝利の喜びをかみしめはじめていた。

０１．或る物件と其の仔細（前書き）

少々ブラックなため「ＰＧ－１２」＝１２歳以下ご遠慮ください。

01．或る物件と其の仔細

たった十年で『住み慣れた』と形容できるのか。
それはＹＥＳだ。
苅野はこの私サナリ（アレクサンドル・スピニオル。略して『サーニャ』）に事実、『帰ってきた』との感慨を抱かせた。
私は今、苅野における己が城を探している。

「多少古くても広めのところを」
「敷金礼金で八十万くらいて、予算マズいすかねえ」

軍資金は二万ドル。
円高でめっきり目減りした。
そして不動産屋の営業の若造は馴れ馴れしい口調で説明する。

「外国の方がそれなりのグレードのお部屋借りるんって、相当ハードル高いんすよ。家主さんのご理解もあるし」
「日本の習慣は理解しているつもりです」
「サーニャさんて、顔隠せばカンペキ日本人ですもんね。家主さんは僕の方でばっちり説得しますよ」

地獄の沙汰も金次第というが、人の世こそ金次第だ。
上主様が私に下された罰のうち、最も厳しい罰は、資金封鎖であった。

「広さと城山町と初期費用以外に条件はありません、掘り出し物はないでしょうか」
「……もし、サーニャさんが気にされないってんなら」

彼は別のファイルを持ち出して、私の前に置いた。

苅野市　南城山町
マンション　２ＬＤＫ
４／６階　南西向　４５？
築６年　駅歩１０分
月２万円（共益費込）
敷・礼　なし

怪しい。一見してそう感じる、破格値である。
いわゆる『事故物件』で……と若造は小声で告げると、詳しくは現地で説明を、ともったいぶるように言葉を切った。
いかなる所以かは実際の物件を訪れれば分かるだろう。
案内を所望した。

不動産屋のライトバンに同乗し、上主様に思いをはせる。
カイ――今度の上主様は古い記憶に頼ろうとしない。
過去を歴史ととらえ、今を現象と受け止め、その内容を解析し未来を分析する。苅野で居眠りしていた怠惰な子どもでは、既にない。その点で私の予測は大いに外れ、そして自らの敗北をむしろ喜んでいる。
たった一年でアジア・中東の＜ＭａｇｉＦａｒｍ＞の現状、周辺情報、区分所有する天使・神・魔物たちのレポートをまとめ、全ての情報をシステムに入力完了したのは今年の春。もちろんそのプロジェクトを命じたのは上主様である。思惑と感情と過去に囚われる魔という存在に、その出来事は革命的でさえあったのだ。
まあ多少……運用を開始して間もない今は混乱しているらしいが。
彼はいずれ天と和し、秩序をもたらす存在たりえると、私は確信

している。
しかし多くの魔物は違う。上主様を弱い『半人半魔』とみなしていた。口惜しいが詮無いことだ。先の上主様も『人に誘惑された王』とされた。
二代にわたる上主様の目指す姿、その意思を、多くの魔物は解する知恵を持たないのだ――。

「ああ、ここです」

不動産屋の若造が車を停めた。
芽衣川沿いの遊歩道よりふた筋南、旧来の住宅を壊して建てた趣の六階建マンション。瀟洒な佇まいで品は良い。
ただし、四階だろうか。ベランダに灰色の霧がかかっていた。梅雨の合間の快晴予報の本日、自然現象であるはずはない。紹介された物件も四階だったはず。ますます早く部屋を見たいと思った。
内部に入る。オートロック、巡回管理人あり。エレベータは日本メーカー。内廊下。

「分譲貸なんで設備面はバッチリですよ」

４０４号室。
日本ではあまり縁起の良い室番号ではないとされる。
角部屋南向きだ。

若造がドアを開ける。
どうぞ、とドアを押さえて私に入るよう促した。確かに日本の礼儀に適った動作であろうが、ここでは適用すべきではなかったろう。
ホスト自らの安全確認ののち、ゲストを招くべきだ。

まずはじめに玄関に立つや。

蒸し暑い。
空気が重い。
息苦しい。
三重苦だ。
ふつうの人間でも直感的に気持ちよい部屋とは思わないだろう。
気を取り直し、廊下を真直ぐにゆき、扉を開く。白で統一された明るい色調の、開放感あるリビングがそこにあった。芽衣川を望む眺望も良好だ。ただし、灰色の霧で視界の半分が覆われていなければ。
霧はベランダでもリビング左の部屋側に集中している。

「暑いっすね。梅雨時に閉めっぱなしやと、どうしてもね。窓、あけますね」

若造がそう言って窓を開ける。
一方で私はリビングの隣の部屋へ続く扉を開けた。
……居た。
私は若造をふりかえった。彼は外の空気の美味しさを堪能していた。

「この部屋で前、なにか事件でも?」
「え！　サーニャさんて、霊感とかあったりします?」

霊感もなにも。
部屋のど真ん中に神経質そうな女が手首から血を出して倒れているが。青黒くなった口からはずーっと灰色の霧を吐いており、ベランダから見えた霧はこの女が発生源だと一目瞭然だ。さらには、部屋中に淡青・白色のカプセル薬が大量に散乱、空中に漂っている。
女と目が合った。
恨めしい視線だ。

その濁った瞳の奥を探ると、かつての容姿の片鱗が澱のように残っていた。元々は可憐な女だったようだ。

「店で『事故物件』て申し上げましたでしょ。実はここでですね」

若造の説明は聞くまでもなかった。

当然この程度なら借りようと決めたが、少し交渉をしてみよう。

その前振りとして。

「周辺環境を拝見したいのですが。一四時くらいに店に戻ります」

と、告げた。

02．或る少年と其の使い魔

霧が懸命に私にまとわりついてくる。どうやら部屋からついてきて、私の持つ『呪』をも吸い取らんと画策しているようなのだ。
少々不快感を覚えるも、マンションの周囲、南城山町を散策した。

旧市街で再開発された繁華街からは外れている。一部居住用のマンション地区に再開発されつつ、ある一角には旧家も残り、原則として文教地区とされ、端正で伝統的で、落ち着いた町並みだった。
なにより近くにカイの母親やアキナリが住んでいる。カイに関わった以上、事件に巻き込まれる可能性はゼロではない。対処できる場所に私も居住すべきなのだ。
家賃相場が若干高価で悩ましかったのだが。
それもこの灰色の霧の女のお陰でなんとかなりそうだ。多少の妥協はやむを得ない。お互いしばらく仲良くやってゆこう。

＊　＊　＊

若々しい声がする。
林を通り抜けると、古めかしい灰色のコンクリートの建舎が見えた。
学校だろうか。
丘からちょうど校庭を見下ろせた。
若々しい少年たちがボールを蹴りながらグランドを駆け回っている。隣接する別のグランドでは、地を這う小さな球を拾っては投げる動作を飽かずくり返している。
それらの輝かしい魂に、我が身につきまとう霧も反応し、色濃さ

を増していた。未来への憎悪は、今生に心を残す者に共通する愚かしい習性だ。

黒い霧が私から離れた。

その動きの意味はひとつ。理性を失した怨霊は欲望に忠実に、霧は呪わしい表情の具象をあらわし、眼下の校庭へと襲い掛かる。

混乱は避けたい。

この町の怨霊跋扈ぶり。私にも責任の一端はある。

「術の展開はままならないし。面倒だが、引っぱり戻すか」

と思案した矢先のこと。

唐突に、黒く小さな“かたまり”が霧の中へと飛び込んだのだ。

――フギャア！

それは細い獣の声。

霧は霧散し、逃げるように再び私にまとわりつく。

小さな黒い“かたまり”が着地した。

黒猫だ。

毛を逆立てて私を見ている。

最近の飼い猫は人と同様、魔を感知する能力も低下したものだが。

どうして、彼女は私と霧とに反応し、敵意をあらわにしている。

霧の主と勘違いされている？

心外な。

「一人前に使い魔気取りかな」

私は黒い子猫を拾い上げた。

彼女は足を乱暴に動かすが、それ以上の抵抗はない。
一方の霧。子猫にちょっかいをだそうとするが、少し脅すと大人しくなった。
さて。
霧を退けたのは彼女だが……彼女からは『呪』の迸りを感じない。ならば彼女を一時的に魔法の発動体とした者がいる。そしてそいつはすぐ近くにいるはずだ。
近くの魔物の『呪』を探る。
……読めない。
可能性は二つ。『呪』が微弱か、私を軽く凌駕するほどか。まず後者の可能性は考えがたい。

「可愛いきみ、大人しくしなさい」
「ふみゅう」
「そうだよ、きみのご主人様はどこ」

彼女はやがて私の腕にしなだれかかる。
魔法でもなんでもない、ただの暗示だが、単純な子だ。

「マロ」

それは林の奥から聞こえた。
少年の声だ。

「姿を現したまえ。彼女の主なら」
「別に、身を隠してるわけやない」

木陰から姿を現したのは少年、いや少女かとその見目を疑った。
声は少年であると示している。
そして『呪』を使う。ただ人ではない。

「半人半魔（ネフィリム）ですか」

彼は押し黙った。

まあ、その態度では肯定するも同然だが。

私にとって彼が半人半魔（ネフィリム）か否かはさしたる問題ではない。

彼の保有する『呪』は微かで、警戒は不要だ。仮に攻撃を受けても正当防衛の範囲、いや片手でさえしのげよう。

その弱さは多くの半人半魔（ネフィリム）の哀れな特徴だ。彼らは『呪』の集積能力が限られる。カイ――上主様が花瓶を用いる理由はそこにある。そして彼らの重大な欠陥は――人であるが故に『魂』を持ち、『呪』をも作り出す存在でもあること。上位の魔物にとって奴隷となすには最適の存在であることだ。一方で、上主様のごとく計り知れぬ強大な魔とも成り得るのだが、それは稀なる一部のものに過ぎない。

「その猫を離してほしい。彼女は私の大事な友」

彼の美しい瞳を見つめる。

日本人には異質な栗色の瞳。私と猫が映る。

私は彼の大事な友人を取り上げるつもりはない。まして上主様を差し置き、彼を配下にするつもりもなかった。

彼の美しさに、私はむしろ庇護欲をかきたてられていた。

「いいでしょう、お返ししましょう。ただ、ひとつ条件が」

「条件とは」

「君の名を教えてください」

彼はまぶたを伏せ、そして細い声で答えた。

「……コウ」
「それはニックネームですね」
「フルネームを、とはおっしゃらなかったから」
少年――コウは短く反駁した。それもごく穏便なものだ。
「コウ、彼女の行為は、悪霊祓いですね」
彼は答えない。正しいということだ。
私は尋問を続ける。
「『契約者』の依頼に基づく行為ですか。それとも貴方の考えのみによるものですか。そしてここ苅野を、とある方の＜農場＞と認識してのことですか」
「『契約者』と私の意思です。苅野がだれの＜農場＞か、それは存じませんが」
上主様の＜農場＞での無断の悪霊狩りは容認できない。
ただし人間との契約による行為なら話は別だ。『契約』が確かに完成されていること、つまり彼の言葉が真実だとは探ることができた。
だが、いかなる人間が彼と契約を？
興味はあったが、彼の『契約者』は見破れなかった。
「結構。『契約者』の意思でそれが＜農場＞を侵すものでないのなら」
私は彼の黒猫を放した。
彼女は私に媚びた鳴き声を聞かせ、地上に飛び降りると、女王のように悠然と歩んでいった。出迎えたコウ少年は彼女を抱くと、ア

ホボケカスと愛ある罵声を投げつける。
無邪気な光景だが――彼は老獪だ。
私はそう判断を下した。
彼は契約に基づき『呪』を操り、魔法を行使している。すなわち＜農場＞の概念、法を理解している。そして『契約者』の存在を第三者に悟らせず、その探索を拒んだ。
会話、そして態度。彼自身は自然体に見えて、全く隙がない。
弱みを挙げれば『呪』の保持量の微弱さ、これは魔にとって致命的だろう。そして使えない黒猫・使い魔マロ。それらもますます私にとって彼が魅力的に映る。
さながら泥の中に咲く睡蓮のよう。
私は彼のような存在を好む――花は手折るものではなく愛でるものだ。

「私はサーニャ。貴方とは今後は友好的にお付き合い願いたい」
私は握手を求めた。
彼はじっと私を見つめたまま動かない。

「サーニャとかいいつつ、サナリ――王の農場の統括者ですね」
やはり彼は私の正体を読んだ。正確には読ませたのだが。

「いかにも。よくご存知で」
「ここって、名高い魔王様の農場、やったんですか」
「知らなかったのかい」
「知りませんでした。教えていただいてありがとう」
彼は理知的な柔和な笑みを浮かべつ、握手に応じた。

「コウ、きみは苅野には長いのかい」
「まだ一年半です。言い訳やないんですが」
コウ少年は一度、私の顔うかがってから続けた。
「ほんとうに魔王様の＜農場＞とは知らんかったんです。連れが苅野の出身なんで調べもせんと家を買ったんで」
「家？　買う？　一戸建？」
「え。そこに反応？」
成人済らしい。日本人は年齢不詳だ。
理不尽ではなかろうか。
子どものような半人半魔（ネフィリム）が一戸建住宅を購入でき、魔界でも名だたる実力者たるこの私が事故物件のレンタル・ルームに住まうことになる事実。
人の世の沙汰はやはり金次第だと、実感するのだ。

02．或る少年と其の使い魔（後書き）

次回はせりちゃん短編です。

Ｓｉｎｇ　ａ　Ｓｏｎｇ（前書き）

ＮＯＫ全国高校音楽コンクール地方予選のお話。実際は夏の終わりくらい開催？

イライラする。

受賞校の発表、そんなにひっぱらなくたっていいんじゃないの？

どうせ金賞は今年も、一八〇人の部員を抱えるＫ高校だってことは、わかりきっている。私たちの学校なんてＫ高校の二軍――Ｂチームにすら及ばない人数なんだし。

「金賞は、Ｋ高校Ａチームううう！」

サッカーのゴールシーンじゃあるまいし、絶叫しないでほしい。

ふと見るとみんな落胆の色を隠していない。うちの実力じゃ、銅賞（金銀以外の全ては、銅賞）に決まってるのに。

「今年はかなりイケてる！　と思たんやけどなア」

私は、客席最後尾から『客観的に』聞いていたから、うちの歌とＫ高校のハーモニーを聞いたとたん、結果を確信したもんだけど。

「よっしゃ！　みんな全校合唱が終わったら、ダッシュや」

ニシノ部長――我が合唱部唯一のテノールパート――が小声で指示を出した。

「会場は去年と同じ『カフェコスモス』。予約の時間をオーバーしてもてるから、みんな急げ！」

全員、といってもたった一〇人ほど。それぞれ手を振ったり首を振ったりと、了解の動作をしてみせた。

ただひとり。久瀬くんは申し訳なさそうに頭をかいて訴えた。

「ぼく、そこ知らんねんけど」
「高梨、頼むで！」

私はなぜか、顔が赤くなった。
久瀬くんを見やる。彼はさっきと全く表情を変えず、好々爺のようににこにこしているだけだった。
恒例のうちあげは、とりあえず全員感想を述べてからはじまる。

「高梨」

ニシノ部長に指名されて、私は立ち上がった。

「賞はとれなかったけど、練習の時より声が遠くまで届いてたし、すごく良かったと思います」

私はありきたりな感想を述べただけで、さっさと座ってしまった。

私は、ピアノ伴奏者として合唱部に入った。ちょうど今年はピアノが弾ける人がいなかったため、私は大歓迎された。
音楽のキヨ先生と仲良くなれば音大受験のための準備もやりやすい。そういうつもりで入った合唱部だった。いうなれば打算。けど、自分の夢の実現のための手段であり、だれに迷惑をかけるじゃない。悪くないでしょ？
でもコンクールに向かって、みんな真剣に取り組んでいたときに、私はケガをした。ピアノを満足に弾けなくなった。
私の居場所は……なくなってしまった。ピアノを弾けない伴奏者なんて、意味がない。
どうして今、私はここにいるのだろう。
部員だから？
そう思うと、放課後の音楽室に顔を出すことすら、ためらいがち

になった。
私はなにもしなかった。私は、いてもいなくても構わなかった。
そんな私が、どうして感想なんか言える？

＊　＊　＊

うちあげが終わって、同じ中学だった私と久瀬くんは、電車も同じ方向へ帰る。空席の目立つ車両の端に並んで座る。彼の横顔は、やはりいつもと変わらないほのぼのとした顔だった。
彼は、私のピンチヒッターとしてピアノを弾いた人。入部はしていない。帰宅部だ。
私は知らなかったのだが、最近までハイソなご家庭に育ってた彼は、ピアノも中学に入るまで習っていたという。中学時代の友達・はるちゃんがそう教えてくれた。今はピアノじゃなくてバンドでギターをやっているそうだけど。
私はキヨちゃん先生とニシノ部長に彼のことを話してみた。彼らはすぐ頼みにいった。そして即、久瀬くんはＯＫした。
正直なところ、気分は良くなかった。

「久瀬くん、合唱部、続けてかへんの？」
「遠慮しとく」

即答だった。

「人数少ないし、たまに顔出してくれたら」
「バイトもバンドも補講あるし」
「久瀬くんでも補講受けるんだ」
「英語強化のね。選択肢広げるにはＴＯＥＩＣ受けとけていわれて

る」
「だれに」
「うちの副担。伊那」
「リーディングの」
「そう」
「そっか」

私はそこで話を切った。
久瀬くんが断って、少しほっとしている私がいる。
なぜ？　私以外の伴奏者がいることが、許せないから？
なんて狭量。
私は底の見えない穴をのぞき込んだような薄気味悪さに自己嫌悪し、言葉を継ぐことができなかった。
しばらく続く、沈黙。
次の駅の名が車内放送で告げられてすぐのこと。静寂は破れた。

「そうや、高梨」

久瀬くんは大事なことを思いだしたかのように、少々早口に話しはじめた。

「ホールん中でも、最後尾に僕ら陣取ってたやんか」
「うん」
「高梨に歌を届けられるか、それが目標やってん」
「……私が目標？」
「暗闇の高梨めがけて、声を伸ばしてん。ほら、ただ『遠くをめがけて』と言うよりイメージできるやんか。結構、いつもより声伸びてたんちゃうかなあ」

私はホールの最後尾にひとりぼっち。みんなはライトに照らされ

た舞台に立っていた。
私はひとり取り残されたと、この場に私がいる必要はないのだと思い、白いステージを眺めていた。
けど……私は必要とされていた？　声を伸ばすために、より素晴らしい歌を歌うために。それはあの場に私がいたことが、みんなにとって意義あることだった、ということで。
意義……いいや、意義なんて。
少なくとも、ひとりは『私がいて良かった』と言ってくれている。

「久瀬くん、ありがとう」

彼は一瞬、けげんそうな顔をしてみせた。が、元ののんびりした表情に戻ると、にこりと笑った。

「……お疲れさま！」

私も笑顔を返してみせた。彼はプラットホームを歩いていった。
電車は再び、走り出した。

Ｓｉｎｇ　ａ　Ｓｏｎｇ（後書き）

次話からは、はるこ視点ファンタジーの長編です。

Ｐｌｏｒｏｇｕｅ ； ａ ｓｐｉｒａｌ ｓｔａｉｒｗａｙ.

太陽は傾いていた。
潮の香りを全身に受けながら、歩く。
丘を登る。空が迎えてくれる。少年と少女は歩を止めた。
街からの風景とは異なる、海。広くまっすぐに伸びてゆく。
誘われるように彼らは丘のはしへと歩みを進めた。高揚する心を持て余すかのように、少女は大きく息を吸い込む。
海面が太陽に染まりだす。
紅とも紫ともつかぬ色。未だかつて知らない自然の彩りに、陸も少しずつ染められていく。

「ね？　きれいでしょ」

無邪気に少女は紅顔をさらに紅に染めて、亜麻色の髪をかき上げた。
少年はなんの感情も見せず、ただ‘Ｊａ’と音をもらす。

「私はここが大好きなの」

穏やかな波。行きかう船。海に記された小さな波形。
それは遥かな空の下のひととき。

そこは北海の大洋に面する港町。
だが……私はこんな場所を知らない。
だけどひとつだけ、知っている事がある。
その少女に時折目を向けながらも、丘にたたずむ少年。
無造作にはねた黒い髪をそのままに、薄い茶色の眼を海に向けている少年。

それは、少し大人になった藤生氏の姿だった。

01．再会のとき〔1〕

花火は日本の夏の代名詞。
今年も、苅野駅前商店街主催の夏祭りは二千五百発の花火が予定されている。
去年もおととしも私、天宮はるこは出かけられず、自宅マンションからの鑑賞となった。理由は恥ずかしながら……ハライタである。よって苅野に住むこと三年目にして、初の夏祭り花火体験となる。
今年はカキ氷もエアコンも規制した。それだけ私の期待は大きかった。
しかし当日、

「ゴメン行けなくなった」

友・渡辺かのんからのメールにはそうあった。
ウソだ。百ポンド賭けていい。
でも波風を立てるつもりはない。一言、返事をかえした。

「ガンバレ」

……彼とね。
微妙な皮肉か、素直な友情か。
はたまた、彼氏なし歴十数年の醜いジェラシーゆえか。
つまらん。こんなことに拘泥するでない、と自分を叱咤した。
三人連れが二人になっただけやん、と。

「かのん無理やって」

私は部屋で高校野球を眺めながら、その手でさらにケイタイをい

じる。
もう一方の連れ、なつきはまさか、キャンセルだなんて言わへんやんね。
半時間後。
テーブル上のケイタイがぷるぷる動いた。
「直接はるの家行って良い？」
私は液晶をしばし眺めてから、ほっと一息ついた。

＊　＊　＊

「なつきっ」
私が大きく手を振ると、なつきも大きく振り返してくれた。
なつきは、私の住むマンションに自転車を停めに来ていた。
というのもなつきは北の山を越えたところにあるニュータウン地域の住人で、家は市街地から電車で三駅と離れている。出身中学は当然、違う。うちはというと旧市街地の一部、むかし苅野のお城があった『城山』という町の高層マンション。私の部屋から十分観賞できるくらい、花火を打ち上げる芽衣川河川敷は至近にある。
「実は初・苅野祭りデビューやねん。すごい楽しみで」
「私も十年住んでて、あんまり行ってへんから、めっちゃ期待してる！」
去年は宝塚の花火行っててん、となつきはおしゃべりをはじめた。
歌劇の宙組公演のあと、宝塚阪急で買ったお菓子をもって武庫川沿

いに陣取ったとかなんとか。
そういえば神戸に住んでたんよね、あっちの花火は？
そう聞かれて思い出す。一回だけハーバーランドに行ったけど、トンでも大混雑に親とはぐれて、花隈（はなくま）駅に向かったら、迎えに来ていたおかあさんのほうが半泣きでオロオロしてたとか。小学校のとき住んでた仙台では毎年恒例、でかい水筒にアイスティー入れて、あまんざのエクレアほおばりながら、がんばって仲の瀬橋に陣取ってみたり……なつきには地名言ってもわからない、メインはお菓子の話になった。
教室の延長のような、とりとめのない話。
花火への期待を述べたコメントが、いつの間にかスイーツ情報になっていた。
なつき。
フルネームは武崎なつき。高校に入ってからの、友達。
彼女と私は気があった。
といっても共通の趣味はない。お茶に誘ってもあんまり来てくれない。人付き合いが悪い、というわけでなく本当に飲食が好きではないようだ。
外見は長身でスマートで、ボーイッシュなのにどこかエレガント。一言でいうとモデル体型。河川敷までの道のりを並んで歩いていると、チビで丸い私との対照ぶりの明快さに時折、むなしさを通り越して笑いがこみあげてくる。
それでも、私たちは気があった。
これだから世の中、不思議なんだろう。

芽衣川の河川敷にある東谷公園。
そこは家族連れやカップルでごったがえしていた。

「河川敷で、イモ洗い」

思わずそんな言葉が口をついて出た。
もちろん状況はそんな風流？　を感じる状態ではない。
東谷公園でノンビリ眺めようと思っていたが、それは世間並みの考えだった。苅野市のローカル行事とはいえ、二千五〇〇発の花火大会である。認識は甘かったようだ。
花火の打ち上げは、さらに北の上流で行われる。
上流に行くかどうかでまごついていたとき、

「天宮さん！」

と人ごみから声がした。
男の子の声だ。聞き覚えは、ないこともない。

「ひさしぶり」

第二声で思い出した。
中学二年のときの同級生。

「鹿嶋くんやん」

深緑の細いメガネで茶髪。
背も多分以前よりだいぶ伸びたのだろう、私より頭ひとつ大きい。
少しどきっとしたんだが、かなりカッコイイ。

「久瀬くんはいっしょちゃうん？」

私の中では、鹿嶋くんは久瀬くんとセットになっている。
私、実は久瀬くんも卒業式の日以来顔を見ていない。最後の近況報告メールも五月ごろ。それによると、鹿嶋とは同じ高校でまたも同じクラスになってしまった、僕はバイトで、鹿嶋は塾通いでバン

ドはちょっと疎遠、云々。
要するに、変わらず二人はワンセットなのだと納得した。

「久瀬もいっしょの予定やで。ヤロウ二人で花火見物と、洒落込むつもりやったから」
「こっちも大和撫子二本で炎の芸術を愛でるつもりやけど」

鹿嶋くんは急にうつむいて、ぷっと失笑した。
なにがおかしいのか知らないが失礼なやつである。
私はかまわず、なつきには中学の同級生と、鹿嶋君には同級生のなつき、と紹介した。

「ほなら、大和撫子にものは相談」

鹿嶋くんは笑いをこぼしつつ、続ける。

「一緒に花火見いひん？」

別になんてことはない。
なつきが肯くのを確認して、私は素っ気なくええよ、と答えた。
その後、私たちは上流河川敷へと赴いた。
人口密度は低く、のんびり座って見られる。おとなりの家族四人から数メートル離れているくらいだ。意外にも、東谷公園より蚊は来ない。いいこと尽くしじゃないだろうか？
去年より人少ないな、と鹿嶋くんは言った。

「淀川と神戸の花火大会とかぶってるからちゃうかな」

なつきが推理を披露。
鹿嶋くんは、絶対それ！　と大きな声で同意した。

「そういや塾でみなと花火の穴場情報交換しとったな。兵庫突堤近辺とか、ポーアイしおさい公園とか」
「苅野で十分やなぁ。立ってるの、しんどいし」

なつきは活発そうな外見とは相反した、枯れたことを言う。
神戸と淀川は四千発を見に、公称二〇万ないし三〇万人がやってくる。それに比べ苅野は二千五〇〇発、苅野市民の三分の一が来たってせいぜい五万人だ。スターマインもあるし、夜は都会に比べて数度、気温も低い。
花火の後のらぶらぶイベントを考えなければ、苅野の花火のほうがいいじゃないか。
具体的数字を根拠に並べ、鹿嶋くんは『花火を純粋に楽しむなら地方の大会』説を力説した。このへんは久瀬くんの友達らしい。

「それを思うと、このノンビリさは贅沢と天宮は考えるね」
「うん、贅沢」

なつきと鹿嶋くんと私は、すでに既知の友人のようだった。
なんとなく思うんだけど。
鹿嶋くん、少し照れてないか。
これは？
もしかして！？

01．再会のとき〔2〕

……いまだに久瀬くんは来ない。

二〇時半に少し遅れる。と鹿嶋くんに電話があり、すでに十五分を経過。二一時過ぎに花火は終わるはず。

ピンク、レモン、水色と淡い色遣いのスターマインが優しく空の色を彩る。

私たちは無言で空を眺めていた。

最後に幾つものきら星が素早く乱れ飛び、四方へと飛散し、空には煙だけが残った。

終わりや。そうとなりの小学生の男の子が言った。

いや、終わりじゃない。

また光の筋が空へと上がった。そして、スマイルが黒いキャンバスに描かれる。

おとなりの家族連れからも脱力の笑いが漏れた。

尊敬するぞ、花火職人よ！

突然、Ｂｅａｔｌｅｓの『Ａｌｌ　Ｍｙ　ｌｏｖｉｎｇ』。鹿嶋くんのケイタイだった。

相手は久瀬くんらしい。どうやら居場所をナビゲートしているようだ。

私は堤防上の道へと向き直り、視線を走らせた。

すると、ビックリ。

目と鼻の先にケイタイで話している、濃い色のシャツにジーンズの少年がこちらを見下ろしている。しかも目が合った。

私が大きく手をふる。すると彼はすぐに気づき、素早く河川敷に下りてきた。

「一瞬びびった」

彼は開口一番、こう言った。

「話、ちゃうやん」

話が違うって、どういう話だったんだ。

それはそれとして。

私は『ひさしぶり』と笑顔で迎えた。だが久瀬くんは私を見るなり、あからさまに『なぜいるのか』という表情をした。

どういうことよ！

大いに憤慨しかけたのもつかの間、久瀬くんの表情は瞬時に凍った。

「あ……」

彼の視線の先には、なつきが立っていた。

なつきもまた、身を固くしていた。

「もしかして、白河くん？　白河あきなりくんなん？」

なつきは小さく、かすれた声で彼に問いかけた。

久瀬くんの目線が揺らいだ。

いまや使うことの無い父方の姓で呼ばれて、動揺したのだろうか。

いや、そんなんじゃない。そんなことで動揺する人じゃない。

彼の頭上で光の輪が幾重にも広がった。

遅れて響く破裂音。しゅるしゅるという音とともに、蜂が舞う。

蜂の群れが消えた瞬間、忽然と現れる黄金の椰子林。周りからはほお、と感嘆の息がもれる。

久瀬くんがようやく口を開く。

「……自分、武崎なつき？」

二人とも、双方の相貌を見つめあったまま立ち尽くしていた。

そこには壊してはならないと思わせる空気が漂っている。静寂に包まれ、深遠で、他人には触れることのできない、見えぬ沈黙。

鹿嶋くんも私も、どうしたらいいか分からない。お互い、顔を見あわせるばかりだった。

その夜空は幻想的だった。

きらきらひかる星がいっせいに降り注ぎ、次の瞬間、山吹色の光彩が大きく花開いた。その花は枝垂れ桜のように闇を揺らす。金の花弁が無限に降り注いだ。

黄金の雨に染まってしまいたい。

途方に暮れた私は、そんな気さえした。

ファンタスティックな雨が止んだころ、周囲は帰路についていた。

明るい声で沈黙を切り裂いたのは、鹿嶋くんだった。

「なんか食ってく？」

私は少し、救われたような気がした。

＊　＊　＊

だが救われたと思ったのは、早計だった。

ここはお豆腐屋さんのレストラン。

創作和風な趣の一方、お茶カフェもやっていて、私は丹波の黒豆コーヒーを注文している。

店内は空いていた。

カフェスペースに至っては、三人しかいない。私、鹿嶋くん、久

瀬くん。お客さんはそれだけだった。
なつきはあのあと『疲れたから』とさっさと帰ってしまった。
本当に楽しかったの？
そう勘ぐってしまうような表情を残して、彼女は去った。
残されたのは微妙に気まずい空気。

「天宮さん、実はさ」

と明るく言って、鹿嶋くんは自らのカバンをあさる。
取り出したのはチケットのような紙片。

「来週の金曜、ライブやるねんけどさ、来おへん？」

私はしばらくチケットを見つめてから、ぼそぼそと言った。

「静岡のおばあちゃんちに帰るねん。金曜から」
「ああ、お盆やもんな」

鹿嶋くんは、何度も細かくうなずいた。
聞き分けのよい子供のように納得してくれるからこそ、よけいに申し訳なく思えてくる。協力できないものかと、私は頭を悩ませるのだ。
知り合いに声をかけようか。
……なつきの顔が思い浮かぶ。
次に、久瀬くんを見やる。
静かにコーヒーの味を堪能している。
いつもの如く紳士的に『意地悪』を述べはしない。視線は時々、私に向けられる。
別にいいよ、とフォローするでもなく、知らんふりを決め込むわけでもなく。

この無言が一番の『意地悪』ではないだろうか。結局は。
それにつけても、である。
なつきと久瀬くんの挙動はなんだったのだろうか。
直感的に警鐘が鳴る。
なつきは、誘えない。

「ちょっと待って」

チケットをしまおうとした鹿嶋くんから、強引にチケットを奪い返す。
とっさに、脳裏に浮かんだ。

「かのんやったら、お盆に帰省はせえへんはず」

たしか、かのんは絶賛していたはずだ。
中学校のとき、彼らがやった『文化祭ライブ』のことを。
それに加え、私は彼氏のタカくんに恩を売ったこともある。うまくたきつけたら二人そろって来る可能性は少なくない。というか断ったら不義理を糾弾してやる。

「それなら、二枚預けてもええかな?」

今度は私がふるふると、うなずく。
素早く鹿嶋くんがいま一枚、あわせて二枚をテーブルに添えて、笑顔で言う。

「ありがと!　ケーキおごろか?」
「そ、それは」

さすがに遠慮した。

「というわけで」

久瀬くんは白いカップを置いた。

「空気が重たくなったとこで、自分らが気にしてるネタ話しよか」
「気にしてるネタて」
「武崎さんのこと」

久瀬くん、にっこり笑った。
気にしてる。たしかに、間違いなく気にしてる。
だけどそうストレートに言われるのもしゃくに障るもの。だからそっけなく『あ、そ。どうぞ』と返してみる。
ところが、

「なんかあったのか。あの子と？」

鹿嶋くんは気が気でなさそうに『心の友』につめよる。
素直すぎるよ。いい人だけどさ。
それと……やっぱり。
もしかすると、もしかするかもしれない。

「中学に入る前、会ったことがあんねんな。小学校の卒業前後どっちかは忘れた」

久瀬くんは再びカップに触れた。

「会って？」
「会った。話もした。そんだけ」
「ウソぬかせ！」

という罵声を飲み込んだのは、私だけではあるまい。
お話しただけで、おたがい、あんな尋常ならざる態度をとるものだろうか。

「ホント、そんだけ」

いま一度、彼は確認するように言った。
それ以上のネタは提供されるべくもない。いかにも消化不良な気分だ。聞かないほうがマシなくらい。
私だけでなく、鹿嶋くんもかすかに不快感を顔にあらわしていた。

01．再会のとき〔3〕

日時は過ぎて、次の週の木曜。
土曜深夜からの帰省に備え、夜八時ころから荷物を詰めだしたのはいいんだが、

「ジュース忘れたよ！　お菓子もないよ！」

ということらしかった。
渋滞に遭遇したときの対策物、事前調達が上策なのである。
私がその晩、近所のコンビニに向かった理由はそういうことである。どうでもいいことだけど。
そのコンビニはぽつねんと古い住宅にまぎれている。店の明るさと原色に光る看板は周囲とは異世界という事実を主張していて、その存在を浮かび上がらせていた。
そういう店舗事情で、若者がたむろしているということはあまりない。静かに確実に、お客さんは物を買って帰る。
私が店に入ったときは、唯一のお客が出て行ったところだった。
二リットルのお茶。
野菜ジュース。
ポテト、チョコ。
おつまみに、胡桃と胡麻のお菓子。
昔は、こういう買い物も楽しかったんだよね。
小学校の遠足のおやつ。だれかが鑑定するわけでもないのに、限られた予算におさめようと努力したっけ。
いつの日からかお菓子を買うことなど日常でしかなくなり、新鮮さ、楽しさを覚えることはなくなった。制約のもとに限られた楽しみではなくなった、その代償として、大きな喜びは失われたのかもしれない。

なぜかこんな一節を思い出す。

かくして主
人を楽園より追い給い
再び過ち無き様
エデンの東の園に智天使と
自ずと旋転る焔の剣を置き
生命樹への途上を守り給う
（『創世記』第三章二四節）

アダムとイヴって、知恵の実をかじったことでエデンの園を追われ、だけど世界は広がったんだよね。それはいいことなのか、悪いことなのか。
そんなことを漠然と考えながら、私は無気力、無言でレジにお菓子の類を置く。

「いらっしゃいませ」

私は反射的に顔を上げた。
なんてカッコイイおにいさんだろう。
まずそう思い、次に『うぅ』と小さくうなってしまった。
そして完全に思い出した。

「サナリさん！？」

思いがけなく大声になってしまい、あわてて周囲を見渡した。
よく考えれば他にお客はいない。

「おひさしぶりです」

間違いなかった。

ハーフのように目鼻立ちに陰影があって細く、背もスラリと高く、心地よいテノールの声。なのにキザっぽくもなく、鑑賞していて和んでしまう。

そんなおトクな美青年、サナリさんだ。

「な、なんで？」

「ここでバイトしてるかですか？」

「そう。そうです」

「ごはん食べてくためですが」

『ごはん食べる』って言葉が全く似合ってない。

ビジュアルの美しさがゆえに、生活臭がしないのだ。この魔物さん。

「ずっと苅野で？」

「いえ。今春まで東アジアを転々としてましたよ。例のＭａｇｉＦａｒｍの修復交渉で。苅野にはつい最近戻ってきたばかりです」

二年も前のことだが、すっかり思い出される。

サナリさんが独断で＜ＭａｇｉＦａｒｍ＞という、魔物用のエサ場の結界を壊したこと。藤生氏の守役らしき立場を利用して、記憶をうまいこと操作し、自分の都合のいい魔物の上主さまとやらにしようとしたこと。

それがすっかりばれたため、藤生氏はサナリさんにＭａｇｉＦａｒｍ修復を命令した。それがこの春までかかっていた、という話だった。

「戻ってきた？」

この表現も気になる。

「勘違いしないでください。戻ってきたのは私だけです」

「そうですか」

少し落胆する。

ひさしぶりに藤生氏の姿を見られるかと思ったんだが。

「でもなんでまた苅野に。私とか、久瀬くんとか、顔見たら腹たちません？」

少しも感情に変化は見られない、というのはさっきまでの会話で判断がついた。

でもそれが不思議でならない。

二年前、サナリさんの計画を邪魔した張本人は私たちだ。サナリさんが私を恨めしく思っても不思議じゃない。

「あれは私が負けたってだけで」

「でも」

サナリさんはとくに何の感慨もない様子で続けた。

「なんにしろ、苅野に住むことになったのも、上主様のご判断がすべてです」

意外と忠誠心あふれる魔物さんだったんだ。

と、私は認識を新たにした。

確かに彼は当時言っていた。配下の数の拡張が必要だったから、

やったのだ、と。藤生氏のために動いていたというのも本当かもしれない。もっとも、自分に利益があればもっといい、とは思ったに違いないけど。

「藤生氏、最近どう」

「私の知るかぎりではご多忙極まれりといったご様子でした。片腕が、頭脳はあっても行動力のまるでない＜右目＞のみですから」

具体的なことはわからないが、やはり忙しいというのは確からしい。

じゃあ……あの港町はなんなんだ。

「サナリさんみたいに東アジア、ヨーロッパとか、行くこともあるんですか？」

「ありますよ。世界中にＭａｇｉＦａｒｍは点在していますから」

それではあの『亜麻色の髪の乙女』？

……などとはちょっと聞けない。

「他にもなにか聞きたそうな顔ですけど、今は私もあなた方と同様、ただの人間なんですよ。だからこの春以降の情報は持っていませんし、魔法とやらも使えませんし。それでも生活していかねばならないので、バイトというわけです」

彼はいわゆる謹慎という罰をくらっているらしい。

魔物とやらもタイヘンだ。

心底、私は同情した。

「お疲れ様です」

「どういたしまして。一三一二円です」

いつの間にかお菓子の類はレジ袋におさめられていた。

「なんかサナリさんと小銭って似合わへんね。もっと大金扱ってそうなカンジ」

「そうですか？」

とサナリさんは微笑で答えてくれた。そしてもう一度、

「一三一二円です」

と、お勘定の請求をくり返した。

Interlude 01.

ゆっくり丘を降りる。
ただ無言で、ひたすら歩く。
そのまましばし時が流れた。
しびれを切らしたのは少女のほうだった。口をむずむずさせ腕を振り回したかと思うと、やにわ切り出した。

「カイ。あなたはなに人？　なにしてる人？」

少女は上半身を傾けて、少年をのぞき込んだ。
藤生氏は氷の表情のまま、さらりと答える。

「日本人の留学生」
「大学生？　そうは見えないわ」

クスクスと少女は笑った。
そして、自分と同じ『家出少年』と思ってた、と付け加える。
藤生氏は前を向いたまま言う。

「家出少年と大差ないよ」
「どうしてこの港町に？」
「調べたい事があって」

いぶかしげに少女は藤生氏を見返した。

「駅で会って丘に登って海を眺めて……あなたは今日、何を調べていたというの？」
「下調べ名目の観光かな。宿は用意してるし、ゆっくりと」

少女は無言で目を伏せた。
藤生氏はその反応の理由を知っている。

「行くところ無いなら泊まる?」

少女は耳を紅に染めた。
もともと純朴さをあらわすように頬は赤みを帯びていたが、そのときは全身にまで熱が回ったように見えた。
同年代の異性、しかも今日初めて会った男に『泊まるか』と言われて、平然としているほど擦れてもいない。だが、相手が少し年上とわかったら、背伸びをしてでも大人に見られたい。

「いいわね。泊めてもらえる?」

少女、渾身の虚勢を張る。
その機微を知るや知らざるや。
藤生氏は『いいよ』と軽く答えたまま、鉄面皮を崩さない。

02．無罪証明〔1〕

ある昼下がり。
私とかのん、せりちゃんの集まりは卒業以来だった。
関西では有名なカリスマ・パティシエがプロデュースしたカフェが、苅野グラスタウンにできたっていうから、

「そこで集まろう」

ということになったのだ。
パラソルのもと、三人の女子高生はかしましい。
本音いえば、店内に居座りたかったんだけどね。涼しいから。
でも席がとれなかったんで、店内の黒と赤のアヴァンギャルドな装飾は夏にはふさわしくない！　と強がってみせたりして。
私はフォカッチャをほおばった。それから冷たいカフェラテをのどに流しこみ、また食べた。
食欲の大魔神と化し、友人のトークも耳に入らない。
そもそも困った話だった。
私の口をはさむところなど、ありゃしない。
私どもは『お年頃の』『女子高生』である。
そういう人種がもっとも熱く、深く、談義できる話とは。いわずもがな、恋愛談義である。

「あきらめんでもいいやん」

かのんはストローを勢いよく回して力説する。
かたや、せりちゃんはカプチーノの泡をなで付けながらうつむく。

「でも……自信失った」

「それ気ぃ早ない？　すでにカップルってわけちゃうねんから」

自分のぶんのフォカッチャがなくなってしまった。

「でも……」

手持ち無沙汰だ。

そろそろ会話に参加せにゃならんかな。

「その人って、同じ学校の子なん？」

かのんとせりちゃんはそろって私の顔を見た。

いや。見たというよりは、別世界から来た人のように眺めた、と表現したほうが正しい。

そして、大きく息を吐くようにかのんが答える。

「ぜんぜん、身に覚えなし？」

身に覚え。

ますます分からない。頭の上で『？』が大量に舞い踊っている。

「なんて？　かのんさん」

「せやからさぁ」

「かのん！」

せりちゃんが立ち上がってかのんの発言をさえぎった。

私もかのんも目を丸くして、彼女の次の動きを待つ。

「あかんよ……ダメな気がする。絶対」

せりちゃんは今にも涙をこぼしそうだった。
私には意味が分からなかった。
だがなんとなく、状況は分かった。
せりちゃんは好きな人がいる。ホントに好きらしい。相手は別に彼女がいるわけでもない。でも努力してもその人は振り向いてくれるだろうか……だめなんじゃないか。そんなジレンマ、絶望に近い想いを抱えている。
かのんは相手がだれか知っているみたいだけど、私には教えてくれない。
私も知っている人か。
となれば数は知れている。

「はるもそこまでアホちゃうよ」

アホで悪かったな。

「かのんに、まかせる」

せりちゃんはお手洗いに行って来る、と言ってから、くちびるをかたく結ぶと、席を立った。彼女の長い髪が揺れ、花のような香りが微かに残る。
かのんと私はしばらく黙っていた。
……これだれの曲やろ、いい声してんなあ。
重い空気に耐えかね、店に流れている音楽をサカナにそう口走ろうかと思った矢先、

「ハル、ライブのチケットありがと」

おもむろにかのんはきりだした。

「よかった？」
「すごいよかった。鹿嶋久瀬ええよね。ビジュアルもいけてる方やし偏差値高いし。惜しいっ。中学んときゲットしときゃよかったっ」
「おいおいなに言うか彼氏持ちが」
「『Ｐｏｔ　ｄｅ　ｍａｇｉｅ』てバンド名なんやって。名前だけやとコミック系みたいやけど、やってたのは『転石苔むさず』」
「ローリング・ストーンズかね」

知的なのかどあほうなのか分からんボケだ。

「ヴォーカルの人がめっちゃかっこええの！　歌はねちっこかったけど」
「ミック・ジャガーも微妙にシツコイけど、マイナス評価にはならんよ」
「顔が美しいんだわ！」
「君は音聴いてたか顔拝んでたか、どっちやのん」
「せり、花を渡しててん。ヴォーカルの彼に」

私はツッコミを止めた。

「彼は花を受け取らんかってん。そんで、天宮はるこが好きなんやって」
「は？」
「タチバナ・モトイってゆう子やけど」

だれやねん。それ。

「ハル、だまってたわけちゃうよね」

私は横に大きく頭をふって、あぜんとしつつ、答えた。

「寝耳に水なんですけど」

02．無罪証明〔2〕

「タチバナ・モトイって、だれよ」

私は戻ってきたせりちゃんに、誠心誠意、弁明をしなければならなかった。

そんな奴は知らん。

聞いたこともない。

私は確かに鹿嶋くんと久瀬くんとは友達だ。だがこの前の花火大会での再会も卒業式以来。その花火大会に『タチバナ・モトイ』なる者は存在していなかった。

こういう仮定は考えられないか。

鹿嶋くんと久瀬くんが私のことをネタにしていたとしよう。

同じバンド仲間というのなら、そのタチバナ・モトイとやらが名を知っていても不思議ではない。ネタを聞いているうちに、空想がふくらんで、そんで。

やだ。

絶対やだ。

ストーカーと紙一重としか思えん。美少年だかなんだか知らんけど、痛すぎる、カンベンしてくれってのが偽らざる本心。さりとて口にもらすとまたひと波乱。自重だ。

「本当に知らへんの」

と再度、せりちゃんは確認した。

私は知らないと答えた。だが神の名において証言したところで、客観性には欠けている。無罪の証明にはならないわけだ。

「そんなら、直接あたろっか」

「え？」

かのんはキョトンとした顔で次の言葉を待つ。
が、聡明なるせりちゃんは意図に気づいたようだ。

「待って、はるこ！」
「まずはそいつの愉快な仲間を呼ぼう」

そして本人を直接問いただせばいい。
私は携帯電話の画面に鹿嶋くんの番号を表示させた。
あわてるせりちゃんとかのんは無視。けむにまくには猛烈なスピードで走るが肝要だ。

「鹿嶋くん？　天宮っす。取り込み中やないよね」

私はまず『タチバナ・モトイ』なる人物の存在を確かめた。
鹿嶋くんはバンドのメンバーで、同じ高校二年の先輩だと答えた。
ということは、せりちゃんは鹿嶋久瀬と同じ学校だから。同じ学校の先輩というわけね。

「なんでその人、私のこと知ってるわけ？」
『そりゃネタにしとおから』
「ネタって、天宮をどうネタにするわけ？」

それは久瀬に苦情を言ってくれ、と鹿嶋くんは逃げた。
仮定は間違ってはいなかった。
知らないところで自分がネタにされている。それが原因と断ずるのは少々気が早いが、せりちゃんやかのんにいわれなき譴責を受けている遠因にはなるだろう。
怒りのボルテージが上がる。上がるにつれ、強気になる。

「そんなら不問に付したげよう。せやから、君ら三人と私らが会う算段つけて」

私は有無を言わせぬ勢いで、鹿嶋くんに要求を突きつけた。

『算段？　俺があ？』

「そう」

『……分かった。ちょっと待って』

素直に鹿嶋くんはひき受けた。

ちょっとはゴネるかと思ったけど。やっぱり鹿嶋くんは断然、人がよすぎ。

見た目は久瀬くんの方が温厚でやさしそうに見える。だから、鹿嶋くんはあらゆる局面で『心の友』よりいく分か損をしているのではなかろうか。

そんなことを考えながら、次の言葉を待った。

『幽霊って大丈夫？』

唐突に鹿嶋くんは言った。

脈略のない話。反応に苦しんだ。

『最近目撃談があんねん。幽霊船の。知らへん？』

「幽霊船？」

「それ、私も知っとおよ」

かたわらで声をあげたのはかのんだった。

せりちゃんも急に小声になって続けた。

「幽霊船って、あの芽衣川の幽霊船の話？　木造に鉄板張ったみたいなヘンな船が浮かんでるっていう……」
「有名なん？」
ふたりともうなずいた。
それなりにウワサにはなってるらしい。私、情報に疎いな。
携帯電話に再び意識を戻す。
「私以外は知っとおみたい」
『せやったら話は早い。久瀬とタチバナさんが興味あって、見に行く言うねん。天宮さんらもよけりゃ』
同じ話をかのんとせりちゃんにも話した。異口同音、賛成した。
『でねでね？　天宮さん。お願いがあるんやけど』と鹿嶋くんは一息つく、『武崎さん……な。彼女も、誘ってくれへん？』
私は一瞬、ためらった。
鹿嶋くんだって、なつきと久瀬の挙動は知っているはずだ。
だが鹿嶋くんは、あえて呼びたいと言った。
私がタチバナ・モトイなる者を確認したいのと同様、鹿嶋くんもあの両者の関係性をはっきりさせたい、そう思ったのだろうか。
「善処します」
私はどうやってなつきを口説くか、脳みそを働かせはじめていた。

Interlude 02.

石畳の街並に調和する土色の、切妻壁のホテル。
柔らかい照明は、温かさに慣れない少女に不安を覚えさせた。
さらには、藤生氏の格好はいつものTシャツにワークズボン。少女の格好も隅っこがほつれ古くなって白さを失ったワンピース、そして小汚い茶色のリュック。アットホームさを演出するエクゼクティブ・ホテルのゲストとしては、彼らの格好は不釣合いのようだ。
白と黄色の花で彩られた入り口から細長く伸びているフロント・デスク。
藤生氏がなにかを待っているすぐ横で、観光客とおぼしき日本人老夫婦がもめている。日本語スタッフがちょうど出払っていて、老夫婦も若いスタッフも、意思が通じず困っている。

「クレジットカード番号をもう一度確認させてほしいそうですよ」

藤生氏は木の香るフロントにもたれかかりながら、そうアドバイスした。
老夫婦ともども藤生氏に向き直る。そして藤生氏に質問する。

「はじめにカード番号は教えたんだがね」

当然の疑問だろう。
藤生氏は素早くスタッフを問いただす。的確を期してとのやりとりは現地の言語を使う。

「番号がクレジットカード会社で拒否されたそうです。間違ってうかがった可能性があるので確認させてほしいと」

ようやく婦人は納得した。

”Ｈｅｒｒ．ＦＵＪＩ－Ｏ．”

年かさの禿げたスタッフがジュラルミンのボックスをかかえてやってきた。

少女は興味深そうにボックスを覗き込む。

……ブロンズの十字架と赤く小さな冊子。

たったそれだけだった。十字架は精巧な細工が施されていたが、金目のものには見えない。

少女はつまらなそうにボックスから目をそらし、口笛を吹いた。

「以上です」

「ども、ありがと」

「小さなハイキングはいかがでしたか？」

「よかったよ。また、おすすめよろしく」

短く答えて、藤生氏はエレベータホールに向かう。

フロント向かいの植栽を弄って遊んでいた少女は、あわてて藤生氏を追っかけた。

「君！　助かったよ」

背後から、かの老夫が声をかけてきた。

「どういたしまして。何階ですか」

婦人の答えたとおり、藤生氏は『４』を押す。

少女は自分の降りるべき場所を確かめた『５』……最上階らしい。

「新婚旅行かな」
「はあ」

と、かなり適当に返答する藤生氏。
若いねぇ、国際結婚かね、と老婦人が盛り上がる。
間もなく、エレベータがかくんと振動し止まった。おたがいにお辞儀を交わすと、老夫婦はエレベータを降りていった。彼らを見送りドアがゆっくり閉まるのを待ちながら、藤生氏は軽く、ため息をつく。

「カイ、あの人たちはなにを言ってたの?」

藤生氏は答えなかった。
そのかわり、俺も大人になったなぁ。と、うかつにも現地語でぼそぼそつぶやく。少女は大笑いした。

03．幽霊船を考察する〔1〕

私は鹿嶋くんの提案まで、この噂を知らなかった。
この噂、とは。

――芽衣川に、幽霊船が出没する。

あまりに乏しい私の知識のフォローが必要。
それで私たちは集まった。私たちといっても、二人だけ、なんだが。
苅野市立中央図書館裏手のケーキ屋さんの、カフェ。
カップルや有閑マダムの集う中、私はパイナップルのチーズケーキを注文する。

「まずは疑問に思わんかった？」

いま一人の調査隊・久瀬くんはそう切り出した。

「なにが」

疑問？　質問？
うーん、なんにも思いつかない。
久瀬くんは私をまじまじと眺めてから、大きくため息をついた。

「なんだいその態度。むかつくぞ」
「単純で結構やなあと」

いつか一本背負いお見舞いしてやる。必ずだ。

「天宮さん。ここはひとつ真剣に考えてみてください。船はどこに浮かびますか」
「水」
私、小学生扱いか。
「水。結構な解答です。でも少し考察が足りませんね」
「海とか川とか」
「Ｆｉｎｅ！」
どこのエセ英語教師だろう。
「問題です。苅野に海はありますか」
「あっ」
海はない。
苅野市は盆地にある。昔は京の都から北へ向かい山を二つ三つと越えた、街道の要衝。今は神戸や大阪の少し離れたベッドタウン。
海は南、山を越えた神戸方面か、はるか北の日本海。
苅野には中央を流れる芽衣川と、ここに流れ込む数箇所の湖しか水源はないのだ。
『幽霊船』。
沈没や遭難した船が幽霊になる、という話はままある。
でも、川で沈没とか遭難とかして幽霊に、という話は聞いたためしがない。ましてや。
「川に幽霊船が出るって不自然」
「そうやろ？」

「お待たせいたしました」

私のトロピカル・アイスはシトラスとパッションフルーツのフレーバーティ。久瀬くんのお茶はダージリン・セカンドフラッシュ。夏摘み葉のダージリンを選ぶとは、さすが元おぼっちゃま。

そして待望のパイナップルのチーズケーキ！

「お先にどうぞ」

涼しげに優しげに、久瀬くんは微笑んだ。

なかなか、地味な委員長がイイ兄ちゃんになったな。

……いかん。だまされるな。

営業スマイルの奥に潜む本性は、腹黒い冷徹漢だ。

私は、注文が出そろうまで待つことにした。

「そういえばさ。なんで鹿嶋くんとタチバナ・モトイとやらは来ないわけよ」

「それを言えば高梨さんとか渡辺さんも来おへんやん」

「せりちゃんはともかく、かのんが地味な調査なんてするわけないやん。だいたい言い出しっぺの鹿嶋くんがなんで来ないんよ」

「奴らのことは言うでない」

「なんかあった？」

「思い出したない」

「お悩みなら天宮がうかがいますぞ」

久瀬少年は沈思黙考の末、少しいじけた表情を見せる。

「あいつらフェス遠征中」

「フェス？」

「ライジング・ジャパン・ロック・フェス！　北海道の試される大

地でコロボックルと舞い踊る二日間ッ！」

理解不能なまでの上げ上げテンション。正直、ひいた。

……夏フェスか。バンド兄ちゃんにはたまんなく魅力的なのだろうね。

ところがどっこい、久瀬くんは貧乏。

地元の名士で政治家の父親がいるのになぜ、と思うのだが、どうやら一緒に暮らしてる母親がどうも……お金の使い方が微妙に分かってない。ヘタすると久瀬くんのバイト代が、電気代に化けることもあるらしい。

ピアノも弾ける秀才貴公子、実情は苦しいらしかった。

「おサイフが追いつきませんでしたか」

「働けども及ばず、ふところ底をつく始末、無念至極」

「よしよし。かわいそうやねえ」

同情とおちょくりを同居させながら、私は悟る。

久瀬くんは『格別のモノ』にはあきらめも悪いし、ゴネるし、打ちひしがれるわけですね。弱点、見つけたり。

「こんな話しに来たんちゃう。下調べやって」

しかし彼は気持ちの切り替えも尋常なく早い。

もう少し楽しもうかと思ったが、残念だ。

「お待たせいたしました」

とお店のおねえさんが運んできたライチのデザートは、久瀬くんの頼んだ品。ライチのゼリーとムースの上にフルーツソースとライチの実。涼しそう。

彼は少し味わってから、言った。

「船の目撃談を分析しようと思う」

待ってました。そのために来たのだから。

私がケーキから目を離すと、彼は淡々と語りはじめた。

「僕が聞いたんは……」

03．幽霊船を考察する〔1〕（後書き）

注意：作中の夏フェスは実在するイベントとは一切関係ありません。

03．幽霊船を考察する〔2〕

ある夜、日付が変わる頃。
苅野市でも北のほう、田園と山あいの地域。
原付で家路へ向かう四〇代のサラリーマンは、芽衣川堤防横のカエルの合唱の中に人の声を聞いた気がした。

――えいや、えいやあ。

言葉自体は威勢のいい掛け声だった。しかしその声音は、絶望の叫び。

――――えいや、えいやあ。

声は耳元で木霊した。遠いようで近い。カエルの歌は何処へ消えたのか。
そのサラリーマンは声を振り払おうと、スピードを上げ、顔を上げた。そのとき……芽衣川堤防の上に、白いものが見えた。
白い布。
中央に棒のようなものが見えた。
マストだ。
あれは、船？
刹那のことだった。暗澹たる静寂。
そして、彼の耳には聞きなれたカエルの合唱が戻った。

「それって、呑みすぎで見た妄想やないの」

素直に認めるのもアホな気がするので、批判的態度をとってみる。

「確かに、暑くて死にそうなときはセミしぐれも壊れたテレビの音に変わるけどね」

「ほかには」

「新苅野駅からウッディプラザに上がる道で、芽衣川と交わるやん。あのへんで」

新苅野駅は田園の中にある。ウッディプラザは、せりちゃんたちと行ったイタリアンカフェのお店がある、ニュータウンのショッピングモール。芽衣川を渡って登り坂を1キロ。

確かに新苅野駅周辺は田舎だ。しかし、ウッディプラザ周辺のニュータウン住民が大阪に通うには、この駅を利用することが多い。結果、市街の中心にある苅野駅と朝の乗降客は変わらない。おそろしくベッドタウン的な駅だった。

そういう背景があるから、

「目撃談、多いんちゃう」

と期待するのだが、

「そうでもない。時間帯が終バス後になるから」

甘かったか。

「けどさすがに複数の証言がある。一番面白い話をすると」

今度は二〇代の看護婦さんの話。

新苅野駅・ウッディプラザ間には苅野市民病院がある。彼女はそこの看護婦だそうだ。

彼女は病院から駅に向かっていた。終電は深夜一時半。急いでいた。

――どおおん。

芽衣川に近づくにつれ、打ち上げ花火のような音がした。

（こんな夜中に花火大会？　花火職人でもいるのかな）

と、そんなことを考えながら坂を下る。

芽衣川を渡る歩道を早足で進むと、川の上流がわが何やら霞がかっている。

注意を払う。霞は白く、霧でもなく、光が見える。

（火が）

本格的に花火か。

――うちかた、よういい。

声が聞こえた。

ささやくようで、叫ぶよう。相反する表現だが、そうとしか言いようがない。

――うちゃれい！

どおおん、と破裂音。身体を駆け抜ける重い衝撃。

彼女はそのとき見た。

巨大な物体が川面に浮かぶ。

光を放つ朱い楼閣。楼閣の下部側面から突き出た無数の棒……。

なんてどハデな船だ、と彼女は思った。

そして次の瞬間、その威容は消えていた。

「久瀬くんちょい待ち」

私は疑問を投げかけた。

「なんでしょう」

「光っててなんで船が朱色て分かるん」

「ツッコミ入れなさんな。世の中には説明できんことがあるのだよ」

「それ言われると」

私は首をひねる。

「納得できへんか」久瀬くんは苦笑しながら続けた、「原理を科学的には説明できへんけど、それを超越した論理ってもんはある」

「藤生氏が風を呼べるのは、魔法が使えるから、みたいな」

「幽霊だから朱色の船と判別できた、みたいな」

上手いこと言いくるめられた気がする。

それにつけても、朱色の楼閣。

なんだかにぎやかだ。

ボートや漁船を想像してはいけないだろう。『巨大な物体』というくらいだから。神戸港に泊まってるタンカーは黒と朱色だ。でも客船のルミナス号は白っぽい。

そういえば、せりちゃんがこの前言っていた。

「木造に鉄板」

「木造？」

すかさず久瀬くんは聞き直す。

「このまえせりちゃんが言うてて」

木造に鉄板張ったみたいなヘンな船。
確か、そう話していたはず。

「……昔」
「むかしあるところに」
「船はよう分からん」

だから図書館で調べよう。
久瀬くんは私のボケを無視して、静かに空のカップを置いた。
私は、残るチーズケーキを急いで食べる。

「んなハムスターみたいにほおばらんでも。図書館はまだ閉まらへんて」

怒るぞ。
私がにらもうと顔を上げたら、久瀬くんはニコリと笑った。
彼はサギ師かホストになったら大もうけじゃないんだろうか。そんなことを、ふと思った。

03．幽霊船を考察する〔3〕

苅野市立中央図書館は混雑していた。
書架の机はおろか、自習室までふさがっていた。雑誌室の椅子も占拠され、二階への階段にも小学生が座りこんでいる。
静かに調査をする雰囲気ではない。
検索端末で、なにを検索するわけでもないのに遊んでいる子供もいる。
久瀬くんはカウンターに向かった。

「日本の船の歴史がわかる本って、どこにありますか」

聞いたほうがよっぽど早い。
カウンターのお姉さんは、素早く検索し、案内してくれた。

「日本の船の歴史を調べれば分かるん」

久瀬くんのあとを追いながら、たずねた。

「日本の川でギリシアのガレー船が浮いてるとも考えにくいしね。カラック船やジャンク船は証言とは合わへんし」
「……はあ」

暗号を聞いたみたいだ。

「そんで。船の形態について、証言をまとめるとこうなる」

そう言いながら、久瀬くんはメモを差し出した。

１）帆を張っている（帆船）
２）マストは1本、おそらく多くとも数本程度
３）櫓が側面から出ている
４）大砲を備えている
５）比較的大型船である
６）甲板上は楼閣を備えている
７）木造
８）鉄板による側面保護

あまり字はうまくない。
という感想は置いといて。
最後のひとつ「鉄板による側面保護」は走り書きだった。私の発言を受けてだろうが、いつメモしたんだ。店でる前にお手洗いに行ったときかな。
という、どうでもいいことも置いといて。
久瀬くんは『日本の船（和船）』という本を手に取った。
座る場所もないから、書架に向かって立ったまま。彼は本を体から離し、腰の高さで開く。私からも見やすい。
この本は、図版がわかりやすく、船がどういう姿だったかよくわかる。結構面白そうだ。
日本の古い船のこと『和船』ていうとは、知らなかったです。
さて、久瀬くんは最初のページをすっ飛ばした。

「なんで飛ばすん」
「戦国時代以前は見てもしゃーない」
「だからどうして」
「船は大砲を積んでるんやろ」
「積んでるらしいさね」
「『鉄砲伝来』以前に大砲が存在すると思えない」
「へーえ」

なるほどねえ。
これはあとで確認してみたコト。
えーと『鉄砲伝来』は１５４３年。織田信長が今川義元を倒した『桶狭間の戦い』は１５６０年。

「それから櫓を動力としているなら幕末以前が考えられる。ペリーの黒船は蒸気船やろ。開国・倒幕の流れで各藩が外国から船を買いあさって、和船はヨーロッパの船に急速に切り替わっていったから」

『ペリーの黒船来航』は１８５３年。
要するに三百年間、戦国時代・安土桃山時代・江戸時代を考察すればいいわけだ。
戦国時代の船の形態は見慣れない。
主として紹介されているのは二種類だ。
ひとつは関船（セキブネ）。大きなボートの上に大きな箱を置いたような船。
もうひとつは安宅船（アタケブネ）。箱を置いたのは一緒だが、その上に小屋と大きな帆が一枚ついている。

「これちゃう？　アタケブネ」

マスト一本、帆が一枚。

「小屋を楼閣に見立てたらメモの条件に合致する」
「軍船、やって。そやから大砲撃ってたんかな」

久瀬くんはしばらく『アタケブネ』の絵を眺めていた。
ぼんやりと。
そしてゆっくり、丹念にページを繰る。

「ゴザブネ」

彼はぽつりと、言った。
私はそのページを眺めた。
御座船。
そのモデルとして本に掲載されているのは、江戸時代、徳川幕府の将軍家光が建造させた『天地丸』という船の模型写真。
大きな一枚の帆、朱塗りの家のようなもの。たくさんの櫓。説明によれば船体は三四メートル。

「……これ、久瀬くん」
「……これ、天宮さん」

私たちは顔を見あわせた。

03．幽霊船を考察する〔4〕

「いや。そうやない」

久瀬くんは言い聞かせるように強く言った。

「これやと断定すんのは早い。だいたい船体は鉄板で覆われてんのか？」

「そのへんの解説はないね。難しい」

「こんなでかいの、芽衣川やと川底こする」

「実はたいして大きくないとか」

「なのかも、だけどそれも推測にすぎず。大道具の推定は、実際見るしかないやな。芽衣川を舞台にする理由も」

芽衣川を舞台にする理由。それはイコール、不自然にも『川』に出現する理由。芽衣川でなければならない理由。

本当にそんな理由はあるのだろうか。どの川でもいいんじゃないのか。どの川でもよい、となれば淀川に浮かんだって良いし、海でも良いのではないか。

どんな船で、どういういわれか。

そこまで追求しようとする久瀬くんの探究心はすごいものだ。

私は、幽霊船が出る！　と聞いて、面白そうとか、すごい、と思ったりしたくらいだから。

「理由なんて分かる？　実際に見たからいうて」

「あたって砕けろ」

抑揚なく彼は言って本を閉じた。

慎重派のこの発言は、本来から『あたって砕けろ』的行動原理な

私もおぼろげな不安を感じる。

「大丈夫かな」

「大丈夫じゃない。だから僕は渡邉さんや高梨さんはご遠慮願いたい、て言うたんや」

そんなん私聞いてませんけど。鹿嶋くんに言ったのかな。

いや。

ちょっと待て。

「久瀬くんさ、私については遠慮せいとは言わんかったわけ？」

「言わへんよそんな無駄なこと。天宮さんてば、言ったって聞かない。殺したって死なない。ある意味最強」

「ええ加減にしなはれや？」

「君の不安材料はタチバナだと思ってる」

「タチバナ」

私はツッコミの舌鋒を止めた。

タチバナとは、せりちゃんを拒否した挙句に私がどうのとほざいたという輩。久瀬くんのいう『不安材料』は、ホレた張ったとかいう話のことだろうか。いびられるとか、そんなのないだろうし。

私がタチバナとやらにヒトメボレするとでも？　そんなアホな！

藤生氏以上の社会逸脱ぶりか久瀬くん以上に人格歪んでない限り、私は大きな関心を寄せることはないだろう。これは自信であり、自負だ。

「不安材料てなにが」

私はあえて聞きなおした。

久瀬くんは思慮深い表情を見せ、少し間を置いて答える。

「実際見るしかないやな」
「幽霊船とおんなじかい」

私は軽口をたたいた。
だがやはり不安が心をかすめる。
久瀬くんの瞳には憂いが浮かんでいる。ほんのかすかな色合い。
注意しないと分からない。
かつて見覚えがある。
二年前だ。芽衣川の噴水結界に向かったとき。

――僕も冷静やなかったよな。

そう言いながら彼は藤生氏に思いをはせた。
その後、彼はサナリさんを裏切る。
私も今ならばそのときの感情が分かる。不安もしくは畏れ、だ。
だがタチバナなる輩を久瀬くんが懸念する理由が、私にはまったく推測できない。
ただひとつだけ考えられるとしたら。
藤生氏がらみ、とか。
飛躍しすぎだろうか。
海外ドラマを見るようにリアルな、藤生氏の『夢』。連日、あれを『見ている』ことになにか意味があると考えるのは。
努めて思いつきを装ってたずねてみた。

「……そういや最近、藤生氏から連絡ないん？」

久瀬くんは、射抜くような視線を投げてから、穏やかに返答する。

「ないけど。どしたん、突然」

「いや、ふと思い出したから」

追求するのはやめよう。逆に質問の意図を問い正されそうだ。

当たりさわりのない話題に変えよう。

「でさ、幽霊船遭遇にいつチャレンジする？」

今度は彼も、さらりと答えた。

「新月の夜」

「新月。ああよく言うやんね。『月のない夜は背中に気をつけな』」

「陳腐な言葉シリーズ、その一」

「うるさいやい」

「明るい時より幽霊も出やすい気がする、てだけのセレクトです」

じゃあさ、と私はツッコミを試みる。

「雨の日のほうが良いような気がするんやけど。光がないという意味では」

「うるさいやい」

久瀬くん、スネた。私の勝利か。

いや、彼は反論を繰り出してきた。

「だが天宮さん。雨の日は実際のとこ、条件的に良くないで」

「どして」

「大砲がぶっ放すのに適してない気がしませんか。雨よけとか面倒くさそうやし。それに」

「それに？」

「雨ん中、出かけるのはやだ」

……大いに納得させられた。

＊　＊　＊

就寝前にメールが届いた。
鹿嶋くんからだ。

『幽霊といやあ新月の夜。
てなわけで来週土曜夜十一時集合。では皆の衆、体調完備のほど！
＞天宮嬢、皆様に連絡願い奉る』

鹿嶋くん、テンション高いっす。
来週土曜ということは、新学期入ってからだ。
夏休み中じゃないのは『新月』うんぬんより、宿題の問題じゃないのか。と勘ぐってみたり。
とりあえず、私はメールをせりちゃんとかのんに転送した。
それからなつき……まだこの話をしていない。どうしよう。承諾してくれるだろうか。
……明日考えよう。とりあえず眠い。今日は頭使いすぎた。
おやすみなさい。

Interlude 03.

「十分ほど待ってて」

藤生氏がライティングデスクに向かいノートパソコンを開く動作は、全く無駄がなかった。ＰＣの起動までに椅子に腰を下ろし足を組みながら、乱雑に置かれたメモを揃えている。

少女……そして私も、彼の日常を垣間見た気がした。

無造作にテーブルに投げられた十字架の側には、分厚い本。白い山羊の皮のカバーがかかっている。なぜ山羊とわかるかって……それは私にも説明は出来ない。

大学生。

日本人。

住み慣れた家から遠く離れた都会の夜。

少女はどれも馴染みがない。不安が交錯する。

「待ってる」

と答えた少女はベッドに倒れこみ、両肩を抱えた。

屋根裏部屋のように傾斜のついた天井。落ち着いたワインレッドとディープブルーの寝具に、心地よいマットレス。心和む間接照明。窓の外に広がる港の灯。

不安が氷解し、安らぎがもたらされる。

このまま……眠りに堕ちてしまいたくなる。

藤生氏はメールを確認していた。

「白河、やなかった。久瀬やったっけ」

慣れないな、と藤生氏は独りごちた。

「苅野、芽衣川、幽霊船。幽霊船……」

藤生氏は腕組みをした。
そして無表情な彼にしては珍しく、眉間にしわを寄せていた。
厳しい表情のまま返信記事を素早くタイプする。

――天宮さん巻き込んだら殺すぞボケ。

手遅れです。
自分から首突っ込んでます。私。
その後数人に返信し、素早くパソコンを畳んで、席を立つ。
ベッドのクッションを軽く投げつけて。

「もがっ」

クッションの的にされた少女は、本気で眠りかけていた。
しかも、おなかの虫をきゅるきゅる鳴らしながら。

「悪い。寝てるのとディナーとどっちがいい」
「ディ、ディナー」
「一階のレストラン。邪魔が入るかもしれんけど、それで良ければ」
”Ｊａ……Ｎｅｉｎ．”
「どっち？」

少女は困惑の眼差しを返し、首をかしげながら答えた。

「いいのかしら。ホテルのレストランでディナーをとるのに、私、こんな服を着ているけど」
「それ、俺に言ってる？」

この貧相な格好の二人組。どこをどう見て老婦人が『新婚さん』と勘違いしたのか。藤生氏はそれが不思議でならない。

04．さぐりあい〔1〕

あの夢は荒唐無稽な話ではない。

確実に地球のどこか――行ったこともないヨーロッパ風の街――で展開されていそうな話だ。まあ私としては、藤生氏の挙動は素直に受け止められるものではないけれど。

疑問を呈したいのは舞台。

舞台である街とホテルは私が経験したことのない空間だった。『屋根裏部屋のように傾斜のついた天井』になっているホテルの内装自体、初めてであり新鮮、私にそんな発想はない。空想で創り上げるにしてはディティールが凝りすぎている。そのリアリティに私は戸惑う。

そう考えてみると、ひとつの仮説につき当たる。

あの夢は現実とリンクしているのではないか。

とすると、久瀬くんはウソをついているのではないだろうか。

私は彼に藤生氏からの連絡はないか、と尋ねた。彼は答えた。

『ないけど。どしたん、突然』

ところが藤生氏は久瀬くんのメールを確認しだい即座に返信している。あくまでメールの内容に対して事務的に。たまたま、久しぶりのやりとりだったとしたら、ほかの感情の入る余地はあるだろう。多からずもやり取りがある、と私は想像する。

そもそも、である。

藤生氏が久瀬くんからのメールを見たタイミングはいつなんだろう。

図書館に赴いた後日だろうか。後ならいいが、前の話なら虚言の

可能性が高くなる。
いまひとつ判断がつかない。
私たちの日常と夢の中の出来事の「時の流れ」が違うからだ。
夢を見はじめて、かれこれ数週間がたつ。ところが私が見た藤生氏の「物語」は夕焼けが去った数時間の話。数週間かけてたった一日の出来事すら終わっていない。

――夢は「過去」なのか。「未来」なのか。
それとも現実ではないのか。たんに私が精緻に創り上げた絵空事なのか。
無限階段をのぼり続けるような自問自答を、私はくり返す。

＊　＊　＊

新学期。
いきなり確認テストとは、なんと非人道的な仕打ちだろうか！
私は武崎なつきに断固、不平をぶちまける。
なつきは大人しく耳を傾けていたのだが、私が口を閉じるとぽそっと、つぶやいた。

「お休み気分ひきしめっしょ？」

大人な意見だ。言い返す言葉もない。
反論すると私のヘナチョコぶりをさらすことになるので、あえて話題を変えることにする。
話題は、そう。アレだ。

「幽霊船の話、知ってる？」
「ゆうれいせん？」
なつきはオウム返しに聞き返してきた。
「芽衣川に深夜、船が出現するんやって」
私は、ちらとなつきの顔色をうかがう。
興味ナシというわけでもなく、大いに関心を寄せているわけでもなく。
だが彼女を誘う義務が私にはある。鹿嶋くんのためだ。
私は平静を保つようつとめながら、落ちついて話をつづける。
「目撃したっていう人間もリーマンとか看護婦とか、まっとうな人たちなんよ。川から音や声が聞こえて、不審な構造物があると思ったら、船が浮かんでたって」
「川に幽霊船て変」
「やろ？」
なつきは私より頭がいい。私は久瀬くんに諭されるまで不自然さに気づかなかったんよね。
少し複雑な気分になりながら、
「しかもその船、大きくて朱塗りでハデやそうやねん」
「なんか具体的表現」
「そこが非常に興味深くてね」私は声を落とす、「探究心そそられるねんな。実際どんなんやろって、すごく」
「つぅか、すでに見に行く気マンマンちゃうのん」
なつきは予想以上にこの話題に関心をよせている。

すでに彼女は私が誘いをかけていることを見抜いているようだが、それはかえって好都合だった。ムダに頭を使うことなく直球勝負に出られる。

「なつきも一緒にどう?」

しばらく彼女は口をぽかんと開けたまま、首をかしげて考えていた。

たて続けに二球目を投げる私。

「今週土曜、夜を考えてんねんけど」

「夜って、夜中?」

彼女は難色を示す。

「ちゃんと成人の保護者と<足>を用意しとおよ」

鹿嶋くんはお姉さんも連れて来る、とのことだった。理由は、自動車がないと帰りが怖い、ということ。

都会の人からすると、ガキっぽい理由だと思うかもしれない。が、ベッドタウン苅野市は実のところ田舎、真夜中はとことん真っ暗になる。ましてや、集合場所の新苅野駅周辺は遠景に大きいマンションがぽつねんと二棟、食事処がぽつぽつあるくらいで、あとは河原と田んぼの寂しい場所なのだ。そんなところで幽霊に対面するには、ある意味度胸がいる。

これが神戸の生田川や大阪の淀川だったら。あまり怖くないだろう。適当にネカフェかカラオケボックスでも手配して一晩すごすやろし。

「鹿嶋くんて、あの花火の」

なつきはすぐに思い出したようだ。
私が、ふむ、と答えると、
「じゃあ」
なつきは口元に手を当て、しばらく考えてからつぶやく。
「白河くんもいるんやね」
「そうやけど。不都合？」
私は少し突っ込んでみることにした。彼女の表情は曇ってはいない。
「不都合やないよ」
「いまは親が離婚したんで、白河やなくて久瀬っていうんだけどさ、あやつはなつきのこと『小学校のときの知り合い』と言うてたけど」
彼女は遠景を望むような表情で言った。
「そっか。離婚しはったんや」
「うん。そやから今は白河やないよ」
と、私は受け答えしながら思う。
私となつきの受け答えが微妙にずれている。
私は『小学校のときの知り合いって言ってたけど、どうよ』と聞きたかったわけだ。でも、なつきは別の話に論旨を置いた。
離婚しはったんや、って。

彼の家庭事情を知っているからこその、反応ではないのか。それがフツウに『知り合い』と言えるものなのか。
これはなにかあるんじゃないのか。
深読みしすぎだろうか？

「もし、あやつとは顔を合わせたくないとかならええよ」

思いやり半分、探り半分の提案である。

「別にそんなことないよ」
「『会いたくないやつと会っちゃったな』て顔してたし」
「そんなことないよ」

少しなつきの表情が曇ってきた。このへんで切り上げたほうがよさそうだ。

「じゃ今週末」

と念を押した。なつきの首が縦に動いたことを確認。とっとと別の話題に移る。

「しっかしさあ。びっくりたまげたね」
「なにが？」

04．さぐりあい〔2〕

最近、あるお菓子がお気に入りでコンビニに通っている。
誤解のないように断っておく。決して、コンビニの魔物さんに会いに行くわけではない。

「サナリさん」

カップラーメンの棚を整理し終わった銀縁メガネ青年は、ダンボールをつぶしていた。
以前のようにカッコいいオーラはない。
似合わない銀縁メガネのせいだ。故意、だろう。アイテムで美青年レベルを下げる、という術を編み出したらしい。
私はパウチ入りのお菓子を握りしめている。クルミにカラメルをかけてゴマを散らし、軽く焼いたもの。軽い口ざわりと香ばしさ、くどくならずに広がるカラメルの甘さ。これがほかのコンビニには売っていない。私が買い続けるから、ここでだけ入荷されているのかもしれない。
レジに戻る彼の後ろをついて行く。

「サナリさんは、藤生氏と連絡をとることはないんですか」
「基本的に、私からは出来ません」
「基本的に？　も少し詳しく教えていただけますか」
「はい。上主様の命令を私は受ける義務があります。でも、私にはあの方に申し上げる権利は基本的にはない。行使するとすれば禁……法律を破るのと同じです」
「手段としてはあるけど、やっちゃいけないってことですか」
「そういうことです」

沈黙。バーコードリーダーの電子音が耳につく。
うつむいたサナリさんの顔は少し、寂しげに見える。

「じゃあ、知りませんかね。藤生氏と久瀬くんて、結構連絡とってるかどうか」

サナリさんは顔を上げた。
そして、思いを巡らすような眼差し。銀縁の奥の瞳が光る。

「考えたことがなかったな……いや、存じ上げはしませんが」

彼はなにを思索したのだろうか。
私の質問は、意外と盲点をついていたのかも。
私にはなにが盲点となっているかすら、分からないが。

「旧知の友人と連絡をとりあうことはあるでしょう。彼らはいわゆる『幼なじみ』ですし」
「そうかな」
「なにか、ひっかかる話があるんですか」

反対にサナリさんが私に問いかける。

「ちょっと思っただけ。私も連絡してみたいなーなどと思ってみたり」

言えやしない。『夢でメール送ってました』なんて。

「そうですか。じゃあ探っておきます。今度のバンドの練習に参加してみて」
「へ？」

バンド？

「バンドって」

「アキナリがバンドをやっているんですが」

「久瀬くんの……メンバーなんですかっ！」

寝耳に水だ。仰天動地で目の玉ぽろんと飛び出そう。

「もしやサナリさんが『タチバナ・モトイ』やないっすよね」

「『タチバナ・モトイ』をご存知でしたか」

「話には聞いてますが。久瀬くんが彼には気をつけなさい、と」

サナリさんは嘘はつかない。

ただし『嘘はつかない』イコール『真実だけを話す』でないのがミソ。だが、何らかの情報が得られればそれでいい。

どうも、久瀬発言で不安が頭をもたげてきている。

「彼がどういう人間なのかを知りたいのですね」

私は何度もうなずいた。

「実際に顔をつきあわせるのが一番でしょう」

「やはり同じこと言うし！」

「アキナリも同じことを言いましたか」サナリさんがレジ袋を差し出して微笑む、「ここはぜひ、あなたの印象をぜひ聞かせてほしいものです」

私は返事に困り……今日のお会計一五七円ちょうどを財布から取り出した。

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ　０４．

藤生氏は振り返る。

「ムッシュ・フジオ」

窓際のテーブルに座る藤生氏の右手、少女の向かい側。その青年は立っていた。

「おひさしぶりですね」

藤生氏は無言で視線を目の前のプレートに落とす。

青年はやれやれ、といった手振りをオーバーに表現してみせた。その所作に青年の美しいプラチナの髪は玩ばれるように揺れる。全身を黒で統一した端正なスタイルも含め、すべてが洗練されていた。

「あなたは地獄の門番のような顔をしていますね。しかも冷淡だ。広い世界で再会した祝杯を互いに交わそうとは言いませんが、偽りでももう少し歓迎の態度を示してもよいとは思いませんか？　昔の貴方は紳士でしたよ」

「邪魔すんな。フロリアン」

青年の雄弁に対し、藤生氏の返答はこの一言だけだった。

「Ｅｘｃｕｓｅｚ－ｍｏｉ――あなたがいるなら挨拶をせねばならないと思っただけなのですよ。至福の時を邪魔するほど僕は罪深くはないし愚者でもない」

少女は、青年の一挙一動をわき目も振らず捉えていた。

青年は少女の瞳を意識していた。それがゆえ、彼は少女に決して視線を向けはしなかった。ただ優雅な微笑みを絶やさず、口ずさむように言う。

「カイ、愛らしいマドモワゼルと楽しいひとときを」

そして、彼は王様へ許しを請うがごとく、胸に手を当て一礼をして去るのだった。

少女は姿が消えるまで、彼の背中を目で追っていた。

シャンパンを一気に飲み干す藤生氏。

「カユいねんボケが」

少女にも藤生氏の不機嫌さが伝わってくる。

なにが彼の気に障ったのだろう。彼女は問いかける、

「あなたはデートの邪魔が入るって言っていた。それが彼なの？」

「そう」

「あの人は知り合い？」

「まあね」

「あなたの親切ではない態度を、私は理解できない」

フロリアンという青年の礼儀を邪険に扱う藤生氏。

そういう印象を、亜麻色の髪の彼女は持ったようだった。

彼女にはどんな会話だったかは、ほとんど分からなかっただろう。

少女の知らない言葉で話していたからだ。

いや、おそらくは会話の不理解だけではない。

彼女の非難は至極まっとうな意見だ。事情を知らない限りにおいては。逆にいえば、あの態度をとった理由を理解するにはそれなりの事情、あの青年が何者なのかを知る必要がある。

果たして藤生氏はそれを説明するだろうか。

「親切にする必要がない」
「不誠実な行いだわ」
「彼は、俺の調査を探りにきた」
「調査を？　丘に登って海を見ただけの？」

藤生氏はフォークを手にしてサーモンを食べはじめた。
バターソテーにサワークリームとレモンを添えて。もくもくと、ゆっくりと噛んで、飲み込む。
彼の食べっぷりはあまりおいしそうに見えない。

「カイ、聞いている？」

藤生氏はフォークを持ったまま、顔を上げた。

「あのひとクールだなとか思ってるだろ」
「なにを言っているの」
「見たまんま」

彼女は顔を真っ赤にして反論した。

「そんなことないわよ！」
「あんたは結婚詐欺師に気をつけた方がいいな」

今度は少女のほうがスプーンを引っつかんだ。
サバのスープは彼女にとっては何てことのないありふれた料理らしい。
うちと味が違う、ということだけは分かる。だがそれまでだった。
それ以上のことは混乱してよくわからない。

「あんたをここに呼び寄せたやつに失礼だろ」

かちゃん、とスプーンが音をたてた。動くことを止めた少女の手から滑り落ちたスプーンがそのまま、スープの中に沈みこんでいく。

藤生氏は沈黙の中にいる。

自意識の谷間からはい上がった少女の悲痛の声は、至極単純な問いかけでしかない。

「カイ、あなたは誰なの？」

05．月さえも眠る夜〔1〕

新月の夜。
ひんやりとした空気が肌にふれる。
昼の照りつけるような日差しを忘れさせる。涼しさは寒さと紙一重、立ち止まるとふるえさえおこる。
山あいの苅野特有の気候だった。
鈴虫。
夜露。
草の匂い。
ささやかな星空。
月明かりはない。
新苅野駅の街灯に群がる虫が、光源をさえぎる。

鹿嶋くんのお姉さんはピンクのヴィッツを、かのんの彼・タカ君はデュカティという真っ赤なバイクを新苅野駅のロータリーに停めた。お姉さんとかのん、タカ君を残し、私たちは河原へ向かう。かのんは残ることにゴネたんだが……おねえさんを一人残す不適切さをタカ君が懇々と説いてくれた。良識を持った彼氏でよかったよ。
せりちゃんとなつきと私は、芽衣川河川敷へと下りていった。そこには三人が待っている。
鹿嶋くんが私たちを出むかえた。

「まだ現れてへんよ」

せりちゃんが軽口をたたく。

「幽霊船、もう出たあとっていったら怒りの持って行き場ないよね」

私も続けて、

「とりあえず鹿嶋くん殴っときゃいいよ」

「あんたら最悪や」

なつきが小さく声をあげて笑った。

つられて、鹿嶋くんがうれしそうに口元をほころばせる。

お、いい感じ。

この調子でいこうぜ！

少し離れた川面に二人はいる。街灯が川岸の向こうにあり、人影しか見えない。立っていることだけは分かるのだが。

鹿嶋くんのあとを追い、彼らのもとへと歩む。

「タチバナさん、久瀬」

仲間の呼びかけに、その二人はふりかえる。

鹿嶋くんは先になつきを紹介した。

「はじめまして。武崎です」

私は彼らの面差しが判別できるまで待った。

「はじめまして。天宮です」

久瀬くんの隣に立つ人は、少し背が低い。

髪はゆるやかにウェーブがかかる。懐中電灯なので分かりにくいが、髪の色は抜いている。くっきりとした目鼻立ち。ハーフとかクォーターとか、そんな感じっぽい。

「どうも。橘です」

そして少し不遜さを覚える態度、事務的な返答。
私は途方に暮れた。
いきなり笑顔を見せたり小うるさい言葉をかけたりした場合の処遇を、私は事前に決めていた。貴様なぞ知るか！　と先制パンチをお見舞いする心づもりだったのだ。
ところがこの素っ気ない応答。肩すかしをくらったような気がする。

「せりちゃん」

私は困ったサインを送る。
彼女も同じサインを返す。

「あの発言は一体」

せりちゃんをフッたときに飛び出した、天宮お気に入り発言のことである。

「照れでもなさげやし」

なつきも参加して推理。ここに来るまでになつきにも事情は話している。
その場を支配しかける、妙な空気。
それをぶった切らんと、鹿嶋くんは半ば強引に、腕時計を指し示しつつおしゃべりをはじめた。

「夜一時。『草木も眠る丑三つ刻』はまさにこれから、てところやな」
「『丑三つ刻』ね」

久瀬くんが応じていわく。

「『逢う魔が時』は夕暮れの闇せまる時間やな。ほんなら夕方から今時分まではどうゆう時間なんやろ」

「フツウに闊歩(かっぽ)してますとか。なら『いつが安全やねん』てツッコミ入れたくなる俺」

「魑魅魍魎(ちみもうりょう)の類より、ヤバイ人のほうがよっぽど危険」

せりちゃんの発言。常識的にして真実だ。

「俺はヤバくないです」

「僕もです」

鹿嶋くんは片手を挙げて宣言。つづく久瀬くんも、特技の愛想笑いとともに誓いを述べる。

やっぱりこの二人、息ピッタリ。まさしく漫才コンビだ。

タチバナ・モトイ（『橘・基』と書くらしい）はそんな二人を遠巻きに眺めていた。

少し距離を置いているようで、他人のよう。だけど彼らに好意がないわけではなさそうな雰囲気。人柄がまだつかめない。感情もあまり垣間見えない。

せりちゃんを見た。腕組みしながら川を眺めて、彼女は言った。

「幽霊出ないって可能性もあるわけやよね」

「それはそれで平和でよろしいなぁ」

久瀬くんがのほほん感をかもし出しつつ、愛想をふりまく。と、すぐ横から鹿嶋くんの激しいツッコミ・ヒジ鉄。

「……あぐっ」
「お前なにしに来とんねん」

なつき、笑う。
せりちゃんも苦笑しながら。

「それこそ怒りの持って行き場ないやん」
「とりあえず鹿嶋くん殴っときゃいいよ」
「あんたらやっぱり最悪や」

かなりどうでもいい会話だ。
だが、言葉が途切れたとき周囲の非日常感を実感する。
闇。
向こう岸と遠く、駅の街灯。
空に月はなく星あかりだけ。
懐中電灯が一番確かな光だ。
静寂。
ささやかに水が遊ぶ川のせせらぎ。
虫たちの歌。
羽音さえも音楽。
なにかを話さなくちゃ。
私たちのハイテンションな会話こそ、恐怖をおさえこむ武器なのだ。

「出たらば、渡辺さんよけい悔しがるかも」

なつきのつぶやきに、せりちゃんはそうよねぇ、と明るく同意。
つづいて鹿嶋くんはわざとらしくため息をつく。

「お前らと思考回路が違うわやっぱ。みんないい方向に考えようや、

な？」
「殴られんで良かったな。鹿嶋」
「ケンカやったら買うぞ。久瀬」

アホコンビだ。
断っておくけどほめ言葉です、あくまで。
私は彼らの盛り上がりをよそに、橘の様子をうかがっていた。
彼は少し前から川面に注視している。左手を軽くズボンのポケットに突っ込んで、少しだるそうな態度で。
私はそれに、軽いデジャヴを覚える。
――このデジャヴ、なに。
私は戸惑いながらもおぼろげに思う。
――追求は、やめるべき。
好奇心。それと相反する自制心。自制を求める危機感。
この危機感はなんだろう……。
久瀬くんに視線を向ける。

「出てきてほしいのか出ていらんのか、どっちやねん」

他愛のない会話のツッコミ中。
頼れないかも。
そう考えたとき、彼はちらっと詰問するような視線を向けた。
だれも気づかないほどの一瞬だ。

『どう感じた？』

そう回答を強制されたようで、目をそらす。そらさずとも、彼が私に目を向けたのはひとときほどもないのだが。
私は結論を出すことをやめ、橘が見ている川面へと目を向けた。
向こう岸の街灯が乱反射してできた、うすぼんやりとした光が浮

かぶ。
……いや、違う。
「なんか悪寒が走った」
「オカンが走った?」
「そのオカンとちゃうわっ。寒気のほうやっ」
こんなときでもボケツッコミは忘れない。
「なにこれ!」
せりちゃんが声をあげた。
異変は明らかだった。
霧が周囲をとりかこむ。驚異的な速さで視界は失われていった。駅も川岸も、マンションの明かりも田んぼも気づいたときには見えない。かすんだ視界の中でおたがいの姿を確認するのが精一杯になっていた。
鹿嶋久瀬にしろ、せりちゃんもなつきも、きわめて強い意志で自分を律する。だれも『怖い』とは口にしない。恐慌状態に陥った瞬間、ほかのメンバーも恐怖のどん底へまっしぐらだ。全員それを理解している。
「マジでさ、これなによ」
「霧」
「見たまんまやん」
このやりとりだって恐怖心を払拭するためだ。
……と受け止めるのは、かいかぶりでしょうか?

05．月さえも眠る夜〔2〕

「見えてきた」

あいさつ以来、初めてタチバナが口を開く。一同に緊迫感が走る。
つづけて鹿嶋くんが間延びした声で、

「久瀬、大きなクジラやな」
「ボケはこのへんでやめとこ。奴に失礼やからな」

久瀬くんは襟を正して＜奴＞を見上げた。
＜奴＞は白く光っている。
間もなく、その輪郭を正確にとらえることができた。この霞の中にいながら、だ。それこそ不思議なのだが考察を放棄するくらい、私は＜奴＞の姿に圧倒されていた。
まさしく黒い巨体。
その意味で鹿嶋くんの『大きなクジラ』は正しい。
話にたがわぬ威圧感であり、存在自体が見る者への恫喝だ。
全員があおぎ見た。
クジラの上にすえられたまばゆい＜楼閣＞。一部しか見えないが、その華々しさは一望して分かる。

「近づいてみる？」

私の果敢な提案に、全員が同意した。
聖書にいわく。

――――恐れるな、私は貴方と共にいる。たじろぐな、私が貴方の

神だから。（イザヤ書４１章１節）

いやいや怖いもんは怖いわ。

川岸から船へ、二本の道が伸びていた。

いわゆる桟橋というものだろう。桟橋は二本とも、体の幅くらいの板を継いだもののようだ。全力疾走しろと言われるとちょっと自信がない、そのくらいの横幅。二本の道は互いにからだひとつ分の距離をおいている。行き帰り、一人一本というところだろうか。船までの推定距離、十数メートル。

いざとなると足がすくむ。

だれか先に歩けよ、と心中、思う。

せりちゃんは半泣きの態である。鹿嶋くん、顔は笑っている。さりながら、ほおのあたりが引きつっている。

「ふーん」

タチバナが楼閣を見上げ、感嘆の声をあげる。不敵な視線を幽霊船に投げかけ、明らかに状況を楽しんでいた。

そしていま一人冷静な人間がいる。

「装甲船ぽいな。確かに上の方は木みたいやけど」

久瀬くんだ。超常現象への恐怖もへったくれもない、その好奇心に感服。彼らを観察するにつれ、必要以上に不安になることもないだろうと思ったりもして、多少気分が落ち着いてきた。

「櫓、異様に多いな……イカも泣いて逃げるな」

「ゴタク並べるより行こや」

タチバナは板の上に足を乗せて久瀬くんに視線を投げると、

「そやな」

久瀬くんも積極的に歩みを進めた。桟橋は私たちもまともに歩けるらしい。

「ちょっと待ってよう！」

せりちゃんが悲壮な声を上げる。鹿嶋くんもまた、頼りない顔をしながら板にそおっと、足を乗せている。

私、ですか？

私はなつきの様子をうかがっていた。

彼女はあらぬ方向を見つめている。行こう、と声をかける前にその眼差しの行方を追ったのだが。

「う」

私は絶句した。

な、なんか、いません？

目を凝らして輪郭をとらえる。人影に違いない。褐色の地味な、でもこぎれいな着物。そして印象的な長い黒髪。当然、女の人だ。

まさか、うらめしや？

あ……。

目が合った。

全身から血の気が引きかけたそのとき、

「はるちゃん！」

思わず肩をすくめ、声の主を見る。

せりちゃんだ。妙なものを見るような視線が私に突きささる。
でも私はほっとしている。……よく声をかけてくれたものだ。

「なつき」

私は小声で彼女に声をかけた。
すると彼女は、きょとんとしながら言った。

「どうしたん？　行こ」

私は耳を疑った。
立ち止まっているのが私・天宮のせいと言わんばかりだ。なつきこそ、今まで遠いところを見ていたというのに。それでいて彼女、悪気は微塵も感じさせない。むしろ心配そうに私を気遣うさまを見せている。
なんで私が気遣われなきゃならんのだ。
なつきこそ、と反論しかけた。
……やめておこう。
反論を試みても場が混乱するだろう。なつきの態度に加えて、せりちゃんも私を見て妙な顔をしたってのもあるし。
とりあえず、

「考えごとしててん。ごめん」

と、私はその場を言いつくろった。
そしてなつきに前を歩いてもらい、私は最後尾をゆく。
すぐに私たちは先頭集団に追いついた。出むかえたのは意外にもタチバナである。

「怖いん？」

小馬鹿にしたような物言いにカチンとくるが、そこはおさえて。

「平気と言うたらウソかもね」

これはなかなか冷静でオトナな答えだぞ。

私、ちょっと酔いしれる。

すでに船のそばである。ここは板の道がつながり、十人くらい楽に並べるスペースができている。

今ごろ疑問に思いはじめたけれど、このへんの水深は深いのだろうか。大きい船が進水してるくらいだし、桟橋作るくらいだし。普段は気にしたことがないから……もしかして、川に落ちたらえらいことになる？

懐中電灯はその役割を終え、久瀬くんのリュックに納まっている。船の周囲は暗いが、頭上が明るく、おたがいの姿を確認できた。幽霊船の幽霊さんに見とがめられる可能性は皆無ではない。

そんな不安があるやなしや。

学究精神満々の久瀬少年はそりゃもう、楽しそうだ。

「やっぱし鉄張りやけど、めっちゃ薄っ。思ってたより結構すごいかも」

彼の賞賛の的は、船を覆う鉄。船体自体は木製だ。鉄ののべ板は上から貼り付けられたもので、そのすき間からはところどころ、塗り木が垣間見える。鉄板は厚紙の広告と大学ノートのあいだくらいの厚み。

そんなすごいものなのか。ちょっと触れてみる。

冷たい。

どちらかというとざらっとした質感だ。

「錆びる直前の鉄っぽい」

感想を述べつつ振り返ると全員、観察するように私を眺めている。

「はるちゃん大丈夫？」（なつき談）

「触れるんやなあ……」（久瀬談）

「天宮さんなんともないんかいな」（鹿嶋談）

「よう触る気になるね」（せり談）

「猪突猛進」（タチバナ談）

私・天宮がこの場の全員に『最強』の烙印を押された瞬間だった。

いや、ちょっと待ってくれ。

「あの板の道を歩けるんやったら、船を触るくらい大丈夫では」

全員こぞって無言で否定した。

「なんでやねん！」

せめてここをお読みの皆さんは、同意していただきたい。それが無理なら、先駆者たる私の果敢なる勇気を称えていただきたい。

さて、先駆者たるもの常に衆人に先んずる冒険心は欠かすべからざるもの。

「どうせやったら乗船してみたくない？」

タチバナは同意するより先にすぐそばを指差した。

「縄ばしご」

確かに、もう一本の板の道側にそれはあった。しかも腰の位置までに下ろされている。

……なんでご都合主義的に縄ばしごが。片付けとけよ。

だれに対してかは分からないが、とりあえずツッコミ入れておくとして。

乗る手だてがある限り、冒険者たるもの突き進まねばなるまい。

選択肢はない。……一方で『やけのやんぱち』という言葉が脳裏をかすめるのだが。

「先頭行かせてもらうわ」

橘は先に断りを入れながらも、さりげなく前へ出た。

久瀬くんが必要以上に語らぬ先輩の意図を代弁する。

「ここからはさすがに猪突猛進はヤバイやろ」

すみませんね、猪突猛進で。

「それと全員。今からは、しゃべり、厳禁な」

「了解ッス」

鹿嶋くん、お約束のボケである。

すぐさま久瀬くんは、

「黙れと言うたやないかい！」

とツッコミを入れるかわりに、無言で相方の腹にグーを入れた。

05．月さえも眠る夜〔3〕

桟橋を歩いた順番にはしごをよじ登り、甲板に上がる。
私もせりちゃんも、

「こんだけの高さ、上ってきたんだ」

という気分で川面を見下ろす。
校舎の三階くらいはありそうだ。ただし、暗さで距離感は狂っているかもしれない。そもそも幽霊であろうこの船、物理的な距離が測れるシロモノなのかも不明だ。
今度は見上げてみよう。
川岸からは屋根部分しか見えなかった楼閣。逆に今は、屋根が見えない。どうも三階建らしい。白塗りの壁がまるでお城だ。
甲板には、縄とか箱とかたたんだ布とかが雑然と置かれていた。その間から柱が伸びている。このへんの布をこの柱に引っ掛けて、帆を張るんだろうけど……足の踏み場がない。どうも整理整頓がなっていないんじゃないか。よけいなお世話かな。
意外と揺れはない。ゼロではないけれど。船に乗った経験は数少ないが、その経験からして揺れは「ないも同然」といえる。船酔いを起こすのは至難の業だろうってくらい。
私たちのいる場所は船の後ろ側だろうか。川岸から見た感覚で判断している。
それにしても、甲板には私たち以外の人気がない。いや、幽霊船だから「幽霊気」か？
思い切って船の後ろ端に行ってみる。
ハンドボール大の直径くらいの、長い鉄の筒が三本、並べてある。
これはなんだろう。
私となつきが『？』を顔いっぱいに表すと、鹿嶋くんは長い銃を

抱えて狙撃するようなふりをしてみせた。
鉄砲？
せりちゃんはというと、マッチを擦って導火線に火をつけ、耳をふさいでいるらしい。
大砲？
久瀬くんは両人のパントマイムにＯＫサインを出した。どちらも正解、というわけか。
大きな鉄砲かつ小さな大砲というところか。なんだか中途半端な。大きいなら大きい、小さいなら小さいで作りゃええのに。
そういえば目撃談に『大砲の音』てのもあったね。その正体がこれなのだろうか。

「何とよ！」

全員がはっとして、お互いを見た。

「船上にはだれもおらぬのか」

男の人の声だ。それは船の外、船の下から聞こえる。

「人払いをせよとの仰せゆえ」

船のへさきから少し顔をのぞかせる。
小船が大船にへばりつくように浮かんでいる。そこには灯りに照らされた、ちょんまげ二つ。
ちょんまげ。『お侍さん』『武士』とやらか？
おお！　武士だ。今、武士を見下ろしてるよ私。会話聞いてるよっ。

「貴公。いくら人払いの後とてだれもおらぬは、無用心にも程があ

ろう」
「闖入者が入ることもまかりなるまいとは。その自信、なにを以ってか」
という二人のクエスチョンに対して、もう一人のアンサー。ボウジをたてケッカイをはっておるでな、とその武士みたいな人は胸はって答えてる。
ケッカイ。『結界』のことか。
どこにそんなものがあるんだ。その結界とやら、破ってる奴らがここに六人もいるんですけど。
「それでも油断は禁物。万全を期し井楼の周囲に番を置くべきと存ずる」
「しかし足軽衆は一刻帰ってこぬ」
「拙者どもが当たればよかろう」
つまり彼らは甲板の番をするらしい。
ということは。
……見つかるやん！
私たちはあわてて、撤退路を探した。
だが、はしごは私たちが上ってきたもの以外はないようだ。そのはしごは、さっきの武士が上ってきているのだろう。荒縄がきしむ音がしはじめた。むろん、三階の高さからダイブする、無謀な勇気を持ち合わせている者はいない。
冷や汗が出る。心拍数が上がる。
武士が上ってくる。
私たちは手っ取り早い隠れ場所に逃げ込んだ。
それはすなわち、楼閣の中だった。
しまった、という表情をみんな浮かべている。
さしずめここは、ことわざの『虎口に入らずんば虎子を得ず』の

虎口だ。でも私はトラの子供なんてほしくない。かわいいかもしれないけど。

楼閣の中は明るい。

ランタン型の懐中電灯がところどころつり下げられているのだ。よくみると……ＬＥＤライト。この最先端ぶりどういうこと？　幽霊船と武士にエコ電球。ミスマッチもいいとこだ。

そして外から見た楼閣の大きさからすると、意外と狭い。

人三人並んだらおしまい。通路はまっすぐに、それこそ迂遠に延びている気もする。距離感がおかしくなっているには違いない。

通路はまっすぐだが所々、壁がへこんでいる。ちょうど人ひとりくらいはおさまる凸凹ぶり。いざとなったら隠れられる……かもしれない。

例の武士、甲板にあがったのだろう。

楼閣の出入り口は白い布のカーテンだ。声はよく聞こえる。

「随分散らかしておるな」

「確かに。麻網を張り巡らすどころか、甲板に放りはなしじゃ」

声がだんだん近づいてくる。

「まったく、非常時出来となればいかにする」

「貴公のいうといおり。大事の前にこれはな」

どうする？

久瀬くんが右手のひらを前へ突き出してみせてから、そろっと奥へと向かう。

船内を確認する。他のみんなはそのままとどまっておくように。

ということだろう。慎重派と思っていたが、意外と果敢だ。

この場で冷静に立ち回れるのは彼か橘くらいかもしれない。せり

ちゃんは怯えてるし、鹿嶋くんもなつきも落ち着かないようだ。

「将士や水主(かこ)どもをひきしめておくべきだ」

この声の主の位置関係を測る。楼閣のすぐ側に立っているに違いなかった。

そのとき。

ごん。

と、鈍い音が響く。

なつきだ。

立ちくらみだった。倒れまいと壁面にしがみついたのだが……。

なつきの顔は顔面蒼白。だが、私も血の気が引いた。

問題は外の武士だ。

「どうした?」

一人が問いを発した。ということは。私は瞬時に予想した。

もう一人は気づいていた。無言で近づき、突入し、そして、

「曲者じゃ、出あえ」

と叫ぶ。お約束の展開だ。

お約束どおりでないことを祈る!

通路の先の壁面から顔が突き出る。

びくっとしたら……久瀬くんだ。

彼のいる場所は、十メートルも離れていない。ある程度のスペースがあるのだろう。

橘が両手で『×』のサインを出す。久瀬くんが戻ろうとするのを押しとどめたのだ。彼はすぐに事態に気づいたのだろうか。親指と人差し指でお金サインを出して、手をふってこちらに来るようなな

がす。ちなみにお金サインはＯＫサインの誤りだろう。そういうことにしておく。

橘は先に行くよう、他のメンバーを促す。せりちゃんと鹿嶋くんはなつきを気遣い、手を差し伸べながら早足で進む。

そして橘はポケットからビー玉を取り出し、床にそっと置いた。

（だれかがいた証拠置いてどうすんの）

私は憤慨してつめよりそうになる。

橘は私の心中を見透かしてか、口元をゆがめた。

ビー玉は電灯の光に照らされ、オレンジ色の輝きを見せている。

「行く」

橘がするどく言った。

瞬間、私は腕をつかまれ、ひっぱられた。

そりゃもう強引だ。通路をそれるにもジェットコースターさながら遠心力がかかり、急に動きが止まるや、反動で前にのめりそうになる。が、もう一度腕をひっぱられてバランスを失い、私は結局、床にへたりこんでしまった。

橘はかたわらで事務的に話す。

「この空間の音は消した」

顔を上げるとなつきと鹿嶋くんが立っている。その後ろにはせりちゃんと久瀬くん。

あれ？　せりちゃん、頭ひとつ分高いんだけど。

「話しても大丈夫」

久瀬くんはいつもの愛想笑いを浮かべる。橘は素っ気なく答えた。

「そう」

「音を消すって」

せりちゃんが私の疑問を代弁する。

時間ないな、と橘は背中を反らしてつぶやき、

「奴ら槍持って来とる。階段を」

私はようやく階段の存在に気づく。せりちゃんが頭ひとつ高いのは階段を一段、上がっているからだ。

さて。階段を上がるか、下がるか？

せりちゃんはちゅうちょすることなく、上へと向かった。

05．月さえも眠る夜〔4〕

「……との連……が……」

三階に上がると、目の前にあるのは変なマークを黒く染めた白いカーテン。カーテンを少しめくると、板ふすま。梅に桜に桔梗に牡丹と、なかなかキレイだ。声はその向こうからする。

鹿嶋くんと橘が遅れて、そっと階段を上がってくる。二階の様子を確認していたのだ。二階にも武士がいる。よって、ここでどうにかやりすごす方法を考えるしかない。

ここは下の二層とは明らかに違う間取りだ。

窓があり、のぞけば甲板の様子が見える。霧がなければ、新苅野駅か駅前マンションが見えるかもしれない。満月なら月見もいいな。

「若殿。イーユウケンは最早、時間の問題とのこと」

イーユウケン？　なんだそりゃ。

若い男だろうか、強い口調で答える。

「キボウホウもバミュウダも準備は整うた。我らの調練もこれまでにし、早う外海に出ねばならぬ」

「御意」

キボウホウ。喜望峰のことか。それって、どこだっけ。「バミュウダ」ってバミューダパンツのバミューダ？　地名でもあった気がする。

博学な久瀬くんなら知ってるだろう、と彼の様子をうかがって見る。

だが視界に入ったのは橘――彼は一歩下がりながら叫んだ、

「さがれ……！」

突如としてふすまが開いた。

頭上から、網が落ちてくる。

（やられた！）

と思ったときには遅かった。

瞬時にして、私たちは投網漁の獲物になってしまった。

「うそっ」

「マジかこれー！」

まさに一網打尽。

全員一箇所にいたことが災いしたようだ。

私たちがもがく間、若いちょんまげが十人ほど、近寄ってくる。

いや、中には頭を剃らずに髪を結ったまげもいる。

「いかがいたしましょう」

「闇夜に帰せ」

青年が鋭く命じた。

「話を聞かれておりますが」

「現世の者を殺すと厄介だ」

青年が若殿らしい。羽織を着て偉そう。

頭はちょんまげじゃなく、まげ。私的にはこのビジュアルの方が好きだ。ちなみに目鼻だちははっきりきりっと凛々しい。顔のつく

りは今風イケメンかも。
ともあれ、少なくとも槍で一突きあの世行き、にはならない模様。
だが『闇夜に帰』す、このことばがどういう意味なのか分からない不安がある。
それに目下の問題はこの網。

「どうする、鹿嶋」
「ど、どうするって」

鹿嶋くんが答えながら、手を止める。
いず方から、笛の音が聞こえる。
ゆるやかにたゆたう、美しいメロディライン。その穏やかな音色。
安心感を覚える。
心地よい。
ていうか、眠いなぁ。
……。

(はるこさん!)

どこかで声がした。女の子の声だ。

「え」
(眠らされたらあかん!)

眠らされる?
私は、はたと目を見開いた。

「なつき!　せり!」

二人は倒れていた。

私は揺さぶり、頬をはたき、起こそうとする。それでも二人は目を閉じ、深い眠りに堕ちたままだ。

「鹿嶋もや」

久瀬くんもまた、相方の体をかかえていた。橘は剣呑な目の色をたたえ立っている。

やがて、笛の音が止んだ。

「音色に囚われない、か。タダビトではなさそうだな」

その声に背筋が凍った。

ふりかえると、神社にいる人みたいな格好をした青年が背後に立っていた。なんだか陰陽師？　って感じ。彼は白い手に笛を抱えていた。先ほどの音は彼のライブ演奏だろうか。

さて、若殿は少し考えていわく。

「やむを得ぬ」

その、やむを得ぬ、の続きはなに？

武士どもの槍の白刃がキラリ、ひらめいた。

……冗談やろ、それ。

「冗談も大概にせえよ。そっちこそ結界、勝手につぶしやがって」

いらついた口調で言う橘。

神社の人（？）は眉間にしわを寄せた。

「貴様、何者だ」

私もよほど『貴様何者』と問いつめたい。
しかしそんな状況ではない。

「まあええわ」

橘が鼻で笑う。
その手の中でビー球がぶつかりあい、カチカチ音をたてている。

「さほど一般の人様に迷惑かけとるわけやなし、カギ返して道開けたら、不問に付したる」
「四の五のうるさいよ。やれ」

若殿が一喝。武士が何人も槍を突き出してきた。
逃げられへん、と頭を抱えた瞬間。

どん！

と床に衝撃が走り、辺りは煙に満ちた。
その煙幕も……消えうせると、槍の武士の姿はそこにはなかった。

「カギ返すか、船壊されるか。どっちや」

橘はさっきと変わらず手の中のビー玉をもてあそびながら、宣告する。
色をなした青年神主は、若殿へと向き直る。

「スミタカ殿、撤退命令を！」
「将士の大半が帰っておらん」

先ほどに倍する衝撃が起こる。

なぜなつきたちは起きないんだろう、というくらいだ。立ってられない。
今度は背後。煙が消えると、壁面には穴がぽっかり開いていた。外は、闇だ。

「そんなに壊してほしいんや？」

神主は若殿につかみかかって訴えている。

「忠義ある彼らだ、彷徨えども必ずや戻るはず……また長い歳月を無為に待たせるってのか！」

橘がビー玉を投げる仕草を見せた。
私は腕にしがみついて、それを止める。

「これ以上壊したってしゃあないやん」

彼らはもう、私たちをどうこうしている場合ではない。そう言いたいんだけど、うまいことばが出ない。
橘は不機嫌そうな表情で言い返す。

「あんたらには単なる探検かも知れんけど、俺はそうやない」
「カギっての、渡す気まるでないか全然知らん、て感じやん、奴ら」

久瀬くんが口をはさむ。
イライラを隠さずに橘は問う。

「なにがいいたい」
「先輩、破壊活動が目的なん？」
「……お人良しが」

――撤退！

命令は私の頭に響きわたり、大きな船のすべてに届くようにさえ思われた。

だがその命を下す若殿の顔は、苦渋に満ちていた。

……やがて目の前が急に真っ暗になり、そして、

（おしりがつめたい）

と思った。

それもそのはず。私は芽衣川の浅瀬にしりもちをついて座り込んでいたのだった。

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ　０５．

「誰って」
「夢の話よ」

藤生氏は気だるい動きで髪をかき上げる。

「私は誰にも話していないわ」
「『貴方を守る者はまどろむ事が無い。見るがよい、イスラエルを守る者はまどろむ事無く、眠る事も無い』」

藤生氏の言葉に少女は眉を寄せる。

「……何？」
「聖書詩篇。あんた本当にキリスト教徒か」
「はぐらかさないでよ」

藤生氏はギャルソンに声をかける。

「サロンの１９９０年があれば」

ギャルソンが去ると、沈黙が訪れる。
彼女は思索する。
目前に座し、グラスに残るシャンパンの芳醇を無言で称える男。
昼、国営鉄道の駅で出会ったばかりというだけの間柄だ。

――私は何も知らない。
――でも、この人は私を知っている。
――なぜこの人はそれを知っているの？

誰にも語ったことのない夢物語を。
心に固く秘していた、恋なのか否かすら分からない、想いを。
彼女の問いかけは、彼女の心の中で永久に回り続けるようにさえ見えた。

「ゼンタ」

伏せがちな藤生氏のまぶたが、少し開く。褐色の瞳にキャンドルの炎が揺らぐ。黒い髪は赤いろうそくの炎の色に染まり、紅葉が終焉するさまを思わせる。
自らの名を呼ばれた少女の瞳は潤んでいる。

「昼メシのサーモン・サンドの金、返す」
「……はい？」
「俺、借りただろう、ユーロしか持ってなかったから」

少女は……頭から湯気が出そうになる自分に気づく。
気づいてはいてもその憤りは抑えがたく、彼女は満面を朱に染めて怒鳴るのだった。

「言ったでしょう、話をはぐらかさないで！　彼のことは誰にも話したことがないのよ。カイ、あなた何なの？！」
「留学生がこの国の通貨を持っていない。それは奇妙な話だ」

少女は目を見開き、そして短く嘆息する。
藤生氏のポーカーフェイスは依然、崩れることがない。

「何だろうな。少なくともオスロ大学の留学生じゃないだろう」
「そう、確かにそうね……」

「君はゆっくり謎解きを楽しむんだね。俺もハンザ同盟以来の、歴史ある街をできるだけ長く楽しみたい」

そして藤生氏はいつにない温かな視線を少女に向けた。

――――そう、もう少し長く。

と、自らに言い聞かせるようにつぶやきながら。

06．タチバナと魔法の花瓶〔1〕

秋。夏休みボケも遠く去りゆき、芸術とおイモに心高まる季節。
幽霊船体験から一ヶ月が過ぎようとしているけれど、未だにあのときの衝撃は忘れられない。
幽霊船。そして魔法少年。
不可思議というか、謎というか。残念ながらそれらは解決の糸口さえ見えないままだった。
鹿嶋くんの携帯電話のカメラがとらえた画像には、ただ闇が広がるばかり。物証はなにも残っていない。
かのんにはおしゃべりで体験を伝えるが、記憶だけが頼りだった。その記憶にしたってあやしいもの。なつき、せりちゃん、鹿嶋くんは、船に乗り込んだところまでは覚えていた。でも武士がいたことは忘れてしまっていた。
『闇に帰す』。
それは記憶を闇に葬ること。
久瀬くんはそう結論づけ、納得していた。
私は納得できない。魔法少年・橘はともかく、久瀬くんと私が『闇に帰』らなかったのはなぜか。それがずっとひっかかっていた。
なお、船内で網に捕らえられた話は自主規制している。話せばどうしても、あの人物のあの魔法について説明せねばなるまい。

そんな秋晴れの土曜日の朝。

『ちょっとつきあってもらいたい』

橘から電話があった。
だれが電話番号を漏らしたんだ。鹿嶋久瀬のどちらかだろうか。
厳重に抗議せねば。

いや、それより。
私は布団にくるまりながらベッドの上で姿勢を正した。

『魔法の花瓶が欲しい』
「ちょっと理解できへんのですけど」
『藤生君は花瓶に呪を貯めていたんやなかったっけ』

藤生君。
その名前に、鳥肌が立った。
彼のことを知るのは久瀬くんとサナリさんと私だけ、のはず。橘がなぜ藤生氏の名を知っているのだろう。
いや、幽霊船の出来事を思い出せ。
彼は苅野の結界を知り、『カギ』とやらにこだわっていた。そしてなにより、まがうことなき魔法少年だった。魔法少年に結界といえば、藤生氏が結びついてもおかしくない。むしろ、自然な発想かもしれない。
橘はなにか知っている。私は半ば勝手にそう決めつけていた。謎が解けるかもしれない。ならば一日おつき合いするくらいの労苦は、いとわない。
私は携帯電話を力いっぱい握りしめた。

「わかった」
『おすすめの焼物屋、ない？』
「コンダで陶器まつりやっとおよ」
『新苅野駅のホームで待つから』

私は急いでベッドから飛び出した。

＊　＊　＊

コンダ、は苅野市の北隣の町。
漢字で書くと『今田町』。
峠ひとつ越えた山あいの農村地帯。陶芸が昔から盛んらしく、＜陶芸の里＞というフレーズで町おこしをしている。
電車とバスを乗り継いで、山と山に囲まれた狭い地域に南北に伸びる道にたどり着く。その道沿いにはそこかしこに『窯元』の看板が上がっていて、＜まつり＞を銘打っているからか、歩行者の数も少なくはなかった。

私たちはぶらぶらと店を渡り歩いていた。
買う気があるのかないのか。私が見るかぎり、橘の様子は購買意欲のかけらも垣間見えない。そもそもついて行っているだけの私など、冷やかし同然だろう。
しかし、である。
若いおねえさんやマダムの集団がこっちを見ている。すれ違うたび視線がぴたりと止まる。その焦点はいわずもがな。

（確かに美少年には違いない）

タチバナモトイ、その人だ。
こんな連れを持つのは、さぞ気分が良いだろうって……そんなわけはない。落ち着かない。見世物だ。いわゆる引き立て役、刺身のツマ。いや、アンバランスなコンビ（カップルではない！）、さながら鉄板上の神戸牛ステーキとモヤシいため？
ネガティブに自分を見つめなおし、離れとこう、と二歩ひいた。

道中、そこかしこでひとあし早く、紅葉が訪れていた。
今年は記録的な早さとか。朝晩のひどい冷え込みが例年以上だか

らだそうだ。でも、今日は天気が良かった。むしろ暑い。秋の「夏日」……なんだか変な表現やなぁ。

などと、どうでもいいことを考えてなんとなく複雑な気分をまぎらわしてみる私。

「陶芸教室」

橘がぽそりとつぶやいた。

少し心ひかれているようでもある。私は首をかしげながら、問いかけた。

「花瓶買うんやなかったでしたっけ」

「買いでも作りでもどっちゃでも」

「陶芸教室やと花瓶にはならないと思うけど」

「なんで」

「材料、湯呑みとかお皿くらいの土しかない」

「頼んでみる」

そのまま橘は店の中に入っていった。

私は店内の焼き物を眺めて首尾を待つ。

店内には、素焼き風の大きな水がめもあれば、釉薬（うわぐすり）を斜めからさっとかけ流したような大胆な横長の花瓶もあり、あちこちの作品に目を奪われる。そんな中、手のひらサイズのお地蔵さんたちの一体と目があった。

丸くて愛想がいい。そしてかわいい……。思わず手のひらに一体、二体とのっけてしまうのは、人情ってもんじゃないでしょうか。

そんなこんなで、ひとつずつ微妙に表情が異なるお地蔵さまをとっかえひっかえして、各々とのご縁を楽しんでいるうち、

「ＯＫやった」

橘は報告をしに戻ってきたのだった。

なにが？

と言いかけてことばを飲み込む。魔法の花瓶の製作ですね。完全にお地蔵さまに心奪われてて忘れてたわ。

受講のお誘いを受けたけど、丁重に断り、彼の製作光景を横から眺めるだけにした。

06．タチバナと魔法の花瓶〔2〕

「呪術ツールなら出来合いより、手作りがいい」

橘は言い訳じみた話をしながら土をこねていた。

「天宮は『かわらけ投げ』って知っとお？」

「お寺とか神社で、ちっちゃいお皿投げるやつ？」

願掛けとか厄払いとかで、高い場所から素焼きのお皿を投げるんだっけ。京都のお寺と天橋立でやったことある。

花瓶製作とかわらけ。陶器つながりには違いないが、なんの関係があるのだろう。

「千尋の谷、水踊る瀑布、荒波打つ断崖。そういった場所は人が容易に立ち入ることを許さない、隔絶すべき禁足の地、神宿る地となる。かわらけを投げる場所はそういう場所が多い」

「うむ」

「てことは、かわらけは神様への呪術的メッセンジャーといえなくないか」

要は手作りだと『呪』がためやすい。そんな感じか。

一応、意図をたずねてみる。

「それと手作りであるべきとの主張とどういう関係が」

「単なる趣味」

オチか。それともまじめな答えか。

ツッコミをちゅうちょしていると、

「若いのに難しい話しとうなあ」

講師のおじさんが作業を確認しにやってきた。

橘が目線だけを、講師のおじさんに向けた。

「こんな感じですかね」

「そうそう。魂を込めると必ずええモンが出来るからな」

橘は静かに笑みを浮かべて、うなずいた。

彼の手の中の土はどんどん柔軟さを増してゆく。長くなり、丸くなり、あらゆる形に変わる。魔法の花瓶になるという土は、たしかに初心者向きの湯のみ用より、多い気がする。

どんな形になるのだろう。

彼は白い手をひっきりなしに動かし、淡々と指を土の中にうずめ続ける。他の生徒たちはとうに粘土を様様な形にかたどっている。橘は彼らが扱っている土よりさらに前段階のものをいじっているらしい。

やがて彼はおじさんの指示に従い、棒状のかたまりを作り出した。そのかたまりを積み上げて器の形を作る。そうとうに精巧に作ろうとしているらしく、棒は『筋』と言い表してよいほど、細い。

大変、集中力の要る作業だ。静かにしていよう。

……。

やはり、沈黙には耐えかねた。

この際だからと、私は最も聞きたかったことを率直に切り出した。

「藤生氏のこと知っとんの？」

橘の反応は素っ気なかった。

「知っとおといえば知っとおし、知らんといえば知らん、てとこ」
「それって謎かけ、本音、どっちなんです」
「本音。そやから器を作ってんのやんか」
「そやから器を、って？　ぜんぜん分からない」
「だから、趣味」

だめだ意味が分からない。

「いったい、藤生氏とはどういう関係なんですか」
「天宮はどういう関係やったん」

橘は視線をちらっと私に向けて問う。

「関係って……」
「どう思ってたん」
「どうって、ともだち」

橘は少し手を止め、私に顔を向ける。

「率直に聞くけど。藤生皆はきみになにをした」
「なにって」

するって、な、なにを？
どういう答えを求めているんだろう。
ヘンな方向へ発想が飛んでいく。……ダメだ。顔が赤くなる。
彼は作業に戻りしばらく没頭していた。だが、やがて苦笑をおさえきれなくなったらしい、含み笑いで確認するように言った。

「笛の音に眠らされなかったやんな」

そういうことか。

私が幽霊船で『闇に帰』らなかったこと。彼も疑問に思っていたようだ。

藤生氏が私に魔法をかけて、バリアみたいなものを張ってるとか。橘はそういった類のことを尋ねているのだ。むろん私は思い至るふしもない。

……もっと早くフォローしてくれ。想像力の駆使しすぎで疲れてしまった。

「久瀬が眠らされなかったのは納得できるけど」

「なんで納得できるん？」

「なんでかな」

私が答えを出さない限り、彼も久瀬くんの理由は答えないつもりらしい。

代わりに、彼は土の塊をそっと差し出す。

「天宮さんも作ってみる？」

今までのような小バカにした笑みは影をひそめていた。理知的で落ち着いた表情は決して冷たいものではない。

「いいです。ぶきっちょやから。その、見てるほうが楽しいし」

なぜ、どぎまぎしているんだ。私は。

「一度、陶芸教室に来たことあって、マグカップにチャレンジした

んで」
「前回マグカップなら今回、お皿とかどう」
前回結果。茶碗とお皿を足して二で割った外見で、さらに底に亀裂が走っているという、常用に耐えない代物が出来上がった。金輪際、作ろうという気は酔狂でも起きないだろう。
その思い出話を聞くや、橘はバツ悪そうに無言で土に視線を落とした。

「というわけでお気遣いなく」
「……退屈やない？」
「別に。見とどけます。魔法の花瓶の製作過程」
「なら、遠慮なくゆっくり楽しませてもらうな」

彼はそう言うと、まぶたを伏せて微笑した。
そして再び粘土と向き合った。
その横顔は穏やかで、温かみをも感じる。それに一瞬の笑顔は、見守るような優しげな温容、寛容なオトナの顔。
私はそれをどこかで見た。
それは……。

（夢の中の藤生氏だ）

亜麻色の髪の乙女、彼女を見る藤生氏の視線は温かかった。「珍しい」どころではなく、見たことないかも、というくらいだった。
付け加えればセリフまでどことなくかぶっている。
どこかが、どことなく、似ている。
橘と初めて会ったとき、私はデジャヴを覚えた。それも今思えば納得がいく。
いや、違う。

納得してどうする。
目の前の人物は藤生氏ではない。なぜ藤生氏と似ていると思うのだろう。

「人に惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストと言い、多くの人を惑わすであろう」（マタイによる福音書第二四章五節）

イエス・キリストは偽キリストをかく述べた。
藤生氏だったらどう言うだろう。

「あ」

橘がふと顔を上げる。

「誤解してそうやからフォロー」
「フォロー？」
「かわらけ投げって、宗教儀式やなくて単なる花見の余興やから」

よきょう？
遊び半分てこと？
花見の呪術的メッセンジャーだし、手作りの方がよいとか、そういう話言ってたはずなのに。

「単なる縁起かつぎというか。かわらけ投げは座興、マイ花瓶製作も単なる趣味」

前段でかわらけと呪と花瓶について考察した時間、返してくれ。
そう言いたかったが、勝手に私がミスリードしてただけって気もする。
この人、意地悪ってより、これが素なんだろうな。よけいタチが悪いわ。

Interlude 06.

この北欧の港町の夏は短いという。晴れる日のほうが珍しい。あくる日の空模様は雨。無風だがこころもち、肌寒い。

「今日はきっと、すばらしい夕日を見ることはできないわね」

少女はホテルの軒先でワインレッドの傘をさしていた。藤生氏は不機嫌を隠さず、ぼそりとつぶやく。

「寒い」

「寒がりなのね」

「違う。あんたの服見てるとこっちが寒くなる」

彼女は昨日の半袖ワンピースのままだった。藤生氏はというとTシャツにフリースをひっかけている。周囲の通行人も、市場のおじさんでさえも、上着を羽織っていた。

「だって、私、服ないもの」

「風邪ひくぞ」

「ふだんはこれくらいなんともないわ。もう少し寒くなったらロープを着ます。使い古しの毛布で作ったものだけど。かばんにちゃんと入ってるわ」

少女はそう言うと、後ろ手にリュックをぽんと叩いた。それが少女の全財産だ。

「毛布の、ローブ」

「暖かいのよ」

「使い古しの」
「なによ、悪い？」
「いいや」

藤生氏は後ろをついていきながら、ぽそりとつぶやく。

「ヴィンテージのローブ、最高にクール」

少女は一瞬、きょとんとしたが、すぐに目を細めて応じる——あなたもね。

ヴィンテージ。藤生氏はそういうけれど、鑑定でもして値段がつかなければ、お古はお古でしかない。

毎年季節ごとに服を何枚も買い足してしまう私からすると、ひどく堅実でつつましい。いくら日本が不況だといっても、子供のころの毛布をリメイクして上着にすることはないだろう。室内着に限定したって、バーゲンで買ってしまう。

「今日のランチはおごる」

藤生氏はつぶやきに、少女はふり返る。

「きのう結局、おれ、食べさせてもらったし」
「サンドイッチくらいいいわよ。一晩宿を提供してもらったのだから」
「あんた、金もないし、アルバイトをしようにも保証人がないだろ」

少女は言い返そうとしたが、思いとどめた。

藤生氏のことばは事実である。衝動的に家を出たものの、あてはなかった。あったとしても頼れば連れ戻される。保証人はお金で買えるが、そんなお金なんてない。それどころか一週間も食べつなげ

るかどうか。
今さらながら、自らの無計画さにあきれはてている。少女の心境はそんなところだろう。

「雇おうか」

少女は立ち止まる。

「……変な意味はないわよね」
「ない。俺はことばが不自由だから通訳がほしい」
「十分話せていると思うけど」
「話していても自信がない。俺はほんの短期間しか勉強していないから」
「カイは日本人だっけ。日本人はなに語を話すの？」
「日本語って言語がある」
「そうなの。英語や中国語ならここって観光都市だし、通じると思ったけど。もっとも、私はどちらも分からないけどね」

藤生氏はカフェに入ろうと促した。
驟雨（しゅうう）が、本降りに変わろうとしている。

07．ある日突然、恋敵〔1〕

夜もすっかり寒くなったな、と感じる。
コンビニに行くにもなにかを羽織らなきゃ、風邪をひく。ましてやあのコンビニは徒歩十分。ちょっとそこまで、って気分じゃないよね。
実は夏休み以来ご無沙汰。体育祭に文化祭に中間テスト。忙しくて、ついつい学校の近場を利用していた。にもかかわらず、サナリさんは私を見かけると微笑んで出むかえてくれた。今日のサナリさんはレジに立っている。
お客はいない。大丈夫なんかな、このお店。他人事ながら心配だ。

「意外とお昼はお客がいるんですよ。裏手が神社の境内で、その竹林を近道にするとすぐ苅野北英高校が」

苅野北英、といったら苅野と近辺の地域でいちばん勉強のできる公立高校。せりちゃんや鹿嶋久瀬、それに橘が通う学校だ。
では彼らも来るのかというと、そこは微妙。近いのはグラウンド側の裏門で、しかも通過点の神社の竹林は砂利道だというから、徒歩客に限られる。そんな地理的条件からこの店は北英高校の体育会系部活のみなさんの御用達であるが、文化系帰宅部な彼らとは縁が薄い。ゆえにこのコンビニでの偶然の出会いは、期待薄といえよう。

「ところでサナリさん？　例の胡桃のお菓子、どこいったん」
「ぎくっ」
「ぎく、やなくて。まさか販売中止ですか」
「はい」

ショック。

近年にないハマリ菓子だったのに。

「申し訳ありませんが、発注番号がなくなっていて注文できないのです。店長さんに仕入れる方法を聞いているのですが」

難しい話はよくわからないが、とにかく今後の入荷は未定、ないかもしれないとのことだった。

どうしよう。

この店に来る意義って……サナリさんだけになっちゃった。

うつむいて途方にくれていると、サナリさんは和やかに質問してきた。

「タチバナモトイはいかがです。最近、ふたりで会ったそうですね」

なんで知っている。

とツッコもうとしたが、そういえば同じバンドだったっけ。練習中に話でも出たかな。ということは、鹿嶋久瀬も知っているかも。

ちなみに、あれから二人からはなんの連絡もない。

それはさておき、私は思いをめぐらしながら答える。

「正直なところ、わかりません。たぶんサナリさんも久瀬くんも、藤生氏のこと意識しとんのやろけど、藤生氏みたいで藤生氏みたくなくて」

「私も同じ感想です」

サナリさんの率直さは予想外だった。

「上主様には長年、あなたからするとそれこそ幾星霜ともいえる年月、私は仕えて参りました。魔法を使う術は封じられても＜呪＞を感じる限りは上主様がどんな姿をしていようと、ひと目で分かりま

す」

「ひと目で分かるつもりが、分かんなかったんや」

ツッコミでなく、真剣に私は問い返した。

サナリさんは戸惑いつつ首を横に振った。

「あの人は上主様です」

私は雷に打たれたようだった。

なら、やはり藤生氏じゃないのか。

頭の中にその等式が浮かんでは消え、消えては浮かぶ。

サナリさんは私の反応を見て、そして自分の考えを再確認しつつ、ゆっくりと言った。

「私にすら分からぬように、お姿を変えられている、としか考えられません」

「『知っとおといえば知っとおし、知らんといえば知らん』」

「それは？」

「橘が話してたコト。藤生氏のことを知ってるのかって聞いて」

サナリさんの銀縁メガネの奥底に見える瞳は、憂愁、という言葉が似合う。

その瞳と私の目が合った。彼はささやいた。

「今後もこのコンビニにいらして頂けませんか」

私は小さくうなずいた。

「君！」

押されたように私は背筋を伸ばした。
声は背後から聞こえた。いつの間やら、お客さんがひとりいたようだった。ふり返るとバーバリーのセーターを着た、品のいい老人が立っている。
話、聞かれてたかな。聞かれてもまずい話じゃないだろうし、いいか。

「あの胡桃のお菓子、もう扱いはないんかいな」

愛好者がここにもいた。
サナリさんは私のときと同じ説明をした。私も横から「買いに来たけど、なくて悲しいっす」とぽそっと話す。

「そんなに売れゆきが悪かったんかな」
「そうですね。私の入る時間帯ですと、お客さまと、この彼女しかお買い上げがなく」
「そうかね」

かのご老人の落胆ぶりもかなりのものだ。
思うに、私の嗜好(しこう)って、老人と同じか。自分、枯れてるなあ。

「今回は申し訳ございませんが、なにとぞ今後とも、当店をご利用ください」
「うん、分かった。君には公演の券を予約するんにも頼っとおしなあ。また寄らしてもらう」
「ありがとうございます」

というわけで、かのご老人は気を取り直して店をあとにしたのだった。めでたしめでたし。
えらいなあ。クレームをさわやかにまとめるところは、サナリさ

んさすが年の功。若そうに見えるけど、実はすごい年齢らしいし。人生経験というものか。いや、人じゃないから魔生経験……わけわかんなくなってきた。

「天宮はるこさんもまた、いらしてください」

急に話をふられてあわてた私だったけど、

「そうする」

今度は、大きくうなずいた。

07．ある日突然、恋敵〔2〕

「ダージリンとチコリ・コーヒーと、ラムレーズン・チーズと」

図書館裏のケーキ屋さん。

以前、久瀬くんから幽霊船の講義を受けた場所だ。明るいカフェスペースに腰をおろし、季節のケーキを注文する。

一ヶ月前に作った器ができあがったのだ。

私の目の前に座っている橘は、午前中、それを取りに行っていたそうだ。ほんとうなら宅急便で送られてくるのだが、特に自分で受け取りに行くことを頼んでいたという。

彼はリュックの留め具をはずし、キーボード大ほどの箱を取り出した。

ゆっくり、ふたをとりはずす。

「わあ」

私は感嘆の声をもらした。

いっぱしの評論家を気取るなら——濃灰色に薄墨を刷いたような色合い。形は口が狭い縦長三角形で、筒は四角に近い。製作には難しい形状なのに、しかも手こねで作ったから全体的に肉太で不恰好となるはずなのに、崩れも愛嬌と思えるほどバランスが取れている。釉薬もほどよく散り、落ち着きがある——なんてね。

私には審美眼があるわけではない。でも、ぱっと見、素人の作とは思えない。どこかのギャラリーに置いていても通用しそう。そんな気がする。

「キレイ。いっそ陶芸作家になれば」

「ほめてもナニも出えへん」

橘はさらっと軽口をたたいた。

「それより天宮は知らん？　呪の回収ポイント」

いきなり話題が飛ぶ。

まあ、花瓶の完成はきっかけにすぎない。いわばここは情報収集の場だ。

藤生氏、上主様、魔法、呪……謎めいた夢と、現実に存在する橘。

考え出すと気持ち悪くて、真実をつきとめずにはいられない。

橘にも思惑はあるだろう。ビー球、鍵、花瓶……意味は分からない。けど今、彼が次にやろうとすることは予想できた。かつての藤生氏のように、魔法の源＜呪＞を集めるのだ。この『単なる趣味』で手作りした花瓶をもってして――。

藤生氏は、私の住んでいるマンション・グリーンヒル東城山を根城にしていた。

「旧市街地の中心で＜呪＞が集まりやすい」

ごく少ない藤生氏語録に、そんな内容があった気がする。なにしろ二年も前だし、記憶があやふやだけど。

だが橘には言うまい。なんとなくそう思い、

「さあ。私、魔法使いやないし」

とりあえずそう答えておく。

藤生氏のようで藤生氏でなく。

でもサナリさんの上主様かも？

先入観なく人物をみるべきなんだろう。でもどうしても、彼に対

してはどこか警戒心が抜けないのだ。
質問に答えない後ろめたさを感じつつも、私も質問する。
「カギ、とかはどうなったん。苅野の結界が壊れてるて言うてたけど」
「進展なしや。船はあれきり現れへんし」
彼もまた、それ以上の話はしなかった。
ケーキも食べ終わって、できあがった花瓶も見て。たいした会話をすることもなく、今日はさよなら、ということになった。
期待したほど収穫はなかったかな。ため息をついて立ち上がった。
そのときだった。
入口にこのお店の紙袋を下げた彼女がいた。
彼女も、私に気づいたようだった。
せりちゃんだった。
「奇遇やねえ」
そう言おうとして、ことばを飲みこんだ。
せりちゃんの表情が変化してゆく。戸惑いから怒りへ……。
すぐ、理由に気づいた。
（この状況、デートっぽい、かも）
くるりとかかとを返してせりちゃんが店を出ようとするのを、私は追いかけ、
「待ってよ、せりちゃん」
「サイテー！」
あ、やっぱり。

そうじゃない、誤解だから、と声をあげる。
そう、勘違いもはなはだしい。けど、私は彼女の勘違いを責められない。
軽率。その一言につきるから。
そもそも、幽霊船探検におもむいたのも『橘なんて知らない』を証明するためだった。それが今の今まで、ことの発端をすっかり忘れてたんだから、アホもたいがいにせいって感じだ。
外を出たところでせりちゃんの体がゆれた。
橘が彼女の手首をつかんでいる。

「この修羅場、俺が渦中の人てことで、合っとんの」

橘がせりちゃんを見下ろす。
せりちゃんは全身をこわばらせるように動きを止めた。
次に橘は、私へと視線を移す。まるで裁判官が法廷で証言を要求するかのようだった。
一方の発言を求められた私だが、言葉につまる。

「そ、そう、かも」

ふう、と橘が一息ついて、

「高梨さんやったかな」
「は、はい」
「なんか興味がわいた」

せりちゃんは目を白黒させている。
橘の発言は脈略なさすぎだ。意味がくみとれない。たぶんせりちゃんも同じだろう。混乱が動揺に拍車をかけているだろう。橘に顔を向けることができず、視線はうつむいたままだ。

「高梨さんは以前、俺のこと、好きだと言った。俺は天宮さんに興味があると答えた。そこまでは覚えてる？」
「覚えてます」
「物覚え、ええな。でさ、なにか手持ちのネタある？」
「手持ちのネタ……」
「ぶっちゃけると、興味なり好奇心なりを満たす手持ちのカードある？　もってたら付き合うけど」

……なんだそれは。
と思ったが、我が身をふりかえると当を得ている。
私は彼が魔法少年であることや、藤生氏とのかかわりが知りたかった。橘が知りたかったのは……おそらく藤生氏の過去の話。
橘はそれらをカードゲームの手札に例えた。橘と私との間柄も、そういうことなのだ。
せりちゃんはきっと顔をあげた。

「あります！」
「それはなに？」
「まずは、私自身！」

私は突っ立っていた。ぼう然としながら、目が離せない。
せりちゃんは一歩も引かない。真摯で、自信をみせることをかけらもちゅうちょしない。
私とせりちゃんは勝負をしてるわけじゃない。そうじゃないのに、私は敗北感と恐れの入り混じった感情をおぼえる。

「……降参」

と言う橘は困ったようすなどなく、柔らかく笑ってみせた。

「高梨さん、ツレは？」
「いない。お客さんが来るからお菓子買いに来たんで」
「なら、家まで送ってく」
せりちゃんは小さくうなずくと、橘は彼女の背中を押して歩き出した。
「じゃ」
橘の軽い別れのあいさつに、とっさに反応できなかった私は、遅れて小さく手をふった。声は、出なかった。
せりちゃんは終始、私を見もしなかった。
――せりちゃん、よかったね。
そう喜べばいいはずだった。なのに素直に喜ぶことができない。気まずさだけを残して、私はしばらく立ち尽くすだけ。
そして……この喪失感はなんなのだろう。

Interlude 07.

藤生氏は、道を歩く日本人の老夫婦と目が合った。
老夫婦はぱっと表情を明るくし、足どり軽くカフェの扉をくぐった。

「昨日はほんとうに助かりました」

妻は深々と頭を下げた。
老夫婦の柔和な笑顔は心温まるものであった。対する藤生氏の愛想笑いはぎこちない。一見して、応対の不慣れが分かる。

「今日は奥さんはいっしょではないの？」

藤生氏の頭に疑問符が浮かんだ。
奥さんというのは少女のことを指しているらしい。そのことに気づくまでに多少時間を要したようだ。

「今、お手洗いに」

老夫婦は隣のテーブルに腰をかけた。
とはいえ彼らはこの国のことばはおろか、英語もまた不得手な様子。メニューもわからず、しぜん、藤生氏が手助けをすることになる。ひととおり注文を済ませた後――それは実は大変な作業だった――夫はため息と愚痴をこぼしはじめる。

「私たちはね、今日はフィヨルド観光に行くはずだったんだが、荒天で船が出ないというんだ」
「メインはフィヨルド観光船ですしね」

「そうだよ。これを楽しみにしてきたんだ。なのに船は出ない、ここで一日過ごせというんだからね」
「残念ですね。でもまあ世界遺産の街ですから見所は」
興味を示した老夫婦に、藤生氏は少し押し黙った。「しゃべりすぎかも」と思ったかもしれない。
しかし藤生氏は思い直して、話を続ける。
そのころ少女はなにをしていたのだろう。
私は目を他に向けてみた。
……窓辺に立っていた。お手洗いをすぐ出た場所にある窓、そこは開いていた。雨と潮の匂い、そしてコーヒーの香りが交じり合う――――夢でさえ嗅覚があるのだろうかと私は驚く。
「ええ、私は彼を存じ上げていますよ。貴女が彼にお会いできるよう、私がご案内してもよろしい」
窓の外に立つ青年は声をひそめた。
「……本当？　あなた、ウソを言ってはいないでしょうね」
彼の姿を瞳にとらえながら、少女もまた声を落とす。
彼は昨晩、レストランで会った。フロリアン。藤生氏はそう名を呼んだ。青年の端正な顔は微笑を添えても崩れることなく、香り立つような甘さを感じさせる。
「約束しましょう。ヴェッケン氏に引き合わせると」
ヴェッケン……少女はお気に入りの詩篇を謡うように、何度もそ

の名を口ずさむ。

――初めて知ったわ。夢のみに出会い未だ巡り会えない、あの人の名前を。

少女はそれだけで幸福であった。だが幸福は即、満足ではない。彼女は今、ひとつ、幸福の破片を手に入れた。長く夢見続けてきた邂逅という、さらなる破片は眼前の青年が握っている。

――手に入れたい。

少女は切望し……ほぼ無条件に、彼を信じた。

「私、会いたい。必ず会いたいわ」

「分かりました。ではこのメモにあるところに、今晩十一時半においでなさい」

メモを半ば奪い取る少女。その全身は震えていた。

フロリアンはささやき続ける。

「ただし約束して下さい。このことはムッシュ・フジオには口外しないように。貴女を引き止めるかもしれません」

張子の首ふり人形のように、少女は何度もうなずいた。

「約束するわ」

08．作戦会議〔1〕

「はるは悪くない」

開口一番、かのんは言った。

「夏休み時点ではタチバナ、知らんかったわけやん。それから進展があろうが」

「進展なんてないっす」

「どっちでもええの。要は、恋愛に取った取られたなんて」

「そやから恋愛やないっす」

わざわざ別のクラスからやってきたかと思ったら。

よう、元気い？　じゃないみたいやねえ。せりから聞いたよ！

わははっ。

その陽気な訪問ぶりを逆説的に受け取って、えらいご叱責を受けるかと身がまえたのであるが。

「でも高梨さんの立場になると気分悪いかも」

「なっちゃん、それは言っちゃあかんよっ」

なつきのこぼした本音を、かのんは明るく打ち消す。

だけど、やっぱり私は注意すべきだったのだ。二人きりで会っちゃあ、疑念を持たれてもしかたない。

「あーあ。はる、人生どん底に突き進みはじめてもたやん」

「ゴメン」

「ゴメンですんだら警察要らん。責任感じた？」

なつきは私をちらと見て、こっくりとうなずく。

「なら、ここはなっちゃんに、ひと肌ぬいでもらうかんね」

「わたしに」

「そっ。名づけて『トリプルらぶらぶ大作戦』！」

「……わたなべさん」

なにをやらかすつもりなのだ。

しかも脱力感あふれる、さむい作戦名やし。

無言でなりゆきを眺めていた私もそうだが、なつきもまた、戦々恐々、顔をこわばらせていた。

だが、かのんはおかまいなしにつき進む。司令官よろしく、

「そんなら、なっちゃんじきじき、鹿嶋にメール入れて」

「鹿嶋って、あの」

「あの鹿嶋。メガネの鹿嶋。ボケ役の鹿嶋。メールアドレスならあとで転送したげる。で、バンドの練習見にいっていいか聞くねん」

「バンドの、練習と」

なつきはあわててメール編集画面を出して打ち込みはじめた。納得するより、勢いに負けたようだ。

「ＯＫくれたらなっちゃんとウチらで見に行こ。はるっ」

「ハイ」

返事してしまった。

「久瀬の連絡先教えて」

「ハイ」

またも返事してしまった。

「どうするつもりなん？」

おずおすと、なつきはかのんの顔をうかがう。

「ショーに出るにはまず馬に乗れ、て言うやん」

将を射るならまず馬を射よ、です。

なんとなく言いたい意味は分かる。しかも意味も存外間違っていないように思えるし。そんなわけで、私もなつきもツッコミは入れないでおいた。

＊　＊　＊

「店まで押しかけてくるとは思わなかった」

久瀬くんのバイト先は、シックなバー。

開店前の準備中だという。彼はカウンターでボトルを並べているひげの素敵なおじさまをふりかえる。

「店長、すみません」

「両手に花やん。ガンバレよう」

「……。天宮さん、渡辺さん、そこのテーブルで」

久瀬くんが案内したのは店の一番奥。籐の鉢に植えられた、大きな観葉植物の隣だった。ぴんと上を向いた葉っぱと、不思議な感じに曲がった枝が印象的だ。

彼は音もたてず椅子をひき、私たちを座るようううながした。優雅なものだ。まるでエスコートされているようで、気持ちがいい。

ウーロン茶だろう。彼はグラスを差し出す。手首の時計が少し揺れて、きらきらひかる。動きにそつがなく大人っぽい。

彼は私たちの対面に座りながら切り出した。

「知っとおよ。橘先輩と高梨さんのことなら」

「早耳やねえ」

「今日も一緒らしいよ。つか、ここんとこずっと」

かのんはへえ、と感嘆をもらした。

「せりもやるもんやね」

「僕からもお幸せに、と言いたいとこやけど」

「その笑顔の影になんか不満あんの？」

対する久瀬くんは、あくまで穏やかな笑顔を崩さず、語るのだった。

せりちゃんは合唱部でピアノの伴奏をしている。その合唱部、今は苅野市主催のクリスマス・コンサートの練習に入ったばかり。音をとる……つまりメロディとリズムを体に覚えこむ作業中、きちんとしたピアノ伴奏は欠かせない。ところが、せりちゃんは出てこない。

そうなると久瀬くんがピアノを頼まれるのだそうだ。彼は以前も、ピンチヒッターとして伴奏をしたことがあった。

でもバイト先の店もかき入れ時。バンドはクリスマスの合同ライブを目標にしていたのに、橘もそんな調子。

だから彼も懸念材料だ、いうわけだった。

「どうしてそう引っ張りまわすんやと思う？」
いたずらっぽくかのんは問題提起する。
問われた久瀬くんは少し間をおいて、答えた。
「不安。占有欲」
「分かっとおやん。そうよね。油断するとはるに取られちゃうしぃ」
「取るって」
私は絶句する。
かのんは力強く論じ始めた。
「はるも言い分あるやろけど、恋愛ってのはね、ことばだけでは通じへんの。好きなら好きって飛びついて、嫌いならつきはなす。それがあるべき形です」
「あるべき形」
「はるは今、どっちつかずの態度で、せりを疑いのスパイラルに陥らせてんのよ」
「うーん」
なんか怒られてる。
最初、かのんって、私は悪くないって言ってくれたような。
「だいたい、はるは橘のことどう思っとんの？　他にだれか好きな人おらへんの？」
「うー、うーん」
私は途方にくれて、うなった。
そういえば中学校の頃、せりちゃんに問われてこう答えたことがある。

――うん、気になっとんのは、藤生くん。

もし今、藤生氏が近くにいたら。私はこう答えてたのかな。

でも今はどうだろう。夢に出てくる藤生氏はあくまで夢だけど、彼の隣には彼女がいる。橘が藤生氏かもしれない、というひとすじの可能性もまた、私を迷わせる。

「いるよ」

グラスの氷がからからと音をたてた。

揺れているグラスは久瀬くんのものだった。彼はにっこりと微笑んで、

「天宮さんにはちゃんと、好きなひとがいるよ」

08．作戦会議〔2〕

なにを言い出すのだ！
いきなり冷水を浴びせかけられたようだ。あるいは、あぜんとしているかも。

「初耳！」
「藤生皆つって、天宮さんが前住んでたとこの、同級生」
「そんなコおるんやん！」

かのんの声が店じゅうに響きわたった。
開店前なのでだれに迷惑をかけるわけでもない。店長さんはそ知らぬ様子でレーズンバターと一口大のチョコレートを冷蔵庫に入れている。チョコは、手作りだ。
さりげなくカウンターを飾るクリスマス・ツリー。カウンターのボトル。大きなスピーカー。いろんなものが視界に入る。
いかん。現実逃避しかけてる。戻れ、私。

「僕もたまたま友人でね。だから知ってるわけやけど」
「彼がいるならそのほうがええねん。要は、せりに『取られない』と安心させればいいんで。その彼氏、呼び出されへん？」
「無理。オランダのロッテルダムにいる」
「超・遠恋！」

ドラマ以上にドラマティックな遠距離恋愛だ――事実としたら。
かくなる設定にいたく感激したかのんは、顔を紅潮させていた。
すごいっ、と言いながらぴしぱし、私をたたく。

「なんでそんな面白い話、黙ってたの！」

「ちょっと相談しにくいやん」

両手にウーロン茶をかかえ、私は強がった。

まさしく強がりである。久瀬くんが藤生氏のことを持ち出すとは思わなかった。ショックでいたたまれない。

久瀬くんの嘘設定に合わせなければならないんだろうか。どこかでぼろを出さないだろうか。不安に胸がつまる。

なにより、なぜここで、かのんに話したのだろう。彼は去りぎわ、すべてを消して去ったはずなのだ。みんなの記憶からも消え、私もこの二年、久瀬くん以外には名前を口にしなかった。そうやって今まで隠してきたというのに。

私には、ウソでも藤生氏の存在を語ることは、彼への背信行為と思えてならなかった。

「でも外国にいますってのは説得力ないし。その藤生とかいう人には悪いけど、やっぱり当初計画どおりやってもらいましょ」

かのんは（勝手に）決定を下した。久瀬くん、そして私を交互に眺め、文字どおり「ニヤリ」と笑う。

「善処はするけど」

久瀬くんが苦笑いを見せている。

もしかしたら、もしかする？

「『トリプルらぶらぶ大作戦』のトリプルて、そういうわけ。鹿嶋と」

橘とせりちゃん。久瀬くんと私で、もうひとつはなつきと鹿嶋くん。

じょ、冗談じゃないぞ。

「そういうわけです。ええいついでだ、なっちゃんと鹿嶋くんをひっつけちゃおう大作戦！」

その点は賛同するんですけど。

「お手洗い、借りていいですか」

久瀬くんがそこ、と指差した。立ち上がって身をそらすと、延長線上に確かにドアがある。

大またでテーブルを離れた。そしてなかば身を隠すように個室にこもる。

私に久瀬くんとらぶらぶのふりなんて。なんだよ『らぶらぶ』って。私にどうしろとおっしゃる。私は頭をかかえる。

落ち着け、とりあえず落ち着け自分。

黙っておトイレのシートの暖かさを受け入れつつ、顔をあげると、チューリップ畑の写真が目に飛びこんできた。

座って正面の壁にはコルクの掲示板がかけてある。チューリップ畑、変なフラワーアレンジメント、川と石橋、水車、銅像や街角のお店といった、ヨーロッパの風景写真が何枚か、ピンで刺してあった。ポストカードじゃなくプリントアウトしたような写真。店長さんの作品かな。

そして、バーっぽい写真の横には、吹き出し型のふせん紙が貼ってあって、

オランダのジン“Ｊｅｎｅｖｅｒ“入荷

＊＊　Ｂｏｋｍａ　Ｊｏｎｇｅ　＊　＊

滑らかで　フルーティー　です！

チューリップ畑といえばオランダ。同じ国つながりでジンてお酒、宣伝してるってことかな。

といっても貼ってる枚数多いし、写真見せたいついでに宣伝って感じやけど。

あ、そういえば。

「ロッテルダム」

ぽやっとした頭に、ぽやっと浮かぶことば。

ぽそっと口にする。

そういや久瀬くん、妙なことを言ってた——藤生氏はロッテルダムにいる——。

藤生氏がオランダにいるなら、夢と現実で話がくい違う。夢で見る場所はオランダではない。『オスロ大学』ということばを手がかりに調べたのだが、オスロはノルウェーの首都だ。夢の舞台はノルウェー、北欧の国のようだ。

それにロッテルダムという話自体、初耳だ。久瀬くんはなにをどこまで、知っているのだろう。

そうだ。久瀬くんは藤生氏の一番の理解者やん。らぶらぶだかなんだか知らないけど、この機会にいろいろ聞こう。そうしよう。

私はその決意を自分に言いきかせようと、両手をぐっと握りしめた。手洗いをすませて、ドアノブに手をかける。

と。

「ウチら、せりと言うてたんやけどね、久瀬って、はるが好きなのかなって思ってたんよ」

反射的にドアノブから手をはずした。

かわりにそっと、頭をドアに押しあて、耳をします。

「なんで」
「はるだけ扱い雑やない？」
「人聞き悪いなぁ。ツッコミやすいキャラってだけやん。そう思わん？」
「思う」
納得された。泣ける。
「そやろ？　鹿嶋並みのツッコミを入れられる貴重なキャラというべきか」
「久瀬ってむかし、告られてたコ、全部ふってたやん。てっきりはるのこと」
「うんにゃ」
「ネタとか虫除けとかやなくて？　ほんとうに？」
久瀬くんはなにかをこらえるように笑った。
「虫除けって、鹿嶋のこと指しとんのよな」
そのウワサは中学三年のころから流れはじめた。すなわち「鹿嶋久瀬ホモだち説」である。
中学三年の夏くらいだったろうか、女子の間で人気がでだしたのは。見た目は地味ながら、頭いいし面白いことも言うし人望もある。委員長常連で生徒会役員もやって、リーダーシップもあり。なにより優しいのが女子的にポイントが高いとか（私自身は全面的には同意しかねるが）。
文字で並べると非の打ち所がないな。
卒業までに女子に告白されること、二ケタ超。すべて拒否の返答。
それでも嫌われることもなかったのは、やっぱり人望と人徳なんだろう。かわりに鹿嶋久瀬の仲良しぶりが喧伝され、かくなるウワ

サが流れたわけなのだが。

「それならそれでええけど。はるはホントええ子なんやからね」
「渡邊さん友達思いやね」
「ひとこと多いよ？　はる、今かなりヘコんでんのやから、キツいツッコミは遠慮したげて」

かのんの心遣いに胸が痛くなる。ありがとう、と言いたかった。

「そやね。分かった」
「うーんと優しくしたげて、略奪愛ってのは面白いからＯＫ」
「いい友達を持って幸せやな」

ありがとう、と言うのはやめとこう。
私はドアノブに手をかけた。ドアは音をたて、私の視界にはバーカウンターが飛び込んだ。
店長さんと目があった。ぎこちなくならないように、私は懸命に自然な――なにも考えていないような――表情を心がける。
軽い調子で言った「ただいまあ」は、ハモった「おかえりい」で出むかえられた。
よし。
言うぞ。聞くぞ。藤生氏のこと。

「く……」
「じゃあもう店開ける時間やから、悪いけどこのへんで。また詳細連絡メール頼むわ」

音をたてて立ち上がる久瀬くん。
先を越されたようだ。とほほ。

Interlude 08.

「博物館はなかなか面白かった。なんていうのかな、北欧の中世世界の息遣いというものが感じられてね」
「暖房は同盟の集会所でしか許されなかったなんて、商売している人たちは、冬場は大変だったんでしょうね」

夫は多少興奮気味で、妻は冬の厳しさに思いをはせる。

「ヨーロッパもいろいろ旅行したけど、他のところは城でも町でもみんな石造りだった。この町は木造なんだな。今ごろ気づいたよ」

夫婦は仲良く感想を述べ合っている。
藤生氏はふっと息をついた。
ため息ではなく安堵の表情である。夫婦が楽しんでくれたことを歓ぶ、そんな心遣いがあらわれている。
以前の藤生氏と比して、驚くほど細やかな優しさ。以前は他人のことなどどうでもいい、という態度だった。しかたないかと嫌な顔をあからさまにしつつ、重い腰を上げる。それがかつての藤生氏だった。
この夢が夢でないならば、現実だとしたら、彼はこの二年で大きく成長しているのだ。私も追いつけないくらいに……。

「奥さんはどうだね。なんだか疲れてたようだけど」
「え？　……ええ。ひと風呂浴びれば、疲れもとれるでしょう」
「すまないね。呼び止めて。お礼が言いたかったんでね」
「いえ。とんでもない」

ホテルのショップで藤生氏と老夫婦は別れた。

白夜が訪れる。夜を迎えても太陽は沈まない。
藤生氏は自室に戻った。シャワールームからはまだ水音が聞こえる。ベッドのふちに座り、サイドテーブルを引き寄せノートパソコンに向かう。
メールはまた、何通も届いていた。

『藤生君の要求は断る。
天宮さんには協力を仰ぐ。
どうせネタ振りも煽りもせんのに１００％首を突っ込んでくるし、同じこと。』

送信の主は久瀬くんか？
ひどい書かれようだ。事実だけど。
メール本文はまだ続いている。藤生氏の視点とともにさらに文面を追う。

『思うに、藤生君は独力でなんでも叶えられる。だから、他人を巻きこんだら余計に面倒、と思っているんじゃないのか。
天宮さんをかかわりない場所にいさせたいのは、君の思いやりか？　違うだろ？
違うなら反論をどうぞ。』

彼は眉をひそめ＜返信＞をクリックした。

『なんでも』

次々にディスプレイに踊った文字も、ここまでだった。
しばしの間、藤生氏はまぶたを伏せた。
目を閉じたまま文字を一文字ずつ消していく。すべてが消えてもなお、彼は惰性で＜ＤＥＬＥＴＥ＞キーを押し続けていた。

不意に彼は立ち上がると天井をあおいだ。そして席を立ち、なにか考えごとをしていたかと思うと、緩慢にベッドに倒れこむ。光沢ある暖色のベッドカバーに半身が沈んでいった。

「白河の文句言い……あーもう、めんどくせっ」

藤生氏はそうはき捨てると、身体をよじった。ベッドメイクはご破算。カバーはよじれてくちゃくちゃになる。そんなのも知ったことではない、藤生氏は子どものように大きなまくらを両腕でかかえ、顔をうずめる。

すると突然、奇跡の情景が生まれた。ベッドカバーには照明によって陰影と輝きを刻みこまれ、折れた翼を描き出していた。その翼の主はまぎれもなく藤生氏。ベッドをキャンバスにして描かれた、中世の宗教絵画がそこにあった。

現実的にも見え、空想のようでもあり、そしてただ静寂がある。なんでも叶うわけあるか——藤生氏の小さな嘆きの後は、パソコンのＣＰＵファンとシャワーだけが音を奏でていた。

09．ナナツギの物語〔1〕

クリスマス最高潮に突入する前に。
期末テスト終了のごほうびに。
久瀬くんからの指定で足を運んだ先は、苅野グラスタウンにあるリゾート型ホテル。
グラスタウンのショッピング街のカフェから目と鼻の先にある、憧憬の場所。テーブルからの眺望を楽しむ。いつものカフェを見下ろしている。ひどく新鮮で、気分が高揚しているのが分かる。

「ただのケーキバイキングやん」

と冷や水をあびせかける久瀬くん。
いいじゃないか。ここに来たのはじめてだし、なにより、

「ホテルでお食事なんて、家族旅行以外、初めてなんやもん」
「そりゃ喜んでくれてどうも。今度は新神戸オリエンタルホテルはどうですか？　スカイラウンジで三宮の街並を一望しながら」
「わあ！　ムードあるある」
「力の限り食い尽くすのにムードもあるかいっ」

序盤からツッコミ入りっぱなし。
キツいツッコミは遠慮してくれるんじゃなかったのか。
ともあれ、花より団子、色気より食い気。デザートを調達に向かう。
ドイツ菓子。
毎月テーマが変わるそうなのだが、今月のテーマはドイツ菓子。
クリスマスらしいテーマだ。ザッハトルテに、シュトーレンに……
切り分けられたブッシュ・ド・ノエルもセレクト。

さてテーブルについて臨戦態勢に入ろう、というところだった。

「先に謝っとく」

彼は真顔になった。私は姿勢を正して次のことばを待つ。

「幽霊船の件にしろ藤生君のことにしろ、全然話してなかった。言い訳になるけど、ちょっと時間も余裕もなかった」

「今聞かせてくれたら別に」

「ありがと。なら、はじめに幽霊船の素性をひも解こうか」

「素性？」

私は身を乗り出した。

幽霊船はあれから出現のウワサを聞かない。シーズン・オフやし？　というのは冗談。でも橘にぶっ壊されたから修理中なのかも、と思いながら、放ったらかしにしていた。

どう調べたらいいか分かんなかった、というのも理由だけどね。

今、素性がわかる……ものすごく、期待。

「この苅野、昔はなんて大名が治めてたか知っとお？」

唐突に彼は質問してきた。

私は素直に「知らない」と答える。

予想通りの回答だったか、特に反応を示さず（それはそれで悲しいが）カバンからタブレットを取り出す。

「そんならコレは見覚えある？」

クリックを繰り返し開いた画像は、大きく黒い変なマーク。

変なマークといっても至極単純な形。真ん中に黒い「丸」があり、

その周囲にも黒い丸が六つ。
覚えている。はっきりと。

――三階に上がると、目の前には変なマークを黒く染めた白いカーテンが。

私は身を乗り出して液晶画面をのぞき込んだ。

「見た！　幽霊船の楼閣の中で」
「家紋。紋章や」
「カモン、て『ええい控えおろう、このアオイのモンドコロが目に入らぬか』のアレ？」
「そうそう。そんでこれは苅野藩ナナツギ家の『七曜』」
「苅野藩、ナナツギ家」

あのカーテンのデザインは、ナナツギ家という苅野市の殿様の家紋（カモン）だったのだ。とするとあの幽霊船は……。

「苅野藩の船なんや！」
「おそらく」

久瀬くんは明確に肯定しない。

「なにか不審な点でも？」
「川である理由」
「……ああ」

そうだった。久瀬くんが最大の関心を持っていたのが「なぜ船を川に浮かべるのか」なのだ。

「苅野の藩のお殿様やからやないの。んで、自分とこの川で船を浮かべた」
「微妙に納得しがたいんやけど」
「なにか矛盾でも？」
久瀬くんは少し間を置いてから、ゆっくりと話した。
「ナナツギ家の歴史を……戦国時代にしぼって、説明してみるよ」
七鬼。
ナナツギ、は漢字ではそう書く。
変な名前。陰陽道とかやってそうな感じだ。
だが久瀬くんいわく「戦国時代はれっきとした戦国武将」とのことだった。
「出自は、志摩の国になる」
志摩は三重県の南部のことだ。
小学校六年の修学旅行が伊勢・志摩だったから、すぐ思い出した。
伊勢海老が土地の名物。秋の終わりから冬が旬だよね。それから真珠。ミキモトってジュエリーメーカーの真珠島なんてものがある。
そのころ住んでた神戸は真珠加工地という縁もあって、修学旅行には志摩に行くって聞いた。
といった回想はこのへんにして、と。
海やね、と私はつぶやいた。
「志摩と海、きってもきれないね。幽霊船も関係ありげ」
「ほう。知らぬ間に賢くなったな。えらいえらい天宮さん」
「アホ扱いしとるでしょ」
「えらいえらい。で、だ。志摩はすぐ背後は山で、田んぼや畑なん

かは少ない。伊勢湾近辺で海賊をやって、通行料取り立てたりして」
「『海賊』って、世界をまたにかけて冒険する荒くれものでそ」
「それはマンガの中の話」

彼いわく――膨大な資金・物量がないと長距離航海はできない。王族や貴族らがスポンサーになり資金を得れば、世界じゅうを航海する『探検家』となる。資金がなければ生計を立てるために限られた海域で他船から財を奪う『海賊』となる。なぜ限られた海域かってーと、攻撃はまだしも、退却となると潮の流れを熟知してないとすぐ身の破滅や。ま、そんな感じで、社会的見地からはまったく異なる存在やな。

理屈屋さんぶりにはあきれ、いや感心する。

が、難しい話は頭のはしにやっとく。久瀬くんも脱線していることには気づいていて、ナナツギは船を使って武力で稼いでた人たちだと思えばいい、とものすごくアバウトな物言いをして、話を戻す。

「ナナツギが志摩で海賊してて、それで」
「時は戦国、弱肉強食の時代。ナナツギは負けた。滅亡はまぬがれたけど、志摩の地は追われた」
「そして苅野に」
「そう甘くない」
「どうしたん」
「ひとまず織田信長を頼った。えらいついでに知ってるやろ、ノブナガ」
「『人生五十年』の人やんね」

戦国時代といえばこの人だ。下克上の天下布武、本能寺で焼かれた人。

……私の認識、おかしいですかね。

「そ。のちの天下人やけど、このときの信長はまだ愛知・尾張や岐阜・美濃をおさえたばかりで、新発売キャンペーン中にすぎないんやけど、あとのことを考えると、ナナツギの統領はえらい強運とカンの持ち主やったんやろね。ナナツギは織田の武将・滝川の配下に加えてもらえることになった」

「織田信長の部下の部下ってあんまりえらくないね」

「新参者やししかたがない。最初のうちは慣れない陸戦で負けとおしやったらしい」

なんだかパッとしない。

「でもナナツギの運がいいのはこれからやねん。織田に水軍を指揮できる人間がいなかったのがポイントやろな」

最初の大活躍は伊勢だった。伊勢は志摩のすぐ北の国だ。

『伊勢長島の一向一揆』という戦いだそうだ。

織田の主力はみんな陸の武将だから、陸の上で一向一揆を取り囲んだ。

ナナツギは船に乗り込み、海上を封鎖した。封鎖しただけでなく、上司である鉄砲大将の滝川から学んだ鉄砲を大型に改良し、船に搭載した。そして海から大きな鉄砲で攻撃した。

「大きな鉄砲。船の甲板にあった、あれ？」

「かもしれんね」

少しずつ、ナナツギの歴史と幽霊船が結びつく。

「それで。船も鉄板の？」

「まだ。鉄張りの船が登場するのは次の話」

09．ナナツギの物語〔2〕

そのあと各地を転戦し、織田信長に認められたナナツギは、直属の水軍大将となった。

なったはいいがすぐ次の戦いを命じられた。

次の相手は、毛利水軍。当時最強の水軍だ。

「勝ったんよね」

「いや、負けた」

「なんでよ！」

思わずがっかり。

いつの間にか私は、ナナツギに肩入れしていた。がんばって実力でのしあがっていく。そんな様子が小気味いいし、成長ものＲＰＧみたいで、応援したくなってくるのだ。

久瀬くんはコーヒーを少し楽しむと、また話し続ける。

「相手は戦国時代最強の水軍やしね」

その『最強』の毛利水軍。

主力は進むスピードの早い小船だ。しかもおそろしく統制のある動きをとる。火器の射程を計算しながら巧みに近づき、ナナツギの軍船に火をかける。

ナナツギは鉄砲や大砲を放つどころか、消化活動をしながら逃げまどう。しかし鉄砲を積んでいるから動きが遅い。船を片っ端から燃やされて、コテンパンに負けてしまったのだった。

「鉄張りなら、そんなことにならへんのに」

「ナナツギも気づいた。そこで作った。側面を鉄で覆った大きな安宅（あたけぶね）

宅船をさ」

鉄張りの軍船。しかもこれまでにない大きな船。

大きな船にした理由はごく単純なものだ。

鉄を張るとどうしても動きは遅くなる。確実にまた、火矢を放たれる。鉄を張った部分は火には強いから問題ない。問題は甲板より上である。ひとつは船の重みのバランス。もひとつは人間がその上を歩くことで、むきだしの鉄の上ではすばやく動けないので、鉄を張れない。そうなると木板のままも甲板部分が弱点になる。どうするか。簡単に火矢が届かないようにすればいい……。

「今度こそ勝った」

久瀬くんは少し笑って答える。

「勝った。正しくはとっとと逃げられた」

「よかったあ」

「めでたしめでたし。というわけで、鉄張りの船と大砲や鉄砲てのはナナツギからしたら、輝かしい栄光の証なわけ。幽霊となった場合、＜呪＞の最も力を発揮するスタイルなのかなと」

なるほど。

どん底から勝ち上がるのに、船や鉄砲・大砲を利用した。最も大切なアイテムなわけだ。

「で、結局、苅野の殿様になったから、船を芽衣川に浮かべてるわけやね。苅野には海ないし」

「そこがね。さっきの話の主人公、『ナナツギ・ヨシタカ』という人物なんやけど」

久瀬くんは違う画像ファイル『七鬼家―系図』をクリック。
すると、名前が七段にわたってずらりと並んでいる。
私は目がくらんだ。系図が長い。長すぎ。由緒正しいおうちなのかも知れないが、実に目に優しくない長さだ。
ポインターは五段目に『嘉隆』と表示されてあるところを指している。
それが話の主人公『ナナツギ・ヨシタカ』らしい。漢字読めないけど話の流れから察するに。彼の後ろからずっと系図は続いている。世に言うところの「中興の祖」という人なのだろう。

＞i３６７７９―４６０３＜

彼の孫である『康隆』という人の横には「苅野藩」と書いている。孫の代から苅野にやって来たようだ。久瀬くんの話では、江戸時代の話という。
船を浮かべているのは、この孫以降の時代の人ということになる？
さらに系図を眺めていると……。

「……スミタカ？」

『ナナツギ・ヨシタカ』には兄弟がいる。系図の書き方からしてお兄さんだろう。そしてそのお兄さんには子供がいる。
『澄隆』という名の、おいっ子だ。

――――スミタカ殿、撤退命令を！

撤退を叫んだ、あの若殿さまの顔がフラッシュバックする。
あのイケメンな武士。

もう一度、慎重に記憶を探る。
数ヶ月たっても『闇に帰』ることはなく、すぐに思い出せるほどに鮮明だ。
私は『澄隆』の表示を指さして尋ねる。
「スミタカって、船にいた若殿」
「……たぶん」
久瀬くんはまた歯切れが悪い。
「なにか疑問が」
「でも苅野にいるのが不思議でならへん」
苅野に来たのは『ヨシタカ』おじさんの孫からだ。
「『スミタカ』が江戸時代まで長生きしたなら、苅野に来てるんやないの」
「『スミタカ』は若くして亡くなってる。叔父の孫の顔すら知らないはず」
「それは変。なら苅野に一度も来てないことになる」
「それも疑問やけど、もっと疑問が……苅野は『スミタカ』の幽霊が来たとしても締め出したいはずやないかと」
「どういうこと？」
久瀬くんはポインターを『澄隆』と『嘉隆』の間を行き来させている。
「『スミタカ』は、叔父の『ヨシタカ』に殺された」
私はカップを置いた。

「実は『ナナツギ・ヨシタカ』は統領代行やった。父親を失った小さな『スミタカ』の」

『嘉隆』につながる系図の先を追う。

……実力と地位を獲得したら、自分の子供に継がせたい。

だから邪魔なおいっ子を殺した。

さっきまでの爽快なサクセス・ストーリーが一転、血なまぐさく陰惨な悲劇へと変わる。

「スミタカが幽霊になるなら恨んで出そうやね。ヨシタカの子孫としちゃ、確かに出てきてほしくないと思うのが筋ってもんかも」

久瀬くんは小さくため息をついて、嘆く。

しょげたような表情はかなりレアものだ。

「そうやねん。なぜ、わさわざ相性の悪そうな苅野に『ナナツギ・スミタカ』が登場したのか……その背景がぜんぜん推理、いや想像さえつかんのよな」

09．ナナツギの物語〔3〕

私は新しいお菓子を取りにいく。彼も続いてお皿を手にした。
再び、シュトーレンをお皿にのっけた。
その昔、ドイツのシュトーレン王がクリスマスに貧しい人々にプレゼントしたパンのようなケーキ、それがこのお菓子の由来だそうだ。雪山のように粉砂糖がかかり、中はレーズンやアーモンド、オレンジピールに、ラム酒なんかも入っている。
私が当時の貧しい人になってこれを食べたとしよう。王様って毎日こんなものを食べてんのか……イラッとくる。いや、暴動ものだ。
そんなよけいなお世話な妄想をしつつ、席に戻った私はひとつ提案をする。

「『スミタカ』がなぜ苅野に来てるのかは今後の課題てことで」

久瀬くんは生返事。推理がおよばないのがくやしくてならないようだ。
ほかの話題にしよう。
藤生氏のこと。これも多少、面倒だ。
もっと身近な話題にしよう。

「同じバンド仲間と同級生として、橘とせりちゃんはどうでしょうか」

久瀬くんは動きを止める。
スプーンはコーヒーのババロアに突き刺さって微動せず。

「余裕でしょう」
「余裕てなにが」

「つくづく人間てのは不公平にできてると思う。あいつらってほんと、どうなん？　最初から人よりアドバンテージあるやん。顔、お金、アタマ、生活環境」

なにを言っているのか分からないが、

「……ま、神様ってけっこう不公平だよね」

「で、天宮さんはもう大丈夫かな」

久瀬くんは和やかに表情を崩す。そのへんでふりまく愛想笑いではない。

問いかけも意味がつかめず、なにがと問いかえすと、

「その橘先輩の件で、天宮さん落ちこんでたやん。復活のきざしかなって」

「心配してくれてたん」

「渡邊さんに言われたし」

「あ、ありがと」

なんだか照れるな……。

これが女子に人気の秘訣だな。サラッと押し付けがましくない。

そんな気づかいされたら、女子的には優しいなあって、かたむくわ。

そんな彼は優雅にコーヒーカップに手を伸ばす。

と、手首にキラリと光るものが見えた。

「それ！」

反射的に私は彼の手首をふんづかんだ。

ぱんっ。

と、音をたてて払いのけられる。私は勢いでのけぞった。

「あ……」

彼自身、自分の取った反応に驚いているようだ。

ゴメン、と彼らしくない所在なさげなつぶやき。

いやいや、彼が悪いのではない。いきなり手首をふんづかんだ私がマナー違反。こちらこそ、すんませんでした。私は右手で手首を指ししめしながらおうかがいをたてる。

「ちょっとその時計、見てええ？」

今度は久瀬くんも素直に腕を突き出す。

腕にはめられているのはバンドは黒い皮。枠はシルバー……プラチナかもしれない。年月日の表示もあるクロノグラフ・タイプのフォルム。太陽がのぞく窓もついている。そして銘は『ＢＬＡＮＣＰＡＩＮ』。

「すごい」

「なにが」

「この時計。ねじ巻き時計やよね」

「うん」

「ブランパンちゃうん」

久瀬くんはきょとんとしていた。

博学才英な彼だがブランド物にはうといらしい。ここが弱点だったか。

「知らん？」

「知らん」
「びびるほど高い時計。車、買えるんちゃうかな、モノによっては」
彼はそのまま固まってしまった。
「これどうしたん」
「高校入学祝。親父からの。でもこれってそんな高いん？　ホンマ？　ホンマにホンマ？」
彼はどこか鬼気せまる表情でつめよってくる。私は多少、腰がひけた。
彼が父親からもらった物なら、本物だろう。まさか政治家が息子に偽ブランドをプレゼントするとは思えない。
「ええこと聞いた。カマバーに身を売る前の、最後の手段ができた」
「なんでいきなりオカマ相手よ。ホストでよくね？　会話うまいし」
「うまくないよ」
「んなことないって。もてるっしょ」
「女のコと話すん苦手、しんどいし」
やはり鹿嶋久瀬ホモだち説は真実なのか。
……いや、待て。どこか引っかかる。
女の子は苦手といいながら、私にはツッコミ入れるわバッサリ斬るわアホの子扱いだわ。これはどういうことだ。
「私は女扱いしてないわけか」
「はいっ？」
久瀬くんはすっとんきょうな声をあげた。

「目の前に、同い年の、女子高生。おもいっきり長時間、会話してますが」
「今までの話の流れで、怒るとこ、あったっけ」
彼らしい冷静な返しにカチンとくる。
「天宮は苦手な女の子の範疇外ってことですか」
「そうは言わんけど。僕にどうしろと」
どうしろと。
直球で問われたら返答に困る。でもやっぱり腹が立つ。
「……もういいから！」
「ええことなさげやけど」
「いいの！　さっき優しいなぁと思ったのもまちがい。藤生氏のほうが絶対優しい」
「藤生君が？　不機嫌・無愛想・唯我独尊の代名詞が？」
「んなことない。このまえも老夫婦にも親切にしてたし」
「なんの話。それ」
あれ？
それは藤生氏のことは夢の話で。夢と現実をごっちゃにしてしまってる。現実でもない藤生氏と、現実に座ってる久瀬くんを評するとか。
自分、無茶苦茶、支離滅裂だ。
「いまの話、なし！　忘れて忘れて」
あわてて否定にかかるのだが。
久瀬くんは困惑でなく不審の目を向ける。

「もしかしてその時計、普段使いやんね。もったいないよ。安物つけたほうが」
「このまえ藤生君がどないしたって」

ちゃんと話しろ的オーラがすごい。
私は黙った。話をそらすかわりに目線をそらした。
久瀬くんて温厚だけど怒ると怖い。藤生氏がらみだと特に。殴り合い程度なら受けて立つが、どんな秘策で返しをくらうか分かったもんじゃない。火に油を注ぐ結果にはしたくなければ、やっぱ、話すしかないのかも。
目線を上げると、きっちり視線が合った。
彼はふっとパソコンに視線を落とす。その指先が画面に触れ、黒かった画面がふっと明るくなった。

「藤生君とメールはやりとりしてた、一応は」

メールソフトが表示されている。
見たいなら見てもええよ、と画面を私のほうに向けた。
画面に触れてみる。
送信元はすべて『Ｋａｉ．Ｆｕｊｉｏ』となっている。久瀬くんは別のフォルダを作って、藤生氏からのメールはすべてそのフォルダに保存しているらしい。
保存されているのは二年前から。私たちが中学三年になった春。だから、藤生氏が去ったころから。送信頻度は数ヶ月に一回程度あるかないか。なので今までに六通だけ。気が向いたら返信もする、といった感じで、かなり筆不精だ。ある意味、藤生氏らしい。
全件読むのはさすがになんなので、ちょっとだけ……。

『祝ご入学。
また鹿嶋と同じクラスｗ』

短い。
タイトル『おめ』だし。祝われてる気がしない。
ほかのメールも『Ｒｅ：Ｒｅ：』『Ｆｗ：』とか。藤生氏らしい。
かと思うと『Ｆｗ：』の中身は、

『悪い調べて。
・ｌｉｇｎｅ　ｄｅ　ｃｈｅｍｉｎ　ｄｅ　ｆｅｒ　Ｍａｔａｄｉ―Ｋｉｎｓｈａｓａ
・Ｉｎｇａ　４ｔｈ　Ｐｒｏｊｅｃｔ』

なんだこりゃ。
きっちり返信マークついてるし久瀬くん調べて返したんかな。
メールにはいろんな地名が登場する。藤生氏がその時その場所にいたのか、それとも単なる情報集めかは分からない。なにしろあいさつ近況なしで用件のみばっか。ただ、どこへ行っていたとしても、お気楽な旅って感じがしなかった。
最後のメールは八月二四日。タイトルは『Ｒｅ：苅野幽霊船』。
藤生氏にしては長文。

『ロッテルダムに続けて苅野も幽霊船て。
毎度調べてくれんの助かるけどどうもきな臭い。
なんか鹿嶋や天宮さんの名前でてたけど、やばいふんいきだったら手をひいてくれ。

こういう件のベストプラクティスを理解してない他人を関わらせるのまずいだろ。
天宮さん巻き込んだら殺すぞボケ。』

……驚くほかない。
最後の行をタイプしている藤生氏を、私は夢で見た。

「この八月のが最後？」

最後の一行を凝視しながら私はたずねる。視界のはしっこで彼が深くうなずいた。

「そのときロッテルダムにいるってよ。で、そのメールを最後に三ヶ月音沙汰なし」

やはり、私が見ていたのは単なる夢じゃない。
藤生氏周辺の出来事だ。しかも八月の数日間という、ピンポイントで。
この先、どこまでこの夢を見るのか分からない。なぜ見ているかも分からない。
ただ『三ヶ月音沙汰がない』。メールの頻度からして心配することじゃない。でも……なにかが起こったのではないか。私が夢を見るようになった原因となる、なにかが。
次の夢を……一刻も早く見たい。

「ロッテルダムやないよ。この時はノルウェーに」

久瀬くんの表情に驚きはない。
むしろ待ち人が来た瞬間のように、安堵と期待がその顔に浮かぶ。

記憶の糸をたぐりよせながら私は話をつづける。

「『藤生君の要求は断る』。私に協力を仰ぐって、久瀬くん、藤生氏の最後のメールにそう返してるやんね」

「返したよ」

「今からの話は、夢の話やけど」

私が思うにまかせて語った内容に、久瀬くんは始終冷静に耳をかたむけていた。

Interlude 09.

今日一日の終焉は近いというのに、夜の帳はまだ下りない。
藤生氏が窓の外をうかがう。通行人はまばらながらも歩いている。
まだ闇は近くて遠い。

「会わないわ。カイがそう言うのなら」

少女は礼儀正しくひざをそろえてベッドサイドに座っていた。
藤生氏は窓の外から視線をはずしてふりかえる。

「偽らざる魂は常に純粋なもの――あんたみたいに純粋でいて、偽りに覆われた魂も珍しい」
「どういう意味？」
「『嘘つきは泥棒の始まり』って言っている。あんたこそ分かっているのか。会いたいと願う相手が誰なのか」

少女はそっぽを向いた。
藤生氏はそんな彼女に、険しい視線を投げる。

「これはとある歌劇の話……『ヴァン・デル・ヴェッケン』という紳士がいた。彼は紳士であり、連合東インド会社の航海長兼船長であり、そして、神に背いた者だった」

少女は弾かれたように立ちあがる。
おののくくちびるからは息だけが漏れた。問いかけは声にならない。
そして、彼女は苦しげにかぶりをふる。

「あんたは『Ｆｌｙｉｎｇ　Ｄｕｔｃｈｍａｎ』という話を知っているかい？」

「……サッカーの？」

「それはヨハン・クライフ。八十年代オランダが誇ったエース・ストライカー……って、何歳だよあんたは」

私、知らない。ボケ・ツッコミにならないぞ。

「とりあえずそういうタイトルの歌劇がある。ワグナーの代表作のひとつだ」

神に背いた男は、彼の船と共に海にさ迷う運命が定められていた。死ぬことは許されない。なぜなら神の罰だからだ。

彼はただひとつの『救い』を求めて、ひたすらに海を漂い続けていた。

そんな永い航海の中の、ある短いひととき。入り江でその男と会ったある航海者は、宿泊の礼として財宝を授けられた。その航海者は財宝に目がくらみ、やがて時が来れば自分の娘を男の妻とすることを約束する。

娘ははじめは反目するも……乳母に教えられた神に背いた男のバラードを歌う。歌ううち、神に背いた男に激しい同情を寄せるようになる。彼女は純粋で、夢見がちな娘だった。だからこそ娘は、魅入られるように男を救う運命を自らに定めたのだ。

「娘が、私だというの？」

藤生氏はくちびるを結んだ。

「歌劇の話でしょ？　私が会いたい人は現実にいる。彼は会えると言ったわ！」

「出来すぎた想念は、夢を現実に変える」
「分かったわ……会いたい人はその『神に背いた男』だとする。私は彼に夢を見ているのかもしれない。でも、だから何だというの？　私が会うことで彼を救えるのでしょう？　可哀想な彼を救うことに、なぜあなたは反対するの？」
彼はまぶたをふせ、闇に溶けるごとくに沈黙する。

10．胡桃のお菓子に誘われて〔1〕

どうしよう。

隣にはタチバナ・モトイ。緊張が高まる。

「天宮さんなぜここに」

「お母さんがクリスチャンなんで教会にくるのは年中行事」

その母は友達と前列に居座っている。

私はそれほど熱心ではない。終われば早々に帰るべく、後列にいる。

「神父サンタのプレゼント目当てってわけやないんや」

「駄菓子もらってうれしい年やない」

語気を荒げて言いかえすのだが、

「……やっぱりうれしいな」

「ガキや。ガキがおる」

うるさい。

「橘先輩、今日、せりちゃんは？　イヴやのに」

「主の降誕を祝う日やろ。今日は」

「世間的に言うやないですか。クリスマスディナーとか、二人の夕べとか」

「二人の夕べて。昭和の青春ドラマかっ」

笑うな……しかも腹抱えて笑うな……。

しかし一連のかけあいのおかげで、緊張がほぐれてきた事実は否定できない。

さて、ここは苅野のカトリック教会。キャナルシティ、つまり川の流れる新市街の片すみにある。

厚い宗教心あってのことではない。カトリックな母につきあう例年の習慣でなかば義務的に訪れるにすぎず、翌週には神社でおさい銭投げてる典型的な日本人である。

でも嫌々ではない。苅野の教会はなにかと楽しい。神父さんの説教がコミカルな語り口でいい。それと、この町には気の利いた合唱団がなくて賛美歌は礼拝参加者みんなで歌うことになってる。それが妙に気持ちよくて気に入っている。大きな街の教会だと地元の大学の合唱団の歌を聴いたりするけど、私には眠気をさそうだけだった。『諸人こぞりて（Ｊｏｙ　Ｔｏ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ）』をうまい下手関係なく、みんなで歌って盛り上がるって楽しいよ。

そんな会話を私たちは小声で話している。

「バンドにも最近、賛美歌に目覚めた奴が約一名」

「久瀬くんですか」

「さすがよくご存知で。メロコアとクラシカル・クロスオーバーが至上とかぬかす、節操ないやつやしな。ここに来るんも誘ったけど」

久瀬くんはバイトだとか。クリスマス・イヴも勤労学生とは尊敬に値する。

「普段使いの時計を一刻も早く買うだとか、突然言い出してな。やつの思考は常人にはついていけんわ」

私はふうんと気のない返事をした。

一方よけいなことを言ったと深く反省。話をそらすために口走っ

たコト、彼はちゃんと覚えていたのだ。

「で、今日なんでひとり。せりちゃん誘わへんのですか」

「それ『二人の夕べ』とか言う？」

「茶化さんでください。真剣なんスよ。せりちゃんと私と世界の幸福がかかってんのやから」

橘は静かにくちびるを歪める。

と、前の祭壇のオルガンが旋律を奏ではじめた。

「ほれ、歌うよ」

『エサイの根より　生い出たる　奇しき花は　咲き初めけり　我が主イエスの生まれ給いし　この良き日よ』（賛美歌９８番『エサイの根より』）

私はこの歌が好きだ。

静かな旋律。賛美歌としては地味な存在だけど、好きだ。

その歌を奏でる、橘の声が、胸に染み入る。私は歌うことを止めてただ耳を傾ける。

甘い語りかけではない。癒されるのでもない。崇高で清冽。切なく哀しい。

主が出でし歓びを語るはずなのに……彼は、楽しくて歌っているのではないように思える。

橘をちらりと見た。彼はまっすぐ前方を見つめている。讃美歌集を胸に抱いて。

「残酷な歌やな」

ぽつりと彼はこぼす。

「残酷、ですか」

「望まれず、必要ともされず、産まれてきた者には」

ぎゅっと胸がしめつけられた。

その指摘は間違いじゃない。イエスの誕生を祝うこの歌。諸人こぞりて――みんながある一人のために祝って歌うのに、決して自分のためには歌われることがない。それはとてもつらいことだろう。

そんな指摘をする橘もまた……？

返す言葉を考えあぐねていると、

「と思わんか？　俺は親の期待すっごい重てぇくらいやからええけど」

まただまされた。

いや正確にはだまされてはいない。橘は一般論を語っただけだ。しかし毎度、誤解をしてしまう会話の展開。これってなんなの。

＊　＊　＊

教会の外は湿りを帯びた風が吹く。

私はマフラーをもっと顔へとよせた。

曇り空がより早く夜を呼ぶのだろう。とうに夕暮れは過ぎている。

キャナルシティのバスターミナルに向かって私は歩いていた。母は友達と夕食にパスタでも食べて帰るという。不良中年め。

橘もまた家路へと向かう。彼は方角が違うものの、やはりバスだ

った。

バスターミナルに人気はない……どころか、私と橘しかいなかった。無理もない話だ。休みの日にバスターミナルに人気がないのもこの街の特徴だ。苅野はクルマ社会で、公共交通機関を使うのは学生や通勤、老人くらい。クリスマス・イヴの中途半端な夕方、あんまり人がいないのもしかたがない。

「寒っ。さむさむさむ、寒ーいっ」

私はひざを屈伸しながら悲嘆しつづける。

橘もまた、サッカーボールを蹴るような動作を飽かずにくりかえしている。

この時間帯でこの湿気と寒さ。明日は路面凍結するかも。雪は降らないものの、内陸地の苅野は冷え込みが厳しい。市街地は凍結剤をまき散らすが、路地の日陰などは下手するとすっ転ぶことになる。

「学校休みでよかった。昼まで爆睡しよっと」

「賛成。苅女（カリジョ）は休み？」

「部活の子以外は。北英高校は休みやないんですか」

「補習が結構多い。全国模試で千番以内なら完全任意やけど」

そこで休むあなたは優秀なのですね。ハイハイ。

「あ、でかいクリスマスツリー」

「どこ？」

「あっち」

バス停から大きなツリーが見えた。

ビジネスホテルのツリーらしい。今まさにイルミネーションが点灯したところだった。

もみの木のてっぺんの星は、ベツレヘムから見えた星。東方三博士がメシアを見出した預言の星。でも私が今見ているのは、おもちゃのような星飾りと人工的な光の星たち。

空を見上げると曇り、闇だけが覆う。

今日は本当に祝祭の日なのだろうか。わびしさがつのる。

と。

私は血の気が引いた。

ツリーから姿を現す、プラチナの髪が流れる美しい青年と、外国人ぽい少女。

私は橘の影に隠れ、そして少しだけ影から観察した。確かに間違いない。あれは……亜麻色の髪の子と、フロリアン。夢の登場人物だ。

なぜ苅野にいるのかと疑問に思ううち、二人がこちらに向かってきた。バスターミナルやキャナルシティ駅に向かうなら通り道なのだ。

隠れなきゃ。とっさにそう考えたがここは野外。

そのとき、すべての光が私の前から消えた。私の頬に橘の肩。

事態は把握した。テレてる場合ではない。息をひそめてそのまま、橘のコートのすそをつかむ。

どきどき。どきどき。

激しい動悸との戦いだ。

カツ、カツ、と鋭くリズミカルな足音が耳につく。音は次第に大きくなって、そして小さくなり、消える。

どちらからともなく体を引いた。

橘はそっぽを向いている。さっきの二人が歩いていった先を眺めているのだと思う。その二人はもう視界にはいない。

「ランスタンかな。甘やかなバニラの香りって」

「知り合いですか」

「香水。あの子、ランスタンってゲランの香水つけてました」

「香水、ですか」
「きみはほんとに年頃のおねえさんか」

ほっといてください。匂いものには弱いんです。
久瀬くんをブランドに弱いとは言えないな。私も。

「しかしロリ系の顔して大人の香りとな。ミスマッチと思いきや、意外にそそるなあ」

その感想オヤジくさいです。

「でも橘先輩。なんで隠れるようなマネを」
「隠れなきゃって、あせってたんは自分やろ」
「まぁそうですけど」

ふむ、と橘が考えこむようなたたずまいでつぶやく。

「銀の髪は人外か」
「じんがい？」
「ヒトのソトで人外。神か仏か魔か霊か。こっちも気づかれるとまずいし……あ」

再び、ふんわりと、視界が覆われる。
ちょっと待て。と抵抗を見せた私だったが、橘にしっかりホールドされている。いやいや、そでをつかんで背負い技に入れるスキはあるか。

「気づかれた」

低い声で耳元でつぶやかれた。

なぜか背筋が凍るような、鳥肌が立つような、でも心高ぶるような、よくわからない気分になる。

「一度しか謝らんから……悪い」

歌うようなささやきを聞いた瞬間、周囲の時刻は止まる。

わずかに逸らした私の頭に手を添えて正しながら、音もなく塞いでしまう。束縛されもがいたのは一瞬だが、それからは時の間隔すらない。

からみとられてしまった。

腕もくちびるも、脳みそも。

完全に、世界が真っ白になった。

＊　＊　＊

気づくと、橘はいない。

はらりと肩に白い羽が落ちてくる。

雪だ。

空を見あげた。黒い空から、白い贈り物が舞い降りてくる。足元のアスファルトに白い花が少しずつ咲きはじめる。

『エサイの根より　生い出たる　奇しき花は　咲き初めけり』

歌詞になぞらえて雪を愛でる。柄にもないセンチメンタリズムを覚えたのは、なぜだろうか。

風が冷たくなる。

私はひとり、凍りついたように立っている。

自分を殴り倒したい。どうしてこう軽率なんだろう。安心するのは早計だった。なのに、油断した。逃げるため、避けるため。彼を責められない。なのに悔しさがこみあげる。

私は途方にくれて小さく泣いた。

黒く垂れ込める空も、泣いている気がする。

10．胡桃のお菓子に誘われて〔2〕

『バイトあと一時間入らな』
「ええから、来いっ！」

あとから思うと……私ってなに様だろ。
でもそのとき、私は心の余裕がなかった。だからあとで、歩きながら深く反省した。彼には謝んないと。

『分かった』

携帯電話の向こうの声は、それ以上異論を唱えることもなかった。

『どこに行きゃええの？』
「東城山町のコンビニ」

ホワイト・クリスマスは今年も訪れそうにない。
道は湿ったままで、雲も去りつつある。闇の裂けめから星がのぞく。
携帯電話をカバンに投げこむと、オリオン座のまんなかの三ツ星をあおいだ。
負けるもんか。
私は足取りを速めた。

「負けないぞ。絶対っ」

下手くそな即興詩人よろしく、妙なスローガンを考える。
空は晴れる、いつか晴れる。幸せはふだん気づかない、すぐ近くにいつもある。羽を無くしてもまたいつか、飛べるはず。

いくつか思いついたあげく、やめた。アホくさくなったのと、センスのなさに気づいたのと、コンビニにたどり着いたからだ。

＊　＊　＊

私はまず、とびきりの笑顔を無理やりにつくって、レジにプレゼントした。

「こんばんはっ、サナリさん」

サナリさんはおでん汁の中に具を入れていた。玉子や大根はすでにいい色している。

「すみません。お話うかがいたいのですが、いろいろと作業がありまして」

と、断って銀縁メガネを上げるサナリさん。おでんの具を入れていた袋やおなべ（油抜きをしていたらしい）をかたづける。さらに素早くチョコの棚に向かい、商品を前に出して。ナナメ行列になっているおにぎりをいくつかとってかごの中へ、残りは一直線に並べなおして。

「いらっしゃいませ、こんばんは」

次なるお客様は、久瀬くんだった。

少し肩で息をしている。急いで来てくれたのだろうか。改めて申し訳ないという気持ちでいっぱいになる。

私は、深々と頭を下げた。

「ごめんなさいっ」
「謝ることないっしょ」
「でも」
「たぶん緊急と思ったし。そやから呼び出したものと信じてるけど」
ひねくれた嫌味なのか、本心でそう思っているのか。
今の彼は飄々としていて、にわかには判別しがたい。いつもの愛想笑いがない分、率直ではありそうだ。
「緊急。緊急やないかも知れへんけど」
私は早速、教会とバスターミナルでの出来事を話した。
会話の内容、夢の中の二人、彼らを見たときの橘の反応。それらをつぶさに正確に……ただし一部事象は自主規制のうえ、内容より削除している。
緊急やん、久瀬くんの第一声はそうだった。
「サナリに同時に聞かせる点も大正解やと思う」
「ええ。ありがたいことです」
サナリさんもゆっくりうなずいた。
「ごめん。私、なにがなんだか分からへん……」
「夢は現実でもある。その証明がされただけでも重大やろ」
久瀬くんが自信たっぷりに話すと、サナリさんも柔らかな微笑を浮かべ、
「私も『上主様』と『皆』と『橘』の繋がりが見えてきました」

私はひとり、取り残されたような感覚を覚える。
彼らは一を聞いて十を知る。なのに私は混乱するばかり。私って、なにひとつ自分で解決できない。
……いかん。マイナス思考に陥る。最近こんな感じでへこんでばっかりだ。

「天宮さん。オペラの結末は知っとお？」

久瀬くんの問いかけに私は小さく首をふった。
寡聞にして知らない。歌劇といえばタカラヅカなもので。

「ノルウェーの娘ゼンタは幽霊船の男と結ばれる。おたがいに救い、救われたいもの同士。心の深層ですでに想いは通いあっていた」
「ハッピー・エンドなんや」
「いや。オペラの定石は悲劇」

相手はしょせん、幽霊。そして娘は生身の人間。結ばれるなら道はただひとつ。『死』しかなかった。
二人の霊は滅び、しかし魂は天の高みへと昇華する。天へ召されること、それは神の許しを得たことを意味している。

「悲劇と呼ぶか否かは、鑑賞者に委ねられる。それが『Ｆｌｙｉｎｇ　Ｄｕｔｃｈｍａｎ』のツボとゆうか、ヤラしいとこやんなあ」

たしかにドラマとして巧妙だ。悲劇として泣けるし、成就した恋を喜べる。神様に許されたんなら、クリスチャン的にはハッピーエンドだし。

「ただ、ここでは作品のツボを論じたいんやなく、現実の娘さんの

話をしなけりゃね」

素直に考えたら。

亜麻色の髪の少女が夢で会った人と結ばれてジ・エンド、のはずである。

ところが彼女はゲランのナントカって香水を香らせて、苅野に現れた。あの銀髪美形のフロリアンも一緒にだ。

なぜ、苅野に？

それと藤生氏はどこ行った？

夢で藤生氏と少女は決別状態にあった。その少女とフロリアンがいっしょにいるってことは、少女は藤生氏とあのあと別れたのだろう。では藤生氏の次の動きは？

苅野に少女が現れた。なら藤生氏も登場するのでは。淡い期待をいだかずにはいられない。

「『藤生皆』の消息をつかむすべはあったのです」

私も久瀬くんもサナリさんを注視する。

サナリさんは一息ついて、つづけた。

「私を懲罰から解放していただければ、簡単でした。人間としての『上主様』をお守りする役目として『皆』の居場所を追うことは」

「ないモンねだりしたってしかたない。もう一人の『上主様』の橘はどっか行ってしもたし」

もう一人の『上主様』の橘。

久瀬くんは橘を『上主様』と認めているようだ。私にはその関係性がまだ見えない。

「はるこさんの目の前から消えたのはフェイントで、橘はまだ苅野

に滞留している可能性もあります。残像かも知れませんが、気配は残っているように思えます」

「でもあんたの魔力は今、アテにならへん」

「そこを突かれると」

自動ドアが音をたてた。

あわててサナリさんは、いらっしゃいませと笑顔をふりまく。

ふらりと現れたのは、見覚えのある人だった。黒いダウンジャケットに身を包み若々しかったが、初老には違いない。

「胡桃のお菓子の」

私はぽそっと漏らす。

以前この店で会った覚えがある。胡桃のお菓子同好の士である、あの男性だった。

その人もまた、私に目を止めた。

「きみは胡桃のお菓子買ってた子やろ」

やっぱりあの人だ。

胡桃のお菓子がここに入荷しなくなって、しょんぼりしていた老人だ。

さらにその人は、私の隣にいる少年にも目をやった。細めの眼のまぶたが上がり、小さな驚きをあらわしている。

「白河の、あきてる君やないか。ひさしぶりやなあ！」

彼は思いのほか大声だった。そしてつかつかと歩みよってきた。

白河といったら久瀬くんの前の名前で、お父さんのほうの名前だ。

この品のいい老人は彼のお父さんの知り合いなのだろう。上品な

旧市街である東城山の住人らしいし、苅野の名士とやらかも。

「安賀島さん。両親がその節はお世話になりました」

久瀬くんは実にキレイなお辞儀をした。温厚そのものな好青年ぶり。完璧な愛想笑い。パーフェクトだ。

「私は横からしゃしゃり出て口をはさんだだけや。一番大変だったのは君やないか。いきなり弟があらわれたり」

「その話はちょっと。それより、胡桃のお菓子って」

「そうやった」

安賀島さんは相づちを打って私に向きなおる。

「家内が通販で見つけたんや。今度、きみに会ったら教えんとあかんな、って思とってな」

「うわあ、ありがとうございます！」

その通販情報、ぜひ入手したいです。

「たくさん買うたし、なんやったらおすそ分けしようか。取りに来るかね。家はすぐ裏手やし」

私は行く気満々だった。お菓子につられるアホさ加減、どうか笑わないでいただきたい。

が、ふと思う。この場をほったらかして行くか。胡桃のお菓子のために。

サナリさんと久瀬くんの様子をうかがった。サナリさんは店員モードに戻っていた。久瀬くんのほうは少し考えたのち、

「僕も行ってかまいませんか」

と、にこやかにたずねる。

安賀島さんは少し間を置くと、にわかに声を上げて笑いだした。

「白河の息子なら是非に……ああ、私も無粋やったな。クリスマス・イヴのデートのお邪魔をしたわけやなあ」

ちょっと勘違いしてるみたいだけど、まあいっか。

10．胡桃のお菓子に誘われて〔3〕

コンビニの裏手には路地がある。
路地を抜ければ、神社の境内につづいている。
境内の玉砂利のこすれあう音は、他は静寂の小さな境内にいちだんと響きわたる。

「苅野北英に通っています」

久瀬くんは安賀島老人の質問に答えた。

「せやったら、うちの近所もよう通るやろ」
「今は母と暮らしていますから」

道々で話を聞くに、安賀島老人は久瀬くんのお父さんがお世話になった人だった。
選挙から離婚まで。そりゃなにからなにまで相談した人らしい。
だが『サナリとの契約』……久瀬くんと藤生氏との関係を知っているのかどうか。そのへんはうかがえない。聞いた感じ、魔法とか魔物とかの話とは無縁そうだけど。
安賀島さんの背中を追う。
神社の境内をそれると、こんなところにあったんだ、と思うほど、ひょんなところにある瀟洒（しょうしゃ）なお屋敷。
そこに私たちは入っていった。
門扉より玄関まではそう離れていない。黒いタイルの道以外は白い石で敷きつめられている。そして竹が数本、すっくと伸びる。その足元にはきれいな苔がむしている。少し洋風テイストも混じった和風建築とその庭は、意外なほどにマッチしていた。
安賀島老人が引き戸をカラカラと引く。

「広っ！」

私の部屋くらいはありそうな玄関。玄関といっても、靴を脱ぐスペースだけでだ。

さらに私の家のリビングくらいはありそうな、廊下。

入ってすぐの和室は最低、十畳以上はあるに違いない。

この時点で天宮家、すっぽりと入るに違いない。我が家グリーンヒル東城山の４ＬＤＫは、三千万ほどだった。が、それが玄関と廊下と和室ひとつで、まかなえてしまうとは。

あるところにはあるんだな。土地って。

「まあ上がってき」

と、通されたのは十畳敷きの和室。まんなかに鎮座しているのは、コタツだ。

勧められるままにコタツに入る。と、これは掘りごたつではないか！

……幸せぇー。

「紅茶にコーヒーに中国茶に緑茶、お好みはある？」

「中国茶で」

ここまでのこのこついて来た私たちに『遠慮』の二文字はない。

さて、部屋を見渡してみる。

床の間にお花、違い棚に小さな青磁と、朱描きの陶器。

それ以外は何もない。いたってシンプルだ。

「もういくつ寝るとお正月、って感じやねえ」

お花は松と葉ボタン、千両にピンクと紅色のガーベラ。太めの竹筒にあしらわれている。お正月の花飾りにしては可愛い。

うちもこんな感じにお花を飾ってみたいかも。

「安賀島さんてうちの高校の校長先生やったって聞いてたけど、神職やったんやな」

久瀬くんもまるくなりながら、コタツと仲良しになっている。

「久瀬くん。神社ってもうかるんかなぁ。家大きいし」

「どうやろ。宗教法人やし税金は少ないやろけど」

久瀬くん、目もとをおさえる。眠いのか？

「あんまりこの神社、宣伝してはらへんよね。穴場かも。えーと、ここ、なんてたっけ」

「総領神社」

「やっぱし聞いたことない。毎年ついつい、以前住んでいた延長で生田神社行っとんのよね。今年の初詣、近いしここにしよかな」

「生田神社なんて、人多くて大変やろ」

「毎年つぶされそうになってる。それはそうと久瀬くんは初詣、どこ行っとんの」

「去年は苅野初詣ツアーを鹿嶋とやってたなあ」

「初詣ツアー、ですかい？」

「羽柄山に登って初日の出を拝んで、帰りに登山口の八王子神社に参詣。それから＜Ｍａｇｉ Ｆａｒｍ＞キーポイントの感神社を二箇所ほど。そんで三輪神社、大歳神社……ここは歴代ナナツギ城主の祈祷所らしい。最後に本町の天満宮で学業祈願。うち、四箇所ほどでは御神酒を飲み放題の特典つき」

久瀬くんのバイタリティには圧倒される。でもお酒は二〇歳になってからだぞ。

と、そんな具合にきわめてローカルな話をしつつ、ただ時が流れるのを待つ。

しばらくして、上品そうなおばさまがやって来る。お盆に急須とグラスを乗せて。シルバーグレイの頭に細めの眼鏡、少しぽっちゃりとしている。安賀島夫人、としておこう。

「ほんとに今日は寒いわねえ」

というのが彼女の第一声。安賀島老人がつづいて入ってくる。

「あの神社はよう宣伝しやへんのですワ」

さっきまでの話、聞かれていたらしい。

もうかるとか税金とかの話まで聞かれてたら、かなり心象悪くなりそう。

安賀島さんは手ずから、大きなおわんをコタツのテーブルに置く。おわんの中は、胡桃のお菓子！

間髪入れず、

「いただきます」

カラメルと胡桃が奏でるハーモニー。微妙な舌触りと濃厚な甘さ。

……これだー！

そして安賀島夫人はグラスにお湯を注ぐ。

じわりと黄金色に染まりゆく耐熱グラスの中で、細いお茶はゆっくりと、浮沈をくりかえす。ふう、と息をふきかける。芳醇で少し苦い草のような香り。一口いただくと、なんとも爽やかな味わいがのどにひろがる。

「Ｊｕｎ－Ｓｈａｎ－Ｙｉｎ－Ｚｈｅｎ……君山銀針ですか」

安賀島夫人が顔をほころばせた。

この黄茶は一回だけチャレンジしたことがある。でもこのお茶、高いんだ。中国の洞庭湖の近くでのみ収穫する、貴種らしいから。

「天宮さんさすが」

久瀬くんが素直に感心している。

あまり彼にほめられる機会もないので、少し照れる。舞いあがりそうだし、安賀島さんもコタツ仲間となったところで、話題を他に探そう。

「その宣伝してはらへん事情って」

「それはね、この神社、あまり宣伝できるご利益がないんやな」

「ご利益のない神様って」

そんな神様にお社作ってあがめたりするものなのかな。

よく分からんけど。

「いやいや。ご利益云々は語弊があるかもしれない。ここ総領神社は、祟りを畏れた先人が立てたものやから」

「天満宮もそうですね。元来、菅原道真のみたまを鎮めるために創設されたもので」

「ここは菅公みたいな有名人は居らへん。せやから、もうからへん」

安賀島さんは声高らかに笑った。

あちゃー。やっぱり聞かれてた。でも印象悪そうには思われてないかな。

久瀬くんも苦笑しながら、さらに質問を重ねる。

「どなたが奉られているんですか」

「名前を言うても分からんやろけど……『七鬼澄隆（ナナツギ・スミタカ）』という人や」

「ナナツギ！」

「スミタカ！」

オウム返しに叫んだのは、久瀬くんと私、同時だった。

それ以上に目を丸くしているのは、安賀島さんかもしれない。

１０．胡桃のお菓子に誘われて〔４〕

「イヴでお楽しみのとこ、邪魔してごめんな。実は頼みがあるんやけど」

久瀬くんは電話中。相手はかのん。工作手配中である。

「……いや事後とか鬼畜とかええから」

事後。鬼畜。なんだそりゃ。

「そう、要するに今日は渡邊さんも一緒やったってことに」

久瀬くんはよろしく、とゆっくりと告げる。話がまとまったようだ。大仰な手ぶりで通話を切ると、携帯電話を私に返して、

「以上、了解とった」

「かのん、なんて言って」

「分かったぁ。うまくやっといたげるから任しといてー」

久瀬くんは深く、息をついた。いつも以上に疲れている。

「よけい泥沼化を招く懸念ハンパないんやけど」

今晩は、安賀島さんのお宅に泊まらせてもらうことになった。ナナツギ・スミタカの話を聞いていたら、遅くなってしまったのだ。さらに明日の早朝、文書とかを見せてもらえる約束になっている。

安賀島さん一家はとても多忙な年の瀬なのだ。小さな神社もいろ

いろ準備があるらしい。手作りしめ縄を編んだり、あいさつ回りをしたり。別の神社も兼務してるそうで、そちらの準備はもっと多忙。お守りや破魔矢のチェックしてご祈祷して、氏子さん巫女さんと打ち合わせたり。さらに地域史家としての活動もあり、その納会も。

そんなもろもろで時間的に余裕がない。「どうせやから泊まってき」ということになった。「寝巻きは息子と妻ので良ければ」「なかなか外泊できる機会もないだろう」って。

そこには多分に、勘違いが含まれているかもしれない。

家には安賀島夫人にお電話を入れてもらった。お話を聞かせてもらうことと、『友達』と泊まること。スンナリ話がまとまったようだ。意外と安賀島さんは有名人で、うちの親もすぐに信用したようだ。

『友達』役にはかのんを抜擢。お願いのメールをしたところ、なぜかこんがらがってしまい、見かねた久瀬くんに交代とあいなった。

「まあなるようになるでしょ」

「潔いね。天宮さんて」

「北英って、休みも補習あるって聞いたけど大丈夫なん」

「そっちの心配するん？　まあ、別に出ろって言われてへんし、バイトのほうが大事」

そこで休むあなたもまた優秀なのですね。ハイハイ。

「でも天宮さん。藤生君が現れたらちゃんと弁解してな。僕、なにもしてませんて」

なにもしてません、か。

そうなんだろうなあ。久瀬くんは。私のこと、女の子じゃなくてＲＰＧのパーティ・メンバーみたいに思ってるんやろし。

たぶん妙に意識してるのは私だけなんだろう。すぐそばに、男の

子がいる。
眼鏡をかけた顔。洗いざらしにドライヤーで乾かす手を抜いて、半乾きの髪。シャンプーの香りが私といっしょ。
舞台道具だけは素敵なイヴ。……だめだ思い出してしまう。

『エサイの根より　生い出たる　奇しき花は　咲き初めけり　我が主イエスの　生まれ給いし　この良き日よ』

去年までは好きな歌だった。今年は……だめだ。

「その歌は？」

あれ。無意識に口ずさんでいたのかな。
相当、私、病んでるかも。

「賛美歌。『エサイの根より』って題名」
「そのまんまなタイトルやな。でも良さげ。もっかいリクエストしてええ？」

ためらいがちにもう一度歌う。
久瀬くんはギターを持つふりをする。弦を押さえ弾くように指を動かす。ここのコードは、とうつむいてぶつくさ言ってる彼の姿は少し、変だ。
分かった。そうつぶやくと、抑えた声で歌を奏でだす。

『イザヤの告げし　救い主は　清き母より　生まれましぬ　主の誓いの　今しも成れる　この良き日よ』

霧が少しずつ、晴れてくる。
不思議だ。雪解けのように不安は解けていく。

やるせないのは歌のせいじゃない。ひとひらの歓びを語る歌で自らを嘆くなんて、どうかしているに決まってる。

三番は私も歌ってみた。即興のデュオだ。

『妙に貴き　イエスの御名の　香りは遠く　世にあまねし　いざや共に　喜び祝え　この良き日を』

いかん。目から涙が。

疲れ目のふりをして、すかさず指でぬぐう。

思いっきり感情に流されてるわ。

見られたかな？　頭もカンも鋭い彼のこと。なにかあったのか、と問われかねない。

「……天宮さん」

案の定、久瀬くんはこちらを向いていた。

さあどう言い訳する。目が疲れた。目にごみが。どちらにしようか。

「ゲスト・ヴォーカル頼もうかなあ」

「は？」

彼はぽんと私の肩を叩くと、

「自衛隊、やなくて＜Ｐｏｔ　ｄｅ　Ｍａｇｉｅ＞に入りませんか？」

「全力で遠慮します」

「なんで」

「人前で歌うの、苦手」

「もったいないなあ。声質澄んでてうらやましいし。もはや橘イラ

ネ。ガールズ・ヴォーカルの方がメジャー受けするし」
「メジャー目指してるん」
「それはない」
「そんならなんでメジャー受け、狙うよ」

刹那のこと。
久瀬くんの表情が険しくなる。

「……外」

私も外へと意識を向けた。
久瀬くんが部屋の中のテレビやオイルヒーターのコンセントを抜く。電気製品の音でかき消されないようにだ。
耳を澄ます。
寒風が駆けている。竹や、庭の木々がざわめく。落ち葉が宙に舞い踊る。彼方から、すすり泣く声がする。
女だった。だがこの声は人のものだろうか。虚空をつかむような、悲愴なこの慟哭は。

「境内の方、やな」
「行ってみよう！」
「もう一二時やん。ご迷惑をおかけするわけにはいかんやろ」
「窓から庭へ出よう」
「門に警備会社のステッカーがあった。庭うろついたら大騒動になる。ひとまずあきらめるしか」

やがて声は消えた。
だが脳裏からは離れ得ない。鳥肌が立ち、背筋が寒くなり、なのに血液が逆流しそうになる。

「ナナツギスミタカの神社、なにかあるよ。絶対」
「ある、必ず」
久瀬くんは障子を開けはなし外を望んだ。
「初詣は総領神社に決定やな」

Interlude 10.

部屋は湿り気と寒気に包まれていた。
藤生氏がこめかみを押さえ、のどの奥でうなる。
その感覚は、ただの傍観者でしかない私をも容赦なく巻きこんでゆく。
今すぐ断ち切りたい程にひどく、辛く、苦しい。沈み込む様な頭痛。こみあげる吐き気。息も詰まらんばかりの胸。重石を結び付けたような手足。目覚めてもなお、音もなく、まどろみの中に溶けてゆく。痺(しび)れて再び薄らぎゆく精神。遠くなる意識。

少女はいなかった。
柔らかなベッドの中、毛布に包まれて眠りに着く。
ライティングデスクのほのかな灯りが少女に陰影を添え、彼はそれを眺めていた。
確かそのはずだった。
だが今は、きれいなままの抜け殻だけがベッドにその痕跡を残している。
揺らめくように立ち上がった藤生氏は、そのまま大きく傾いた。
ソファーの角で堪えるように体を支え、窓際ににじり寄る。窓は開け放たれ、外の闇と霧を呼び込んでいた。

「＜眠りの霧＞やったかな」藤生氏が頭を上げる、「白夜の、闇」

窓の外は墨を空に散らしたようだ。
港に停泊する船はおろか、街灯でさえもその視界に入らない。この地の夜は今、自然の有るべきかたちを崩しているのだ。
窓の桟に怒りを叩きつけ、藤生氏は嘆きの息を吐く。

「花瓶ないと、おれ、なんもできんのな」

夜陰から空ろな眼をはずす、藤生氏。

色だけは温かく満ち足りた部屋。彼はその中をさ迷うように歩く。戒めを引きずるように、緩慢に。

サイドテーブルには彼のバッグがあった。錆びた十字架も残っている。だが少女の持ち物である茶色いリュックは無かった。ベッドサイドからその姿を消していた。

「気づかずに行ったのか。おれが『あれ』くすねてたって」

藤生氏はひざまずき自分のバッグを探った。

それもまた素早く終え、その手を止める。わずかに口の端を上げ、頭をもたげる。

「一応、探したっぽい、かな」

パソコンも小物も数冊の書籍も。彼は、すべての荷物をバッグの中におさめた。

そして藤生氏は壁面に手をかざす。

するとその手と壁面のすき間から光があふれ出し、インクが染みるように円状に、その面積は広がっていった。やがて光の円がフラフープの大きさになった頃、そっと、その手は外された。

そこにバッグを押し込んで、光に触れて引き戸を閉ざす動作を行う。

暫時、壁面から光は消えた。

「花瓶なしで魔法使ってもた。となると、おれの居場所はそこら中バレてもとんのやろな」

藤生氏は深く首を垂れた。
彼の前にあるのは灯りに黄みがかったなんの変哲もない壁だ。
追うか。いや逆に追われるかも。そうなったら、逃げて隠れるか。

「＜呪＞はぜんっぜんないし、ケンカは勝てるみこみないし」

そんな弱気さをうかがわせる発言とは裏腹に、藤生氏の表情は薄ら笑いだ。
柔らかな灯りより背を向けて、藤生氏は再び窓際にもたれかかる。

「結果どうあれ、追うのが王道、かなあ」

彼は天をあおいだ。
そして窓を飛び越え、そのまま漆黒の空に吸いこまれてゆく。

11．初詣にて〔1〕

「小林幸子見た？」
「見たよ。終わった瞬間、チャリ飛ばして来たってところ」

手の中の使い捨てカイロをくしゃくしゃともてあそぶ。
足元とかお尻とかも貼るカイロとか貼ってみたりした。だが、やはり夜は寒い。
マイナス三度。
弟から借りた腕時計が示す現在の気温だ。
気象庁によると、関西は平年並みか、まだ暖冬らしい。去年の夜の寒さを覚えているほど、私の記憶力は良くはない。暖冬くそくらえ、って感じだ。
とにかく『寒い』は禁句。言ったが最後、コンビニおでんをおごる決まりとなっている。
なにをしているかって？
ただいま初詣の時間調整中。
総領神社のがらんとした白砂利の境内。そのはしに白く小さな鳥居がある。さらに鳥居より奥、延長十メートルほどの竹林の回廊を抜け、百ほどの石段を上がる。上りきったそこに、ようやくお社が現れる。
だがそのお社はなんともこじんまりとした、真四角の古びた木の小屋だった。ウサギ小屋くらいの大きさで、百葉箱を大きくしたような感じ。いわゆる『方丈』というもので、ぐるっと縁側がついているが、五人も座ればいっぱいだ。そしてそれ以外にはなにもない。
ひどく貧相。それが私の感想だった。
同じようにタタリを恐れてつくられた天満宮とはえらい違いだ。京都の北野天満宮、福岡の太宰府天満宮、どちらも広大な敷地に豪奢な社殿。平安時代の菅原道真も、そこまでしてくれたら満足とい

うものだろう。
それにひきかえ、このウサギ小屋のようなお社はどうだろう。
漠然と、思う。
『ナナツギ・スミタカ』は満足なんやろか。『総領』と呼んでくれるようになっただけで。
この神社の『鎮め』は、この神社の命名そのものにある。
七鬼澄隆を『総領』と認めること。それが真っ当な跡継ぎであったのに、叔父にその座を奪われ、そして殺された彼への慰めであり、鎮めであった。

＊　＊　＊

クリスマスの話にいったん、戻る。
その朝は、イエスの誕生にはまったく似つかわしくない話題が交わされていた。
安賀島さんに久瀬くんが問う。

「苅野だけでなく、志摩・三重県にも神社はあってもおかしくないですね。志摩の武将だから」
「あるよ。向こうは神社の名前が違うけどあることはある。むしろ三重のほうが歴史は古い。灌頂主（カンジョウヌシ）つまりオーナーは七鬼守隆」
「従弟の。殺した張本人の息子になるんですよね」
「そうやな。自分が問題なく後を継げたのは澄隆がいなくなったからで、だからこそ深く畏怖の念を覚えたんやろう。皮肉というか滑稽というか。人間の愛憎というもんやな」

その三重の神社に息子さんが行っている。
そう付け加えたあとしばらくは、その息子さんへのグチとも自慢

ともつかない話が続いた。神職を継ぐ気がなく、家を出て東京で就職して困っていたが、最近は戻って来る気があるらしい、とか。

私たちに語られてもねえ。

と思いつつも、機嫌を損ねては悪い。相づちをうっておいた。

そのほか、ナナツギの水軍はすごいんじゃない？　という話も聞いた。

大きい軍船をポルトガルの宣教師が絶賛した記録があるとか。実は潜水艦なんか造ってたとか。

戦国時代に潜水艦！

冗談じゃなく昔の記録にあるそうだ。記録が即、真実ではないとしても。でも少なくとも、潜る船なんて発想があった可能性はありそうだし、それだけでもすごい。

「そんだけすごいのに、なんでわざわざ海のない苅野になんで来たん？」

「来たんやなくて無理矢理、来さされたんや」

久瀬くんはおろか安賀島さんにさえ笑われた。

当然、好き好んで引越ししたわけじゃない。こいつはヤバそうだからと江戸幕府に目をつけられて、引越しさせられた大名ってのは結構いたようだ。同じく水軍が強かった毛利元就が有名な、毛利家も同じ。ここは同じ山口県内でも瀬戸内海側の山口市付近から日本海側の萩市へ。まだ海があるだけマシで、死守したからこそだけど……というのは、彼らの話の受け売りだ。

内陸に引越しさせられるのは、ナナツギからすると水軍を捨てるのも同然。

他より優れているモノを取り上げられたわけだから、

「『必殺技を封じられた変身ヒーロー』みたいなもんですね」

また安賀島さんが愉快そうに笑った。
なにか違うのかな。今度は正しいことをしゃべったつもりなんですが。

「言い得て妙でいいね。まったく悲壮感ゼロやけども」

安賀島さんが出かけた後。
さらにお昼ごはんをご馳走になった。遠慮もなにもあったもんじゃない。
お昼ごはんはエビシューマイとカニチャーハンと水餃子だったので、よっぽどこの人、中華が好きなんやろかと思ったんだが、この話とは関係ない。
語りたいのは……席上で、ついつい私が夜中の声の話をもらしてしまったことだ。
一瞬冷たい視線を横の少年から感じる。変に思われるぞ。
ところが夫人の反応は意外だった。

「あなたも聞いたの？　私も頻繁に聞くのよ」

夫人は主婦のお茶会話よろしく「ちょいと奥さん」と呼びかけるような仕草をしてみせた。

「頻繁に、ですか。夜中ですよね」
「ええ、そう。もう最初は気味悪くて」

あとは質問をするまでもない。勝手に必要な情報をしゃべってくれた。
声の頻度は、夫人の就寝中は聞いていないので、不明。
決まっているのは時間帯。ちょうど〇時を超える頃なのだそうだ。
そして一、二分間という長さも決まっている。

おそらく場所はお社付近。一度、境内に行って確認したそうだ。

夫の安賀島さんも息子さんも、そんな声は聞いていない。空耳だろう、と夫人は相手にされていなかった。だから私たちが聞いたとなるとうれしくて、なんでもかんでも話してくれたようだ。

それにしてもこの現象を前に――しかも家族からは空耳と断言されて――なお平然と暮らしているあの夫人。ある意味『鉄の精神』の持ち主だ。

11．初詣にて〔2〕

そんなしだいで大晦日、年変わりを待つ。
張り込み決行を大晦日にしたのは単なる都合だ。友達と初詣と称して夜中に出かけられる、というだけで深い意味はない。
久瀬くんと私は、お社の裏側に張り込んでいる。
その現象をつまびらかにしたい。ひいては『ナナツギ・スミタカ』の幽霊にもつながるのでは。そんな期待に私は胸をふくらましている。
まさに新年へのカウントダウンは始まっていた。
声を聞きとるために、私語も厳禁だ。
でも。
おなかが少し痛い。
凍てのせいだ。冷えきった夜の空気のせいだ。
カイロでは役不足だ。ストーブが恋しい。ファンヒーターに会いたい。たき火でもないかな。
黙っているから余計に気になる。しゃべっていれば気が晴れるのに。胡桃のお菓子のことでも考えようか……。
気晴らしに、石段の方をふりかえる。
明るい。
その明るさは境内の方の照明のものではない。白々とした蛍光灯ではない。赤みを帯びた光だ。夜明けのような明るさで、石段のある地平線が満たされている。

（な、なにあれ）

幽霊出現の予兆なのか。あの悲しい声の主が現れるのか。
私は出来うる限り冷静に観察を続けた。久瀬くんもそれに気づき、石段の状況を注視する。

サッ、サッ

ほうきで掃くような音がする。

それは数度すると、また静寂に戻る。そしてまた、音が微かに伝わってくる。

規則正しく繰り返される謎の音は心拍数と同じだった。が、やがてそのリズムもずれが生じる。私の心臓の鼓動が速くなってきたからだ。

「――――っ！」

思わず、息を止めた。

石段に浮かび上がった、姿。

それは人影だった。白い装束を身にまとう。

幽霊？！

じゃないだろ。

ふつうに人間だった。

左手に炎ゆらめくたいまつ、右手に小さなほうき。白い衣に水色の袴の、神職の服装を着けた、現実の「人間」だ。

なーんだ。

神職さんは腰をかがめて、石段から社殿までの通り道を掃き清めていたのだ。

光はたいまつの火だ。あの音もほうきのような、じゃなくて本当にほうきの音だったみたい。

その神職さんは安賀島さんではない。若い人だった。髪の色を抜いているみたいだし、体格もほっそりしている。

安賀島さんの息子さん、だろうか？

彼は背筋をうーんと、伸ばした。首を左右に倒して、腰をひねる。たいまつとほうきを持ってやっているから、見た目に不思議なパフ

ォーマンスだ。
彼はひとしきり運動を終えると、社殿に近づいていった。
私たちの視界から消える。
見えないところで、ごとごとと、音がする。扉を開いているらしい。がさごそと、音がする。中にあるものでも触っているのだろうか？
非常に気になる。
神経を集中する。まさにそのとき。

ジャンジャジャジャジャーン

『おれはジャイアン』の存在感あふれる旋律が、雄大に五秒間、流れた。
腕時計はすでに十二の数字を指していた。

「……なんやそれ」
「メールの着信音……」

かのんあたりからの『あけおめ』メールだ。
脱力する久瀬くん。立つ瀬がない私。
私、その場に泣き崩れようかな。それとも腹切って果てるか？

「なにをしているんですか」

目が合った。
神職さんと目が合った。おまけに声、かけられた。
完全に隠れてるのがばれたのだ。そりゃ、そうだろう。

「はわっ」

袖口を引っ張られた瞬間、視界真っ暗。
なんだかこの状況、前にもあったぞ……クリスマス・イヴや。
たしかあのときは相手がタチバナで、きゅっと抱きとめられていて。
でも今回、ちょっと違うのは。相手が久瀬くんで、頭を羽交い絞めにされていて、彼がいるのは背後で、肩甲骨付近のみが温かくて。
なによりロマンティックさには一歩も二歩も足りない点だ。

「初詣でっす」

頭の上で久瀬くんの声がした。いつもより軽妙な調子だ。

「それでかい？」

彼の腕が、少し下がった。ホールドされているのは肩の上。
それに伴って視界が開けた。
すでに神職さんは一メートル先に腕組みをして立っていた。セルフレームのメガネをかけ、左耳にだけピアスをふたつ着けている。
安賀島夫人に、似ていないこともない、かも。

「ばれずに済んだらこの先僕らも安泰みたいな、運試し、みたいな」
「最近のガキどもはなにやってんだか」

そう吐き捨てたピアスの彼に、あくまで軽そうなノリで久瀬くんは答える。

「クジ引きみたいなもんデス。今年は末吉かなぁ。バレたし」
「帰れ。もしくは他でまともな初詣をしろ。ここはそういうトコじゃない。不謹慎な」
「あぁい」

私はそこでようやくホールド状態から解放されたのだった。
だが息をつくのもつかの間。せかされて、私たちは不本意ながら石段を降りていった。しばらく怖い顔で石段の上から見張られて、しかたなく歩みを進める。

――トメテ

石段も半ばのそのときだ。
嘆きが微かに耳に触れたのは。
久瀬くんも足をとどめ、厳しい眼を虚空に向ける。彼も聞こえているのだ。
ふりかえると、今まで見張っていたピアスの神職の姿はない。

――アノヒトヲ、トメテ

あの人って、誰だ。

――アア、タスケテ、タスケテ……

それよりあんたは誰なんだ！
声を聞くたびに体が異常を訴え始める。
後頭部がひきつるようだ。全身がしびれてくる。おなかがズキズキする。寒気が襲う。

「寒い……」

それに息苦しい。
なにが起こっているのだろう？
肩をすくめ、細かく呼吸をくり返す。

（助けてっ）

これはあの女の人の声か。

いや、私だろうか。

全身が悲鳴をあげ出している。そしてなにかがぐるぐると、回りつづける。

（あたし、つぶされる）

「天宮さん！」

地面がゆれた。

「天宮さん！　天宮さん！」

「え、お、おなか、痛いっ」

かろうじてそれだけ言えた。

11．初詣にて〔3〕

かつて、私はなんの考えなしに承諾して、彼女のタマシイを受け取った。
藤生氏がくれたプレゼントのひとつ。
ご近所の女の子、あおいちゃんの魂。

「ゴメンナサイ。はるこさん」

目の前に立っているのは長い髪の女の子。小学校中学年くらいの、清楚な子だ。

「……あおいちゃん？」
「ハイ」

彼女はしょげた様子でそう答えた。
分かった。苦しんでたのは、彼女だ。

＊　＊　＊

高い、木の天井。
畳の青っぽい、香り。
ここがどこかはすぐに分かった。安賀島さん宅。
第一声はなぜかこうだ。

「あったかぁ」
「その反応は、問題ないと考えてええんかな」

いくぶんか皮肉まじりの言いよう。間違いなく久瀬くんだ。
ぼんやりとした視界が次第にクリアになってゆく。でも頭の中はまだ、混濁したままらしい。
上半身を起こす。ふわふわの布団が、かさりと、音をたてた。
側頭部になにかがくっついているような違和感がある。

「ううん……」
「少し問題ありそうやな。無理に起きなくても」
「……あおいちゃんが……」
「あおいちゃん？」
「安賀島さんち？」
「そう」
「あったかい」
「芯まで温かいね。頭が常人になるまではもう一歩ってとこ？」

（なにを言っているんだろう）

と、自分でも思っていた。
あおいちゃんってだれよ。それに答えようにも、頭が混乱している。会話にならず、思うままがを口走る、単なる独り言と化していた。自覚はあった。
なのに、久瀬くんはなにが起こったのかを性急に問おうとはしない。
先に彼は現状を説明する。

私がいきなりぶっ倒れた。
←
神職さんが安賀島さん邸を案内。
←

安賀島夫人がおふとん用意してくれた。

←

私、起きた。

「ごめ……」

「あおいちゃんって、中学のころ、藤生君の無茶ぶりで天宮さんが魂、引き取ったって子やんな」

「うん、それで」

自分の身に起こった出来事を伝えることができるのか。正しく理解してもらえるのか。それ以上にまともに話せるか。

いまはその自信がない。

「入っていいかしらね」

ふすまの向こうから女性がたずねる。

どこか鷹揚でのどかなその声。鉄の精神の保持者・安賀島夫人に違いない。

久瀬くんが彼女にむき直り、

「たびたびご迷惑をおかけして、本当にすみません」

そうか。まずはおわびをしなきゃね。

「ええのよ。彼女、大丈夫？」

「もう大丈夫、やんな？」

「はいっ」

久瀬くんにうながされ、私も首を縦にふった。

頭の中では続けるつもりだったのだ。もう平気です、ありがとう

ございました、と。
でもことばはもつれたまま、頭の中にとどまっている。
「お茶持ってくるわね。ゆっくり休んでいってちょうだいね」
「おかまいなく。初詣したら帰るつもりやったんです」
天宮さんの親も心配しているだろうから、と久瀬くんは断りを入れた。
彼の手首の腕時計が目に飛びこむ。ブランパンの時計だった。目をこらす。長針と短針は妙な角度をしめしている。どの値をさしているのだろう。
この部屋に時計はないのかと、少し顔をかたむけた。見つからない。
私は布団のぬくもりから抜けだした。みのむしが、みのからはい出るように。もそりと、抜けだした。
バッグから携帯電話を取りだす。時刻表示が見たいだけなので、メールの着信表示を消し、待ち受け画面を表示する。時刻が表示される。
「二時……もう、二時」
「さすがに、やろ」
また夫人は泊まっていくことを勧めてくれた。
今回は断った。久瀬くんが断ったのは、正月早々というのもあるだろう。
でもそれ以上に……私はここにいることが不安でならなかった。
断ってくれて、本当に助かった。
「具合はどう?」

帰り際、玄関口で。
あの神主さんのピアス青年に出くわした。
今度は白装束ではない。フードつきのパーカーにビンテージっぽいジーンズ姿。そのへんにいるような青年だ。

「すみません。安賀島さん」

久瀬くんは頭を下げた。
この神職さんは安賀島さんの息子さんらしい。

「マジびっくりした。もしかして俺のお祓(はら)いにやられたとかだったら、どうしようとか思ってさ」

胸のあたりがずきん、と痛んだ。

「大地っ。なにを冗談言うてやの。貧血起こしはったのよ」

夫人、息子にツッコミはたきを入れる。

「いやぁ。それなら俺ってスゲーと思ってさ。まあそれは冗談」
「では、おじゃまいたしました」

久瀬くんは穏やかに微笑む。
早々に会話を切りあげにかかっているのだ。……一見、そうは見えないが。
そして玄関の引き戸に手をかけた。

「また来いよ。うちの母、きみら気に入りらしいし」

久瀬くんは私を先に外へ出し、

「また今度、ぜひよらせていただきます」

と言うと、できうる限り静かに戸を閉じた。それでも戸は、カラリ、カラリ、ピシ、と音をたてていた。

暗かった。

安賀島邸の玄関もポーチも、電気が消える。郵便受けの上に門灯があり、それが唯一の光源だった。遊園地の幽霊屋敷で、手探り足元探りで前へ進むような状態。竹の植え込みとニアミスを起こしかけた。一部、物損事故を起こした植栽もある。

数秒して、またポーチに光が戻る。

ついつい消したが、私たちがいるから点け直した、というところだろう。とりあえず前へと進みやすくなった。

「僕の自転車、乗って帰ったら」

安賀島邸の塀に横付けしてあるシルバーの自転車。前かごが四角で荷台つき。

久瀬くんの自転車だ。

コンビニに置いてきていたはずだけど。私が寝ていた二時間のどこかで、取りにいっていたのだろうか。

「ええよ。ウチ近いし」

「そんなら後ろ、乗る?」

「歩こ」

二人乗りをしたら話ができない。歩けば、話ができる。

話したいことがある。今すぐに。だから歩いて、並んで帰りたかった。

彼は無言で自転車を押し歩き出した。その歩みのスピードはひど

く遅い。砂利道が理由というだけではないだろう。
やがて、安賀島邸の灯りすら闇に包まれて見えなくなったころ。

「日下部あおい、やったっけ」

と、久瀬くんが頭をかたむけた。
混濁した脳みそはまだ、スッキリしない。うまく説明できるかな。
でも沈黙のままだと歩いて帰る意味がない。彼ならたぶん、分かってくれるだろう。神社でのことより、まずあおいちゃんのことを話そうか。
二年前、藤生氏が同級生だったころ。
私の住むマンション・グリーンヒル東城山。
かつてここには日下部あおいという女の子が住んでいた。
彼女は……詳しい理由は知らないが、魔物にとっては貴重な魂の持ち主らしい。彼女の魂を得ようと魔のものが集まり、その死を待っていたのだ。
藤生氏も、その魂を手に入れるようサナリさんにけしかけられた。
私はゴネた。

「二週間後に死ぬって、それを知ってて見殺しにしていいわけないじゃない。あまつさえ、魂を手に入れようだなんて」

藤生氏は彼女を救おうと努力したのだった。
結局、彼女は魔のものに誘われたのか、階段から転げ落ちた。そして……彼女の魂は私のなかにある。あおいちゃんの希望だった——魔のものに囚われるくらいならという願いだ。

「よう覚えてるよ」彼は目を細めた、「で、彼女のせいで腹痛になったわけか」

私はため息をついた。
ああやっぱり。久瀬くんはなんでもお見通しなのだ。

「ハライタの原因があおいちゃんって、分かってたん？」
「アホかい」
「アホすか？」
「分かりやすすぎやって。ユーレイ出現、祈祷開始、天宮さんは気を失い、寝ぼけまなこで『あおいちゃんって』って。そりゃ分かるやろ。いくらなんでも」

いえ。私ならわかりませんが。
白い光が見えてくる。サナリさんのコンビニだ。

「あの安賀島さんの……安賀島大地、あやしいな」
「あやしい？」
「女の人の声が確かに聞こえた。それで安賀島ジュニアがお祓いを始めたとたんに『止めて』と。少なくとも普通やない。あの状況は」
「ちょっと待って。さっきからお祓いって、そんなのあったっけ」
「祝詞（のりと）か呪詛（じゅそ）かは知らんけど。あいつの声してたよ。天宮さんは聞こえてなかったんかなあ」

たしかに聞こえていなかった。
大人の女性の幽霊の哀願。あおいちゃんの悲鳴。ふたつが頭の中をぐるぐる回っていた。あおいちゃんに至っては「つぶされちゃう」って……。
そういえば帰り際に安賀島青年自身が言っていた。もしかして俺のお祓いにやられたとかだったら、どうしよう、って。

「幽霊さんを狙ったってこと？」
「そして天宮さんちの日下部あおいまで巻きこまれた。苦しむ彼女

を守るべく、天宮さんは意識を失った」
「私、ハライタで倒れただけやけど」
「倒れたら呪詛だろうがなんだろうが聞こえない。結果として守ったことになる」

いつものコンビニの照明がまばゆい。
昔ながらの町並みの中にあって、そこはある種、異質な空間だった。でも私はその照明、にかえって安堵感をおぼえた。
私の生活はむしろここにある。日常に帰って来れた。そんな気がした。
コンビニには別の店員がレジに入っている。
私たちは店を素通りし、交差点をこえて城山三丁目へと進んだ。

「以前、タチバナ・モトイに聞かれてん」

久瀬くんは私に顔を向ける。

「『藤生皆は君になにをした？　笛の音に眠らされなかったやんな』……幽霊船の話で」

答えは今、分かった。
笛の音に意識を失いかけたあのとき。だれかにたたき起こされた。
そのだれかとは、あおいちゃんだった。

「一蓮托生なんやろ。彼女にしても天宮さんがピンチに陥るんは、困るんで」
「一蓮托生、かあ」

城山三丁目は広い道と、モデルハウスのような家。再開発地区で、同じ城山町でもずいぶん様相が変わる。そして林を背にそびえ立つ

のはマンション・グリーンヒル東城山。私の帰る家だ。
もう二時半だった。初詣になんでそんな時間になるのかと叱られかねない。

「久瀬くん」
「なに」

マンションの前。久瀬くんは自転車のペダルに足をかけたところだった。

「ありがとう。ええとそれと……『明けましておめでとうございます』！」
「今年もよろしくお願いします」

彼はふんわりと、やわらかな笑みを返した。

Interlude 11.

氷の海に飛び交う海燕の啼く声が騒々しい。
空は白と灰色のマーブル模様。重苦しく垂れ込める雲は、時を刻むにつれ、邪悪な黒龍へと姿を変える。
その龍尾に抱かれるがごとく、崖の巌にひとりたたずむのは銀髪の青年。彼は静かに海を望む。

「おや」

何かに意識を向けた彼は、やがて胸に手をあて、口の端を上げた。サファイアの瞳が爛々と光る。

「お出まし、甚だ痛み入ります」

銀髪の青年はふり返る。
連ねることばとは裏腹に、表情に敬意はない。嘲弄。それに、挑発。
青年の視線の先、黒髪黒コートの人物が歩み寄る。風キツイ、クソ寒い、足元すべる、なにこのサスペンスドラマ調、と不満たらたらな独り言をぶつくさ言っている。
藤生氏だ。やがてふうっと深く息を吐くと、ぴたりと歩みを止め、問いかける。

「古ぼけた商船動かして、どうなん」
「冒険に出ますよ。大航海時代は商人たちの冒険から始まったのです」
「狙いは海の領域」

藤生氏は一歩、歩を進めた。
鏡さながらに静止した水面。そこに水滴を垂らしたがごとく。足元に波紋が広がる。

「海には＜農場＞の協定はないからか」

周囲には何も無い。
藤生氏、フロリアン。その頭上にただ一羽、はぐれ海燕がさ迷うように漆黒の中を旋回する。
虚無。虚空。深遠の闇。
ことばはいくつもある。そのどれも、この場に流れる澱んだ風を表現し得ないだろう。夢の中にも関わらず、私は総毛立つ。
藤生氏が要求する。

「彼女を返せ」
「お断りします」
「ですよね？」藤生氏は肩をすくめた、「望み薄でも一応、警告を発しとくんはお約束やし」
「面白い方ですね」

二人の足元にさざなみが立つ。空気が震えた。

「ほな、ゲーム・スタート」
「氷！」

フロリアンが宣言した。
藤生氏が飛んだ。せつな、水面が固まる。
次の矢は放たれた。

「霰（あられ）」

降り注ぐ大粒の塊が藤生氏の背を打った。避けきれずバランスを失い、凍る海面に「着地」する。凍てに痺れる感覚がつま先を襲った。

苦汁を舐めるような表情をそのままに、藤生氏は眼前の何者かを払いのけた。生温い風が駆け抜ける。

……あられは雨に変わり、彼の足元が融解する。

「霜」

ぬかるみかけた足元から、霜が立つ。

フロリアンは謳う。

「『束縛、選択の余地なく、裸の者は霜に凍える』」

全身を覆い尽くす霜。抗えず束縛される藤生氏。

言葉にならぬ叫びが藤生氏の全身から発せられる。

疾風が荒れ狂う。張り詰めた氷を刻み、クレバスのような裂け目を作り出す。

フロリアンは腕で自らの面を覆い隠した。彼の銀の髪が激しく揺れ、絡み合い、自らの肌をも傷つける。

その中で、彼の唇は詩を奏でる。

「氷。ガラスの様に澄み、霜が作る美しい、宝石」

風は止んだ。

海面はほぼ、水に戻っていた。

だが、たった一点。

氷のオブジェとその周囲のみが、白かった。輝く光さえ湛えていた。

「宝石は海に眠れ」

オブジェは海に沈む。水に晒されてもなお、氷は溶けない。
一瞬だけ、その中に埋もれた様相が垣間見えた。
細めた二重のまぶた。濡れ羽色の瞳。朱に染まる頬に、歪んだ眉。

「噂どおり、貴方は力なき王者でしたね」

フロリアンは霧のように姿を消した。
海はやがて波をたたえ始める。その白い波間へと、あられに打たれ血を流した海燕の躯はのみこまれていった。

12．籠の中の鳥〔1〕

目覚めてもまだ窓は闇に覆われていた。
豆電球の光が瞳にとびこむ。うすぼんやりと、開き損ねたまぶたのすき間を通り過ぎていく。
浅い眠りに全身が気だるい。ざぶとんを頭に乗せられているようだった。
信じたくない。
いま見たことは『現実に起こったこと』なのか。
認めたくない。だけど。
窓の外の、城山の丘と空の際が明るくなるまで、私はふとんに顔をうずめた。声を殺して、泣いた。

＊　＊　＊

「遊びに行こう！」
かのんは元気いっぱいだった。
始業第二日目は、宿題考査。テスト終了の開放感。しかも今日は金曜日。
かのんの彼氏タカ君は社会人なので、こんな日は会えない。だから遊びにいこうと、私たちに激しく主張するのだった。
「うーん。そうやねえ」
そんなことより眠るか、それより……。私はあまり乗り気になれないでいる。

「はる、眠そうやねぇ」
「休み明け二日目やし。生活サイクルが直らんくて」
私の机にリュックサックがどん、と置かれた。なつきがそこに立っている。
「私、四時半、病院やから」
「そんなら三時くらいまでで、グラスタウンあたりでええかな。せりと鹿嶋と愉快な仲間たちも呼ぼうぜっ」
かのんは携帯電話に向かった。
なつきと鹿嶋くんの『らぶらぶ大作戦』がうまく運んでいない。かのんは、業を煮やしていた。逆に『久瀬略奪愛計画』、つまり久瀬くんと私の「らぶらぶのふり」が「らぶらぶ」に進展したことには、いたく満足しているらしい。全くの誤解だが。
「はる、大丈夫？」
なつきが小声で尋ねる。
「大丈夫やよ。寝不足やし今日は早よ寝るわ」
「冗談やなく顔色、悪いよ」
「大丈夫やって」
私は意識をそらそうと話題を変えた。
「それより、なつき。鹿嶋くんのこと」
「感じ悪いと思われてるんやろね。私」

しまった。私は黙るほかなかった。
そうかも、などとはとても言えない。
鹿嶋くんがなつきに、会いたい、と連絡を入れたとしても。
なつきは断ることのほうが多い。三回に二回は断る。鹿嶋くんは、自分が避けられていると誤解しているようだった。
私たちとでもなつきはつきあいが悪い。お茶を飲もう、といっても断る。一緒に来ても、飲まないでいる。
理由がある。最近、私たちも理解してきた。
なつきは持病があるらしい。それであまり食べない。すぐ疲れるし、夜も出歩かない。そして病院に通っている。毎週二回、学校が終わってから。そんな日の彼女のかばんはリュックサックだ。
彼女は今までなにも弁解しなかった。
かのんがある日気づいて、あらためて問うと、

「あまりこの話はしたくない」

私はそんななつきのさばさばして、ちょっと意地っぱりなところが気に入っている。
でも、鹿嶋くんは私たちほど毎日いるわけじゃない。なつきは理由を説明なんてしそうにないし、事情を察して、と期待するのも無理というもの。誤解もやむをえない。
ただ、先ほどのコメントから、なつきは鹿嶋くんのことを悪くは思っていない。鹿嶋くんさえ心変わりしてなければ、前途は明るいはずなのだ。

「グラスタウン南駅に十三時。お昼食べつつ、鹿嶋に話そうや」

なつきは小さくうなずいて言った。あのね。いいお店があるよ、って。
珍しい。なつきが提案するなんて。

多少は、なつきたちのために時間を割いてもいいかも、と考えた。

＊　＊　＊

なつき指定のお店。

木の香りが漂う。その大きなログハウスを飾るのは、いっぱいの観葉植物。高い天井にも窓があり、冬の空を仰ぎ見ることができる。テーブルの間隔も広く、アンティーク調の椅子に毛糸編みのお座布団。座っていて心地がいい。

その立地のよさにも驚く。

グラスタウンの中央のショッピングモールからは数分。ショッピングモールにも多くのお店があるせいか、それだけ立地がよくても店内は落ち着いている。

「おいしい！」

せりちゃん絶賛のスパゲティは、菜の花とタコのクリームソース。なつきはイカのリゾットをほおばっていた。

「お正月から連絡が取れへんねん。橘先輩」

鹿嶋くんがピザを切り分けつつ話す。

切り分け後のピザはかのんが片っ端から食べているのだが、彼はめげない。きっと鍋奉行タイプに違いない。

「神鍋（かんなべ）の田舎に行くって」

せりちゃんが答える。

神鍋。タチバナ・モトイ、目の前で消えたのに。
私は聞き返そうとした。
それをとどめたのは久瀬くんの愛想笑いの、一瞬の切れ間だ。彼の目は確かに物語っていた――話がややこしくなる。
私はうつむいて、タコをフォークで突き刺した。
フラッシュバックするクリスマス・イヴの出来事。せりに悪いと思う気持ち。息苦しくなる。
しばし忘れるために。
頭の中で、ねじりハチマキ巻いたタコを踊らせてみた。
頭の中で「タコ、タコ、タコ」と何十ぺんも唱えてみた。

「高梨さんには連絡あったんや」
「うん。メールでね。おばあちゃんが危篤なんやって。おばあちゃん子やったから、片がつくまでいるつもりって」
「意外やねえ橘先輩。人の情けを踏み倒しそうなツラ構えしとんのに」
かのんの処々意味不明トークには、せりちゃんも慣れたもの。
「『情けを踏みにじる』。そう見えてすごく気を使う人やよ」
サラリとツッコミを入れるところ、キャリアが上だ。そして思い出したように、
「それで、はるちゃん」
「えっ」
せりちゃんに名指しされ、心臓が止まりかけた。

「ゴメン。私、はるちゃんにひどい仕打ち、した。はるちゃんが先輩を取るって、勝手に怒ってた」

せりちゃんは神妙に言った。ことばひとつひとつをはっきりと、話した。

対する私はしどろもどろだ。

「え、そ、それ」

「ごめんね」

私はかろうじて言えた。「うん」と。

でも本当は、私は謝罪を受ける資格なんてないのだ。なにを偉そうにうなずいているんだろう。

話せない。せっかく戻ったせりとの間を壊したくない。

「良かった。橘先輩も考えこんでてん。自分のせいかなって」

せりの無邪気な笑顔。私もこたえて笑顔を見せる。

私は嘘つきだ。

なんだろ、なぜか、どこかから語りかけられるように聖書のことばを思い出す。

『互いに嘘を言うのを止めて、真実を語りなさい。

なぜなら、私たちはお互いに同じ肢体に属し、私たちが嘘を言う時に、私たちは自身を傷つけているのです。』（エペソ人への手紙　第４章２５節）

嘘をつき通してでも守りたいものだってある。うそも方便という。

でもそれがこんなに苦しいって、思わなかった。

「せりもはるも仲直りしたしっ」かのんが手を叩いて、「これで解決。あとは、鹿嶋やっ」

「え、おれ？」

標的が鹿嶋くんにうつった時点で、私はふうと息を吐いた。

「ウチらはね、鹿嶋。あんたをイイヤツと思ってるから、なつきを預けたげてんのやからね。なつきにも事情ってもんがあるンやから、一度や二度や十度や百度断られたからって、あきらめる姿勢見せちゃウチら怒るからね」

さすがに百度断られたら望みないやろ。

「渡邊さん！」

悲鳴を上げたのは、なつきと鹿嶋くん、同時だった。

静けさに包まれる。『シーン』と頭上に書きたくなるくらいだった。

なつきと鹿嶋くん、おたがいに顔を見合わせて赤くなる。それだけでふんわりとした雰囲気になる。結論はこんなに明確だ。

「あ。三時半やん。もう」

かのんがカウンターと腕時計をたがいに見て言った。

見比べてもどっちも同じやと思う。胸の中でいらぬツッコミを入れる。

「私、そろそろ」

なつきはいそいそと、リュックサックをまとめた。
鹿嶋くんがあわてて席を立つ。

「送ってくよ」
「ええよ。一人で行く」

鹿嶋くんは口を開いたまま、とまどいの色を見せている。

「今から病院に行くねん。あんまりついて来てほしいところやないしね」

なつきはリュックを背負って「ばいばい」と私たちに手をふった。
私とかのんが「ばいばーい」と大きく手をふりかえす一方で、久瀬くんは軽く片手を上げるにとどめ、鹿嶋くんはただ、

「気をつけて」

と心配そうにつぶやいていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1544n/

魔法の壺

2012年1月4日06時46分発行